

明治廿五年五月二十日第三種郵便物認可
明治三十四年八月[illegible]日印刷發行（毎月一回發行）


越

晋功化粧料

浦嶋水

一名しわよらず

無鉛 水白粉 一名しわよらず

無鉛 煉白粉 一名しわよらず

	大	中	小	特製
浦嶋水 定價	金二十錢	金十五錢	金十錢	金五十錢
水白粉 定價	金二十五錢	金十八錢	金十二錢	

	箱入大	小
煉白粉 定價	金廿五錢	金十八錢

老てしわよらずひふ一切によし他にるいなし

尾上梅幸菊五郎榮三郎羽左衛門丈樂屋使ひ

◉うらしまを常に使用せば色を白くし艶をいだし、顔手足のあれ、にきび、そばかす、あせも、しもやけ、おしろいやけ等に最もよろし

◉うらしまを常に御もちひなさるれば老て御顔に「しわ」のよることなしわけて「ばら」「すみれ」の愛すべき香氣を多量に含みたる好品にして其容器にも高尙優美の粧飾をつくしあれば御進物用にはきはめてよろし

◉本品は名醫ゟ傳はる所の由來書有御一讀を乞

◉全國到る處の名高き小間物店にて販賣仕候

製造元 東京市日本橋區若松町 若松堂

發賣元 東京市日本橋區橋町四丁目 内外小間物化粧品問屋（特電話浪花四四八番） 丸見屋號 丸善商店



眞正無毒

クイーン白粉

皮膚艶美

クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧料なり

取次販賣は到る處の化粧品小間物店にあり品切れなれば直接に

本舖 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂

女鑑 第十五年第五號 目次



米國大統領令孃アリス、ルウスベルト孃

來る七月米國陸軍卿タフト氏と同伴し
比賓律を經て我國に來遊すべしといふ



野口小蘋女史

新潟縣長岡高等女學校恤兵藁靴製造



世界各國美人風俗



理想的米國美人

ラテン族亞米利加美人

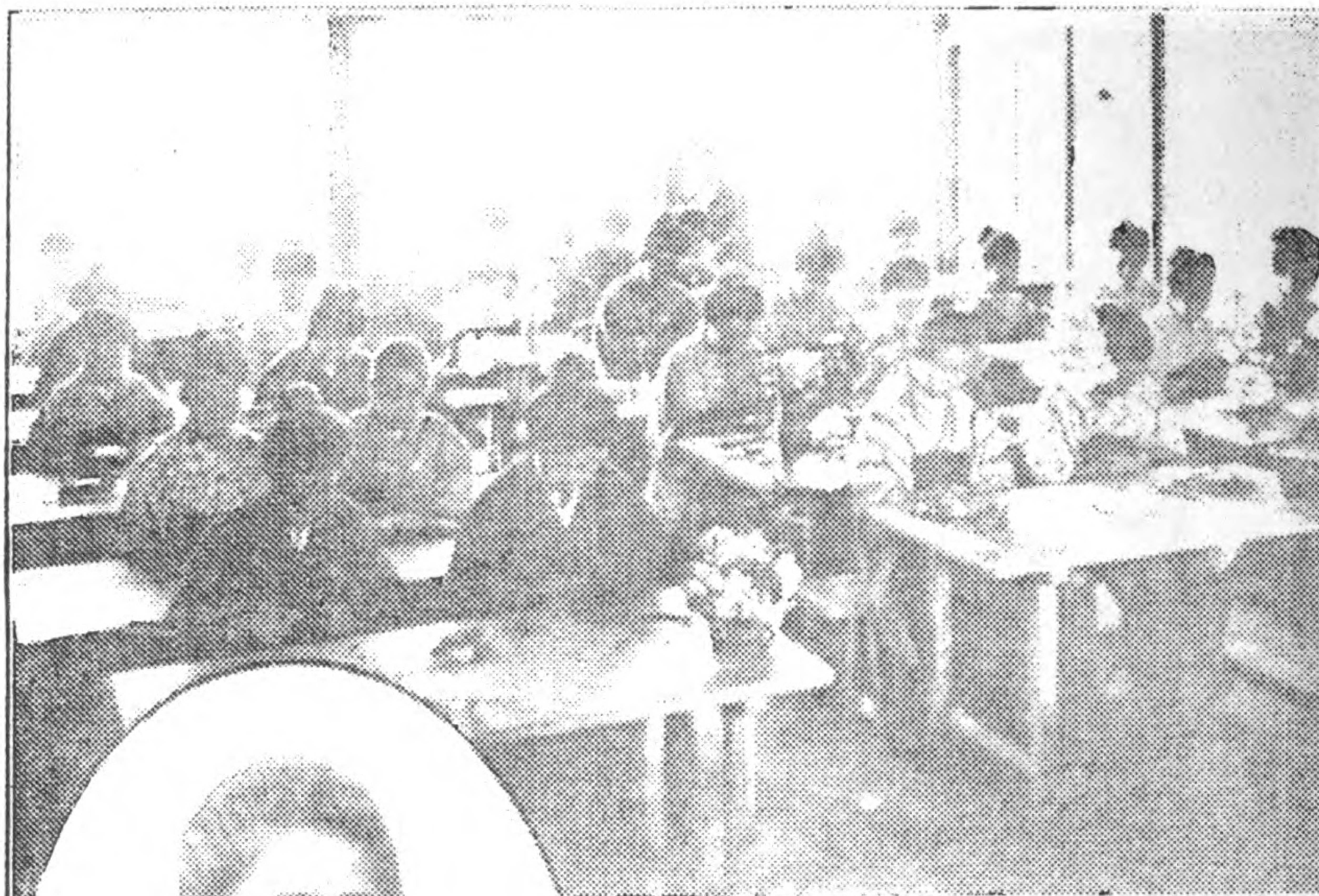
古代希臘形英國美人

サモア美人

西班牙美人


色白くなる高等化粧洗料
セーネ
定價大瓶五十錢小瓶三十錢
◎歐米最新流行品
◎紳士貴婦の洗顔用
本品は使用の際乳色に變化し
永く芳香保つ
御注文は 市内郵送無料 市外小包料十八錢添付
發賣元

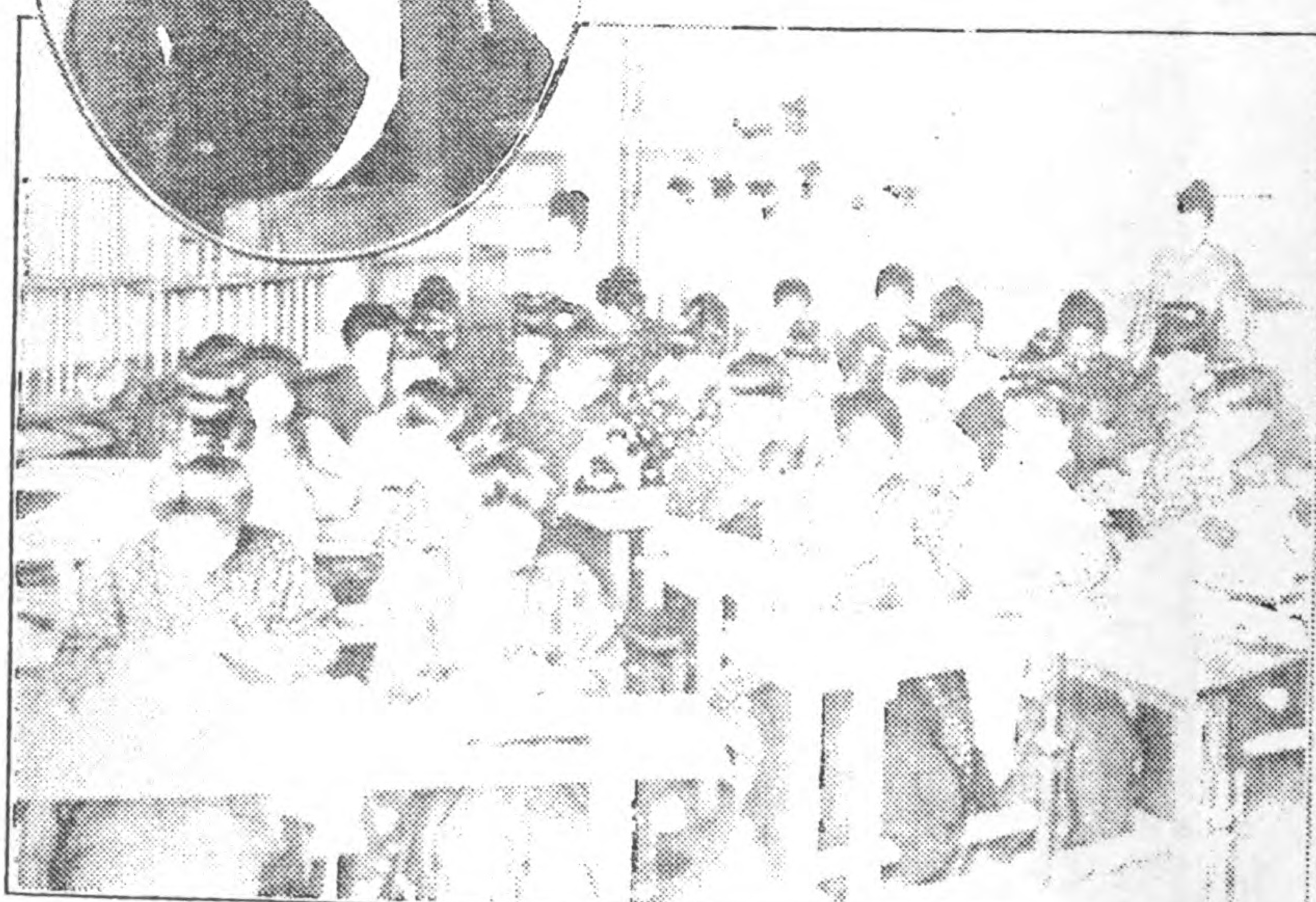
女子美術學校教室



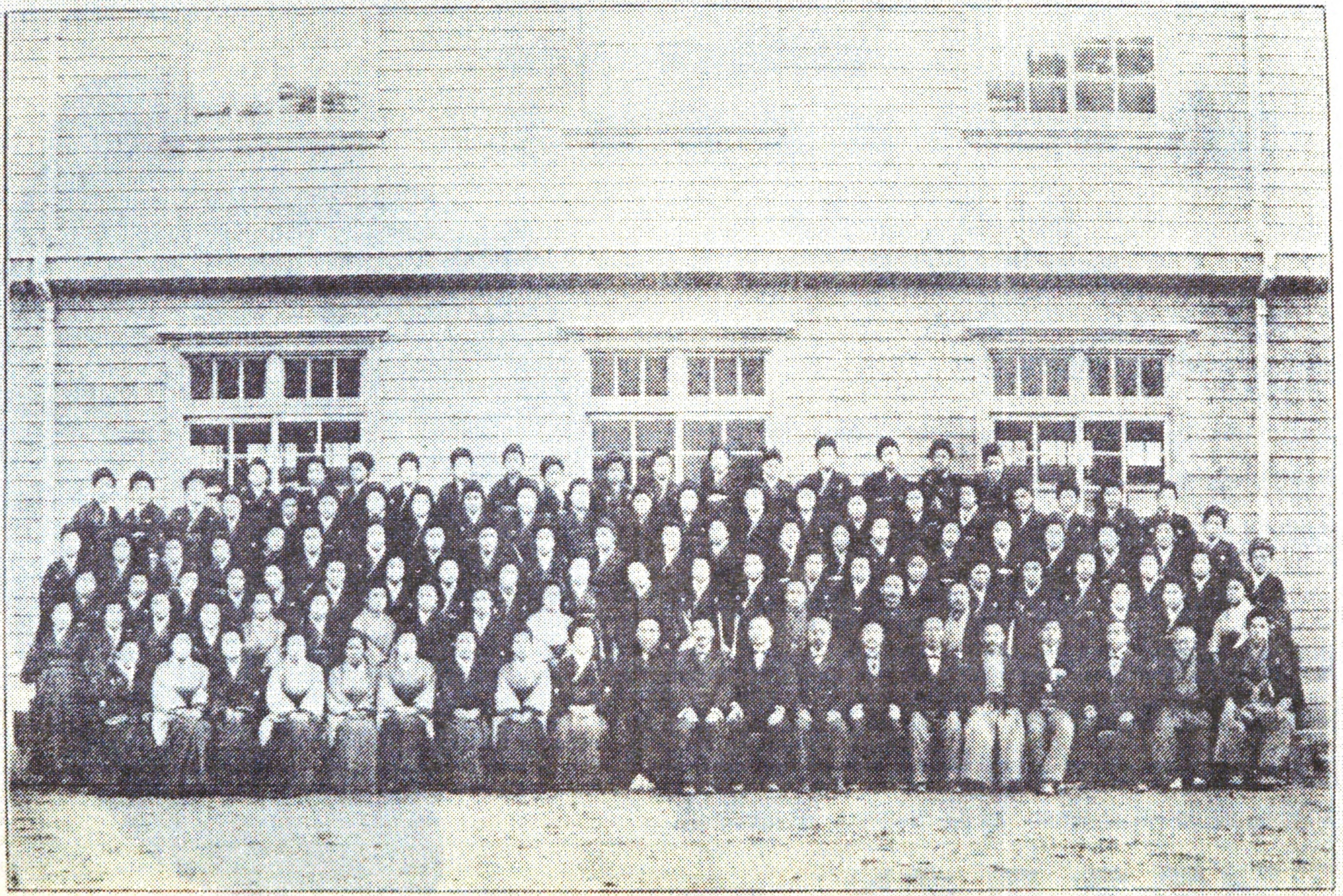
造花科



校長佐藤靜子

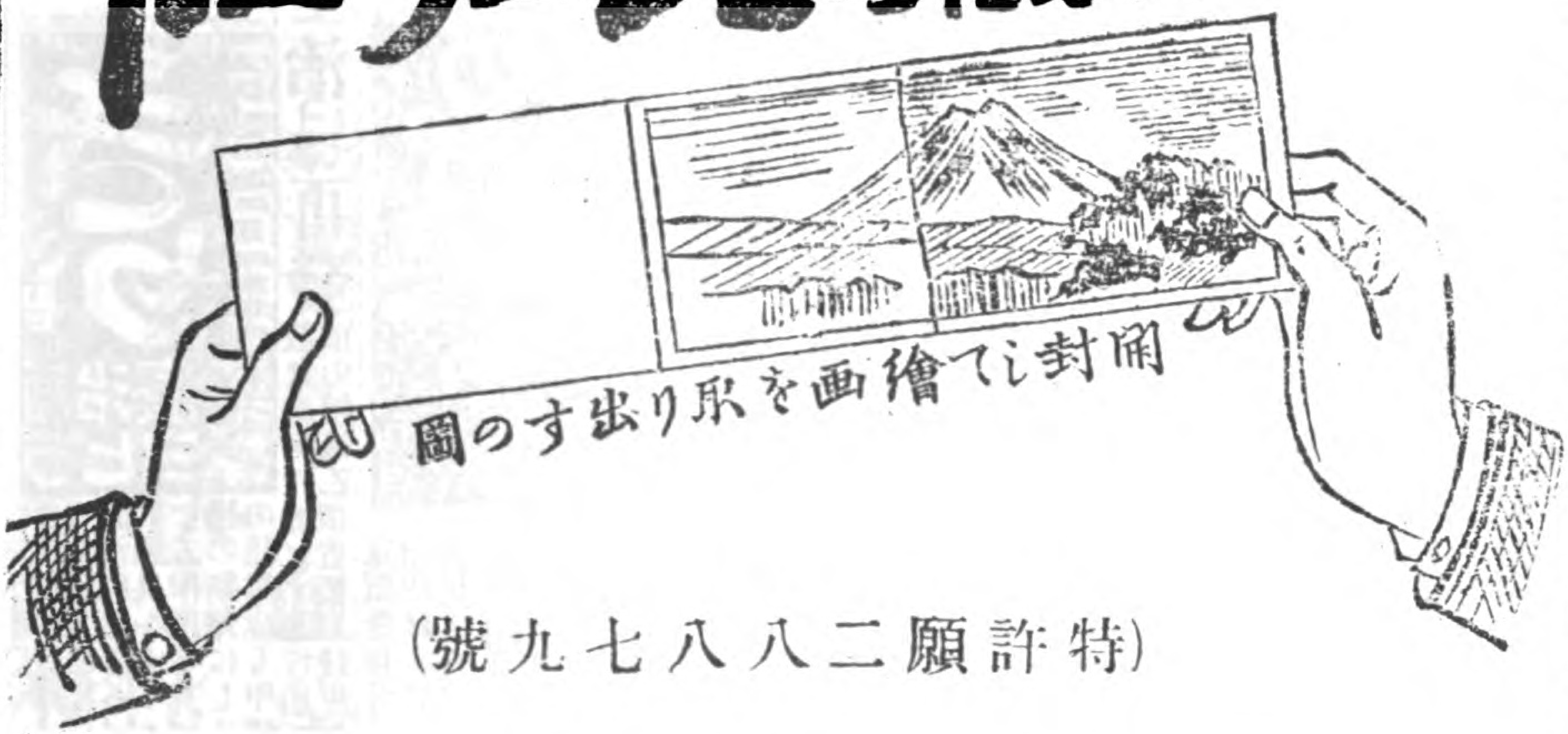


編物科



長野高等女學校第八回卒業生

新發明ビレーフート



(特許願二八八七九號)

新發明ビレーフート
精巧優美繪畫插入

ビレーフートは交際家の一日も缺くべからざる新封筒なり
ビレーフートは優美高尙精巧秀麗なる繪紙入の新封筒なり
ビレーフートは紀念繪保存として最も適當なる新封筒なり
ビレーフートは外征將士を慰むるに唯一無二の新封筒なり
ビレーフートは各種の繪書を交換するに至便の新封筒なり
ビレーフートは繪葉書より以上の趣味ある絶好新封筒なり
ビレーフートは本邦固有の美術思想を發揮せる新封筒なり

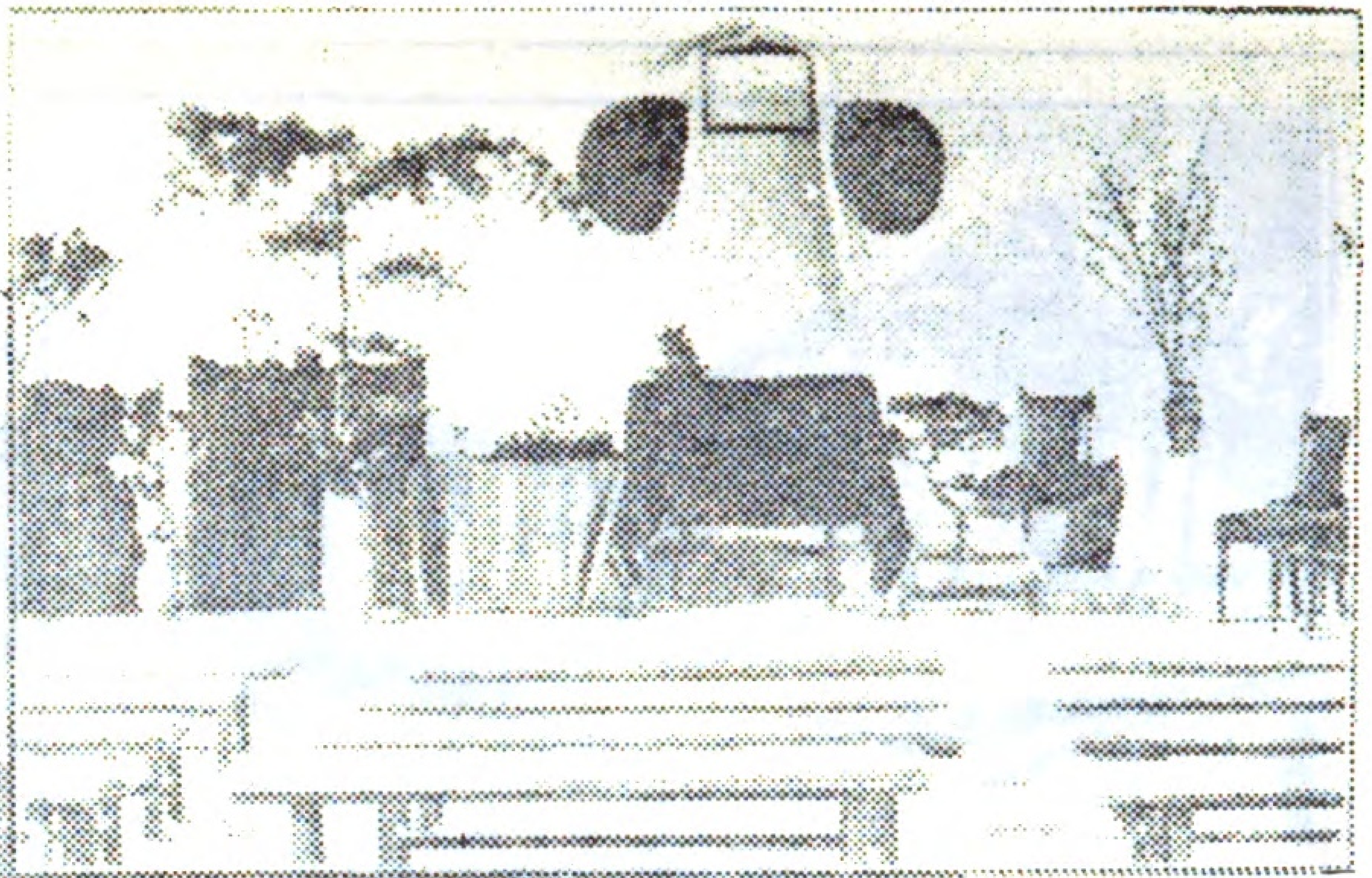
第一號	寫眞版	六枚壹部	定價拾貳錢
第二號	着色寫眞版	六枚壹部	定價拾五錢
第三號	寫眞ドー版	六枚壹部	定價拾錢
第四號	細密日本画	六枚壹部	定價四拾五錢
第五號	古代近世美人	六枚壹部	定價四拾五錢
第六號	絶景水彩書	六枚壹部	定價卅五錢
第七號	明治座川上演劇王冠	六枚壹部	定價拾五錢
第八號 特別製	明治座川上演劇王冠	六枚壹部	定價貳拾錢

東京市日本橋區馬喰町壹丁目

製造賣捌元 **中村封筒部**

電話浪花二千百六十二番

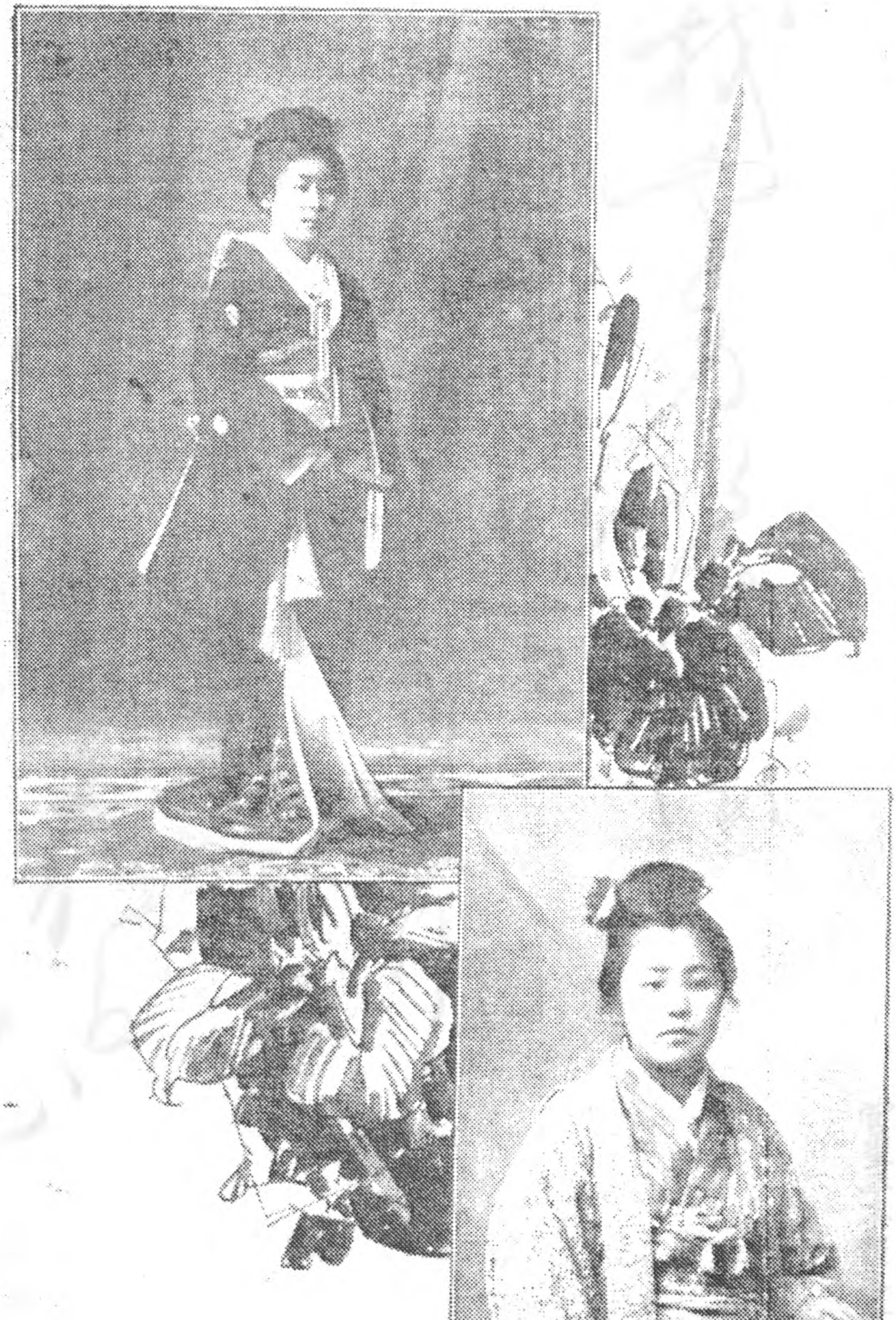
式場裝飾





豐橋高等女學校第一回卒業生及職員

女鑑兼題當稿優等者



竹内ふゝ子

水川とみえ子

我やとのいけの
ふちなみ
さきにけり
山ほとゝきす
いつかきなかむ

富三木枝子書

清心丹は興奮、清涼、收歛、健胃消化劑なれば衛生家の四時日常欠くべからざる要藥なり依てポッケット用、携帯用に便利なるニッケル罐入の設けあり

定價は金卅錢、十五錢の二種あり販賣所は全國藥舖賣藥舖にあり御最寄にて人魚の商標御認めの上御愛求あらん事を乞ふ



本舖東京市元大阪町

高木與兵衛

○大日本の淑女方が一般に渇望する處の原料の確實なる洗粉は此の花洗粉也

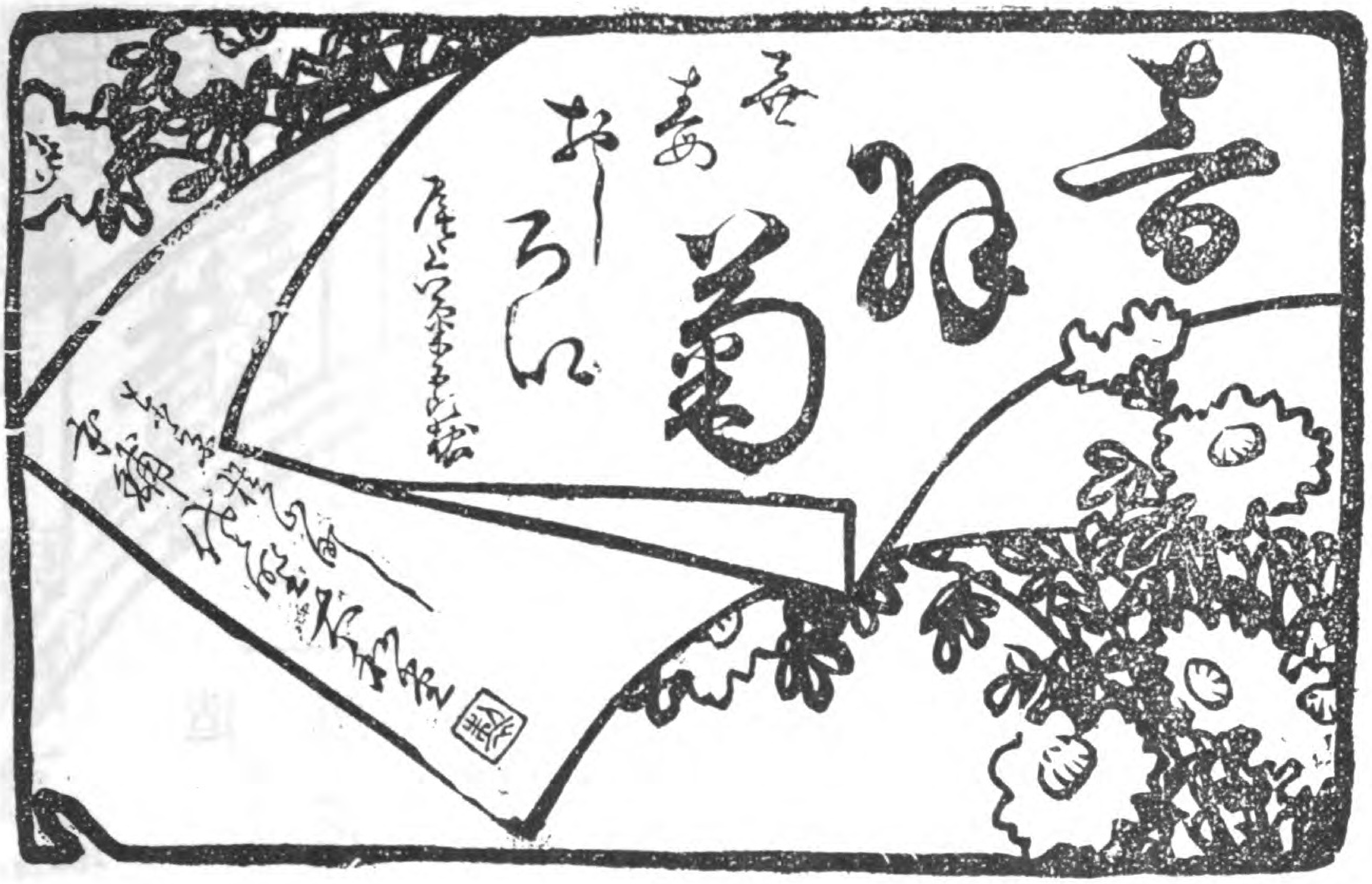


一度御試用の上御高評を乞ふ

特約販賣店

淺草公園第六區 辻小間物店

京橋區桶町 増田勉強堂





定價○金五十錢●金廿五錢●金十五錢○金十二錢



第十五年第五號

卒業

卒業何故に悅ぶべきか、何故に慶すべきか、卒業したる少年少女が、滿面に喜悅の情を湛るは、實に左もあるべし。その父母兄妹までが、祝筵を開き、盃を擧げて慶するは何故ぞや、卒業とは斯の如く悅ぶべきものなるか、慶すべきものなるか。

その證明としては、たゞ一枚の鳥の子若くは奉書の紙あるのみその儀式とては、君が代と、式詞と、諸老先生の祝辭と生徒總代の答詞とが、滿校數百の生徒と、朝野幾多の來賓との前に、唱和され陳述さるゝの外には、別に變りたることはなきなり。一葉の

紙、固より左まで貴き道理はなし。一場の儀式、また左のみ有難きものとも思はれず。

高等普通學以上、若くは各種専門の學科を卒へたる學生は、兎も角その修得したる學業を、實地に應用すべき位置に立つものなり。三年五年の歳月を、學窓の下に費やして、孜々螢雪の功を積み、以て業を了りたる人々は、品格ある紳士として、世に出づべき資格を有するものなり。それ品格ある紳士、品位ある淑女として、社會に立ち、その修得したる學業を利用して、幸福なる生活を遂ぐるに於ては、人生の目的は、殆んど達したりといふを得べし。しかも世路の險易と人生の禍福とは逆じめ料るべからざるものありて、曾て豫想せざる出來事に遭遇するに方りては、理想と現實とが、相反對するの結果として、或は身に苦痛を覺え、或は心に煩悶を感ずることあるは、浮沈常なき世事の習ひともいふべきか。若し世路の險難に克つ能はず、一身の境遇に堪ゆる能はずして、一屈伸ぶるを得ざること、譬へば雨に惱める海棠の如く、水揚げかねたる牡丹花の如くならむには、竟に不幸なる生活の中に沈淪して、一生を苦惱の間に經過せざるを得ざるべし。學校教育が順境に處する、平易なる諸般生活の道を指示するのみならずして、逆境に對する剛毅、忍耐、奮勵等の諸徳をも併せ教ゆるは、それたゞ之が爲めのみ。

されば學校教育は、社會生活の準備にして、社會生活は、學校教育の目的たるは無論なるべし。今之を譬ふれば、不知案内の長途を旅行せむとする旅人が、旅行に要する萬端の準備を整うるが如し。長亭短驛百里二百里、若くは五百里の間には、坦々たる平道のみならずして、峨々たる山路、車馬の通せざる處もあらん。矢の如き溪間の急流、たゞ一個の獨木橋を架するものもあらん。况てや、山路に行き暮れて、雨

さへ降り出でたらば如何にすべき。溪流に橋なくして、淺瀬を探りて、徒歩渉りせざるべからざる時には又如何にすべきか。茫漠の原野、東西の知れざるともあるべく、暗憺たる深夜、孤燈だも認めざることもあるべし。こゝに於てか、傘と合羽と毛布とはいふも更なり、地圖と磁針器との備えもなかるべからず、着換提灯其他の品物をも用意せざるべからざるべく、殊に尤も必要なるは、雨に打たれ、風に吹かるゝも毫も挫屈せざる不撓の精神なり。若し此の不撓の精神なくば、その他の準備は凡て缺くところなきも、一回中途に挫敗しては、復び起ちて行程を續くるを得ざるべし。思へ、旅客は則ち學生なり。長亭短驛數百里の長途は、一代の經歷すべき世の行路なり。山路と溪流とは、一生の間に遭遇すべき災害と阨難となり。旅行に要する凡ての準備は、則ち學校に於ける諸般の修業にあらずや。

之に由りて觀るときは、卒業は世途に出づる首途なり、卒業式は首途の祝筵なり。卒業證書はその餞なり。式に列する來賓は前途を祝せんが爲に集まれるなり。軍人の戰場に向ふや、必ず首途の祝ひなるものありて、一家親戚を始め、郷黨の人擧つて之に列ならざるなし。しかも之れ單に首途そのものを祝ふにはあらずして、前途の健康を祝ふなり。戰場の功名を祈るなり。名譽ある凱旋を祈るにあるなり。卒業と卒業者と卒業式とは、其趣き全く之に同じ。

殊に女學生と卒業との關係は、男學生の卒業に比して尤も適切なるものあるを感せざるを得ざるなり。男學生にありては、中學若くは高等學校はいふまでもなく、各種の專門學校を卒業したるものにても、猶進んで一層高尚なる學科を修むるの餘地ありて、更に幾年の歲月を學校生活に送るもの少からざれども、

女子に於ては、全く趣きを異にして、高等女學校又は粗々之と程度を同うする學校を卒業するの日は、十中の八九までは、學校生活に終りを告げて、更に新なる生活に入るの日ならざるべからず。凡そ女子の十七八歳より、廿二三歳までに至る妙齢青春の時期は、則ち恰かも卒業の時期にして、花ならば滿開、月ならば滿月の時なり。世が盛んに女子を歡迎するは方に此時なり。社會が女子に向つて尤も多く要求するも亦方に此の時期なり。獨立の生活を爲して、終生身を學業若くは職業に委ねんとする決心あるものゝ外は世路に乘出すべき恰當の時は、實に此の時期にありといふべし。されば卒業は、女子に取りて、實際世途の首途にして、簡單なる境涯より、複雜なる生活に進むの一大變遷時期を劃せるものなり。

わが可愛の諸孃よ、可憐の諸孃よ、孃等が、温かき慈母の懷に抱かれて撫愛され、手を拉かれて花の逕路を導かれ、蝶よ櫻と戯れたる幼年時代は、早や昔しの夢となりぬ。徳望高く學識深き師の薫陶を受けて幾歳月の間、學びの業を修め、大祭祝日には、君が代を唱ひ、校歌をとなへたる樂み多き學校時代もまた一場の昔語りとなりて、今や世の苦樂常なく、辛酸多き境遇は、之に代りて諸孃の身に纏ひ來らんとす。古語にいふ、光陰は白駒の隙を過ぐるが如しと、寔とに然り。諸孃が一代の大禮たる華燭の期も近づきぬ。やがては夫に事へ、舅姑に事へ、一家の經營に當るの日も遠からざらむ。たゞそれのみならで、曾ては其身に記念あるが如くに、可愛のものをかき抱きて、乳房含ませつ、愛に餘念なき日もまた來らむ。卒業果して悦ぶべきか。將た慶すべきか、悦ぶべきは、品位高き淑女として、世に立つべき準備の成りたるにあり。慶すべきは、行末長き前途の苦樂に堪へて、竟に幸福なる生活を遂ぐるにありと知れ。



女學生に告ぐ

東京府知事　男爵　千家尊福　述

女子が平生に質素を旨として、節儉を守るべきことは、極めて必要であつて、課程を卒へ學校を出で丶、世の中に立働らくやうになつても、愈よ此の心掛けを失はず、質素儉約を守つて、天晴れ良妻賢母となり、國の爲めに、家の爲めに、何處までも盡して往かねばならぬのは勿論のこと、謂はゞ女子は斯る天職を持つて居るものといつて宜しいのであります。

然るに今日の女學生の有様を考へて見ると、衣服裝飾其の他が甚だしく華美に流れて居る傾きがある、左らぬだに、女子は天性流行を逐ふことを好み、派手を衒ふことを喜ぶもので、奢侈贅澤は婦人から起るといふ程であるのに、今日の有様を此の儘に放任して置いては、如何なる程度にまで華美に流れて行くであらうか、殊に我國の今日は、外に於ては大國と戰つて居る時であるから、好しや戰は連戰連捷であるにしても、尤も質素に、尤も節儉に、充分氣を注けて往かねばならぬ時である、それに此の様な有様であるとは如何にも嘆ずべきことなので、若しも此の勢ひが益々進んで甚しき現象を呈するやうになりましては、國家の爲めにも由々しいことでありますから、私は、東京府知事の職務の上からも、其の向々の役人に命じて、一面各學校に臨んで

其の實際の摸様を取調べさせると同時に、又一面に於ては之れを拯ふて其の弊風を矯め直す方法を講じさせて居るのであります、それでありますから、今後まだまだ幾年月の間、學校に居て教育を受ける人々は言ふに及ばず、今此の學期の終りに際して、其の修習すべき課程を卒へて學校を退く人々に在りても、質素にして節儉を守るといふ心掛けを失ふことなく、必らず之れを行爲の上に顯はして、他の女學生、否、一般婦女子の摸範となるやうに勉めて貰いたいものであります。

次に、女子の中には一つの學校を卒業すると、イヤ一生涯獨身で暮すとか、イヤ獨立して職業に就くとかいふ者が往々あります、勿論、或種の専門的學術を修養して、當然それで社會に立つべきやうに教育を受けた人であつたなれば、獨立して一生涯を送るも宜しからう、然し、只だ普通學を研究したゞけで、直ぐに此のやうな考へを起すのは、全く間違つた話しなのである、好しや、専門の學術を以て世に立つにしても一家といふものは是非に形作らねばならぬ筈の人間であつて見れば、女子の地位は一家に於ては妻となり又母とならねばならぬのである、尤も、世の中には、其の専門の學術を以て世に立つて、男子と倶にせずに、女子一己にて一家をなし、生涯單獨で暮して居るものもないでもないが、これは極めて少數で、専門の學術技能によりて世に立つて居る女子であつても、其十中の九分九厘までは、男子と共に一家をなして居るものなので、一面世に立つて或種の事に從ふと共に、一面は人の妻となり母となつて居るのである、既に妻となり母となつた以上は、必らず良妻賢母たることを期せねばならぬが、斯うなると、女子は一身を以て内外の兩方面に當つて、其の責任を盡さねばならぬことになるから、一ト通りの困難ではない、否只困難なばかりならば宜いが、何れかに缺ける處の出來るのは免かれぬことなので、外を十分にしやうとすれば、内の方が十分にならず、内を十分にしやうとすれば、外の方が十分にならぬ結果を來すのである

其れであるから、女子は茲に於て其の孰れかを棄てるか、左もなければ、其の不十分な方に相當な補ひをつけねばならぬことになる、けれども、既に一家を成した以上、男子と分離して其の一家を破壞し、そして專心外に勤めるなどのことは、其の人の人格の上からいふても出來得べき筈でないから、勢ひ茲に至れば、内の方に相當の補ひをつけねばならぬが、扨て其の補ひをつけるといふことが、亦頗ぶる困難なことで、爲めに、非難の聲を聞くやうな忌はしいことにもなるのである、固より外にたづさはつて居る總ての女子が、悉くそうであるといふのではないが、兎角、女子は其の天職ともいふべき妻たり母たるべきものとして、自から其の任務を充分に果すといふこと、即ち良妻賢母として家の爲めになり、國の爲めになるといふ覺悟をするのが、何より安全な間違ひのないことであらうと思ひます。

棚橋校長（東京高等女學校）のお話しにもあつた如く、米國婦人は特に好んで外の事に勤め、家内の事は第二に置く傾きがあつて、大切な子供の教育なども家庭教師に打任せる程の習慣になつて居て、それで自分でも不都合とは思はず、又た外のものも決して怪しむことのない國柄でありますが、其の米國婦人の中の或る婦人で、學術才藝共に備つて居る一人が、自分は一身を捧げて夫の爲めに忠實に盡す考へである、自分の望みは夫の爲めに盡して夫の滿足を得る外にはない、といつたさうで、それが即ち自から良妻賢母たるべき決心を表白したもので、米國のやうな國柄でさへ、斯のやうな婦人のあるといふ事から見ても、女子は必らず良妻賢母たるべき責任を持つて居るといふことは明らかなことであるが、我々から見ても、斯うなければならぬものと考へられるのであります。

それについて思ひ出したのは、出征兵士の良妻の話しで、其の婦人には私も面會しましたが、如何にも感心なものであります、府下豐多摩郡世田ケ谷村に鎌田久太郎といふものがある、此の久太郎の一家族は、

母と妻と弟の四人暮しであるが、固より家計の裕かなものではありませんので、久太郎は是れまで炭薪などの行商をして、漸く一家四人の糊口を凌いで居たのでありますが、昨年の暮、此の久太郎は召集されて出征することになりましたから、跡には年若い女房と老年の母親と十歳餘りなる久太郎の弟が殘されたので、妻は老人と子供を相手に一家を立て丶行かねばならぬことになりました、處が、其の後、妻は健氣にも夫に代りて一家を立て丶行くべき決心をして、草鞋脚袢に身をかためて、夫の是れまで從事して居た薪炭商賣をすること丶なり、炭や薪を荷車に積み載せて、自分がそれを曳いて弟に後押をさせ、朝はまだ夜の明け放れぬ闇い中から星を戴いて買出しに行き、夜は日が暮れ果て丶何處の家にも燈火のつく頃まで賣り歩き、雪の降る日も風の吹く日も、一日として怠ることなく勵みますので、近所の人々も其の心根に感心をして、炭なり薪なり、必要に應じて、爭ふて此の良妻から買取るやうにする爲め、得意は毎日〳〵其の數が殖へて、品物の賣れることも追々澤山になつて參りましたので、從つて利益も多くなり、今では久太郎が家に居た時分よりも、商賣が繁昌するやうなことになつて、家内の生計も以前よりは餘程よくなつたといふことである、それで私も先達て同地へ出張しまして、其の婦人を呼寄せて面會しましたが、其の時、其の婦人の申しますには、夫は天皇陛下のお召しによりまして、只今出征しまして、お國の爲めに盡して居りますが、私共が只留主して居るといふばかりで爲すこともなく、皆樣の救助を受けるといふことは本意で御座いませぬ上に、私共の苦勞を出征して居ります夫の身の上に比べましては、物の數にも足りませんので、何うかして充分に稼ぎ溜めまして、運よく夫が無事に凱旋を致しました時には、私共の貯蓄を以て幾分か商賣の資本の補足にでもしたいものだと考へて居るので御座います、と話しましたが、何と感心な心掛けではありませんか、之れについては同村長からも、表彰の申立を致して居りますが、眞に

天晴れなる良妻で、出征者家族の模範とも稱すべきものであらうと信じて居るのであります。

要するに、軍國の今日、國民たるものは、誰一人として苟にも奢侈を喜び流行を逐ふなどのことがありてはなりませんが、別けて學生たるものは、其の身分からいひましても、質素を守つて其の分に安んじて居なければならぬ、奢侈を喜び、流行を逐ひなどして、華美を衒ふために父母を苦しめるやうなことがあつてはなりませぬ、尙ほ是れから學校を卒業して、其の修むべき課程を終つた後は、家に在りて家事の實習に怠らぬやう、父母の手助けをして、やがて嫁したる後には、人の妻となり、人の母となりて、天晴れ良妻賢母たるに愧ぢないやうに心掛けて、第二の忠良なる國民を養成することに勉めて貰はねばなりませぬ、感ずる所がありましたから、聊か思ひついたことだけお話しを致して置きます。

（本編は東京高等女學校生徒卒業式場に於て演説せられたる大意にして文責記者に在り）

女子教育雜感

文學博士　桑木嚴翼

私は從來女子敎育などに毫も經驗がないので、到底根據のある實際的な議論をするなどは出來ますまいが、或一個の男子が其異性に對する要求希望といふものを述べるとしたら、強ち僭越な事もないではありますまいか、尤とも私の申上ぐることは、一方の側面を主として居りますから、一般論者や、女子敎育家や、殊に「女鑑」の意見などゝも異つて居るかも知れませぬ、そこは所謂他山の石で、とにかくかゝる意見

を有つて居る者もあると云ふことを認められんことを望むのです。

女子教育に關しては言ふべきことが種々ありますが、先づ私の注意を惹いて居るのは、所謂良妻賢母主義です、社會全體の上からいへば、男女は夫婦となり、親子となるのは最も普通の現象で、又一般に言へば實際然かあるべき筈で、若し此事がなくなつたら、忽ち社會の基礎が崩れて仕舞ふ筈でしやう、女子の將來が良妻賢母となれかしとは、女兒を有つた親達の自然に願ふ所でもありましやうから女學校などで之を第一に說くのは、當然な事とも考へられます、然し此處に注意すべきことは、第一に正當な事でも場所を擇ばず說く可きものとは言へぬ事と、第二に正當な事でも或る特別の例外があることを忘れてならぬ事です。

第一に、良妻賢母主義は女子の將來に於て、最も正當な運命を支配するものであるとした所で、學校の敎育上に之を打明けなければならぬか如何か、が問題だろうと思ふ、近頃では高等女學校の最上級で、大體十七八歲でしようが、學校敎場で無邪氣な學問技藝に身を委ねて、浮世の苦しみは知らず貌であるべき筈の花の如き少女が、家を持つたら如何の、夫に事へるのは如何のなどと敎はると云ふのは、抑も可笑しな譯であります、此の反問も家を持つて、此樣に應用しやう、此技藝も、良人を慰める方便となるだろうなど丶、何時でも思はなければならぬとは、女學校生活も、亦頗る厄介なものと言はなければならぬ、畢竟今日の世の中では、一般社會の智識が、高まつたと共に、今迄は寺小屋或は小學校だけで可かつたものが、一步高まつて、高等女學校丈の敎育を要する樣になつたので、一般の女子が良妻賢母となるべき運命を有つて居るものなら、特別に其樣な事を言はなくても宜さ丶うなものです、然し、或は女子の學問は、男子のと異つて、結局家庭に應用し得る範圍に止むべきものであるから、其れを豫めよく敎育者と被敎育

者との頭腦の中へ浸み込ませる必要があると云ふのかも知れぬ、是に於いてか、第二の點を考察する必要があります。

第二に、一般女子は、成程家庭の女王となるものでしやうが、如何なる女子も是非さうなければならぬと云ふ理由はない、文學や、美術や、學問其他萬事につけて、女のみが必ずしも關係することの出來ぬと云ふ理由はなく、又そんなに普通の生活を送ることの出來ぬのを一概に避ける理由もないと思ふ、或人は女子の生活は、かゝる修業に適せぬと云ふが、之れは所謂良妻賢母に拘泥するからで、其の生活を擇ばなければ、必ずしも難事ではない、又或人は、女子の能力から之を非難するが、成程從來多數の女子は比較的卓越の事業を擧げなかつたかも知れぬが、今後出來ぬと斷言することは速斷である、男子だとて、天才の人は極めて少數に過ぎぬのに、女子にのみ責むるは酷だと思ふ、故に、一般の女子が普通の良妻賢母となること、なほ一般の男子が、良夫賢父となる如くにしても、學藝其他の事業に一身を捧げる人が、男女ともあつたからとて驚くに足らぬ、之れを養成する學校があつたとて、彼是非難するのは間違ひだろうと思ふのです。

然し、要するに、かゝる論議は末の事で、全體學藝に從事したからとて、必ずしも良妻賢母になれぬと云ふ譯は無い、究竟は、問題は本にあるので、今日教育に此主義を主張し雷同するのは、一方に女子の人格を認めざる譯ではないが、人格を養成した上は、人々所として可ならざるはなしで、家庭に在つては、自から良妻賢母になれる譯である、又其の人格を尊重する上は、人々の自然の性情を形式的主義で拘束する譯はないのである、人格を修養することを怠つて、彼是末を論じたとて、殆んど効能はない譯です。

其の人格を尊重しない一例は、今日の學校寄宿制に顯はれて居ます、今日の學校は恰かも生徒を以て罪

惡を犯すものと看做して居る樣です、教育に從事するものをも其の調子で束縛して置いて、すぐ良妻賢母の養成に從事させると云ふのは、殆んど滑稽に類したことではありますまいか、勿論束縛は一方の弊を抑壓することが出來るかも知れませぬが、全くの罪人扱ひは反つて若い人の煩悶を增す許りです、全體學校の教課が、そんなにしなければ、覺えられぬものでしやうか、或はそれほど萬能なものか、そこから疑問が起る譯です。

とにかく、良妻賢母主義や、束縛主義は、一般に言はゞ間違ひがない主義ですが、決して根本の主義ではないから、或特別の場合、特別の人に當はまるもので、之を一般に持て行くと隨分無理が起り、其の無理の爲めに苦しむものも出來る譯です、教育家が、一般の主義を立てるには、是非一般的根本的のものを尋ねて行かねばならぬ理が、此處にも顯れて居るので其の根本的主義を守れば、後は適宜に、自由を許し活用をしなければならぬことになると思ふのです、其の根本主義は私の言葉では、人格の修養及尊重と云ふ事に過ぎぬのです、之を離れて、或は家庭だとか、或は墮落だとか言つた所で、何にもならぬ事ではありますまいか、然らば人格の修養及尊重とは何かとは詳しく論ずるを要することでしやうが、此の點に關する私の所見は固よりまだ未熟ですが、多少他にも一般問題として述べたこともあるし、今後機を得て、追々申述べる事もありませう、目下非常に忙しいので、此位で暫く筆を留めて置きます。



女子と實業

森村市右衛門

▲實業の意味

私は元より學も淺く又才識もないものですから、女子教育に關して意見といふほどのものを有しては居ません、併し日比實業といふ文字に就いて感じて居ることがあるのです。

世人は、實業といへば單に商工農業の仕事の名のやうに思ふが、是れは甚だ間違いで、私はさうは思ひませぬ、私が實業といふ文字の解釋は甚だ意味が廣い、即ち私は人の仕事は一切實業でなければならぬ、虚業といふものゝあるべき筈はないと信ずるものでありまして、眞面目で仕事する人は皆實業家であると信ずるのです、然るに日本では近比未だ却々實業家が尠くて、虚業家が多いです、是れは洵に慨はしい次第です。

特て日本の女子は元來惡い習慣に養はれて來た爲に、凡てが實がない、即ち私のいふ實業家でないのです、彼等は依頼心、浮華心といふやうなものが、その生命です、自分の額に汗して、衣物を拵へて行う家を興して行うといふ考へは甚だ乏しく、希くば力量ある男子によりて、美しく衣食し、娯しく暮そうといふ、實に悲しむべき精神を有するものが甚だ多いと思ひます。

今日では、女子教育が次第に旺んになりますから漸次此惡習慣は無くなることゝ存じます、併し教育家が、餘程また實のある人方で、即ち一生懸命に遣つて呉れなければ、容易に女子をその惡習慣から、救ひ出

すことは出來ますまい。

▲一個の遊民

過去又は現在に付いて御覽なさい、日本の女子は、確かに一個の遊民です、彼等は何事を爲して參りましたか、又今何を爲しつゝありますか。

先づ妻女といふものを見るに、下等社會はそうでもありませんが、中等以上の社會にては如何です、妻女の多くは、全く其夫の力によりて生存し、自分は雛人形の如くして居るのです、縱ひ家富まずして、美しく娛しくといふほどの事は出來ないにしても、自分は決して働かない、夫の力一つを賴みとして生存する事は同じです、自分で自分を養ひ、自分で自分を立てゝ行くのは、動物の天分であるのに、彼の妻女は全く夫に依賴してのみ居るのです。

かく言へば、然らば女子は人の妻とならず、獨立の生活を立てやう、さうすれば決して男子に負けるものに非らずといふものがあるかも知れないが、私はさう極端になることを望まないのです、女子が妻として、一家の經濟、子女の養育といふ大任務を有する以上は、それを眞面目に、所謂實業的の考へて、お遣りなされたならば、それで十分であると信ずるのです。

我國の上流社會の家庭からは、好い子女が出來ないやうです、男子の方から見ましても、立派な働きをなさる御方が幾人ありますか、寔に寥々たるものです、而して私は之を其の妻女が惡いからだといひ度のです、上流社會子女の缺點は、生活といふものを知らない、世の中の辛酸といふものを知らない、筆一本の價は如何にして得らるゝかをも知らない、美服も金も地から湧いて出るやうに思つて居るのです、それからまた自分で苦勞した事がないから、絕えて人に對する思ひ遣りといふものが無いです。

勿論上流社會は、衣食住に不足が無いのですから、自然社會的でない、即ち社會生活といふものを知らない、又其の事に疎いのでありましよう、けれどもそれをさうならしむるは、母の悪いのであると言つて可かろうと思ふのです、其處で日本は今後如何しても、賢い母を造らんければならんのです、而して是れは固より女子教育の力によらねばならぬが、教育の仕方が、唯理屈的で、家庭や社會のお話をする許では効の無いものであるから、到底むつかしいものです、自分が實地に當つて、而して自覺して來ねばならんです、實驗が第一の教訓です、故に此の實驗を重んずる教育の仕方が望ましいです。

▲獨立の氣象

近頃の女子は、皆新教育を受けて居り、又受けつゝありまするが、而も其の受け方が、如何も自分で自分を立てゝ行くといふ、獨立の考へでは無くて、流行を逐ふ、雷同するといふ方が多いです、これが好く無いことです。

音樂、洋學、裁縫、何でも流行でさへあれば、忽ちそれに走るのです、而して二三の人が何か新しい事でも言ひ出すと、忽ちそれに雷同して了うのです、而して自分の自分たる所、即ち自分に頗ぶる必要の事で、已にそれに着手した事でも、それを打遣つて了ふといふことが多いです。

世の中は分業的のものであつて、それ〴〵の役目といふものがある、彼人にはアノ仕事があり、我にはこの仕事のあるものです、然るに彼等女子は、流行雷同といふものゝために、自分の立場を忘れて了ふものが尠なく無から、世間では女子を惡口するに定まつた考へが無いとか三界に家無しとか申しますが、狐には穴あり、鳥には巣あり、人と生れて三界に家無しと言はるゝのは、寔に情けない御話だが、これが全く女子が始終定つた考へが無くして、妻女として、唯男子のために、人形の如く翫弄具視せるゝからです、

人と生れて斯の如きは恥づべきことです。
故に女子は自分の人格を養成することが第一の急務で、其立場目的から自分の必要に應じて、智識を要求するといふ風にして、身を立てゝ行き、又學校でも、家庭でも、先づ女子にそれ〴〵人格を造つて行くといふやうにし、而して其必要に應じて、智識を授けるといふ風になりたいものです、今迄のやうに、唯感情的に流行雷同で學校を卒へ、而して卒業後は、一個の遊民となつて、學問は單に文字を解し、書を讀むに止まるといふ有樣であつては、實に愚の至りではありませんか。

▲ホテルの若旦那と新聞賣子

日本女子が眞面目で無く、實業的でないのは、實に長い間の惡習慣に基くものであるが、亞米利加の母と日本の母とを比較すると、思半ばに過ぐることがあるです。
此間歸朝された日本銀行副總裁高橋是清君の話に、
イヤ驚いた「ニューヨーク」のホテルに泊つた時、其入口で身裝の汚くない新聞賣子が、新聞を賣つて居る御存知の如く、亞米利加にては、新聞賣子は、尤とも汚穢いもので、靴も穿かず、帽も被ぶらずといふものが多い、それに此賣子は、中等の身裝を仕て居るので余は不審の餘り、ホテルの主人に、如何なる、賣子かと聞くも主人は、あれは自分方の伜であるが、彼は學校に行く前、又學校から歸つた後、如彼して、新聞を賣つて居りますが、最初其資本に五ドルを貸して遣りましたが、今ではそれを返濟し、又自分の學校用具を辨じ、其上幾等かの貯金を爲しつゝあるのです、といつたが、亞米利加人の精神は、實に獨立自營的であるのだ、日本人にもこんな精神が一般に普及したなら、實に賴もしからう。
と語られたが、此處が亞米利加のエライ所です、日本銀行副總裁の泊つたホテルといへば、勿論立派なも

のであらふ、其立派なホテルの息子が自分の家の入口で、新聞賣子をする、之が日本人であつたら、若旦那風を吹して威張つて居るのであろう、然るに父から五ドルの金を借りて、それで獨立自營して、學校に通ふ、そのようにして、修學するから、其學問が、皆身を立てるために尤とも實際的となるのです。

又亞米利加では、ドライグズ、ストア、即ち日本でいふ勸工場の大仕掛のものがあるが、其處には、十一二歳の少女が、皆銘にテーブルに種々と商品を並べて賣つて居る、而して十八位宛の間に、監督の婦人が居るが、其少女は又皆生活に窮してさうするのでは無くして、これまた良家の女が多いので、之も母が若干の資本を貸して、其店を出させて、早く獨立自營の道を實地に敎へるのです、亞米利加人の心掛はエライものです、故に亞米利加に金の出來るのは、決して偶然でないです、殊に亞米利加人が仕事に眞面目な事は、一國の良性となつて居る、彼の地では、七八歳の腕白小僧が店に來て、商品を弄んで困る時、此方が如何に叱りつけても、平氣で矢張り商品を弄具にして仕方がないです、巡査が來るといつても平氣、それが一ぴ此方でビジネスといふと、其小供は飛び上つて姿勢を正し、エース、ゼ、ビジネスといつて此方の命令を竢つから、糸を捲けなら糸を捲けといふと、忽ち一生懸命になつて糸を捲いて呉れるのです、此氣風は寔に尊いものではありませんか。

亞米利加に斯く良風のあるは、是れ皆其母が造るものです、日本の女子は、亞米利加の母のやうになつて貰い度いのです。

▲日本の女子に望む

日本は目今大戰に大捷しつゝありまするが、今後は此上幾倍の國力を造らねばなりませぬ、若し夫れ戰に勝つたからとてこれで、滿足して、即ちこれで高ぶるに至りては、それこそ、將來大變な禍に陷ゐる基

であります。

世界の强國となつたに付いては、兵の強さは勿論、金も無ければなりませぬ、而してさうなるには、社會凡てが亞米利加のやうな、眞面目な氣風で、旺んに勉強せねばなりませぬ。

而して殊に立派な氣風が、家々に起り、立派な人が家々に出て貰はねばなりませぬ、されば日本の女子は多くの立派な母となつて欲しいのです、又今日の女子教育家は、多くの立派な母を造つて貰い度いのです、而して先づ女子一般の弊風、卽ち流行雷同、或は浮華的のものを捨てゝ、自己の天分に安んじ、眞面目に家事經濟も社交も職業も、一切眞實、いひ換れば一切實業的にやつて貰いたいと望むのです。

夫妻相互の稱呼

夫妻相互の稱呼に就ては近頃大に研究しつゝあるものあるやに聞けるが實際東京にても地方にても全然一定せず而も曖昧の呼方をなして過ぎゆくもの甚だ多し次の一節を見られよ『友人の坊ちやん（今年五ツ）にお父樣のお名はと尋ねましたら「上村」と申す夫は苗字ですお名はと尋れ返しましたら「あなた」と申します今度はお母さんのお名を尋ねました處が「コラ」と申します私が笑ひましたら「イヤ奥さんだ」と言ひ替へました云々』の通信をなし來れるものあり之は畢竟妻君は良人に對つて所謂「あなた」の代名詞を用ひ良人は妻君に對つて「コラ」なる代名詞を常用したる結果なり家庭教育の上に關して注意すべき事にはあらずや

忙がしき結婚

コンチクチカツトのグリーンウイツチにウエツブと云ふ男があつた、何時も其友人からサジが涌くとからかはれた獨身者であつたが一日或る氣輕る商人が何故結婚せぬかと問ふたら、何故と云ふこともないと云ふ不得要領の答であつた、其處で此の商人は一歩進めて夫れでは一人御世話を仕ませうかと云つて多くの婦人を指名した、其内に學校の女教師の名があつたが、此若者は橇を驅つて授業の終る時分に學校へ乘り付け其婦人を橇の側へ呼んだ、話は忽ち纏つて其橇へ同乘してカトナに至り或牧師の前で結婚式をやつて仕舞つて痛く其友人を驚かした

獄裡の遺訓

女子英學塾講師　辻村松花



明治維新の際の志士として敎育家として有名な吉田松蔭が小傳馬町の獄舍から令妹芳子に寄せられた書は、誠に優しい友愛の情が溢るゝやうで、而も秋霜烈日の氣慨が貫いてある、彼程の人が妹の志しを嘉び受けて觀音の洗米を精進して食べたことゝいひついでは普門品の刀刄段々壞を說き、生死の道理を辯じ、禍福の原因結果を述るところなど、鍾まつて一篇の名文章となつて居る、其の筆を執つたのは、其身が刑場の露と消える數日前即ち死罪の申渡しがあつた其日である。

松蔭の小傳は世人の多く知つて居ることであるからそれは爰には省略するとして、さて其の獄中より妹に與へた手紙といふのは實に次の如きものである。

此間は御文下され、觀音樣の御洗米三日の精進にて戴き候へとの御事、御親切の御志感じ入り申候、精進潔齋等は隨分心の堅まり候者にて宜しき事と存じ候に付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで少々志しの候へば酒肴等一向給べ申さず候其間一度靈神樣の御祭りの物頂戴致し候斗りに候まして三日の精進はさまで六つかしき事にも之無く、御親切の事に候へば相果し度存じ候へ共、當

所にて當り前の精進の外に又精進と申し候へば、連中又は番人共何故と怪しみ尋ね候につき夫れを夫れと相答え候事面倒に存じ候ふ故、八日より幸ひ精進日なれば其日一日に頂き申し候、抑觀音信仰せよとの事は定めて禍ひを除け候爲にある可く、是れには大に論ある事に候へば委細申進ず可く候、拙者未だ觀音經は讀み申さず候へ共、法華經第二十五の普門品と申す篇に觀音力と申す事尊大に陳べて有之候、大意は、觀音を念じ候へば繩目にかゝり候時は忽ちふつ〳〵と繩が切れ、牢屋に捕へられ候へば忽ち錠鍵がはづれ、首の座に直り候へば刄がずた〳〵に折れる等申して之有り候是は拙者江戸の人屋にて此經を幾度も繰返し讀み見て候へ共終始此趣に候、夫故凡人は是より難有い事は無いとて信仰するも無理無く候、去り乍ら佛の教へは奇妙な仕懸けにて、大乘小乘と二つに分けて、小乘は下根の人への教へ、大乘は上根の人の教へと定め之有り候、小乘にて申し候へば、

觀音は右の經文の通りのものと心得たる者を信仰さするに御座候、是は人に信を起さする爲なり、信を起さするとは一心に有難い事ぢやとのみ思ひこみ他念他慮無き事にて、一心不亂と申する此事也、人は一心不亂に成りさへすれば何事に臨み候ても、夫々怠轉して不忠不孝無禮無道等仕る氣遣ひが無い、されど初めから凡夫に一心不亂ぢやの不怠轉ぢやのと申聞せてもさつぱり耳に入らない者故、假りに觀音樣を拵へて人の信を起させ候敎に御座候、是を方便とも申候、是に依りて法華經都上りのたとへ之有り至極面白く候へ共事長ければ略し申候、さて又大乘と申し候時は、出世法と申す事が肝要に御座候、出世と申し候ても立身出世等申す事には御座無く候、其初釋迦が天竺王の若殿に候處、若き時から感じの強き人とて、老人を見ては我身も往く先は老人に成ろうかと悲み、死人を見ては吾身も往く先は死なうかと悲み、蟲けらの死んだのや草木の枯たのまでに悲みを起し

是非に生老病死が此世の習ひなれば、此世を出ねばすまぬと志を立てゝ、年廿五の時、位を棄て山に入り、右の生老病死の免るゝ修行をして參られ候、左候て、三十出山とて、僅五年の間に生老病死を免れる事を知り、生きもせねば老もせず病も死もせぬ事を悟りて出て來て、夫れから人を教化せられた、是が出世法ぢや、故に出世せねば濟世が出來ぬと申す事も此事なり、濟世と云ふは即此世の人を濟度する事に御座候、さて、其死なぬと申す事は、近く申せば釋迦の孔子のと申す御方々は今日まで生て御座る故、人が尊みもすれば難有がりもする畏れもする、果して死なぬでは無いか、死なぬ人なれば繩目も人屋も首の座も前申す觀音經の通りではござらぬが、楠正成ぢやの大石良雄ぢやのと申す人は、刄物に身を失はれ候へ共今以て生て御座る、乃ち刀のずた〳〵に折れた證據でござる、扨又、禍福如繩と云ふ事を御悟りが宜しく候、禍が福の種、福が禍の種に候、

人間萬事塞翁が馬に候、拙者等人屋にて死に候へば禍ひの樣な者に候へ共、又一方には學問も出來候へば福ひ此上もなき事に候、人屋を出で候はゞ又如何なる禍ひの中には又福も變り候へ共、所詮一生の間、難儀さへすれば先の福ひがあるなり、何の効驗ない事に觀音を賴みて福を求める樣の事は本々無益に存じ候、尤も右の通りに申し候はば、身勝手な申分不孝な申分かと御存じがあらうこゝに又論がある、易の道に滿盈と申す事を大に嫌ふなり、御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、芳は夭折、敏は啞子、右樣の惡しき樣な者なれど、又あとの四人は、何れも可なり世を渡られ、特に兄樣そもじ小田村は兩人宛も子供があれば不足は申されぬ、世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ、是程にも參らぬ家は多いもの、近くはそもじの家にても高須樣にても、兄弟內にては右樣の惡い人も隨分あるもの、然れば父母兄弟の代りに拙者芳敏の三人が禍を受るのだと御思候はゞ、

父母樣の御心もすむ譯では御座らぬか、且杉は隨分多福の家なれば、拙者身の上は前にも申す通りつめが牢死しても死なぬ仲間なれば、浮世の福ひは隨分あるが、杉は今では御父子供御役にて何の不足もない中なれば、子供等がいつも此やうな物と思ひ、昔山宅にて父樣母樣御苦勞なされた事を話してきかせても、眞とは思はぬ程なれば、此先五十年七十年の事を篤と手を組で案じて見やれ、氣遣ひな物では無いか、去年も端午に客の多いに人は目出度〱と嬉し貌すれど、拙者はどうも先の先が氣遣ひでたまらんから、始終稽古の場へ屈むで人の知らぬ所で獨り落涙した程の事であつた、若しや萬一、小太郎でも父祖に似ぬやうな事があつたら、杉の家も危い〱、父母樣の御苦勞を知て居る者、兄弟にてもそもじまでぢや、小田村でさへ山宅の事はよく覺へまい、まして久坂等は猶以ての事、されば拙者は氣遣ひで、觀音樣を念ずるよりは、兄弟姪娚の間へ樂は苦の種苦は樂の種福は禍の本と申す事を篤と申し聞するが肝要ぢや、そして又一つ、拙者不孝ながら孝に當る事がある、兄弟内一人でも右樣の惡い人があると、跡の兄弟も自然と心が和らいで孝行でもするやうになる、兄弟も睦まじくなるものぢや、夫れで是からは拙者は兄弟の代りに此世の禍を受け合ふから、兄弟は拙者の代りに父母に孝行して呉れるがよい、左樣あらば、約る所兄弟中皆よくなりて、果ては子孫の爲是程目出度事はないではないか、能く御勘辨候へ、小田村久坂等へも此文御見せ候へ、佛法信仰はよい事ぢやが、佛法に迷はぬやうに心學本なりと折々御見候へかし、心學本に

長閑さよ願ひなき身に神詣で

神へ願ふよりは身で行ふがよろしく候。

十三日認む

讀みもてゆけば、殆ど死の運命の迫りつゝある人の絕筆とは思はれぬ程綽々としたものである、妹の至情を悅び享けて「一日の精進日に頂き候」とは、如

何に美はしき友愛の情なりしか、念彼觀音力刀刄段々壞を説いて「刃物に身を失はれても今以て生て御座る果して死なぬではないか」とは、如何に不息轉の念の堅固なりしか、天地と壽を同じうし日月と光りを齊うすと歌ふた涉江の哀調を聽く如くに思はるゝではないか、末段、易を引いて滿盈を戒め、詢々と兄弟を訓戒した言の周到な事は、國難に殉すると共に家を思ふ心も切なもので、志士として教育家として、短生涯にあれ程の事業を計畫して逝かれた松蔭其人の本領をよく盡してある。

松蔭の妹なる人は當時兒玉氏に嫁して子二人あり、名は芳子とよび、松蔭に二つ劣りの年なれば廿七の時の事なり、今現に府下青山原宿に住ふて至極壯健に餘生を樂んで居らるゝ杉家も吉田家も兒玉家も、中流以上の地位を保つて圓滿な幸福な身の上ながら七十三の高齡であるに、夜は早く臥し朝は午前三時に赴き、盥漱についでは冷水浴をする例で、寒中にでも一日も怠らぬ、さて、髮を梳り、庖廚に下つて自から飯を焚き、汁も仕度て、さて幾人かある下女を起し、熱心な佛教信者とて、夫れより手を淨めて看經にかゝる、其外、賓客の應對も、饗應ども一家經濟も、子弟の教育も、立派に引受けて些の遺算無く、留主宅を處理して行かれて居る、(吉田某氏は和歌山縣視學官にて赴任中)老体なれば絹布にてこそあれ、質素に輕く温かを旨とした服裝にて、假にも奢侈を厭はるゝ、まことに儼然たる武家の婦女氣質で、其風貌を見ると轉た偉人の家庭のさまも忍ばるゝやうな心地がする、すべて世の中が移り易つて新智識が入つて來ると共に、思想も家風も漸々と變るものではあるが、此吉田家は昔しより、老を敬ひ勞はるとか親に孝とか云ふ事は、至れり盡せりで三度の食膳に向ふても母が箸を取らぬ中は主人も取らぬ、如何なる微細の事でも必らず相談して處分する、遠隔の地に離れて居つても三日と書信を斷たないで、其の書信には、大小の日常の生活の狀態をはじめ、珍らしい事面白可笑い事など、側て談話する

如うに書きこめてあると云ふ體で、親子の至情は難有い程である、同家の床の間には松蔭の畫像が掲げてあつて朝夕の禮拜と供物を絶やさぬとのことであるが、松蔭廿九の肖像にしては少し老けてみゆる、是は肖像畫と云ふ事が行はれぬ時代で、只其遺族の記憶して談話す儘を畫工が想像して書いたもので、此の頰のあたりに皺があつたと云ふので線を引いた失策であるといふ、總結髮で小袖を着し袴を附け小刀を帶んで端座の態である、以下兒玉氏の談話の儘を書つけて見んに。

松陰は瘠形の方であつたが極く壯健で、床に就いたを見た事なく、只二歳の時に重い疱瘡に罹つた事があると云ふ母の話し、それで眉毛が少し薄うなつて居る、幼ない時から本讀む事が好きで、夜晝机の側を離れた事が無い、最も父（實父杉常道氏）や兄が嚴しう云ひもしたれど、とんと他所の子達のやうに獨樂まわす事も紙鳶飛ばす事もなく、十三の時殿樣の御前に召されて何とか云ふ書（武教全書）を進講申上ぐると云ふ事に成つた、是は兵法家の後嗣なれば免れぬ役ではあるが、さあ何日と云ふ日も迫つてある上、十三冊の本の何所が出やうも知れぬ、晴の座席で後れをとつてはならぬから復習へて置かぬか不審は無きか、と父兄が繰返して念を押しても、唯く々と計りで別に氣に掛る體も無かつたが、當日御前に進むての講義にお好みの所を問苦しうもなく申上たので上の御褒に預かり、別に其書物一部を賜はりたとやらで、父も心嬉しく御前を退出すると、詰所で同僚の方々が杉の果報者寧馨兒を持た幸福者、胴上げにして遣るまいか、夫れよからうと、大騷ぎ大賑かであつたそうである。

學問は誰を師として學んだと云ふ定まつた事は無く大方は自分の苦學研鑚と、長崎にも行き江戸にも遊むで、此間に名高い先生の門を叩いては修養した事と思はるゝ、家に居る事は稀であつた、此天涯の孤客となつて、それから夫へと周遊つて居る中にも手紙を細々と寄せて、秋になると兄上とそもじと三人提

携へて後ろ山（萩城下松本村の）に茸狩に行つた時を思ひだす、彼の時の樂しかつた事が忘れぬと書いてよこした。

今思へば耻かしい事、彼の時は未だ修行が積まいで只一心稱名で兄の無事をと思ふたが、今ならば彼れ程不覺の事はせまいもの、「二人共お役」「端午の節句」など〻有るのは、父は奉行兄は盗賊改めにて、兎も角もお役向を勤めて居つた故、長男小太郎が初節句に宅では構はぬでも、側から大業にして仕舞ふて、祝ひの酒宴の賑にあつたを、行末の事を案じて戒めたのである、彼の文にある通り兄弟は男四人女三人で、一の兄は今も壯かで國元に居り、其次か松陰、其次か私、夫れまでか父兄の未だお役に就かぬ前の艱難を熟知つてゐる、母の名は瀧、實家は村田氏であるが、兒玉家の養女となつて杉に來た者で、父と共に耕しもし樵もし、舅姑小姑への務も隨分に盡して、勞苦は些かも厭はぬでした、別に學問とても無いが、只物に動せぬ性質であつた、後の四人は彼の文にもある通り。

さて今の元老として出世された伊藤、山縣、故の品川、野村の方々が、松陰の松下村塾で勉強せられた頃も、母は悦んで此人達を愛し、時々褒美等上げて〻あつた、居室が狹隘くて椽側に居溢れ雨が降て來てビショ濡れになつたの、一人が壁土を投げると一人が鏝で塗つた等と、よく人様が申しますが夫れは只松陰が二男で兄の家に居た故、十分の事が出來なかつた時の事を云ふたのである、松陰が毎々云ふて居たのは、私の弟子の中から天下を經綸する人が出て私の遺志を成して呉れる者があるとのことであつた。

最初に江戸の牢に入れられて數度の訊問があり、兎も角、申し開きが立つて放免さる〻と云ふ申渡しが有ると、直其白洲で何か時勢について激しい論を申述べたとやらで、左樣な危險い者は許して置けぬと又直ぐに牢舍の中に入れられたが、其事を聞いた私が愚かな愚かな心から、放免すとあらば夫なりに免

されて親兄弟に無事な顔見せて呉れはせでと、つい怨みの文を書て届けたを、志しは嬉しく思ふ、さりながら物の道理はそうした物で無い、其理解委しく書いて和女の心行く樣にしたいけれど、獄中の不自由さ、又其暇も無ければとて、私のやつた文其儘に此所ぞと思ふ所々に傍線を引いて、註のやうに細書しておこせて、是も大切な遺物と思ふて、机の引出しに秘藏して泣いたが、其後時勢の移り遷りで、數度の轉宅にどう見失ふたか紛失した、殘り惜しい限りと思ふ。

誰方も御存じの彼の手紙（前記）は、日取りは確と定まらぬが御仕置と云ふ事は確にきまつた其日にかき書物は八ケ間しいと云ふので、萬一を恐れて紙捻によつて飛脚に賴んだので、夫れが廿三日なら斬れたのは廿七日の明六ツを相圖であつた、今では彼の手紙は表裝して楣間に揭けてある、愈自宅から江戸表へ差立らるゝと云ふ前夜、湯を浴みて身を淨め、衣を更へて居る室に、母が來て、何卒今一度壯健な顔で逢ふて呉れよと云ふたを、何氣無く笑ひに紛らして、ア、屹度無事でお目に掛かりますと云ふたが何して又逢はるゝものか、永い別れになつたのである、國元では一同謹愼して只江戸表の消息を案ずる斗り、斬罪になつたのも、遙か後に聞いたやうの事であつたが、爰に一つ不思議なは、其廿七日の曉の夢に、母は莞爾と笑を含んだ快活そうな松陰の顔を見、父は鋭利な刀で首を打たれたと見て寤めた事で思ひ寢の夢とはいへ、神が通ずるとは是れであつたか、母には然諾を果し、父には最期の亂れなかつた事を知らせたものとして、家人も歎きに沈んだのであつた、傳へ聞く所によると、陰濕の牢舍で身體は焦瘁し、首の座に直るも正座に堪えず、突支棒をして斬つたと云ふそうなが、兩手の指を握らず、陰嚢の垂下して居つたので、死を觀る歸するが如しとは此人かと驚嘆されたと云ふ話し。

さて明治の御代になつて、贈位の御沙汰を蒙るやら松下村塾は遺志を嗣で再興せらるゝやら、母の寫眞

は三條公の御手を經て乙夜の覽に入り、明治十八年には　皇后陛下より御菓子を賜はり、病中も特旨を以て御下問を辱くし、廿三年八月九十に近い高齢で死亡るまで、只々皇恩に浴して居ました、父は夫から思ふと幸薄く、六十臺に死去つた故難有い御時節も見ずに仕舞ふた。

往昔を思ふと樂しかつたも悲しかつたも、茫ッとして夢のやうであるが、下田港は遠い所でも無ければせめては兄の終身の恨みを遺した蹟を往て觀やうと思ひながら今によう果さぬ、豊多摩郡世田ケ谷村に松陰神社を建らるゝに付て骨折つて下さる方々が、肖像は是で似て居るかなど頻りにお聞きになるが、もう五十年、昔の事で、細かいことはよう思ひ出さぬ位であるから、人樣にお話しても、前後を取違へたり思違へをしたりして、後で孫共に笑はるゝ始末です。

右は前記せる通り、先生の令妹の直話であります、當時の有様が偲ばるゝではありませんか。

アン、ハリソン、フアンショウ夫人と其の記念錄

あまき

アン、ハリソン、フアンショウ夫人は、一千六百二十五年（我が寛永二年）三月二十五日を以て、英京倫敦に生る、サア、ジョン、ハリソンの嫡女なり、母は名をマアガレットと呼び、由緒ある英國の名族にして、敬虔の徳を具へたる完全の女性なりき、さればその女を養育するに當り、注意尤も愼重にして至らざるところなかりければ、マアガレットが此世を去りし時には、夫人はやうやく齢十五歳の一少女に過ぎざりしに、母に代りて、一家内の務をば、その細やかなる双肩に擔ひて、大人も及ばぬばかりに處理せしは、人みなの感嘆せし所なりしとぞ。

十九歳の時、母の一族なるサア、リチヤアド、フワンショウといふに嫁しけり、リチヤアドは元來法律の學を修めたれども、其の性質の簡潔なればにや、煩はしき法律の務によりて、身を立つるを嫌ひ、夫

人を伴うて外國に遊びなどしける程に、幾程もなく西班牙駐在の大使を命せられぬ、然るに其頃ろ英國にては、王黨と共和黨との間に劇げしき軋轢を生じ曩にはチャァルス一世の弑せらるゝあり、今はチャアルス二世の戰に敗るゝありて、クロムウエルは大統督となり、その勢威全く大英國を壓しければ、王黨一味の徒輩は或は捕へられ、或は殺されて、見る影もなき有様となれり、リチャアドは素と王黨の忠臣なれば、夙にチャァルス一世に事へ、續いてチャアルス二世の爲に、力を盡して、王位の回復を謀り屢々兵火の間に奮戰しけるが、ウオルセスターの戰に破れて、遂に敵軍の捕虜となり、哀れや鐵窓に繫がれて、縲絏の耻めを受くるに至りぬ、其間ハリソン夫人は、常に夫と共に艱難辛苦を嘗めて、暫らくも其傍らを離れざりき、今其の一例を擧げんに、夫が囚獄の中に入れられしより、一日として、竊に音づれざることなく、常に薄暗き提灯を携えて、まだ夜明けには程遠き午前の四時といふを期とし、ひそかに忍び入りて、人目を避けつゝ、囚獄の窓に近づきて、その中に苦吟せる夫を慰め、縱ひ天曇り星暗き暗憺たる夜半にても、雨はげしく風ものすごき嵐の日にても、更に其時を違ふことなく、全身雨に打たれて、滴の衣にしたゝるまゝ、簷の下に佇立して夫と語らひしことも屢々ありき、クロムウエルはリチャアドの高義に感じ、敵ながらも、天晴れの人物と見込みしにや、王黨を脱して、共和黨たらしめ、己れの部下に屬せしめんとて、さま〴〵に誘ひけれども、志を變じ、節を偸むるは、本心の決して許さゞる所なればとて、リチャアドは其度毎に斥ぞけて容れざりき、後遂に保釋を免されて、自由の身となり、ヨヲクシアーなるタンカアスリー、パークに遷りて、こゝに住ひ、文藝の研究に日を送りぬ、そは妻なるハリソン夫人も最と嗜むところなれば、夫妻共に喜んで文學の人となれりき、然るに數年を經て王政回復の業成りければ、王黨の人に取りては、恰も天日の一たび沈まんとして、復び其光をあらは

せしが如き思ひして、皇室の萬歳を唱へて相祝賀するが中にも、リチャアドは日頃の志こゝに遂げて、歡天喜地の情、殆んど筆紙に悉すべくもあらず、殊に朝廷の御覺え特て目出度く、衆望によりて、國會議員の榮職に就きしのみか、幾ならずして、葡萄牙及び西班牙の大使に任命せられ、夫妻相携えて任地に赴きけり、夫人はいふに及ばず、リチャアドの心の内の悦びは、如何なりけむ、しかも斯る高き位地に上りたる後も、夫妻の心は、少しも艱難辛苦の昔しに異ならずして、浮きたる快樂を求めず、榮耀榮華の望みを捨てゝ、偏へに家庭の和樂を以て、最上の樂みとせしぞ感ずべけれ。

然るに本國政府の方針一變して、リチャアドは俄かに召還され、歸國の準備を急げる折から、不幸にも急病に罹りて、夫人の厚き看病も、その効なく、空しく異邦の土となりしは、無殘といふも愚かなり、夫人は天に慟き、地に哭きて、身も世もあらぬ許りに哀みしが、西班牙の女皇も、いたく同情を寄せ給ひて、夫人がこれ迄歸依せる宗教を棄てゝ、カソリック教に改宗しなば、數千圓の年金と、別に子女の養育科をも給せんと沙汰せられけり、夫人は女皇の有がたき恩命を承まはりて、深く感銘せしが、此頃歐洲諸國に於ては、己が奉ぜる宗教を脱て、他の宗旨を奉ずるは、尤も重大なる事件として、心ある者の敢てせざるところなりければ、夫人は眼前夫を喪ない、兒を抱きて、貧苦の迫れるにもかゝはらずかゝる條件によりて金錢を受くるを潔よしとせずして、此の恩命を辭みけり、夫人は此時の事をその日記に記して、左の如くいへり。

ア、萬能の神よ、願はくば此の地上の最と哀れなるもの、上に瞻視給へ、わが名譽も、守護も、此世の慰みも、今は亡し、わが夫の此世に於ける潔く且つ善良なる行ひの報として、主の恩惠を望みて、途にさまよへる吾れを視給へ、ア、主よ己れを憫れみて、御扶持なくば、支ゆる能はざる重荷の下に沈めるわが靈魂に、平安を語げ給へ、語る

に人なく、歸るに途なく、國に負き、友に離れ、改宗の誘惑に逢ひて、五人の子を抱き、貧しき家族を携えたる吾れを視給へ、御心のまゝに爲し給へ、そは夫なき女、父なき孤兒のわれ等は主に賴るの外なければなり、願はくばわが生命の終らん時われをして、吾夫の靈魂に結ばしめ給へ。

と、其の困難の情と、敬虔の心と共に見るべきにあらずや、然るに天の惠とやいふべき、奧太利の女王アンより、リチヤアドに送別の贈品を買はんとて金て用意し置きたる金なりとて、數千金を惠まれしかば、そを旅用として、遺骸を携えつ、一千六百六十六年の十月といふに英國に歸着しける。

ハリソン夫人が、全身を擧げて、其夫に盡せしは、前にも記せるが如くなるが、其の德性は啻に之に止まらず、其性質柔順にしてよく夫の命令を守り、假りにも之に背かざりしは、妻としての夫に對する服從の好例を世に示すものといふべし、今同じく夫人の筆に成る記念錄の一章を摘錄せん、但し此の事は

夫リチヤアドが、チヤアルス二世のまだ皇太子たりし時、その秘書官を勤めたる折のことゝ知るべし。

妾は今此身をば、立派なる女皇、我夫をば名譽ある榮冠を戴ける尊き人と思へるなり、そは吾夫は賢く又善良なる人なれば、王族と生れんよりも、夫の姓氏を名乘る方、妾に取りては寧ろ尊しとこそ考へければなり、茲に妾の尤も尊敬するリベルス孃といふ勇ましき婦人おはしき、此方は嘗て王陛下の爲に數萬圓の大金を擲たれし程の人なれば常に心を國家の事に注がれしも無理ならじ、リベルス孃は妾に向ひ、最と親切に國事に關することを探知せんことを賴まれて、國事を知るの便ある數々の婦人はあれど、御身ほど之に適したるはなし、今宵パリスより郵便物は到達すべし、己れはその郵便物が、如何なる新事實を傳ふるかを知りたしと思へば、願くは御身竊かに夫君に乞ひて、その書中のことを探り、これを我れに告げ知らせ玉へといふ、妾は倘年若く世の汚れにも染みしこ

となけば、これまで新事實などのことにつきて、口にさへ上せしことなかりしが、今は國家に關する新事實を探るの中々に大事なるを知り始めぬ、而してかゝる事に立ちさはるは吾夫の愛をして益々深からしむる道なるべしとも考へぬ、されば、此夕べ我夫の官衙より還り給ひし時、妾は直に出迎ひつゝ、手に多くの書類を携えて、書齋へと行き給へるに隨ひ行きしに、夫は振向き給ひて、妻よ、何事のありてやと言ひ給ひぬ、妾は今日巴里より到着せし郵便物ありと聞きぬ、今携え給へるはそれなるべし、願はくは如何なるとのありやを知らせ給へといへば、夫は默笑みて、妻よ、程なく出で來るべければ、此を去り給へ、今は忙がしければと答へ給ひぬ、頓て出で來給ひしかば、妾は又言出で、先刻のことを願ひしに、夫はそれには何をも答へずして、話を他事に轉じ給ひぬ、晩餐の時に、妾は一物をも食せざりしが、夫は例の如く、幾回となく妾へと酌し給ひたり、臥床に入りて後、妾は復び彼事を尋ねて、夫が知り給ふ事をば、妾に隱し給へるは、妾を愛する者とは信ずる能はずとまで言しも、何事をも答へずして、「キス」しつゝ我口を止め給へり、妾は聲を揚げて泣きぬ、夫は眠に入り給ひぬ、明る朝、早く起き給ひて、種々の談話を仕向け給ひしも、妾は一言をも答へざりき、夫は程なく官衙へと行き給ひしが、午餐にとて歸り給ひしかば、妾は夫の手を握りて御身は妾のかばかり思ひ煩へるに氣づき給はずやと言ひしに、夫は妾を抱き給ひて、吾妻よ、凡そ世上に此事程吾れを苦しむることはあらず、御身の尋ね給へるは、公務に屬することなれば、そを打明くるは、吾力の及ばざるところなり、吾が生命も、財產も、みな御身のものなれども、たゞ名譽のみは、吾が物なれば、若し公務の事をしも洩らさんには、吾は吾が名譽を保つ能はざるべし、吾れは御身が此答を以て安らかに滿足し給はんことを望むと答へ給へり。

斯く他意なき道理を立てし答へを聞きて、妾は始めて吾が愚かなりしを感じて深く愧入りつゝ、その日より夫の過去り給ふ日まで、領地又は家族のことに就きて、進んで明かし給ふ事の外には、復び事務のことに關し、妾より尋ね參らせしことなかりき。

その深く謹愼の德を守りて、夫に服從せる情、また思ひ見るべきにあらずや。

憐れ罪なき無垢の夫人よ、初めは強ても、書中の事實を知りたしとて、故と拗ても見たり、泣いても見たりして、偏へに己が一念を達せんとのみ勉めけれども、一旦夫の眞意をきゝては、飜然として、己が過ちを悟り、其後は夫の進みて語ることの外は、一切職務上に關して何事をも言はざりし心の中の潔よきは、譬へば玲瓏たる玉の微瑕をだに留めざるに比すべからん。

女禮の一端

▲爰には座布團の敷方、火鉢と煙草盆の据ゑやう、及び菓子、茶等の差出し方を述ぶべし、座布團より作法を云へば、先づ主人と對等或は知己の人に對しては、取次ぎて客間へ通し、座布團は客の後より、主人の右の膝に向つて眞直に敷きて客に座せしむべし。▲火鉢は主客の對座の際は、無論中央に据ゆべし、火鉢を持參する者、若し取次ぎたる女中なれば、辭儀するに及ばず、火鉢を据ゑて直に立去るべし。▲煙草盆は客の下手へ据ゆべし（火鉢を進めぬ時は無論主客の間）之は火鉢を進めし時の置方と知るべし。▲菓子は座布團火鉢煙草盆を出したる後に勸むるが順序なり其作方は客の上に置くべし、之れに續いて茶を勸むるなり次の間より平茶臺又は腰高に茶椀を乘せて立出で煙草盆と火鉢の間に、双方より約五寸位離れし處へ置くが法なり、是れは略式なれど、元より打寬いて對話する人には左まで儀式張にも及ばず。（小笠原敎場員談）

東關紀行講義（四）

文學士　境野天華

講義

清見が關も過ぎうくて、しばしやすらへば、沖の石、むら〳〵潮干にあらはれて、波に咽び、磯の鹽屋、所々風に誘はれて煙たなびけり。東路の思ひ出ともなりぬべきわたりなり。

（通解）清見が關附近一帶の景色はまた格別であつて、中々見棄てがたい思がしたので、しばらく景色に眼をうつさん爲めに休息した。丁度海は潮干になりてゐて、遠い沖の方まで岩や石が露はれてゐる。潮水は其の岩石にあたつて碎けて咽せんでゐる。また、海濱に並び建てられたる海士の鹽屋からは鹽を燒く烟であらう、海風に吹かれて風のまに〳〵靡いて居ると云ふ面白い景色、東海道中に好い景色も多いが、まづ此の清見が關一帶の景色は折にふれ、物にふれ思ひ出され、いつ迄も忘れられぬであらうと思はれる。

この關遠からぬ程に興津といふ浦あり。海に向ひたる家に宿りて侍れば、磯邊によする波の音も、身の上にかゝるやうにおぼえて、夜もすがらいねられず。

おきつ瀉いそべに近きいわ枕
かけぬ淚にも袖はぬれけり

（通解）興津の浦と云ふのは此の清見が關から餘り隔れて居る處でない。其の興津の浦の海に面して建てられてゐる或る家に宿をかりたが、磯の邊

に打ち寄せ、打ちかけて來る浪の音が、餘り近いので、丁度身體中が浪を被ぶるやうな感がした。それがために終夜眠りを催すことも出來なかつたと云ふ噪ぎであつた。

（四）興津の浦の磯邊にある家に宿をしたので、終夜枕（海岸であるところから岩枕と云つたもの、また或本には旅枕となりてゐる）の下に浪が打ち寄せて其の音のために、夜一夜まんじりともせず、浪は打かけられなくとも、わびしさに泣く涙の袂はすつかり濡れて仕舞つた。

今宵は更にまどろむ間だになかりつる。草の枕のまろ臥なれば寐覺ともなき曉の空に出でぬ。くきが崎といふなる荒磯の岩のはざまを行きすぐるほどに、沖つ風はげしきに打よする波も隙なければ、急ぐ潮干の傳ひ道、かひなき心地して、乾す間もなき袖の雫まではかけても思はざりし旅の空ぞかしなど、打ながめられつゝいと心細し。

沖つ風けさ荒磯の岩傳ひ
浪わけ衣ぬれ／＼ぞ行く

（通解）磯邊の浪の音が高かつたので、此の夜はついぞ微睡（まどろむ）することも出來なかつた。元より草枕の旅寐の事、ゆつくり帶を解いて寐ると云ふのでなくて、ほんのごろり寢（まろ臥）とでも云ふべき程であるから、寐覺と云ふことは出來ない、起き上れば支度の準備のと云ふ面倒なこともなく、明け方の空に直ぐと出發すると云ふ氣輕さ。道はくきが崎と云ふ所を通りたが此の所は荒磯道になりてゐて、道々に亂れ立ちてゐる岩の間を歩るいて居ると、沖の方から吹いて來る潮風が烈しくて岩の上まで浪が絶えず打ちかけて來るので、折角今の潮干の間に此處を通り拔けやうと急

いで居る甲斐もなく、浪は容赦なく泡沫を通り行く自分どもの旅裝の袖に打ちかけて、乾すべき手段もなく、時間もないと云ふ始末、旅の空に出てこう云ふことになりて難儀をしやうとは豫期する所ではなかつたのだと、浪の面を見、濡れた袖の上を見て、つく〲と心細く思ふた。
沖の方から吹く風が今朝はまた非常にあらくて、此處の荒磯の岸に吹きつけるので、其の荒磯、岩傳ひにあるいてゐる自分共の衣裳は、打ちつくる浪の泡沫に濡れて、さながら、浪の中を分ける姿となつた。

神原といふ宿のまへを打ち過ぐるほどに、後くれたるもの待ちつけんとて、ある家にたち入りたるに、障子に物を書きたるを見れば、「旅衣裾野の庵のさむしろに、つもるもしるし富士の白雪」といふ歌なり、心ありける旅人のしわざにやあるらん。

（通解）神原（今の蒲原）の宿の前を通り過ぎた時丁度、伴侶の人が後くれてゐたので、其の人が來るまで待合せやうと思つて、或る路傍の家に入りて休息しながら、ふと見ると、障子に何か書き付けてある。讀んで見ると、「旅に出懸けて、此の富士の裾野なる神原の宿に一夜の宿をかりたが、敷いて居る小席（さむしろ）の上に霜が置いて、夜の寒さがしみ〲薄ひ旅衣の身に覺えられることであるが、これでは屹度富士の御山は雪であらう、さぞかしひどく降り積むことであらう」と云ふ歌であつた。定めし風雅の心懸けある旅人が此處に一泊して詠んで書き付けて置いたのであらう。

昔香爐峰の麓に庵をしむる隱士あり、冬の朝簾をあげて峰の雪を望みけり、今は富士の山のあたりに宿をかる行客あり。冴ゆる夜衣を片敷きて山の雪を思へる。

かれもこれも共に心すみて覺ゆ。

さゆる夜は誰こゝにしも臥しわびて
高根の雪を思ひやりけん

昔香爐峰の云々　白樂天が事、白樂天が詩は此の紀行中には至る所に引用されてゐて、殊に此の所の引用は此の紀行の始めに引かれた彼の「遺愛寺鐘欹枕聽」と聯句になりてゐる。即ち「香爐峰雪撥簾看」と云ふのである。斯く毎度同じ人のもしくば同じやうな古人の詩句を引くのは、此の紀行の僻(むしろ缺點)であつて如何にも讀みつらいやうにも思はれるが、然し、此時代の文章は獨り此の紀行と限らず一般にこう云ふ缺點はあつた。讀者は其の心で讀んで貰いたい。余りよい僻でないと云ふことを承知して讀んで貰いたい。

(通解)　昔は支那の香爐峰の麓に世を忍ぶ草庵を作りてすむでゐた隱遁者があつた。或る冬の朝、簾を捲き上げたが、向ふの香爐峰に降り積んでゐ

る雪の面白い景色を眺めて、彼の有名な詩を作つたが、今はまた我邦に於いても此の富士の裾野の邊りに一夜の宿をかりた、旅人(行客)がありて、霜冴ゆる夜、旅衣を片敷いて、余りの寒さに定めし御山は雪であらうと思ひやりたと云ふのは、彼の支那の事も、此の日本の事も何れもいつれも面白い心涼しい風雅な話ではないか。

霜冴ゆる冬の寒い夜に、寐られぬ旅枕のつらさを打ちなげきて、富士は雪であらうと思ひやりたと云ふ其の旅人、此處の此の宿に此の面白い歌を書き殘して置いた所の旅人は果して誰人であらう。どう云ふ人であつたか、また其の人の名は何と呼んだのであらうか、知りたいが殘念なことには、それも知り難い。

田子の浦に打出てゝ、富士の高根を見れば、時わかぬ雪なれども、なべていまだ白妙にはあらず。靑うして天によれる姿

繪の山よりもこよなう見ゆ。貞觀十七年の冬の頃、白衣の美女二人ありて、山の頂に並びて舞ふと、都良香が富士の山の記に書きたる、いかなる故にかと覺束なし。

富士の根の風にたゞよふ白雲を
　天つ乙女の袖かとぞ見る

都良香が富士山の記、云々　都良香は平安朝の文學者で、宇多、醍醐の朝に仕へた人、其の富士山の記中に、「貞觀十七年十一月五日、吏民仍舊致レ祭、日、加午天甚美晴、仰觀二山峰一、有二白衣美女二人一、双二舞山嶺一、去レ嶺一尺、土人共見」とある。美しい富士山に對して此のやうな神話傳説が傳へらるは怪しむに足らぬことで、天女に關しては例へば同じ地方で三保松原に發生した羽衣傳説がある

（通解）　田子の浦、昔から歌にも詠まれ、詩にも歌はれた田子浦に着いて、其の海岸の好景を眺めた、富士の高根は昔から時知らぬ山と云つて、一年中雪の消ゆる時がなく、此の山だけは冬も夏もないとは云はれて居るが（時わかぬ雪なれども）と云つて、矢張、春と夏、秋と冬との區別はあるのであつて、まだ〳〵全體が眞白妙と云ふ譯には行かぬ。山の色が青みがゝりて（雪が一杯に積んで居らぬから）中天に高く聳えて居る氣高い姿は、なか〳〵繪に書いてある富士の及ぶ所ではなくてもつと〳〵此上なしに立派なものだ、昔、貞觀十七年の冬頃に白衣を着けた美しい少女が二人天上から此の富士の嶺に舞ひ下りて、二人其處に並び舞ふたと云ふことを、都良香と云ふ人の富士山の記の中に書いてあるが、どうした譯だかは判らぬさう云ふ不思議なことが果してあつたのであらうか。

富士の山に吹き通ふて居る風に吹かれて、姿面白く漂ひ浮んで居る白雲、それが其の天から下りた

と云ふ天女ではなからうか、天女の美るはしい衣裳の袖と云ふのは其の白雲ではあるまいか。

浮島が原はいつくよりもまさりて見ゆ。北は富士の麓にて、西東へはるはると長き沼あり、布をひけるが如し、山の緑影をひたして、空も水もひとつなり。芦がり小舟所々に掉さしてむれたる鳥多くさわぎたり。南は海のおもて遠く見わたされて雪の浪、煙の浪いとふかきながめなり。

(通解) 浮島が原の景色は此の度の道中に見た何れの處よりも立ち勝りて居ると見られた、北の方は富士の山の麓になりて居て、西東の方向に長い長い一つの沼がある、それが丁度白布を引いてあるやうだ。其の沼の水に富士の緑の影が倒さまに映つて居て、天水一色、何れが空、何れが水とも分ち難い、其の沼の上に所々蘆刈舟の小さいのが棹のまに〳〵往來してゐるのが見られる。其の水棹の雫に驚くのか、舟のあたりに群がりて居る水鳥が、ぱつと羽風を立て、騒いで居る。さて南の方は廣い海になりてゐて、遠く遠く海の面が見渡され、雲煙漂渺、雲の浪、煙の浪、たなびきわふてゐる、面白さ、何とも云へぬながめ。

すべて孤島の眼に遮るなし、わづかに遠帆の空に連なれるを望む。こなた彼方の眺望、いづれもとり〴〵に心細し。原には鹽屋の煙たえ〴〵立ちわたりて、浦風松の梢にむせぶ。此の原、昔は海の上に浮びて、蓬萊の三つの島の如くにありけるによりて、浮島となむ名づけたりと、聞くにも自ら神仙のすみかにもやあらむ、いとゞ奥ゆかしう見ゆ。

影ひたす沼の入江にふじのねの
煙も雲も浮島の原

(通解) 其のひろ〳〵とした眺め、只一つの島の眼を遮ぎるものもなく、遠くの海の上を往來して居る白帆の影が空と一つに連なりて見ゆるばかり西を向いても南を向いても、あまりに廣々としたた眺望であるので、どれも、どれも(とり〳〵に)心細い感がした。陸の方の浮島が原にはまた、鹽燒く家の煙が細々とあるかなきかに立ち上りてゐて海から吹く風はあたりの松の梢を吹いて颯々たる音樂を奏して居る。元來此の浮島が原と云ふ所はずつとの昔は海の中になりてゐて、丁度、彼の仙人の棲所であると云はるゝ蓬萊島が三つの島(蓬萊、方丈、瀛州の三島)から成りて居るやうに、此の浮島も三つの島が浮いたやうに出來てゐたので浮島と云ふ名が付けられたのであると、島の由緒を聞くに付けても、若しかしたら其の神仙なるものゝ住所は此所ではあるまいかしらと、思はれて、一層奥床敷思はれて眺めた。浮島が原の沼に影を涵して居る富士、其の頂にかかつて居る煙も雲も、さながら沼の入江の上に浮いて居るやうに見えて、何とも云へぬ縹渺たる眺め。

やがて此の原につきて、千本の松原といふ所あり。うみの渚遠からず、松遥に生ひ渡りて、綠の影際もなし、沖には舟ども行きちがひて木の葉の浮けるやうに見ゆ。彼の千株の松下雙峰寺、一葉の舟中萬里の身、とつくれるに、彼も此もはつれず、眺望いづれも勝れたり。

見渡せば千本の松の末遠み
綠につゞく浪の上かな

千株の松下云々 例の白樂天の「香山寺隱居」と云

ふ詩中の句、朗詠集にも出てゐる。

（通解）此の浮島が原に引き續きて、千本の松原と云ふ所がある。海濱も左程遠くなく、松の並木はは〳〵と生ひ茂りてゐて、往けども往けども緑の奥は緑と云ふ果てしもない木影　沖の方には絶えず、浪の上を舟が往來してすれちがふて居るそれがさながら木の葉でも浮いてゐるやうである彼の白樂天の詩の句に「二つの峰の間に抱かれたる松千株（松の數が多いことを云つたもの）とある林の中にある寺（香山寺、白樂天の住居）の座敷から眺めて居ると遠くの方に波の上に一葉舟を浮べて居る人がある、あれは察するところ、遙々と萬里の遠い旅に行くのであらう」と云つてある詩そつくりの景色、此處も彼處もいづれもいづれも好い眺望である。見渡したところ、千本松原の並樹の果がないまで遠いので、其の緑の末と沖の白浪とは一緒になりて、何れが松、何れが浪とも區別し難い。

車返しといふ里あり。ある家に宿りたれば、網釣りなど營む賤しきもの丶すみかにや、夜のやどりありかことにして、床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛戎人の夜はの旅ねもかくやありけむと覺ゆ。

これぞこの釣りするあまの苫庇
いとふありかや袖に殘らむ

縛戎人の夜はの旅ね云々　これも白樂天の詩から出たことで、「縛戎人」と云ふ詩の中に、西方のえびすが捕虜によりて、呉越の地方にうつされる途中、むさくるしき宿に就いて、色々と難儀をした有樣をうつし、「夜臥腥臊汚㆓床席㆒」と云ふ句を挾んである。それを今の旅宿のむさくるしいのに引き當てたものである。

（通解）車返しと云ふ里がある。此の里のある家

に一泊をしたが、宿の主人は網を投げ、釣を試みて、生業を營む賤しい漁師であると見え、家に泊りて居ると、一種云ふべからざるなまくさい臭氣が鼻を衝いて來る。それのみならず、かてゝ加へて、床にかけてある小席と云つても只形ばかりのものであつて、其のむさくるしい事は何とも云へぬ。彼の白樂天の詩に見えてゐる戎の捕虜が泊りたと云はるゝ旅宿のむさぐるしさもかうでもあつたらうかと、我身の上からしみ〴〵思ひ起されることである。

漁師の宿に一夜を明かしたが、釣りする海士の家の事で、苫も庇も實にむさぐるしく、厭はしい臭氣は、何時までも身から離れず、袖に袂に殘つてゐるのではなからうか。

猶ゆきすぐる程に、箱根の山にもつきにけり。岩がねに高く重なりて駒もなづむばかりなり。山の中に至りて水うみ廣くたゝへり。箱根の湖となづく、又蘆の海といふもあり。權現垂跡のもとゐ。氣高く尊し。

權現垂跡云々　奈良朝の頃から佛教が勢力を得て從來の諸神を、佛が假りに姿を變えて現はれたものと說く、神佛同躰說が起りた以來、權現即ち佛の實躰が假りに神躰と現はれて、日本の此の土に跡を垂れたと云ふので、また本地垂跡と云ふのも此の事を云つたものである。

（通解）さきへ〳〵と步を移してゐると、何時か箱根の山に着いた。巖の上に巖が重なりてゐる險しい道であるので、乘りてゐる駒（牡馬）も行きなやみの態になりた。いよ〳〵山中になりたが、其處には廣い湖水が湛へてゐる。これが箱根の湖と云ふのであつて、人によりてはまた蘆の湖とも云つて居る。其の湖畔にまつりてある箱根權現の社、佛が一切衆生を濟度してやらうと云ふ所から

此の處に姿を現はし跡を垂れられたのであると思ふと、實に此處の權現の社は何となく氣高くまた尊く拜まれた。

朱樓紫殿の雲に重れる粧、唐家驪山宮かと驚かれ、巖室石龕の波にのぞめる影、錢塘の水心寺ともいひつべし。うれしき便なれば、うき身のゆくへしるべせさせ給へなど祈りて、法施奉るついでに、

今よりは思ひ亂れし蘆の海の
　ふかき惠を神にまかせて

唐家驪山の宮云々　唐家は支那、唐の皇室、驪山宮は離宮のあつた所で、今の陝西省西安府に屬してゐる。白樂天の詩、「驪宮高」の中に「高々驪山上有宮、朱樓紫殿三四重」と云ふ句がある。本文に朱樓紫殿とあるはこれから出たもの。

錢塘水心寺、云々　錢塘は今の浙江省杭州府に屬して居る。水心寺は唐時代の建立であつて、錢塘江に望んだ所にある。

（通解）　朱く色どりたる高樓や、紫の飾り立てたる玉殿の美しいのが雲と重り合い、空に聳えてゐる有樣と云つたらさながら、彼の唐代の贅澤を盡くした驪山の離宮か、若くば、巖に倚りて築かれた室や、石を穿ちて作られた燈籠が下を流るゝ錢塘江の水に影を映してゐる所は水心寺あたりの光景とでも云ひたい位、又とない機會であるから、此の權現の御前に額づいて、此の今日ありて明日を知らぬ果敢ない身を護り、危險なる世の中の御案内をお賴み申すとお祈りをして、お賽錢を捧げるついでに詠んだ歌は、

只今までと云ふものは隨分、種々な事に思ひ惑ひ胸の中はさながら蘆の葉の亂れたやうになりてゐたのであるが、それは果敢ない人間の智慧で種々とかきまわしたからで、是からは一切を神樣にまかせて、此の蘆の海のやうに深い權現樣の御惠み

に一身を委せて、どうとも神様の御心次第に仔細は考へぬことにしたので、此の後は極めて心易く思ひ亂るゝやうなことは無いのであらう。

漢文講義

阿井笛村

原元辰母

青山延光

原元辰母失其氏。赤穗既滅、元辰未去。良雄致書。請來京師謀議。元辰語母曰。兒以事之京。而他日赴江戶。淹留積日。亦未可知也。母曰。汝赴江戶、必當永訣。武夫世食厚祿。荷重恩。國有難。則死以報之。固其分也。汝宜奮勇報仇。萬一失節。吾不復見汝。元辰曰。機事尙密。故與大石氏相議。雖至親不敢漏洩。是以不告。兒之所悲者。母既老。而兒不能終養耳。

言訖流涕。母怒曰。忠孝不得兩全。汝欲報君仇。安可以我爲累。宜速行。元辰乃赴京師。會良雄嬰病。元辰看護、待其愈議事。良雄曰。事欲速成。則不得萬全。宜徐圖之。元辰乃還赤穗。見母告故。母默然。明日母臥不起。元辰使婢伺之。則伏刄矣。旁有遺書。曰忠孝不得兩全。吾既爲汝言之。今乃歸省。是不能忘情於我也。吾恐汝以吾之故汚父祖之名。故以死勗汝。元辰悲慟。乃葬之而去。

(讀方)原元辰の母は其の氏を失ふ。赤穗既に滅び元辰未だ去らず。良雄書を致して。京師に來り謀議せんことを請ふ。元辰母に語げて曰く。兒事を以て京に之かんとす。而して他日江戶に赴かば。淹留日を積むも亦未だ知る可らざる也と。母曰く。汝江戶に赴かば。必ず當さに永訣すべし。武夫世々厚祿を食し。重恩を荷ふ。國に難有れば。則

ち死して以て之に報ゆるは固より其の分也。汝宜しく勇を奮ひ仇を報ゆべし。萬一節を失はゞ。吾復た汝を見ざるなりと。元辰曰く。機事は密なるを尙ぶ。故に大石氏と相議し。至親と雖も敢て漏洩せず。是を以て告げず。兒の悲む所の者は。母既に老ひて。而して兒養を終ること能はざる耳と。言訖りて流涕す。母怒て曰く。忠と孝とは兩全するを得ず。汝君の仇を報ひんと欲せば。安んぞ我を以て累と爲すべけん。宜しく速に行くべしと。元辰乃ち京師に赴むく。會々良雄病に罹る。元辰看護し。其の愈るを待ち事を議す。良雄曰く。事速に成るを欲せば。即ち萬全を得じ。宜しく徐かに之を圖るべしと。元辰乃ち赤穗に還り。母に見えて故を告ぐ。母默然たり。明日。母臥して起きず。元辰婢をして之を伺はしむれば。則ち刄に伏せり矣。旁に遺書有り曰く。忠と孝と兩全するを得ざるは。吾既に汝の爲に之を言へり。今乃ち歸省せるは。是れ情を我に忘るゝこと能はざる也

吾汝が吾の故を以て父祖の名を汚さんことを恐る故に死を以て汝を勗むと。元辰悲慟し。乃ち之を葬りて去れり。

（譯解）原總右衞門元辰と云ふは赤穗四十七義士の一人で。此の人の母の事に就ての話であります。此の元辰の母は。其の氏素性は分りませぬが。彼の播州赤穗の城主淺野内匠頭長矩が。殿中に於て憤怒の餘り。吉良上野介義央を刄傷に及び。其の身は切腹仰付られ國が滅れて終ひました後。家老職たりし大石内藏助良雄を始め。諸士銘々に國許を立退きましたが。原元辰には未だ立ち去らずに母諸共留て居ますと。大石良雄の許より。京都に來りて謀議を致し度由を申し來りました。そこで元辰は母に語げて申すには。兒事此度用事ありて京都に參らねばならぬことになりました。而他日赴江戸淹留積日亦未可知也＝そふして又他日江戸表に赴く樣な事にでも成りますと淹留となるやも知れませぬと。之を聞きて母の曰すには。汝

若し江戸表に往くことゝなりたらば。必當永訣＝それはもう必と永き訣と成らねばならぬ。武夫世食厚祿荷重恩國有難則死以報之固其分也＝武夫たる者は世々厚き祿を食き。重き御恩を荷けて居るものなれば。お國に災難の有たるときに死を以て之に報ゆるのは固より其の分である。汝宜奮勇報仇萬一失節吾不復見汝＝じやに依て汝は宜しく勇を奮つて。御主人の仇を報てくれねばならぬ。萬一にも武士たるものゝ節を失ふ樣な事でも有たるときには。吾は復たび汝に見はぬぞよと。元辰か又曰すに。機事尙密故與大石氏相議雖至親不敢漏泄是以不告＝機事は密にするのが尙でありますから。大石殿とも相議して。假とひ親兄弟の至親き者でも。敢て漏泄さぬ事に極めてあります故。事柄はお話するわけに行きませぬが。兒之所悲者母既老而兒不能終養耳言訖流涕＝唯々兒の悲しむのは母上には既にお年を老られて居らせらるゝに。兒がお側に居て終り迄お養ひ申すことの不能ぬ一事でありますと。言訖りて淚を流しますと。母怒曰忠孝不得兩全汝欲報君仇安可以我爲累宜速行＝母が怒て曰す樣には。君に忠を盡すのと親に孝を致すのと。此の二つの事柄は迚も兩方とも全くすることは出來得られぬ、汝が君の爲に仇を報ゆる心があるのならば。安に我を以て累とするに及ぶものか。宜しく速に出かけて行きなさいと。乃で元辰は母の言葉に勵げまされて。京師に赴きました。」會良雄嬰病元辰看護待其愈議事＝然るに會ど元辰が京師に着きました時に。良雄には病に嬰りて居ました故。元辰が其の看護をして。病の愈るのを待ちまして。一大事の相談をしますと。良雄曰事欲速成不得萬全宜徐圖之＝良雄の曰すには。事は速に成ようと欲ふときは。萬端全く出來ぬものである故。宜しくこれは心をあせらずに。徐かに圖る方が宜しからんとの意見でありました乃で元辰は一旦良雄に別れを告げて赤穗の方に立還りまして。母に見いまして其の故を告しますと

母は何とも云はずに默然て居ました。明日母臥不起元辰使婢伺之則伏刄矣＝其翌る朝になりますと何時まで經つても母が臥せつたまゝ起て來ませぬから。元辰が怪しみまして。婢に云付て其部屋を伺ひて見させますと。こはそも如何に母は刄に伏し血に染みて死して居ります。そうして其旁に一通の遺書があります。それを讀で見ますと。忠と孝との兩ながら全ふすることの出來得られぬと云ふ事は。吾れ既に汝の爲に言ひ聞して置きたるに今乃歸省是不能忘情於我也＝今かくおめ／＼と歸省て來たのは。是は畢竟我を思ふの情に引かされて忘るゝことが不能からである。吾恐汝以吾故汚父祖之名故以死勗汝＝右樣な事にては此後とても汝が吾の故を以て主君の仇を報ゆることに後れを取り世の物笑と爲りて。家の先祖や亡き父上の御名までも汚す樣な事に成らんかと恐はれる。夫故に吾が一命を擲ち死を以て汝を勗すなりとの文意が。書き認めて有りました。元辰は一方ならず悲しみ働きまして。泣く／＼野邊送りを營みまして。終に再び京師を指して立去りました。此の元辰の母の如きは誠に得難き烈女ではありませぬか。因に云ふ。吉良上野介の實名は。義英としてあるのが普通の樣でありますが。講義者は曾て其墓を尋ねたことがあります。其の石塔には立派に義央と彫付てありまして。猶上杉家の系譜をも調べて見ましたが。矢張義央とあります。依て義英は全く誤りに相違ないと思ふのでありま す。墓は牛込築土八幡宮の裏手の寺の境内に存して居ります。

婦人合宿所

米國ニューヨーク市にて勞働に從事せる婦女子大合宿處を建設せんとて同地ウエストサイド町に六十萬圓の費用の見込にて既に建設に着手したる由なるが此宿は勿論男子禁制にて下宿料は室料とも一週間に六圓乃至八圓なりと聞けるが我東京にては紡績工女の爲め地方に於ては製絲工女の爲に此の備あれど印刷局、砲兵工廠等にてさへ未だ嘗て此の設備なし況て女學生抔に對しては尚更の事なるが是も亦た一の研究に値するものなるらし

英文雜録

慶應義塾大學講師
宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

I. Conversations.

No. 3. About Port Arthur.

旅順港に就ての話

A. Have you ever been in China?
あなたは清國へいらッシャッたことがありますか

B. Yes, I was in North China in 1893 when Japan had war with China.
はい明治二十八年日清戰爭のあッた時私は北清地方へまいりました

A. What places in North China did you visit?
北清では何處々々へ御出でなさいましたか

B. I visited Port Arthur, Weihaiwei and all the other places which were captured by Japan.
旅順港威海衛其他日本か占領した土地へまいりました

A. Then will you please tell me something about Port Arthur?
其れでは旅順の事を御話を願ひます

B. Oh, no; I know nothing about Port Arthur as it is now. You see, every thing has changed there since the Russians occupied the place.
どーしまして私は只今の旅順の事は一切存じませんと申すのは露人が旅順を占領して以來萬事變りましたから

A. Oh, I see. By the way, do you know why Port Arthur was so named?
成るほど。時に旅順の事を何故ポートアーサーと名づけたのでせうか

B. I cannot tell for certain, but some one told me it was so named after an English naval officer, the very first European who visited it.
私は確な事は存じませんが或人の話によれば歐洲人では初めて旅順に行た英國海軍士官アーサーと云ふ人の名を取て左様命名したのじやそうです

A, When did Port Arthur surrender?
旅順は何時降伏したのでしたか

B. It surrened on the first of January when our countrymen were busy with the New Year's congratulations.
一月元日吾同胞が新年の祝賀最中に降伏したのです

A. Did the siege of the fortress cost the Japanese many lives?
旅順要塞包圍の爲めに日本人は澤山死にましたか

B. Oh, yes; over ten thousand men were killed in the attack.
左樣です一萬人以上攻擊に斃れました

A. Was General Nogi safe throughout the siege?
乃木將軍は全包圍中安全でしたか

B. Yes, he was; but his two sons who were officers in his army fell fighting.
左樣將軍は安全でしたが將軍の二子は將軍麾下の士官でしたが戰死しました

A. Oh! terrible! I suppose General Nogi is broken hearted?
オヤひどひ事でしたね乃木將軍は定めて落膽して居るでしやう

B. No, his iron spirit is not daunted by the misfortune at all.
否將軍の鐵石心は此不幸の爲めに少しも挫けません

A. Was he not decorated by the Kaiser with a medal pour le *merite*?
將軍は有功賞牌を獨逸帝より受領したのですね

B. Yes, he was; and General Stoessel, the heroic defender of Port Arthur, was also given the same honor.
左樣です而して旅順を勇敢に防禦したステッセル將軍も同じ名譽を得ました

II. Exercise in translation from Japanese into English.

和文英語練習

1. あなたは今度の春季休暇を何處で御暮しですか
2. 私は箱根の温泉に行くつもりです
3. 十二月廿五日は何故に歐米では休日ですか
4. 其は基督誕生日ですから
5. 二月二十二日は米國最初の大統領 (President) Washington の誕生日です

III. **News of the Day.**

Stoessel. London, Feb. 20.

General Stoessel has arrived at Constantinople.

ステッセル。倫敦二月二十日發電。ステッセル將軍はコンスタンチノープルに着せり

Strike at the Russian Capital.

London, Feb. 18.

The strike at St. Petersburg is again rapidly extending. Thirty thousand men have joined the strikers.

露都に於ける同盟罷工

二月十八日倫敦發電。セント、ピータースバークに於ける同盟罷工は再び蔓延しつゝあり罷業者三萬人に及べり

THE RUSSIAN FORCES.

London, Feb. 17.—It is reported that Russia intends to maintain half a million troops in Manchuria, thereby seeking to exhaust Japan.

露　軍

二月十七日倫敦發電。露國は滿洲に五十萬の軍隊を置き依て以て日本をして奔命に疲れしめんとする計畫なりと云ふ

HOUSE OF PEERS.

The House sat at 10.10 a. m. Prince Tokugawa, the President, reported that on the 19th he attended, on behalf of the House, the funeral of the late Lieutenant-General Matsumura, at which he read the message of condolence passed by the House. After having passed several bills, the House rose at 11.20 a. m.

貴族院

貴族院は十時十分開會議長德川公爵は去十九日貴族院を代表して故陸軍中將松本氏の葬儀に臨席し同院にて議決せる弔文を朗讀したる旨を報告す。其れより數個の議案を議決せる後十一時二十分閉會せり

STRIKE OF EMPLOYEES.

Over 170 employees of the muslin factories in Tokyo have gone on strike the cause of their complaint being the question of wages.

被雇者の同盟罷業

右東京モスリン製造所の職工百七十名以上同盟罷業せり其不平の原因は賃銀問題にあり

RANGOON RICE.

Sixty-nine thousand bales of Rangoon rice con-

signed to Messrs. Samuel Samuel & Co. were imported into Yokohama by the British s teamer Needles, which arrived there on the 18th inst.

ラングーン米

サミユエル　サミユエル會社へ販賣を依托せる六萬九十梱のラングーン米は去十八日到着の英船ニードル號にて横濱に來れり

SNOW.

Snow fell at Tokyo on the night of the 19th inst and had accumulated to the depth of a few inches up to Monday morning, when the weather cleared. There was also a very heavy snowfall on the 18th at Sekigahara and some other neighbouring places along the route of the Tokaido Railway, several trains having been delayed in consequence.

去十九日の夜東京には降雪あり月曜日の朝までには五六寸に達して晴天となれり。又十八日には關ケ原及其他の東海道鐵道沿道の場所にも大降雪あり爲めに數箇の列車は延着せり

Practical Letters.

〆 Readers,

I must correct an error concerning the letter "Notifying one's absence" inserted in these columns of the February issue. That letter was not written by Mr. T. I. Chapman, but by Mr. John Bryan.

A. Miyamori. 〆

讀者諸君本年二月發刊本誌英文欄内にある缺席通知する文はチャプマン氏の書翰にあらずジョンブライアン氏の筆に成れるものなり此段正誤す　宮森生誌

Announcing a Bicycle Trip.

Feb. 16,1905.

Dear Miss Brown,

The Mita Bicycle Club has arranged to take a trip, on Sunday 26th inst, to Sugita to see the plum-blossoms. Leaving Shimbashi by the 9.30 a. m. train, we shall go as far as Kanagawa, whence we shall ride to Sugita and back—a distance of about 15 miles. The expense for each person will be 60 sen which is the cost of the return railway ticket. Please bring some lunch.

Kindly reply whether we may expect you or not.

I remain,

Yours most truly,

A. Miyamori.

55 Sagenyacho,
Azabu,
Tokyo.

拜啓三田輪友倶樂部にては來廿六日(日曜日)杉田觀梅の遠乘相催候午前九時三十分發の列車にて新橋停車場出發神奈川驛にて下車致同處より杉田まで往復十五哩の里程輪乘の筈に御座候費用は一人前六十錢即往復滊車賃に有之候各自辨當御持參の事御出輪の有無何卒御返詞煩度候

REPLY TO THE ABOVE.

51 Tsukiji, Tokio.

Dear Mr. Miyamori,

Having made other arrangements for the 26th, I am sorry to say I cannot join you on your trip to Sugita on that day. Trusting you will have a pleasant run, and an ideal day such as to-day for the excursion,

I remain,
Yours sincerely,
Mary Brown.
Feb. 16-1905.

拜復二十六日には他に計畫せる事有之殘念ながら杉田へ遠乘御伴致兼候同日は今日の如き上天氣にて御一同御快遊あらん事を祈上候

DITTO.

Tokyo, 21 February,' 05.

Dear Sir,

Many thanks for your kind information of the trip on the 26th inst. I really regret very much I cannot join the party, but I am very busy just now even on Sundays.

Hoping that I shall be kindly excused and that you will all enjoy yourselves at Sugita,

I remain,
Yours truly,
Alice Smiles.

拜復廿六日の遠乘御通知に預り奉謝候然る處私事近來は日曜と雖も甚多忙にて乍遺憾御伴致兼候間不惡御思召被下度尙御一同御快遊のほど奉祈候

V. 英語研究瑣談

初學者か verbs 及 Adjectives を學ぶに當ては之と關係ある prepsitions と共に一句として覺えざるべからざること多し例へは Sympathize [同情ヲ表スル; 思ヒ遣ル] と云ふ verb は自動詞にして with と云ふ前置詞と併して初めて意義を作す

I sympathize with you on the death of your sister.

シスターか御死なさッたので御悲みのほど御察し申します

斯の如き場合に sympathize と云ふ動詞を知るのみにて其次きに with を用ゆることを知らず唯

I sympathize you.........と言はゝ大なる誤なり
故に今日の學生の多くが爲す如く動詞と前置詞とを個々別々記臆するのみにては甚不可なり
下に prepositions と連續して覺ゆべきverbs及 Adjectives 數個を示さん

1. Write to. [手紙ヲヤル]
He writes his letters in English.
彼ハ英語デ手紙ヲ書キマス
He writes to me at least once a month.
彼ハ一ケ月ニ少クモ一回私ニ手紙ヲ寄越シマス
I seldom write to my parents.
彼ハ兩親ニ手紙ヲ出スコトハ滅多ニナイ
前文の如く手紙ヲ出スと云ふ意味の時は必ずwrite to と云はざるべからず

2. Think of. [何々ノ事ヲ思フ]
I feel joyous whenever I think of my home.
私ハ故鄕ノ事ヲ思フ時ハイツデモ愉快ニ感ジマス
即何々の事を思ふと云ふ塲合常に think of と云はざるべからず

3. Tired of. [飽イタデイヤニナッタ]
I am tired of studying English.
英語ヲ學ブノガイヤニナッタ
I am tired of a student's life.
私ハ學生ノ生活ガイヤニナッタ

4. Afraid of. [怖イ]
The baby is afraid of me.
赤兒ハ私ヲ怖ガル

5. Fond of. [好ム]
I am very fond of children.
私ハ小兒ヲ好ミマス

6. Speak of. [何々ノ事ヲ話ス]
He often speaks of his English proudly.
彼ハ度々自慢シテ自分ノ英語ノ事ヲ話シマス

7. Full of. [一杯アル]
This composition is full of errors.
此作文ニハ誤ガ一杯アル

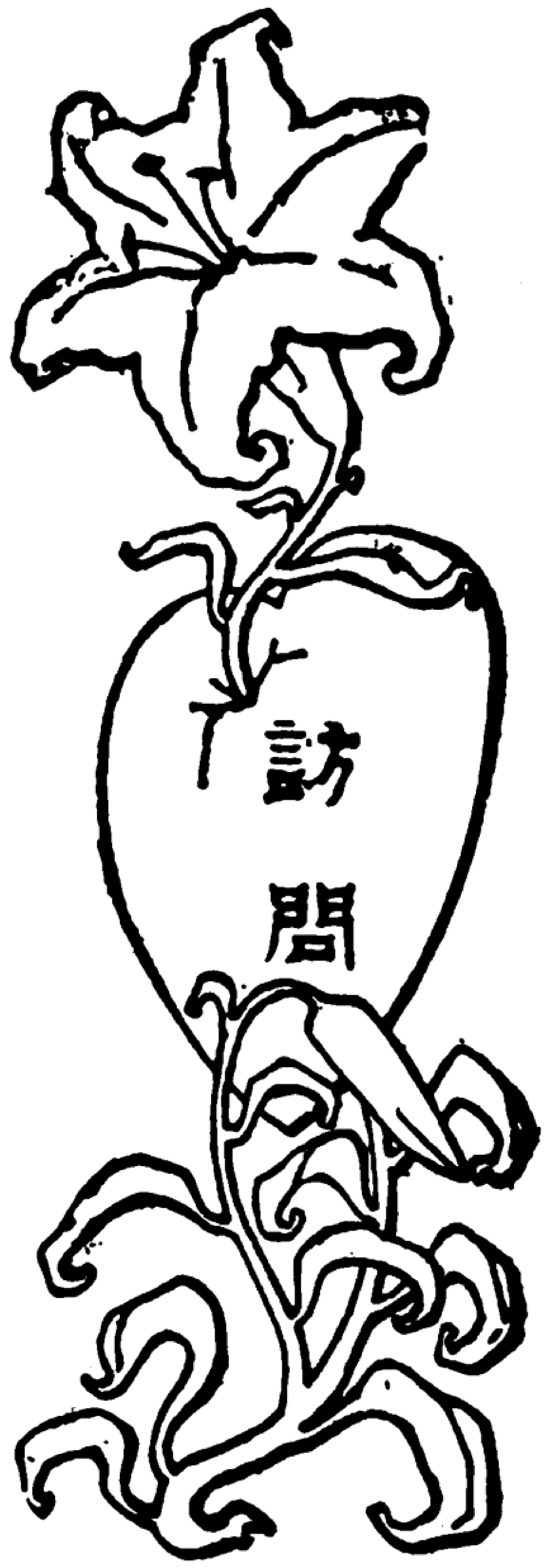
8. Hear from. [便リガアル]
I have not heard from him for a long time.
私ハ長イ間彼カラ便リヲ得ナイ

9. Laugh at. [嘲弄スル]
They laughed at me.
彼等ハ私ヲ嘲弄シマシタ

10. Deal in. [商フ]
He deals in foreign goods.
彼ハ洋品ヲ商イマス

野口小蘋女史

婦人記者



これは去月七日、女史が麹町區內幸町一丁目五番地なる邸宅を訪ねまして、女史に種々と承つたことを綴つたもので、云はゞ女史の立志成功の略歴とも見るべきものでございます。

女史名ば親、字は清婉、小蘋は即ち其號であります。弘化四年大阪に生れ、今年は五十八歳でございます。父の松村春岱は阿波國麻植郡喜來村の人でして、大阪に出て醫を業として居られました。女史は幼より繪畫を好み、十三歳の時、父に随うて加越濃諸州を歷遊し、尾張の名古屋に寓して居られましたが、此時恰かも父の春岱を失うて、母と共に閑居せられました。そして、やがて、文久年間になつて、京都へ出られ、南宗畫家日根野對山を師として、大いに其技を練磨されました。

明治四年になつて、始めて東京へ出で、詩を岡本黃石翁に學ばれ、同十年になつて、近江の人野口正章といふ方へ嫁がれ、良人と共に甲府に在ること五年、同十五年に再び東京へ出られ、即ち內國繪畫共進會に疎密二幅を出品し『區中の殊異なるもの』との褒狀を得、同十七年第二內國繪畫共進會に濃淡二幅を出品し又も『區中の優異なるもの』との褒狀を

受けられ、同十八年東奥宮城に遊ばれたが、翌年東洋繪畫共進會がありまして、女史は畏くも皇后陛下行啓の際御前に於いて揮毫の榮を蒙りました。是からは女史の名一時に高くなつたのでございます同二十年工藝共進會よりは銅牌を受け、二十一年の秋になつて、女史は獨り筆を載せて上州に遊歷し、同二十二年華族女學校教授に囑托せられ、尋で二十三年五月に開かれた內國勸業博覽會には西王母の繪畫一幅を出品して、妙技二等賞を受けられましたその薦告文に曰く

描法正健にして板質ならず、賦彩温厚にして筆澤あり、手姿端麗容光人を照す、妙技甚だ嘉賞すべし。

と。同年十月日本美術協會繪畫展覽會には審査員に推薦せられ、又同會へ秋草七種の圖を出品して二等銀牌の賞を受け、同二十四年に至り日本美術協會會頭より審査員たるの勞を謝し、銀盃一個を贈與せられ、同二十六年には日本婦人會の囑に應じて野州鹽原天狗巖の眞景を寫し、これを米國シカゴ世界博覽會へ出陳して褒賞を受けられました。爾來其技駸駸として進み、且つ揮毫を怠らず、毎年開會せらる美術展覽會に出品し、巾幗者流を以て獨り擢んで、堂々たる畵伯の間に交つて銀牌を受けられました。

その後二十九年秋季美術展覽會には、西園雅集圖の大幅（幅三尺五寸丈六尺五寸）を出品して、二等賞銀牌を受けられました。その後又美術協會繪畫展覽會には川端玉章等と共に金牌をも受けられたのでございます。

以上は女史の略歷ですが、只今は帝室技藝員に任ぜられ、且つ常宮周宮兩內親王殿下の御師範をも勤められ、一週間に二回、高輪御殿へ參殿されて居ります。

女史は繪畫に於きましては、實に天才のお方でございますけれど、唯天才ばかりでなく、拮据精勵の結果蓋し今日の大成を致したことは疑ないところでございます。その繪畫に於て熱心なことは實に驚く

べき位で、幼年の時から今日に至るまで疾病でない限りは、只の一日も筆を休まれたことがなかつたと云ふことです。そして、元來女史は繁忙蒲柳の質に堪えがたきも、勉めて事を貫轍する氣風の強いお方でございます。されば女史は、此負けぬ氣といふ精力が、既に妙齢の頃から著しうございました。

これは、女史がやつと十四五歳の少女時代のことでございました。或る時、女史は醫家の勝田三雪といふ人の家へ遊びに參られましたが、丁度其時其所に三人の男の客が居合せて居りました。

で、主人も客人も共々に種々と談話を爲て居られましたが、やがて談話は繪の方に移つて來ました。

すると、其内の一客、

『いくら、腕の達者なものでも、一日に五百枚の畫は書けはしまい。』

と、云ひまするど、他の一客は透さず、

『ナニ、五百枚?、五百枚どころか、まあ、三百枚でも些と難しからう……。』

と、小頭を拈りまするど、次に三番目の客人は莞爾と口元に微笑を見せながら、

『さうさ、な、まづ三百枚が關の山だらうな。』

と、答へました。

今度は主人の三雪は

『さうさ、どの位書けるものかしら。』

と、云つてくるりと女史の方に打ち向ひまして、

『ね、親ちやん、(女史の名)どの位書けますかね。』

と、云ふ。

今まで、默つて、行儀よく座つて、兩手を膝の上に載せてゐました女史は、

『はあ。』

と、雪と擬ふばかりの眞白な面を徐に上げました。

すると、最初に話出した客は主人の三雪に向かはれて、

『この嬢ちやんは、なにかね、繪を書かれるの、』

『左様です。畫が熱心なので。』

と、云ひまするど、その客は、「さう」と首肯いて、

今度は女史に、
『ぢや、貴嬢は何枚書けますか。』
と、半分はお愛想で、半分は愚弄か、輕く笑ひながら斯う尋ねました。
この時、女史は、言葉しづかに、
『ハイ、私でございますか、私は一日に千枚書きます。』
と、明斷と云はれまするど、座中の人は、誰も彼も餘り其言葉が意外で、立派なので言ひ合したやうに互に顏を見合せて驚かぬものはなかつたのでした。が、中には其言を嘲つて居つた者もありましたので。
座客の一人は稍眞面目になつて
『本當に書けますか。』
『ハイ、本當に書きます。』
と、女史が答へるのを、又一客は
『イヤ、難しい。』
と、打ち消すのでした。
今一人の客も亦
『危いもんだ。』
女史は、これ等の言を聞いて、聊か感情に觸れたと見えまして、少し顏さへ赧めまして、
『屹度、書いて御覽に入れませう。』
と、聲に力を入れました。
すると、主人の三雪は、ちらと女史の顏を見て、ぐるりと一座を見廻しまして、
『こりや、面白い事だ、いくら此子だつて書けないとも限らぬ、物は試驗だ、論より證據だ、親ちやん、千枚書いて衆客にお見せなさい。』
と、云つて、自分は早速立ち上つて、戸棚から數枚の唐紙を取り出し、乃ち一枚を八つに截り、立ちどころに千枚といふ澤山の繪紙を整へたのでした。
一體、これは一日即ち一晝夜二十四時間に千枚といふ大した書を書くので、夜も晝も打通しに描くのですが、左樣すると、筆者の女史は勿論のこと、傍に監視て居る者も、まるで、一晝夜休むことも出來ない、殊に女史に取りましては、非常に骨が折れま

すから、乃ち座客の一人は發議して、

『一日一夜打ち通しも宜いが、それでは横に見てゐる僕等も困るし、それに筆者もなか〱大抵ではない、そして、後で身體に故障があつても困るから、皆樣、斯うなすつたら如何でせう。一晝夜二十四時間を二つに分けて、十二時間づゝ二日やるといふことにしては……つまり明日と明後日とで千枚を書き上るといふことにしては如何です。』

と、云ひ出しましたが、忽ち相談は纏り、乃ちその言葉の如くに、晝夜徹しの議は止して了うて、十二時間宛二日、明日と明後日とで、愈千枚といふ畫を書くことになつたのでございました。

で、其翌朝早く勝田氏の宅へは、女史を始め、前日の客人三人とも來ました、そこで、女史は乘客の取り卷いてゐる眞中で、萬事用意が整ふた上で、徐に筆を取り、

『ぢや、これから始めませう。』

と、落ち付き拂つて、斯う云ふや否や、すら〱すら〱其細やなか腕を右へ左へ輕う振ひ振うて、次紙から次紙へと紙を換へ紙を換へて描き、やがて其日は黃昏になつて止めて了ひました。

その日は客人の一人は、女史の描かれる畫へ落欵を捺すことを行つて居られましたが、女史の健腕速筆宛然で、速寫版か、蒟蒻版でも摺るかのやうに出來まするので、却つて其繼承に遑なかつたといふ位でございました。

そして、その翌日も、また定刻より始めましたがまだ黃昏にならない內に、到頭首尾よく千枚を書き了へ、尙ほ二三百枚をも書き上げる勢があつたのでございました。

で、この有樣を見て居りました主人も客人も、一同此達筆健腕に舌を卷いて感せざるものはなく、また女史の最初の云つた言葉の違はなかつたことを驚かぬものはありませんでした。これから、女史の名聲藉々として高うなつたのでございます。往昔、浪花の井原西鶴は一日に、二萬三千句を發して二萬翁

の名がありますが、しからば女史を千枚娘とでも呼びませうか。實に彼の西鶴と古今一對の佳談でございます。これは偏に女史の達筆の致す所でありますが、又一面から云へば、不撓不屈の精力の强盛なるからでなくては斯樣な大事は出來ないのでございます。

女史は、また、啻だに美術に刻苦したばかりでなく、浮世のあらゆる辛苦をも嘗め盡されました。曾て名古屋にある時、父の春岱が病に罹り、親子三人旅中のことゝて藥餌の料も亦辨ずることが出來なかつたこともありました。そこで、女史は己むなく、父の病床に侍る餘暇に筆を揮ふて僅に其料を支ふることが出來たのでございます。やがて、父が歿して了うて、後は母と二人閑居し、たゞ一枝の筆に由つて、辛うじて衣食されて居りました。

然るに女史は容貌の清秀なると家嚴が鍾愛の餘りに割合に衣服の美麗を極めしとにより、今や母子女性の生活を侮り、彼是と汚名を以て之に加ふるものさへ出來て來たので女史は之を聞いて大いに嘆かれさて、心陰に思はるゝやうには『自分の形を飾り、容を修むるのは一般女流の行ひに倣ふからである、苟も一藝を修めて世に立たうと欲するものは、敢て裝飾姿色するには及ばない』と、乃ち忽ち羅綾を廢し、釵を捨て、髮を束ねて、また脂粉をも用ゐず、一種特異の容姿をなされてゐられ、齡二十二三に至つて、再び又舊の女裝に改められたといふことでございます。此間の世路の辛酸、また實に察するに餘りあることで、また如何に女流の世に處するの至難なるかを知り得べきでございます。

また、女史が其技を大成したことは決して偶然の結果ではないのです、女史は今日一般の敎授の如く徒に機械的に技藝を習ふたのではなく、幼時より其嗜好に任して畫帖を模寫し、自ら發明工夫を用ゐたので、ございます。ですから女史が京都に出で、日根野對山翁に就かれた頃は、既に一家を成して居られて、世評女史に許して居つたものが多くござい

ました。
女史は亦、書齋に呻吟して空想の畫を描くことを欲せられず、常に好んで漫遊をなされ、曰く『美術は造化自然を師とするに如かず。』と、能く良人と共に東海、東山、北陸の地を跋渉され、所歴の名山大澤を藉つて以て雅趣を啓發するで、所謂風月を展開して詩料を添え、江山を裝點して畫圖に歸すといふやうな次第で、則ち女史の畫は天地の粉本に則られて、自家の工夫精研によるものでありますから、殊に女史は山水畫に秀逸せられて居らるゝが、亦、偶然のことでないのでございます。

また、女史が幼時から今日に至るまで繪畫を以て一貫せられましたのは、これ全く家庭敎育の宜しきを得た結果であらうと思はれます。女史が四歲の頃のことでありました。女史は圖らずも痘瘡に罹つて病蓐に居られたが、或時、女史は父の春岱に筆紙を請はれたので、父は早速、それを與へられました。女史は太く打喜んで、土瓶や茶碗等の繪を描かれたさうでございます。で、父の春岱は早くも女史の嗜好と天性とを看破し、爾來毫も束縛するところなく、益々斯道に誘掖裝勵されたのでございました。

又、女史は繪畫の外、詩にも書にも巧手でございます、書は幼年の頃、父に學び父歿せられて後、書法帖に依て自ら研究し、楷書は顏眞卿を慕はれました。又、妙齡の頃京都に於て小林卓齋の門に入り漢籍の敎を受け、詩は東京で岡本黃石に學れました。

今左に其詩を二つ三つ錄して置きませう。

題畫

秋滿江樓上。詩思倚曲欄。水光兼月色。
併入繙簾寒。▲一星遙岸煙。十里歸舟客。
疎鐘沈入雲。月與蘆花白。▲漁笛一聲起。
沙灣繫小舟。蘆邊夜潮上。雁影月俱流。

春寒

日養疎慵掩碧紗。窓中只怯峭寒加。 閑梅凛
殺鶯聲澁。却見枝頭舞雪花。

女史は眉目清秀なお方で、擧止も至つて洒脫な風

があります。そして、人に接するにも極めて温和で且つ言辭に妙であります。今ま甕江川田氏が、女史の東遊を送るの序を引きて以て其人物を見るべきでございます。

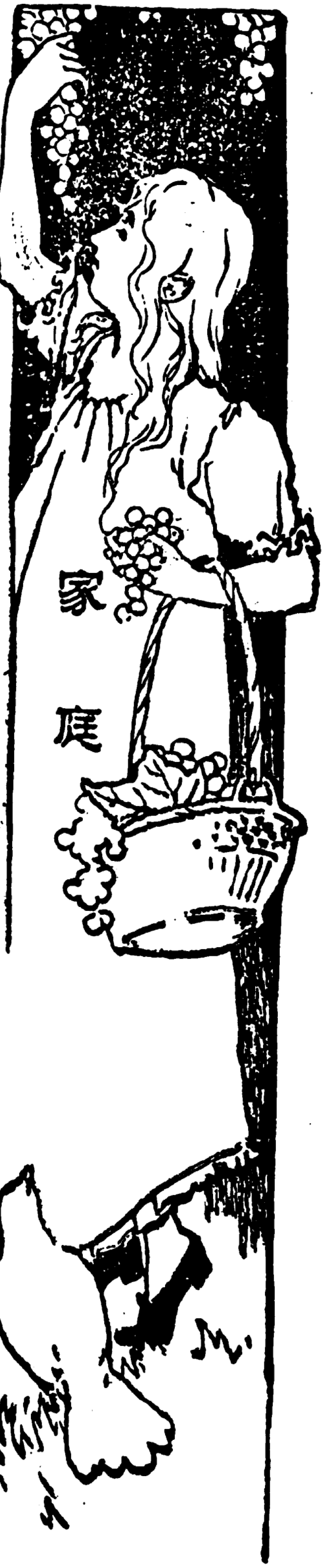
閨秀之能ニ文墨一者。大抵言語動止類ニ丈夫一。覺ニ面目可一レ憎。獨小蘋女史則不レ然。女史善畫ニ山水一。兼工ニ花卉一。而其詩之與レ書。亦頗有ニ可レ觀者一焉。今茲甲申夏。將下携ニ彤管一東遊上。請レ余致ニ書於沿路文士一爲ニ之先容一。余不ニ肯執一レ筆曰。子婉々不ニ挾レ藝傲一レ物。人皆見ニ其可一レ愛。不レ見レ可レ憎。何用ニ先容一爲。雖レ然子試告レ人以ニ此言一。則其不ニ先容效一。或愈ニ於先容一。亦不レ可レ知也。女史拜謝。乃書以贈レ別云。

女史に、一女があります。彼の閨秀畫家を以て有名なる小蘋女史その人であります。其他門人にも秀逸者が甚だ多くございます。

女流で、斯様に藝術を以て成功といふ域に達したる女史の如きは其類洵に稀であります。

女學生の服裝

近ごろ小石川區竹早町なる第二高等女學校生徒に贅澤の風行はるゝとの批評頻りなるより同校長林氏は府立第一第二、お茶の水の高等女學校、三輪田高等女學校、女子美術學校、虎の門女學館、女子大學の七校に各二名づゝの調査員を出して取調べしに大かたは綿服が多く贅澤なる向が秩父銘仙くらゐにて此の銘仙派の多きはお茶の水が七分以上、次いで三輪田女學、第二高等女學校などなり又虎の門の女學校は上流の令孃が多き事とて其の贅澤はお茶水以上に出で女子大學の如きは極めて質素なるが右と共に參考すべき神田一ッ橋なる某呉服店員の談話を聞くに同店は三輪田、和洋裁縫女子職業、東京裁縫、お茶の水、女子大學を得意とし朝の七時前後は殆ど女學生持切の有樣なるが不斷着の上等にて秩父銘仙の飛白類（一反四圓七八十錢）又は絹小紋（價同上）ぐらゐ普通は新銘仙か今年紬（一反一圓七八十錢）にて銘仙の賣口はお茶の水と三輪田が多く新銘仙は和洋、東京裁縫、女子職業に多しと



夫の眼に映じたる
妻の仕事

岩田鳥山

▲馴れたる妻

一體私は隨分床放れの惡い方で、毎朝出掛る時間がチャンと定つてゐますのに、さて容易起きない。家内は二三時間も前に臥床を出まして、雨戸はとうのむかし繰込んで了ひ、茶の間は綺麗に掃除が出來てゐますし、長火鉢の灰は篩はれて炭は山の様、鐵瓶は切りにチン／＼と松風の音をさせてゐますし、飯の仕度もすつかり整つて箸を執るばかりになつて居ますけれど、臥床の中に潜り込んで、眼をパックリさせてゐながら、さて容易起きないのです。此間！勝手から、茶の間から、幾度となく「遲くなりますよ」の掛聲を受けますけれど、好鹽梅式に床が暖つてゐるので、起きて出るのが惜しい様で、枕頭にある新聞を腹這となつて讀んでゐますと、始めは唯聲を掛けてゐるばかりでしたが、何時まで經つても際限がないものですから、家内はとう／＼部屋まで闖入して參りまして、「さアお起きなさい。御飯はもうとうに出來ちまいましたよ。さア起きて下さい。何時迄左様なすつてゐらしつては極りがつき

ませんし、第一御出勤の時間が遲れるぢやアありませんか。さアお起きなさい、起きて下さい」と、やアく\と責めたてますので、兎ても寢て居ることが出來なくなつて、澁々起き上りますると、片端からドシドシと夜具を片附けて了ひます。而して追ひ立てる樣にして顔を洗はせますので。

此時です。否、此日の日記です。いくら起しても起きなくつて困るの、味噌汁が冷めて了つて、鍋の下を二度焚きつける手數が掛つたのと、旦那殿さんざんの體なのです。

さア斯うなりまするす、結婚當時の、内端で、鷹揚で、約しやかであつた點は悉く影を收めて了つて、隔てのない、遠慮ッ氣のない、謂はゞ世話女房振とでもいふのでせう。旦那殿は日記帳に記入らるる樣に、机の周圍を散亂放しにして散歩に出た時の樣に、弱らせらるゝことが屢あります。

が、謂ふ迄もなく、妻となり夫となりますのは、相互の間に默契してゐる或物がありまして、古來よりこれを緣と名付て居ますが、此緣の糸が知らず識らず結びつけられたからなのですから、淺からぬ關係があるのです。ですから、故詩人も結婚の限りなく目出度ことを謳つて、

緣の神に許されて
君と妹子は貝の葉の
互に二個相合して
今宵を千代の盃を
いと樂しくも擧るかな

と讃美して居ます『緣の神』といひ、『貝の葉』といふのも畢竟は人力で何うの、斯のといふことの出來ぬものだといふことを抽象的に示したので、夫婦は飽迄も神聖のものなのです。其夫婦に遠慮があつたり、隔てがあつたりしては眞の夫婦とはいはれないのですけれど、寢てゐたい所を起されたり、思ふまゝをお搆ひなくされたりしては、少しく癪に障らないでもありませむ。遠慮がなくつたり、隔てが脱れたりするのも先づ程度問題で――敢て朝寢をしたいか

ら、愚痴を溢すのではありませんが――、餘り過ぎても困つて了ふ。然し私の眼に映じた「馴れたる妻」といふのは此樣なものです。それから

▲母としての妻

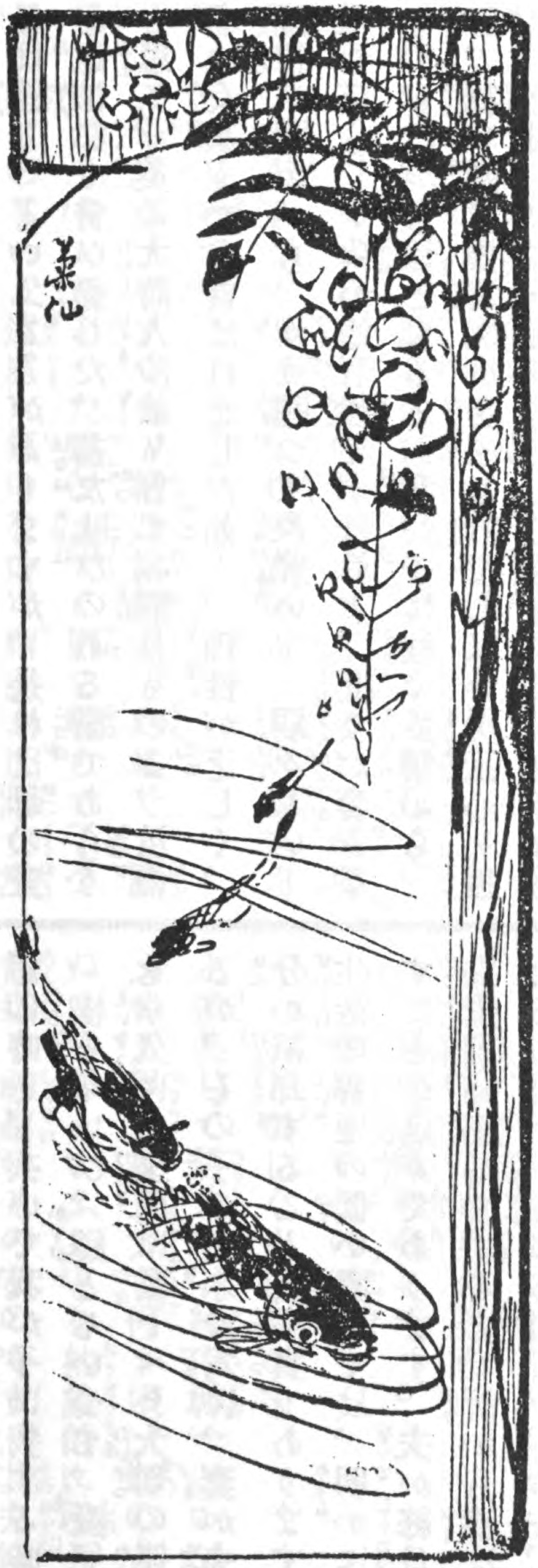
を觀察しませう。西哲の語に『女は弱し、されど母は強し』といふことがありますが、是れは母の愛を遺憾なく言ひ盡した、甚だ味ひのある辭であらうと思ふ。英の大詩人沙翁も曾て『弱きものよ、汝の名は女なり』と言はれました如く、理性が乏しく、感情が強いから、女は隨つて涙脆い――弱々しい――しほらしいのが通有性ですけれど、其女が妻となり、それから母となると、我が子に注ぐ愛情から、否、我が愛兒の爲には男子も敢てしない勇猛心を振起した例は、古今東西は決して尠くはありませむ。

母としての妻が第一の慰籍は天と賴む夫ではなく我が胎内に宿し、我が乳で哺育し、我が肌膚に抱き燃ゆるが如き熱情を傾き盡して育て上げた愛ほしの我子です、子が泣けば我もまた涙を流し、子が笑へば我も亦笑を傾け、喜怒哀樂、凡べて我が子の爲に動き、我が子の爲に發し、子の爲に自我を沒却するばかりではなく、甚だしく熱すると其尊い生命すら犧牲に供することは、決して珍らしいことではないので。婦人の最も美しい心の活動しますのは、其初戀の時と、次いで我が子に對する時とです。

楔ともいひ、鎹ともいつて、愛兒は夫婦間の愛情を永久に、堅固に繋ぐべき大切の連鎖ではありまするが、その子が出來た爲に、妻が夫へ運ぶ愛情の幾分か減却することは事實であります。我々の樣な、生活の程度の低い家庭では、明かに其間の消息を漏すことが度々であります。夫が終日營々として働き點燈頃歸宅しますると、折から妻は其子に添乳してゐるので、出迎にも出でず「おや、お歸りなさい」と一寸と頭を下げたばかりで、「お腹がお空きになりましたでせう。御飯は其處へお膳立をしてありますから」といつて、依然として添乳しながら「ねんねん子守や」の子守唄を小聲で、決して給仕などはし

て呉れませむ。萬一其夫が少しでも、聲高に話しかけでも仕ませうものなら、「あら、貴郎！坊やが今折角寢かつゝてゐる所ですから、其樣大きな聲は出さないで下さい」と一言お叱言を戴かねばならないのです。

此樣具合に妻の愛情は、子の爲に若干か殺がれるやうな傾きがありますので、今迄は何も彼も自分の身の周圍は妻君任せにしてありましたので、夫其人の不便不自由はなか〳〵一通りではありますまい。



けれども、それも可愛い我が子故だと思ふと忍ぶことも出來ますので、家庭は從來よりはより多く平和に又睦しくなつて行きます。母としての妻は斯く我が子の爲には全然愛の權化です。噫！愛の權化！何といふ美しい語ではありませんか。

婦人が此社會に人類の一員として生れて來ました天職は、妻となり、母となると同時に盡されたので、夫を持たぬ女は、縱し如何に美しからうとも、また如何に才學に長じてゐませうとも、決して完全に婦人の天職を盡したものとはいはれますまい。世の中には少し位の學問をしたばかりで、忽ち女子の獨立、女子の自營などゝハイカラ風にかぶれ

て了つて、可惜其天職を疎かにし、畢生不具的生活——孤獨の寂しい生活をなしつゝある老孃なるものがありますが、是れは我が社會の爲に無用の長物であつて、造化が我々人類を男女兩性に分つた思召に悖るものと言はねばなりませぬ

觀察が少しく岐路に走りましたが、婦人の最も尊いのは母となつて、育兒の任に當つた時で、眞に家庭の女王といふ尊稱を呈することの出來ますのも、また母となつた婦人なのです。私は繰返して言ひます。『女は弱し、されど母は強し』と、其母の強いといふのも、我が子に捧げる愛情の強いのを言つたもので、母としての妻の生命と慰藉とは、百年を契るの夫其人よりも、寧ろ、否、ゝ、より多く愛らしい我が子の上にあるといふことは、何人も首肯しない方はありますまい。

私が此稿を起して最初に『新婚當時』の妻を觀察し、次に『馴れたる妻』、『母としての妻』などを研究しましたから、所謂『夫の眼に映じたる妻の仕事』なるものは、縱し不充分ながら觀ることが出來ましたと思ひます。が、唯餘されてゐるのは、

▲妻としての妻

といふ一項です。が、『妻としての妻』といふのは取もなほさず、女としての女といふのと同じ樣なものでして、換言すれば細君らしい細君といふことになります。

細君らしい細君!!? 何樣のが細君らしい細君でせうか。昔時の女大學、女今川などで訓誡された通りの五障三遊を守つてゐるの謂でせうか、但し又、當世はハイカラ式の、英語も巧みに繰り、西洋料理の献立も出來、社交はなか／＼お上手で、今日は何會、明日はそれの會と跳ね廻り、飛び廻り、我が家庭のことなどは捨てゝ顧ないのをいふのでせうか。

否、否、否。前者は餘りに保守的の弊がありまするし、後者は又餘りに突飛的の害があつて、決して細君らしい細君、奥樣らしい奥樣といふことが出來ますまい。『はしがき』にも言つて置いた如く、家庭

があつてからの社交で、家庭を餘所にして決して社交が成立ものではありませむ。例へ其細君——奥様——が如何に社交の花と言はれて、女としての誇を一身に集めませうとも、其家庭にして亂れて居ましたなら、既に細君たるべき資格——大切の資格を缺いでゐるのであります。是れに反して縱しや英語も西洋料理も出來なくとも、社交場裏に立つて花と謳はれなくとも、一家を嚴かに正しく守つて、夫をして内顧の憂ひなからしめたなら、眼に一丁字ない婦人にもせよ、妻としての妻、細君らしい細君であつて、慥かに一家の女王たるべき月桂冠を戴くに足るの婦人といふべきでありませう。

一國と一家！其大小は到底比較にはなりませんが平和に、安らかに、睦しく治めて行かうといふのには、決して些かの軒輊がないので、内務大臣の位にある妻の遣方如何は、延ひて一家の和不和の分る丶所であります。是等のことは餘りに陳腐であつて、今更茲に事々しく擧るの必要はありませんが、今、此稿の局を結ぶに當つて、殊更附記しましたのは、筆者が大いに感じました點があつたからなのです。

（なほり）

我邦の婚姻（三）

林　恒　山

上古時代の末より漸次我邦に傳はりたる支那の文教は、漸く政治上に風俗上に勢力を得るに至り、之によりて遂に決行せられたる大化の一大革新は、此に上古と中古との一畫線を爲し、此時より又支那の文教は隆々として勃興の運に至り、所謂文物制度なるものは一に唐制に摸倣せらる丶こと丶なり、此に風俗上にも一大革新の時期を與へたるものなり、大化新政の一大事業たる法典の編纂は、數代を經て大成し、我邦に於て初めて燦然たる制度法律を見るに至りたるが、是れ即ち所謂大寶律令にして、此法典には明に婚姻に關する種々の規定をも載せられたり、此法典は前にも云へる如く、唐制に摸倣せられたるに相違なきも、亦我邦古來の習慣をも參酌したるは

云ふまでもなし、今法典を論ずるにあらざれば、婚姻に關する規定も、一々之を擧指するに遑なきも、其規定中には「婚家には必ず婚主を定む、婚主とは女子の祖父母、又父兄の如き家長を云ふ、媒人先づ女の許に告げ、祖父母等の家長に就きて許諾を請ひ祖父母等は孰にても、自から婚主となりて、諸近親に申告し、而て後許すべきは之を諾し、若し女子に父母の婚主たるべき人なければ、其女の隨意に、婚主を定むる事を得、男子も己れ自から祖父母等を婚主とする事、猶ほ女家のごとし」といふの條文あり右の必らず婚主を定め、媒人によりて、双方の父母より許諾を得べき規定となりたるは、婚姻を重んずるの趣旨に出で、是に至りて上古に於て男女相知り相撰ぶの唯一方法たりし、彼歌垣は漸く其跡を絶つに至れり、是れ實に婚姻に於ける習俗の一大變遷なりと謂ふべし。

此變遷は啻に法典制度の結果のみにあらずして當時男女の間に於ける習俗の一層嚴重と爲れる結果にして、其原因專ら此に在りといふべきか、而して是れ亦支那文敎の風俗にまで及ぼせる現象ならんか、支那の文敎には、男女七才にして席を同じうせずなど云へるより、上古以來男女の差別嚴重なりし我邦の習俗は、此に一層の嚴重を加ふるに至れるものにして、殊に高位貴人の間に至りては、男女相接近すると云ふが如きは、殆んど絶無ともいふべき有樣となれり、今當時の模樣を見るに、縱令男女の間に於て或る用向ありて、應接せざるべからざる場合を生ずるも、男子は女子の家に至るも、其家にだも入ること能はず、是れ當時に於ける普通の常態なりしなり其稍相親しき間柄のものにても、女子は奥に在りて簾を垂れ几帳を立て、或は障子（今の襖）を隔て、物越しに應對したるものなり、此唯其聲を聞かすばかりも、女子に於ては恥かしき事と爲したるなり、其兄妹の間柄に於てすら、其異腹者ならんには、顏を見ずる事を恥としたり、斯る有樣なるを以て、當時の男女が互に其顏を見知り得るなどいふ事は到底

望む能はざりし事と爲れり、此男女離隔の嚴重なる習俗は、此に婚姻には媒人に依るの外なく、其媒人たるもの丶責任の最も重大なる關係を生ずるは、勢の然らしむる所にして、媒人資格と骨折との多大なるを知るに足るべきなり。

此の媒介者たるものは、云ふまでもなく、双方の家に親しく出入し、身分の相應したる家の好き男子と女子とを知り、其人と爲り、其容貌より心ざまなどまで、能く知り得て、双方の家にも、其年若き男子と女子とにも、言語の信用あるものならざるべからず、未だ曾て見知らざる男子と女子との間に立つものなれば、双方より種々の聞き尋ぬべき事あるは云ふまでもなく、一々之に答へて遺憾なからしむべく男女一代の禍福を定むるものなることを思ひて、最も愼みて其間の事に當るべきなり。

此に當時に於ての婚姻に、最も趣味あるは、此媒人によつて、略双方の事情を聞き定めたる後、尙ほ双方の間に行はれたる相知の方法手段にして、云はゞ双方の意に適へるや否やの試驗ともいふもの是れなり、即ち此媒人によりて、先づ男子より女子に向つて手紙又は歌を贈り、之に對する女子よりの返事を見て、其心中、其才學即ち其文體といひ、返事といひ、其手蹟といひ、何れも男子の心に適へば、此に意を盡して會ひ初めたるものなり、併し此男子より手紙などを贈りたる時、此の女子たるもの丶父母に於て、其男子の意に適はざる時は、其女を誡めて、相會ふことを止むるなり、其代はりに、其男子の意に適ひ、誠に良縁なりと思惟する時は、其女に返書の書き方、其詞の遣ひ方などを敎へ、或は返歌の代作代筆などまでもするものあり、兎に角斯くの如くにして、男女相知り、相會ふに至り、其後男子の女子の家に往來日數を經て、双方に何の故障もなく、互に末賴母しく思ひ、最早や大丈夫といふに至りて、始めて婚姻の式を擧げたるものなり。

當時婚姻の式は上古と同じく、男子より女子の家に至りて、其式を行ふものにして、嫁取りの例はなく

して、聟取りの式（後世の聟取とは異なれり）あり、今其儀式即ち作法を詳述せんことは中々容易の事にあらざれば、其大略をのみ云はんに、相當の身分あるものより高貴の人は先づ聟たる人、車に乘りて女子の門に至り、門内に於て車を下り、前供のものは松明を以て入り、女子方にて此脂燭差二人出で丶之を中門に迎へ、聟殿の方よりの火を受けて脂燭を點じ、中門より奥に案内し、聟殿は寢殿の腋なる階より登り、脂燭差は聟方より點じ來れる脂燭と此方の點じたる脂燭とを一つに合して寢殿の燈籠にうつし、聟殿帳内に入れば、姫君出で丶之に接するなり、此時の裝束、勸杯、祿物など夫々禮儀作法ありて、之を婚姻の儀式とは云



ふなり、併し餘りくど〳〵しければ略す、右の寢殿に點する燈籠は此日より三日間は消さずして點じ置くを禮とし又聟殿の沓は足の止まるを祈る爲めに姫君の父母、其夜沓を抱きて臥するを例とせり、今一つ云ふべきは當夜饗する餅を盛る銀臺、箸臺等（去る年今の東宮殿下御慶事の時、古例によりて御採用ありしものを、當時東京日々新聞の附錄として、彩色の繪圖を公にせるものは即ち是れなり）は夫婦共長年にして、子孫繁榮のものを撰みて、製作せしむるものなり。

其翌朝聟殿は己が家に歸りて後、特に使を姫君の家に遣すことあり、之を後朝の使といひ、三日目の夜に至りて、姫君の方にて餅の設けを爲す、之も定まれる法式なり、斯くて後に至りて露

顯とも呼び、所アヲハシとも稱へて、始めて親戚朋友などを會して宴を張り、新婚の披露を爲すものなり、此時聟殿は始めて舅姑にも對面するを例とす、是等は後世の禮式といふものゝ模範となれるものなるべし。

斯くして後も、姫君は其儘父母の家にありて聟殿より往きかよへるなり、其年經たる後、聟殿の方に於て、新に造作せる舍の設けも出來て、其妻を迎へ取るものもあり、或は其迄に至らずして離縁と爲るものもあり、後世妻の事を御新造と呼ぶは、此新造の舍に迎へられたるものより起れるなり。

切忌はしき事なれども、一旦結婚するも、遂に離婚の免れざるものあるは、人事變化の數にして是非なき事なり、前に云へる大寶の法典にも、啻に結婚の事柄を規定せるのみならずして、離婚の事をも寧ろ詳細に規定せられたり、是れ離婚によりて起れる紛議を豫防せられたるものならんか、即ち云ふまでもなく、恣に離婚するを禁じ、其離婚の塲合を支那の制度に云へる所謂七去（子なき、婬佚なる、舅姑に仕へざる、多言なる、盗竊する、妬忌の心ある、惡疾ある）とし、其内一あらば離婚するを得るなり併し又三不去（舅姑の喪を經たる、娶りし時賤しくして後に貴くなりたる、受くる所ありて歸へす所なき）といひて、其一あれば、婬佚、惡疾及び義絶（夫の祖父母、父母、伯叔父、兄等を毆詈し、又は殺傷する罪をいふ）ならざれば、離婚するを得ず、其の離婚狀には、近親の連署を要すとせり、是れ後世の所謂三行半の起原なるべきか。

以上は男子より離婚する塲合の定めなるが、女子の方よりも離婚を求むることを得るなり、結婚契約後三月を經るも婚式を成さゞる時、夫たらんもの婚式前逃亡して一箇月還らざる時、婚式以前に徒刑以上の罪を犯せる、婚式後逃亡して二箇年還らざる（子あれば三年）の塲合なり、是れ重婚を豫防せんが爲めなるべし、併し右は表向の法律にして、實際には行はれたりとも見えず、尤も右の外に、結婚離婚共

婚主（父母共）の承認を要し、之なくして離婚するも、近親等後に之を知りて、三箇月理せざれば、追論の權を失ふの法文ありたれば、大抵は此失權によりて、事なくして終れるものならんか。當時の風習を見るに、多くは離婚状もなく、女子の方に聟の來らざる樣になつて、遂に女子の他人の妻となりしが如く、又は時として女子の家にて、聟を疎んじ、或は辱しめ、或は怒らしめなどして、相離るゝもあり、斯く曖昧の離緣にて、事濟みとなりたるが、是れ當時人情の朴直にして、男子の方にては我に從はぬ婦女をば、強いて靡し從はしめんものと思ひて、棄て置きしなるべく、女子の方にても、自分を愛することの衰へたるものに、何時までも、又無理に愛を求めんも、末頼母しからずと爲して、此に男女の間の葛藤も起らざりしものならんか。



當時の習俗も亦上古よりの多妻主義行はれ、云はゞ益々甚しかりしなり、故に當時には前記の如く、男女の葛藤を見ざりし代はりにとでもいふべきか、女子の間に、忌はしき嫉妬の外に顯はるもの多かりし、是れ寧ろ公然ともいふべき程にて、高位貴人にても往々免れざり

し、當時數人の妻は猶ほ後世の如く妻妾といふが如き、尊卑の差別なく、云はゞ何れも同位の妻なりしより、互に相下らざるも無理ならず、所謂嫉妬の喧嘩は殆んど常態となれり、源平盛衰記に

村上の帝の御宇、左中將兼家(御堂關白)といふ人あり、北の方を三人持たれば、異名には三妻錐と申しけり、或時此三人の北の方、一所に寄合ひて妬色顯れて、打合取合髮かなぐり、衣引破りなどして、見苦しかりければ、中將はあなむづかしとて、宿所を捨て出給ひぬ、取すふる者もなくて、二三日まで組合て息つき居たり、二人の打合は常の事なり、まして三人なれば、誰を敵ともなく、向ふを敵と打合けるこそをかしけれ、云々

とあり、此二人の打合は常の事といへるを見ても、當時高位貴人の間にも、斯る事の珍しからざりしを知るに足るべく、從つて後妻打といふ事も此時代より始まりて、早く妻となりしもの丶、後に新しく妻となりしものを打ち虐めするものにて、(後世の後妻打と異なり、後に詳しく說くべし、)是等は當時の惡習俗として、後には其蹟を絕つに至れるものなるが、其原因はといへば、相下らざる數妻あるに由れるものなるべし。

此中古時代は多妻主義の最盛時ともいふべき時代なるを以て、斯の多妻主義の大原因ともいふべきものあるを一言すべし、そは他にあらず、我邦は上古より血統を重んじたるの一事是れなり、此一事よりして法律の精神も、習俗の發現も、生れ出でたるものなり、多妻を設くるも血統を得んが爲めなり、多妻の何れも身分の宜しきを撰みたるも血統の汚れんことを恐れたるに由れるなり、後世の多妻主義も亦血統を得んが爲めなるべきなり、只同位の多妻を得るの難きと、嫉妬喧嘩の弊に堪へずして、後世の多妻は血統の汚るゝを憂ふる遑あらざりしならん、是れ後世の正妻には身分相應を顧みて、側室以下には身分に其程の詮議を爲さゞる故ならんか、即ち後世は多妻主義の精神の半を失ひたるものなり、(後世多妻

主義の必要は後に詳述すべし）兎に角中古時代は貴人程多妻の必要ありて、當時の法律に於ても身分によりて規定せるの條文尠なからざるを見ても之を知るべきなり、（此條文等は大寳令にあるも、今之を略す、）

（つゞく）

花暦と花籠　　梅の屋主人

風和らかにソヨ〳〵と野山を拂うて美はしい天地の装は、今や方に盛んに其趣を新らしくして居る人は老も若きも、坐ろに花を訪ひ蝶を逐ふのも、誠に春の賜とこそ申すべきなれ。實にや

そよ〳〵と春の風アレ〳〵てふちょが
三っ五っ花より花へひーらひら。」
ほろ〳〵と花の露アレ〳〵てふちょが
六っ七っ西に東にひーらひら。」

と歌ふ稚兒等の口元には、如何ばかり佐保姫が織りなす錦を歡び迎へる無量の音があるかを知り得でありませう。ア丶心なき稚兒の心すら爾かく自然の美に接吻して、然かも其濃やかなること此くの如きに思ひ到れば、彼等の心界に此美はしい天地の微妙を噛み分けしめて、やがては人生の上に一方ならぬ稗益を與へる素地を爲さしめたい、デ、其工夫にもがなと昨今専ら米國に行はれ居る、

▲花暦

に付て其大要を御紹介致しませう。却説この花暦と申すのは、ドンナものかと云へば先づ數十頁の洋紙の小冊子を綴り、四季折々の花を頁ごとに張り込んで行くのであります。一例を只今の花に取て見れば四月三日の祭日に、某の郊外に散歩の折、櫻の小枝若しくは蒲英の一本を採集して、之を壓搾したる後に、花暦の中に體裁よく排列するので有ります。シテ紙の餘白には、花の名稱、採集の月日、猶進んでは花冠や、蕚の數や、色などまで記入したら一入面白ふムいませう。勿論年齢の違ひに依て記入の事項は取捨増減ソレ〳〵思ひのまゝで差支ありません。

が若し其完全を望まば、初めの頁には、花の全體とそれに相應しき記入。次ぎの頁には、花を分解したもの、即ち萼と花冠と蕋とを一つ〳〵に排列して、之に相當の事柄を書き加へるのであります。去りながらコンナ分解排列や、込み入つた記入は、中々容易に出來がたいものですから、其年齢をも修練をも顧みず、ドシ〳〵六ケ敷注文を望む時は、ソレコソとんだ失敗を招くものゆゑ、指導者は深く心を注がなくてはなりません。かやうに春の始めより休日ごとに順序を追ひ秩序を正して、梅から桃、次ぎに櫻と云ふやうに春、夏、秋、冬を通しますれば、麗はしい一年の花暦が、可愛らしい手に依て樂しく拵へられるのであります。

茲に一つ面白い現象と申すべきは、彼等が樣々の經驗より、暦の形式に驚くべき工夫を凝らして、其初めは横帖なりしものが、縦帖に變るとか、折本に拵へるとか、表紙も單純に花ごよみと記した位のものが、其大さや、格合や、綴方の體裁より、偖は表紙模樣などを彩どるのみならず、同じ樣でも吉野櫻の次ぎに山櫻を配し、八重櫻を終りに置くとか、全部の花なれば必ず一頁におさめて、ヒヨツト空き間でも目立つ時は其葉を加へて配置を整へるとか、花の部分ならば、萼、花冠、雄蕋、雌蕋と四區に分つも其長短大小などを程よくあしらふとか、花の名稱や題目の如きは記載の文字に、大さや太みを付けるやら、ゴシック形に眞似るやら、色々と見善いやうに目立つやうに、ドコからドコまでも心盡しの跡が、アリ〳〵と見えるのであります。

中には又色の配合や、形の樣子にまで意匠を加へて赤い花の次ぎには黄な花を、紫の後には桃色を張り込むとか、大輪の花から、小輪の花に、單瓣のものには複瓣のものを取り交へ、優しい花は強味の花と相隣り、草本の花が木本の花に對照するとか、其外採集の豐富なるより、自然暦を分帖して春の巻、夏の巻、秋の巻、冬の巻、さては霞の巻、緑の巻、木枯の巻、白妙の巻とか、ズット進んでは植物の分類

の上から、其時其折に於ける、各科各部を代表する摸範花を集めて分類の巻などを案じ出すものもあります。實に〳〵何たる奇想、何たる妙趣ぞや、只管秩序ある經驗に從ひ自然の推移を追ふて行き、有力にして、然かも愉快に遊びながら、斯る偉大の効を歛むるに至ては、驚かざらんと欲するも得ぬではありますまいか。ソハ兎も角此自製の手工品は頗て基督降誕祭の贈物として、將た友垣の交際場裏のお愛相として、寫眞ブックや繪草紙などより一層持噺されて居ります。又、時に依り花暦品評會が催されて伯母や、姉などを來賓とし、審査委員を撰定して其成績を品評審査の上に、甲乙を判ち、賞詞を與へなどしますれば、一つは奬勵の道ともなり、兼て遊び方に興味を多からしめるので、彼等は其製品になほざりならぬのみならず、喜んで此の會合を待ちもうけ居る次第であります、若し夫れ之を我邦の遊びに比べ見たらんには、果して如何の感を起すでありませうか、コンナ生々とした遊は夢にも見ないでは有りませんか、斯る進歩的の樂みはドナタも考の外でムいませう、勿論我邦の遊びとて中々適當なるが上に面白可笑しい種類に乏しからねど、最早今日に於て膝頭を露出し、鼻液を啜りながら手球や手玉の遊びのみ墨守し居るにも限りますまい、新遊技の花質や龜さん兎さんなども、學校のお世話甲斐が微かのやうに見えますのは、或は彼等に滿足の樂みを與へ不までに、力が足らないのかも知れません。去れば今日は家庭遊技改良の急を告げたる時機に際會して居るのではありますまいか。更に歩を

▲花籠

のことに進めて、遊びの技の新路に分け入りませう此花籠はドンナ風に造られるのでありますか、お話し申せば頗と造作も無いもの丶やうに見えすが、却〳〵多くの時間と勞力とを要するものゆゑ、先づ十才位からの子女の樂みに適へる一つの遊びとてムいませう、其準備の手始めとして少量の作り土、即ち眞土に細い砂を加へ、程よく肥料を混和したものを

一つの葡萄籠に盛り、輕便な花畠を拵えるのでありま す、此花畠に各々思ふがまゝに、春菊なり、芥菜なり、孔雀草なり、クリン草なり、パラりと種下しをして日當り善い窓先などに釣るし置くのであります、ソレカラは此花畠の主人が、毎朝〳〵怠りなく小漏斗で水を注いで遣ると、數日ならず薄黄味を帶んだ若芽が吹きまして、二三日の中には早や青みづいた二枚の子葉が生ひ立ちます、續いて眞の葉が發生する、追追莖が延びる、枝が出る葉が茂る花が咲く、實を結ぶ、秩然一系、植物發達の微妙が、歴々として樂



みの中、遊びの間に、直觀し得らるゝのみならず、未來の植物學者や、美術家の卵を造り出すに相違ありません。ソハ兎も角此遊びに附帶して花籠日誌を備へ置くなどは、一入興味あることで、折々晩餐の後などに此籠の手に懸られた愛らしい手帖の內容を披露したらんには、如何ばかり家庭の趣味を豊富ならしめるで有りませうか。勿論コンナ望みはチト高きに馳せ過ぎるかは知れませんが、米國に於ける花籠は、重もに學校生徒が休憩時間に仕立てるもので、花の見頃になれば、教場內の裝飾として生徒を喜ばせる一つの工夫に供へられて有ります、

其影響から彼等は我家の荒れ庭や、籬の蔭などを取り去りて、代ゆるに種々の草木を植え立て〻、遂には一村の面目をも鮮かにしたと云ふ實例が少くありません、ソレカラ此花籠にも亦籠集めと申して、花籠展覧會と云ふやうな催しが開かれて、其成蹟を批評し品評する樂みの集りが厶います、マア、彼の花暦や此の花籠はザットこんな風に實行されて居りますが、此二つのものは恰ど好一對の遊びごとで、一つは培養の上に一つは、保存の上に、兩々相照らして、兒童的の趣味を善く發揮し居るは、如何にも善い思ひ付きで有りませんか、若し夫れ此二つのものゝ正面の目的、即ち樂みなる遊びを措いて、更に其裏面即ち樂みなる遊びに附隨する所の稗益を數へ見れば、愈々其皷吹奬勵に力を竭さうと思はれるで有りませう。

▲花暦の裏面▲

兎角子供は物ごとに飽き易いのみならず、甚だ破壞的がちのもので、簪のお土産を貰うた時は、相貌を崩して喜びながら、羽子板の姿を見るや、忽ち簪を抛り出して顧みやうともせず、簪のビラ〱を捻り取るも、羽子板の飾を引きむくも惜しとも思はず、洒々として唯新しい物を追うて、拾うては捨て、取つては壞し、惜氣なく無邪氣に活動するものでありますが、若し之を爲すがま〻に捨て置く時は、遂に手も附けられぬ我儘ものと成つて、その一生に飛んだ大患を殘すものであります。去れば、適當の時機を謀りて此放慢な天性を巧みに締め括る手段、即ち有利な遊びごとを指導しなくてはなりません。此花暦や花籠の如きは、確かに此注文に適へるもので、第一其樂みが何時でも連續して居るから、何でも續けると云ふ考が強くなる、花拵へをして張り込むからは、整理をする習慣が養はれねばならぬ、從うて物に勤勉するとか、清潔を貴ぶとか、延いては自然の美を愛する感情を惹き起すやうになります。斯様な影響が追々しみ渡ると、野原の草や花も猥に捩断らふとか、隣の家の小枝を手折らふとか、公園の植木

を荒さうとするやうな心も消え失せて、公徳の觀念も發達する。ズット進んでは何から何まで自分の手一つで拵らへ上げられたから、其物に對する趣味も増す、興味も加はる、樣々の工夫も出る、想像の力も高まる、而して之を一貫しては、獨立自治の大精神を精練し煥發する上に、大なる力を有するものでありませう。

そればかりでなく、此愛らしい花暦、此些やかな小冊子は、植物研究の好標本と申すべく、生きたる實驗室と稱すべく、繪畫の好粉本に應用し得べきでは有りますまいか。また

▲花籠の裏面

に立ち入れば、更に益々其妙を味ふて舌皷を鳴さんばかりに感じられるのであります、勿論此二つのものは何れも花に由緒れるものなれば、其裏面に生ずる影響は差したる變りの無い筈で厶いますが、花暦の方は其作業が審美的方面に心を用ひ居れど、花籠の方は實用的方面に力を盡くされると云ふ氣味合があります。從うて身體の修養は寧ろ前者より後者に於て有力であると申さねばなりません、又種下しより實を結ぶまで、毎日世話を致すのであるから、其芽出しを喜ぶ中に青々とした葉の艶や、莖枝のスラスラと立ち伸るを見ては、思はず手の舞ふも覺えぬこともあらふし、ポッツリ紅に笑へる蕾に觸れたなら、我れ知らずニッコリ微笑むでありませう、斯くて此嬉し〳〵の間に何時となく因果の法則を發見し兼ねて、我物戀しの心より、所有の觀念を厚うし、收穫の何たるをも悟るに至るものであります、而して土壤の性質や、肥料の加減、偖は培養の工夫などから知らず〳〵園藝の趣味も起るべく、野菜や果樹の栽培にも心を注ぐに至りませう。

修容術（身のたしなみ）　すみれ

▲容貌と衣服の配合

お納戸色の縞が流行致しますからと申て、その容貌の如何に拘はらず誰にも彼にも似合ふと云ふもので

は御座いませぬ。凡ての配合と申すものは其人の容貌と風采によりまして似合もし、又似合はぬことともあるものですから、先づ第一に自分の風采と容貌を基礎として、さて斯樣なる縞柄、斯々の色合は似へくか、どうかと云ふことを考へねばなりませぬ、それは獨り縞柄色合計りでは無く、衣裳の着樣帶の結び方、今少し細かに申しますれば、衣裳を長く少しく引づる位に着るとか、或は短く上前の裙先を上て着るとか、帶を高く結ぶとか、或は低く結ぶとか云ふ樣な事にも、注意を致しませぬ時は、可惜高價な衣服を以て、不恰好な裝飾をすることに成るので御座いますから、之は一種の美術として、相當の注意を拂はれたく思ふので御座います、先づ今日の夫人方や、女學生達の衣裝の好みや、或は粉裝を見まするに、只もう流行一方に驅られて、その流行の仲間に外れまいと云ふ事に憂き身を窶して居らるゝ樣で御座います、勿論東京は人も多い事で御座いますから一寸其邊へ出て見ましても、千差萬別で、それはそれは種々雜多の服裝をして居らるゝ人計の樣で御座いますが、それは只表面をざつと見渡した所の觀察で若し仔細に之を類別致して見ますると、大抵其社會々々で、流行が種々に別れて、チヤンと區劃が立て居りまして、各々其社會々々か流行に感化されて居ることが明に分ります、夫は男子方の目からは、一寸分らぬかも知れませぬが、其實存外に區域の狹いもので御座います、其千差萬別に見えますのは、實に東京には數限りも無い種々の社會階級の人が打交つて居ますする爲で、若し夫を一つ一つに識別して見ますれば、女學生には女學生風があり、官吏の夫人には官吏の夫人風があり、町家の內儀には町家の內儀風があると云ふ樣に、チヤンと……殆んど版で押した樣に極つて居りまして、……それは決して惡い事は御座いますまいが、……それがコレコレのものが流行ると云へば、身體の肥滿た方でも瘦た方でも、背丈のスラりと高い方も、又チンマリと低い方も、そんな事にはお構ひなく、誰も彼も其流

行を逐ふのですから、中には隨分不釣合な見惡い扮裝を見受けます、何も官吏の夫人が官吏の夫人風を致し、女學生が女學生風をするに、其容貌と身體の恰好によりてそれに相當する裝をされたいと申ますので、一寸した事でも此節流行します、彼の襟卷……チヤケツトとか申す糸で編みました長い襟卷……ハイカラショールとも申そうです、それを背のスラりとした瘦形の色の白い方が、無作法に着けられたのは中々よい風ですが、ムク〳〵と肥滿た色の黑い婦人が、窮屈そうに猪頸に卷きつけました体裁は………尤も色合にもよる事ですが、………隨分可笑しなもので氣の毒らしう見えます、襟卷ばかりでは御座いませぬ、半襟にしても吾妻コートにしても、六つか敷申しますると蝙蝠傘の形や色合にも、その人々の容姿によりまして、相應と不相應があります、一寸其一例を申して見ますれば、背丈のスラりとした瘦形の方には、縞物なれば竪縞瀧縞の類が似合ひ、背の低い人には横縞とか、格子とか云ふ樣なものが似合う樣に思はれます、然るに大低の方は背の低ひのを高く見せやうとして竪縞を撰び、色の白い方が薄色の衣裳を着けて居るのを見て、大層配合がよいと申して、色の黑い人が之に倣ふと云ふ傾が御座いますが、之は誠に配合の原則を知らぬので、恰度背の低い方が高く見せやうとして高い履物を穿きたのと同じで、一種の滑稽に陷るので御座います、此頃流行致します鶯茶の袢襟……彼れを色の青色い方がおかけになりますと、何となく淋しく見へて引立ちません、又之も流行の小豆色の衣裳や、羽織は、色の白い方には大變よろしう御座いますが、色の黑い方には似合ひません、一體風采上の趣味と申しまするものは、色の白い方は白い樣に、黑い方は黑い樣に、各々自然の風采のあるもので、彼の柳や竹が細長き葉を有し、椿や山茶花に圓い葉や花のあると同樣で、それが即ち自然の配合取合せと申すものであらふと思ひます、然し又反對のものの配合で非常に其もの丶美を增すことが無いでも御

座いませぬ色の白い方が黒無地の衣裳や茶縞の衣裳を着られてよく似合ふ類、然し夫は背が高いとか瘦形であるとか何所かに配合上一致する點があるからのとで、此反對上の釣合と申すのは下手に致しますと矢張り滑稽染みるもので御座いますから、先々普通の配合の原則によりて、風采を整ふるのが、肝要であらふかと思はれます。

▲座作進退

これは婦人の身だしなみの上にて、尤も大切な事柄で少々容は醜くゝとも、坐作進退の沈着きて優雅なるは非常に奥床しくも見へ、品格も打上りて見ゆるもので、彼の西洋の諺に申まする通り、美しき姿は美しき衣服に優り、美はしき動作は美しき姿に優つて見ゆるもので御座います、これは日本でも西洋でも同じ事で、彼の國でも上流社會の婦人ほど動作の優美なもので御座りますそうです、これは衣服などの様に貨財を用ゐずして得らるゝ立派な身の飾りで御座いますから………ホンの心掛け一つで出來ることで御座りますから、婦人には是非この動作に付てのたしなみと云ふことがありたいと思ふので御座います。

昔から女に禮法を八ケ間敷申ますのも、必竟此精神なので、然ばとて小笠原流とか、吉良流とか申様な窮屈に身を整へよと云ふのでは御座りませぬ、餘り何も彼も禮法づくめでは、却て不恰好で、此忙しい世の中に間に合ひませぬから、只しとやかに優雅にさへ立ち振舞へば、自ら禮にも適ふので、足のだし方が如何の、歩き様が法則に外れて居るのと、左様な事は如何でも能い………構はぬと申譯では御座いませぬが、何程禮式の爲方に適つて居りましても、しとやかで無くては一向詮のない事でおります、其しとやかに沈着いた動作は別に六づかしい稽古も何も要りませぬ、只謙譲の精神を以て、坐作進退に注意を致しますれば、自然に此域に達せらるゝので御座います。

（をはり）

化粧のいろ〳〵

▲白粉の溶き方

白粉の溶き方は、化粧するに就きて、先づ第一に心得ねばならぬものであります、溶き方が、よく厶いませぬと、白粉落つかずして、恰も粉の吹き出たやうに見へて、甚だ見惡いもので厶います、扨て其の溶き方と申しますは、水を少しく入れて、指先でそろ〳〵と解き、又水を少しく加へて解くのでありますす、斯致しますと、自然と光澤が出ますので、器に仕舞いましたのを、入用の時には、前の通り少しづゝ水を加へて、丁寧に解くのであります、決して初めから水を多量に入れてはなりません、又之に用ゐる水は石灰分の少ない軟水が宜しう厶いますが、必ず一度沸さねばなりませぬ、冷水のまゝでは、皮膚を刺戟するのみならず、黴菌の爲に皮膚病にかゝる恐れがありますから。

▲紅の附け方

紅は皮膚の血色を補ふて、艶美鮮麗ならしむるもので、歐洲諸國に用ゐらるゝ、肉色彩粉と殆んど効用が同じいのであります、元來口紅は慶事にはいふまでもなく、常の化粧にも附けるものでありますが、凶事には用ゐぬのが禮としてありますから、注意せねばなりませぬ、さて口紅は成る丈け濃く染まぬが宜しいのです、唇に紅の餘り強く附きて光りますのは、自然顏が甚だ硬く見へて賤しいものであります殊に口の大きな人が、濃く付けますと、其口益々大きく見へるものであります、それ故紅は凡て淡くした方が、軟かにして温雅しく見ゆるものですから、口の小さい方でも、やはり少しく附けるのが宜しう厶います、その附方は上唇には淡くし、下唇には稍々濃くするのですが、上下共に内側にはキッパリと紅を引き、外は次第に淡く塗りまして舌端にて嘗めますと程よくなるのであります。

飲食物の話　磯部武者五郎

豆　類

豆類の主成分は蛋白質にして脂肪、澱粉をも含有し人生須要の食品なり。

▲大豆　大豆には種類極めて多く、黒豆、黃大豆、綠大豆等重なるものなり、黒大豆は煮、又は炒りて食し、或は菓子、味噌、納豆等を製するに用ひ、黃大豆は黒豆と同じく煮、炒りて食する外に豆腐、湯皮、菽粉、味噌、醬油を造るに用ふ、綠大豆は靑菽粉を製るに用ふ、大豆は本邦に產する外、支那、蒙古、滿洲、高加索、印度等に產出す、就中、支那、蒙古は其の產出尤も多し。

▲小豆　小豆は重に赤飯、餡又は菓子を製するに用ふ、其の種類に赤小豆、白赤豆、大納言小豆等あり

▲豌豆　二種あり、靑豌豆、白豌豆にして、靑豌豆は菓子、味噌の料に用ひ、白豌豆は未熟の內に莢と共に煮て食す、俗に之を莢豌豆といふ、又熟せるものを西洋料理にてはスープの實、其他に使用す、豌豆は蛋白質に富み、又脂肪あるを以て、頗る滋養に適するものなり。

▲蠶豆　多くは煮て食し、又炒りて食す、其他菓子餡、味噌、醬油を製する原料に用ふ、其の効用は豌豆に同一なり。

▲隱元豆　未熟のものは莢と共に煮て食し、熟したるものは煮豆として食す、又「キントン」を製し、或は餡を製するに用ふ、隱元豆は本名菜豆といひ、其の原產地は南亞米利加なり、本邦には支那より隱元禪師の携へて來りしもの故に此の名あり。

▲豇豆　熟せるものは小豆に代用して、餡、菓子に用ふ、半熟のものは莢と共に煮て食す、豇豆には種類甚だ多し。

▲刀豆　紅白の二種ありて、紅刀豆は莢と共に鹽漬として保存することを得、白刀豆は煮て食料とす。

▲落花生　豆類の一種として見るべきものに落花生

わり、頗る脂肪に富み、蛋白質は之に次ぐ、熱帶地方の產物なり。

菜蔬類

菜蔬の類には根を食ふものと、莖又は葉を食ふものとあり、根を食ふものにて重なるものは薯類なり。

▲甘藷　主成分は澱粉にして、水分を多量に含む、其の他糖分を有し、少量の蛋白脂肪を含む、東京地方にては、多く燒諸として食す、其他蒸、煮等して食す、澱粉に富むを以て、之れより飴を作り、酒を釀し、其の他酢、味噌、醬油を製造する原料に供す甘藷の傳來は、其の初元祿年間に琉球王の薩摩侯に送りしに基き、德川八代將軍吉宗の時、青木昆陽の建議に由り享保二十年幕府命じて諸國に種子を頒ち與へて播種せしめ、以て飢饉に備へしめられたるより、遂に全國に弘まるに至れり。

▲馬鈴薯　一名瓜哇薯ともいふ、原產地は南亞米利加なりといふ、其の瓜哇薯と稱するは、我邦へ瓜哇島より渡り來りたるを以てなり、主成分は澱粉、水分にして少量の蛋白、及灰分を有す、多くは煮て食し、又は燒いて食す、西洋料理にては種々に使用して副食料と爲す、歐米人は本品を食すること尤も多量なり。

▲青芋　多量の澱粉と水分とを有す、我國到る處に產し、人の能く知る所なり、親芋と子芋とありて、多く煮て料理に使用す、親芋の大なるは九面芋といふ。

▲薯蕷　水分尤も多く澱粉、蛋白を含有す、種類多く山野に自生するを自然生といひ、栽培せるを長薯といふ、長さは五六尺に至るあり、一年間に生長せるを一年薯といふ、又扁平なるを佛手薯といふ、佛手薯は粘液多きを以て、擦りて薯汁として食用に供す。

次は根菜類なり。

▲大根　大根は本名蘿蔔なり、成分は水分尤も多く少量の澱粉、蛋白、灰分を有す、生にては大根卸として用ひ、煮て食する外、乾して切干とし、又漬物

として食料に供す、漬物の中にて專ら使用するは澤庵漬なり、大根は我邦到る處に產す、著名なるは東京の練馬、京都の聖護院、薩摩の櫻島、尾張の宮重村、相模の秦野、河內の守口等なり。

▲蕪菁　成分は大根と同じ、只大根に比すれば糖分を含有すること多きなり、生にては細く切りて膾の料とし、煮て食するの外、鹽漬、糟漬等に爲して食料に供す、近江の產、大阪天王寺の產共に名高し。

▲胡蘿蔔　成分は水分尤多く、澱粉、糖分と少量の蛋白、灰分を有す、生にては膾に用ひ煮て食し、又は味噌、酒糟等に漬けて使用す、西洋料理にては殊に使用すること多し。

▲牛蒡　成分は胡蘿蔔と同じ、糖分は少し、多く煮て食し、又は鹽漬と爲す、東京梅田村にて出づるを名產とし、梅田牛蒡の名あり。

▲百合　成分は澱粉の多きは根菜類にて第一とす、其他水分、糖分と少量の蛋白、灰分を有す、煮て種種の料理に使用す。

▲慈姑　成分は百合と同じく、澱粉尤多く水分、蛋白を有し、少量の脂肪と灰分を有す、本品は池沼に自生するものと、水田に栽培するものとあり。

▲蓮根　成分は澱粉、水分多く其の他少量の蛋白と灰分とを有す、慈姑と同じく池沼に自生するものと水田に栽培するものとあり、原產地は印度にして佛敎に緣ある根菜なり、又支那の南部に尤も多く、其の花は文人詩客の吟咏に上ること多し。

割烹科の講習につき

共立女子職業學校
割烹科敎員　岡野をりえ

學科も季がはりになり、且割烹には丁度よろしい春から夏の魚菜ともに材料の多い季節にむかひましたので、相替らず、割烹の講習は盛んでして、職業學校の割烹科などは、滿員して斷るほどの志望者が多いのでございます。

一時は割烹科と申すと、兎角料理屋の料理めいたも

のをつくりますので、これでは手がかゝり費用がかかかり、なるほどうまくはあるが、家庭にはむかぬとの非難がありましたが、ちかごろは殊に職業學校などでは專ら家庭にむくものとの注意から、惣菜によろしいものを選み、それに簡短な折衷料理をも加へますので料理屋でつくれぬやうなものも出來ます尤も講習をうける方でも割烹に熟して來て、加減なども手に入つて來たので失敗のすくないところから今は令孃のまゝ事といふ笑ひぐさにならず、大分家庭とよく調和することになつて來ました。

どうしても仕方ばかり知つても、手が馴れなくてはいけません、それゆへ講習をうけたら、その講習は直ちに家の臺所でやつて見て、幾度も幾度もくりかへすことが第一に必要と思ひます、玉子を燒く仕方は本にかいてありましよう、しかしなか〳〵うまく燒けはしません、幾度も燒そこなつて見てはじめてうまくゆきます。それがうまくゆかぬと何のために講習をして居ると言れますが、それは無理でござゐます、しかしそう言れがちゆへ、講習はなるべく親切に丁寧に注意してなるべくよく呑みこむやうにしなければなりません。生徒が多く、時間がすくなく生徒はせわしくてはどうも工合がわるうござゐますそこで割烹の講習はなるべく人數が少なく、時間をゆつくりとするのがよろしいようです。しかし學校などではそうばかりはまいりません、講習をうける人はなるべくせわ〳〵せず、且欲ばつてわれもこれも覺えやうとして、講習をうけてる以外のものまでも質問するのは、何のためにもなりません、そのやつてる事をひとつでもよく呑みこめれば自然に應用が出來るものと思ひます。

家庭の割烹

▲五もく玉子

五もく玉子の材料は「推茸」煮て味をつけ、「ゴボウ」、「ニンジン」、「竹の子」、「蓮根」いづれも下煮をしてほそく切り、「鶏」はうすく切り、生のまゝ醬油

にて洗ひ〔三ッ葉〕は生のまゝ五分位ゐに切り、醤油にて洗ひしぼりて用ふ、右おの〜〜準備をして置き、さて〔鷄卵〕は中粒五個をこわしよく攪ませ、鰹煮汁五勺〳煮きり二勺にてよくまぜ、玉子燒鍋に入れ、右の五もくの材料を加へ、上下に火を置き(但し下火よわく)燒くべし、上に焦け目のつかぬやうに紙を水に浸し、焦げ目のうへに置くべし、玉子の燒けて、吹あがる時を度に火より却し上の紙を水にてぬらし、剝して切るべし。

▲豚の醤油燒

〔豚〕をうす身に切り、醤油につけて金網にて燒く。サッパリとして酒肴によろし。

▲胡麻煮

〔白胡麻〕を煎り摺りて裏漉にかけ鍋へ入れ、鰹煮汁酒、味醂、鹽、醤油少量を加へて煮立て置き、一方〔ゆで竹の子〕と〔生椎茸〕を油にていため、煮汁、味醂、醤油にて下煮をして、まへの胡麻の煮立し中へ入れ、よく煉りて煮あがりぎわに〔葛〕をすこし入れて交せるなり、

▲木の芽田樂

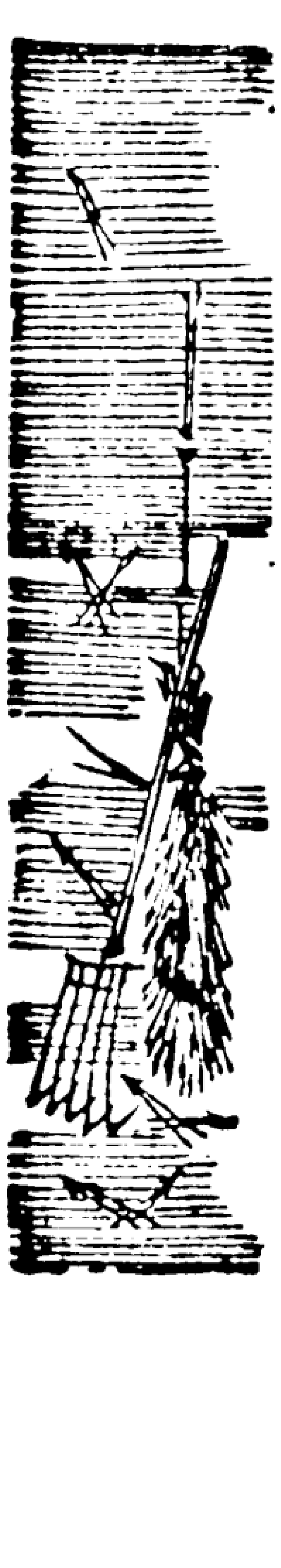
〔田樂〕は豆腐の水を切り、串にさし、スダレの上に置き、〔味噌〕は上赤味噌を用ふ、味醂、酒、砂糖を入れ、うらごしにかけ鍋に入れて煮る。豆腐を燒きし上に、これをつけて侑む。

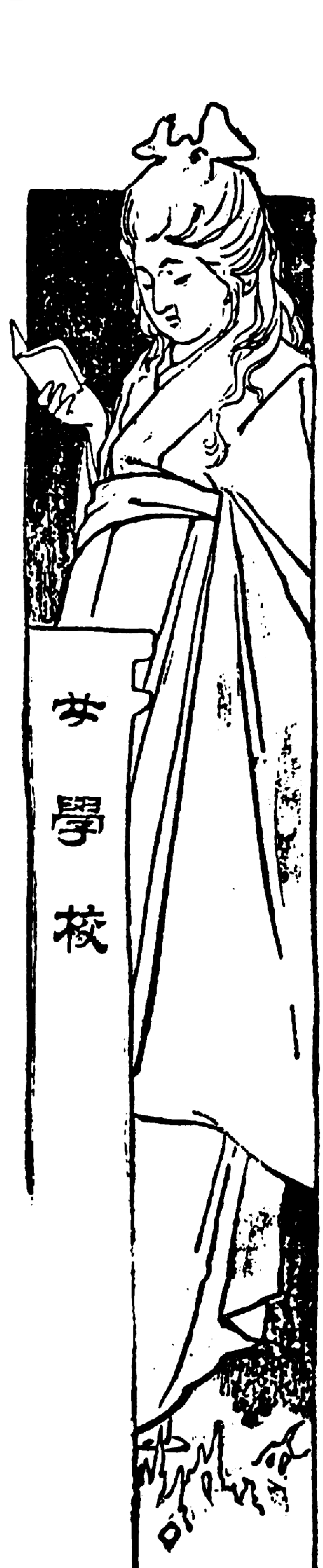
▲鮎の甘酣

鮎はいろ〜〜用ひ方がありますが、三枚におろし、裏漉にして置き、用ゐるときに酢へつけ、皮をむき二つに切り、加減酢をかけ、山葵をのせてすゝめる、しやれた酒の肴なり。

▲同田樂

鮎を串にさして燒き、さて上赤味噌を裏漉にかけ、酒、味醂、砂糖にて煮あげし中へ玉子一個を入れよくまぜ、鮎の燒きし上へつけて、再び火にかけて燒くなり。





明治女子學校

一ノ瀬初子

我國に於ける女子敎育の開拓者といへば、先づ指を巖本善治先生に屈せねばならぬ、そして先生の經營になつた明治女學校は、多くの女學校の中で古い歷史をもつて居る一つであります、私は今日女子敎育の隆盛なのを見るにつけても、同校の昔を偲ぶと共に、現時の模樣の知りたさから、同校の構内にお住居の五島先生に面會を願つて、お話を聞かして頂くことに思ひ定めまして、立出でましたが、只だ巢鴨の何の邊と聞いたばかり、定めし

門には校標

嚴めしう、そして、こんな所で、あんな風でと、いろ〳〵想像しつゝまゐりましたが、行つても、行つても、如何しても見つからない、學校らしい、と思つて見れば從三位某と陶器の表札、如何したのだろう、途が違つたのかと思つて、そこらの人に問ひますと、「え、それは、五六町も手前で」との應答、如何して行き過ぎたのだろう、學校らしい處はなかつたがと思ひ〳〵少し歩いては人に問ひ、また少し行つては人に問ひ到頭尋ね當りましたが、見過したのも道理、大きな門があつて校標があつてと思つた想像とは違つて、稍引込んだ處に、門は立派であります

が、校標などはなく、只其建物に依つて、わずかに、それと知らるゝばかりですもの、門を入れば丁度盛りの何とやらいふ樹の、

花の香高き

が先づ懐かしう、郵便受のある玄關に案内を乞へばはいと立出でらるゝは、生徒の君にや、背の高き、體格のよき、つくろはぬ姿、身裝は質素に、態度は質朴な方で、五島先生の御宅を問へば、お心やさしくも態と下り立ちて、芝生の彼方を指さして丁寧に敎へて下さいました、三つある綠の家が御宅と聞いて右左草原芝生の道をまゐりますと、小じんまりした日本家の隣に、新らしい洋風の家がありまして、それが先生の御宅なのです、瀟酒した八疊の御間に通りまして、さて始めて御逢ひ申しました、

先生の御人格

は豫てそれと承つては居ましたけれども、また更にこの先生ある明治女學校は實に幸だと思はれました、先生は五島博士の御令室で、世の多くの夫人が意氣地なきに係らず、まことに確乎たる見識を有せらるゝお方なので、世の貴夫人が眠れる間に、先生は己れの信ずる處を行つて居らるゝのであります、また極めて同情に富んで居らるゝのでありまして、先生の助けて居らるゝ苦學生もあるさうです、御容姿を申せば、御顔の圓い、色白の御背の高い、やさ形の御方で、いと深切に話して下さいました、

はい空氣は

非常によろしいので、體の爲めには餘程よろしいやうに思ひます、私なんか、醫者も捨て自分も捨てゝ居た體なんで御座いますが、此地に參りましてから眞實に快いやうになりました、小供なんかもねえ、大變丈夫になりまして」と仰せらるゝ、實に田舍特有の新鮮な空氣の漲つた好個の位地をしめて構内は廣く、彼方此方に家……それも日本風の床しいのが散見して、其の中には車夫の家もあれば火番のもあります、そして先生方は大抵構内に御住居になるので、通つて居らつしやるのは二三人の御方だけだそ

うです「琴の先生の御宅もこの内にありますので、お殊に面白いのはその御稽古なのです、皆さんが、お琴の先生の宅に行つてまゐります、と云つて出られますが、行つてまゐりますと云へば、都での樣に遠い所まで行くかのやうに聞えますが、實は直ぐ目の前なので」と、先生は笑つて御話になりました、生徒の過半は琴を習つて居らつしやるさうで、私が初めて玄關に行つた時も、何處からとはなく

ゝ、琴の音

が聞えまして、浮き立つ樣に、また寄宿舎内の和樂を誇るかのやうに思はれました、さて玄關の左手の方、教室と少し離れて講堂が一棟別になつて居ます二十七疊ばかりかと思はれる廣間にオルガンが一つそれに續いて又た疊敷の間などがあつた、女禮、茶などは、何れも此處で教授されるさうで其の一部分を裂いて足りない教場の一つ二つに充てゝあります

それから少しまゐりますと、左の方に少し隔たりまして、畫にでもありさうな、日本造りの餘り高くない家がありまして、それが巖本先生の御宅だとの事あゝあれが若松賤子女史の住はれし處だろうか、これが名高かりし巖本先生のお住宅であるか、思へば如何にも古蹟を問ふかの感がしまして、坐ろに追想の念に打れました、フト振り返ると寄宿舎が、幾年の昔を語り顔に立つて居まして、今日の春風に開け放たれた居間は、室内の整理、生活の凡そも推せらるゝので、折しも日あたりよき縁側に二人の生徒の君、庭には大な犬の二三疋、邊に花は咲き出でゝ、實に麗はしい景色でした、この寄宿舎の後方に、

テニス、グラウンド

があります、ずつと寄宿舎を回つて玄關から左の方にまゐりますと薙刀の道場が別に建てゝあります、疊敷で云へば二十四疊敷位でせう、「せまくて、いけないから、も少し廣くしなければ」と、先生は云つて居らつしやいました、これ等の教室、講堂、寄宿舎先生方の御宅を除いて、後は皆あき地で、草原に芝生に梅の香がこぼれる樣で、彼方も此方も香にみち

て居ました、「梅も隨分あります、昨年は、はづれまして、二本きり實りませんでしたが、それでも一斗ばかりありまして、梅干にして恤兵部に送つた由です」、先生は樂し氣にかく仰せられて、また、「こちらの方の栗の木かげで、これも隨分なりますよ、栗の木ばかり御覽の通り澤山ありまして、あの垣の內だけのを私どもで學校から讓つて戴いたのですが、それでも家の邊に四五本でございますよ、秋になると

、、、、生徒が栗拾ひ

に、ホヽヽ可笑しいんでございますよ、夜灯燈なんか、つけましてねえ」、あゝ如何に愉快でせう、實に面白い樂しい罪のないさまが想像されます、先生はなほ　夏になると、こゝいらの萱が私共の丈より高くなりましてねえ、そりや涼しいんですよ、ですから生徒が皆彼方此方に出まして、……はい、あの前には體操もやつたそうですが、この節では薙刀やテニスばかりでございます、薙刀と申して有志ばかりで、またテニスも今まで霜解がした故でせうか餘りやつてるのを見ませんでした、皆體操や何かより、この草原や木かげを散歩する方が好きらしいので……、尤も空氣が新鮮故でせうか、生徒が皆丈夫で醫者に走けつけるやうな事はまだ御座いませんよだから醫者は遠くても少しも不自由は感じません、先頃でしたねえ、インフルエンザが大變に流行いたしましたでせう、あの時なんかも、私はじめ小供や女中まで交る〳〵煩いましたが、生徒は一人も罹らなかつたんでございますよ、勿論生徒の多くは、田舍から來て居ます者ですから、健康なのかも知れません、はい、大抵田舍者ばかりでございましてねえどうも學校がこんな田舍に在るものですから、わざわざ物數奇に都からやつて來る人もありませんし、また同じ地方から來られるにしても、當人は素より父兄も矢張同じ事なら都の學校に出したいものですからねえ、わざ〳〵當校にまゐりますものは、その姉が當校の卒業生だとか、或は從姉がこゝに居たとかいふ風で、謂はゞ

生徒が系統的になつてる樣な有樣で、ほんの田舎者ばかりでございます」、先生は、あく迄御謙遜の態度で「ほんとに田舎者の學校です、はい服裝でございますか、これは別に學校から何だの彼だの申すやうな事はないのですから、云はずながら皆質素でございます、飾る事なんか少しも知らないのでございますよ、可笑しいのは、紺足袋をはいて平氣で居るのがあるんですもの、いろ〱の式や集會があつたり致します時でもねえ、着物を着更へる者は殆んどありませんよ双子木綿ならまだしも、手織木綿のゴツゴツで平氣で頓着しませんから、質素過ぎる程なんです、尤も通學生は少しはしやれると云へば、しやれる樣ですが、これとて他に比べると極質素なのでございます」、仰せらるゝ通り、いづれの方も皆さん質素な質朴な方ばかり、都の姫君のやうな才女ぶりたる所もなく、さかし氣のさまもなく、罪といふものを知らぬ、例へば自然の儘に裝はず飾らぬ野の花のなつかしき趣がありまして、こゝ巣鴨の女學校、位地の塵をはなれたると共に、また世の罪なき樂園の如く思はれました、「通學生と申しましてもほんの小部分でありまして、大抵寄宿して居ます、只今五十人位ありませう、前には七八十人もありましたでせう、兎に角、僅かばかりの生徒ですからねえ、それに先刻申上ましたやうに、多くは姉か從姉が來て居た縁故から來てるものですから、生徒間或は敎師と生徒の間が至つて親密でありまして、

學校内の和氣は實に本校唯一の特色だろうと思ひます、眞に家族のやうな思がしますよ、別に家族的にしようとか、しなければならぬとか、特別にかうといふ事は少しもないんですけれども、自然に知らず〱睦まじくなつて來ますので、それからまだ可笑しい事があるんでございますよ、あの三月の節句には例年學校を休むのでございましてねえ、そしてその夜は親睦會

をやる様になつて居ます、これが年々の習慣になつて居まして、通學生も

親睦會と云へば

大抵參ります、そして其夜は寄宿舍内に泊つて行くものもありますし、まことに樂しみなのでございます、七夕には田舍で致しますやうに、篠を切つて赤い紙、青い紙なんかさげましてねえ、ほんとに遊ぶ事ばかりで……、外出でございますか、それは土曜の午後と日曜とでありまして、何れも日沒を限りとしてあります、保證人や、保證人から許可のあつた宅には一人で行く事を許しますが、其の他は一切一人では出さない様にしてあります、倫理は一週一度、全校一緒に講堂でいたす様にしてあります、巖本先生の校長の時分は、先生御自身御受持でしたが只今は學務課の方がなさつて居ます、それから前には豫科が二年、本科が三年、高等科が三年で、高等小學卒業のものを豫科一年に入れるやうになつて居ましたが、只今では高等小學卒業生を本科一年に入れるやうになりまして、高等科は二ケ年にしてあります、學科の如きも、元は

英語が多く

て、あれもこれも英語でやる、尤も其時分は、譯本がなかつたものですから、自然原書を用ひたのでせうが、とにかく英語が澤山でした、然し只今では、日本學を重にしまして、英語はほんのわづかばかりでございます、はい校長の御更りがあつたのと、一つは時節柄とでも申しませうか入學者が少い様ですが、學校の方は強ひて生徒の多いのを望まないのです、假令五人でも十人でも可いから、善良な婦人をつくりたいので、たゞ一人でも、役に立つものを出したいと云ふのが、今の校長さんの御希望で、始終然云つて居らつしやいます、尤も校長は御更りになりましても、敎師が一人更つたと云ふのでもありませんから、まだ全く現校長の意見が行はれるわけにも參りませんが、この四月から幾分か違ふだろうと思ひます、本校では專門の學問を授けると云ふので

なく、在學中三年四年の間には生徒の性質其他の事も分りますし、卒業後はそれ〴〵適當した専門の學校に進めると云ふやうな風で、つまり普通の學科をさずけて、他日の下ごしらへをする樣なものでございます、生徒が少いものですから、學藝、才能、性質なども、よく分りますから、敎育上大に都合が可いのでございます」と語られましたので、私も希望の通り此の學校の現在を詳かにすることが出來まして、やがて辭して歸りました。

卒業式瞥見

記者

△花の咲く頃となると、女學生の嬉しさうな顔が、溫かな春風に煽られて、何となく引立つて見えるのは、卒業證書といふ目出たいものが、目の先きに散らつくからである、イヤ卒業證書でなくても、修業證書丈けでも、お目出たい譯ではありませんか。

△一年の間の勉學の功が見えて、新たなる學年に入るといふのは、慶すべきことである、況て三年五年の學業を卒へて、これから世間に出る人達に取りては、お目出たさが、又格段である。

△このお目出たい卒業式に、御案内を受けて、參列するのは、記者に取りて、無上の悦びと光榮とを感ずるのであります、併し一日に二三校も參列するときは、記者も中々忙しう厶います。

△若又た時間がカチ合うことになると、遺憾ながら何れか一方を、お斷はり申すことになりまして、折角の晴れか式場に參ることの出來ませぬのは、心苦しい譯であります。

△本鄕の女子美術學校の生徒は、校服といふのであらう、みな黒紋附の衣裳を着て居られましたのは、如何にも引立つて見受けました。

△但し袴は、蝦茶のと、紫のとが、雜つて居ましたが、紫の方が割合ひに多い樣でありました、これも何れかに極めた方が、宜しくはありますまいか。

△佐藤校長の勅語奉讀は、お聲は少々低くかつたが靜婉で落著いた御容子は、何となく奥ゆかしさを感

じました、女性の校長としては、アマリ擧動の輕快なよりも、此方が見好いものです。

男子といふものは、多くの女子の間に出ると、何となく一種の情感に打たるゝものと見へて、衆議院の演説壇に上つて、三百の議員を目前に控へ、國務大臣席に向つて、落着拂つて、數時間の長廣舌を弄んだ、あの尾崎市長も、式辭朗讀の折には、淀みなくサラ〳〵と讀み行かれる中に、耳朶の次第に熱くなるのが、有り〳〵と見受けられました。

△幾百となき年頃の女生の前では、平素講義などに慣れた敎員の外は、先づ大概は顔が赤くなるか、聲が振うのが當然です。

△此の學校では、毎でも來賓の室が二つになつて居つて、銘々案内さるゝが儘に、何れかの室に入るのである、停車場に上等待合と、下等待合とのあるのに、眞似られた譯ではあるまいが、同じ來賓に區別をするといふは、どういふ譯かと、呟やいて居た人がありました。

△津田梅子女史の女子英學塾は、流石に女史が、獻身的經營をされて居る程あつて、卒業式に臨んだ丈でも、赫たる異彩を放つて居るのが見受られる。

△生徒の數は、百名を越すか、越さぬ位であらうが實際の學業となると、三百五百の生徒を有して、大きな名をつけた學校よりも、確かに優れて居るのは塾長の熱心な體度と、卒業生總代の英語の答詞朗讀方とによりても分ると存じます。

△大方の私立女學校は、入校を志願するものがあれば、大概お出でなさい〳〵を極めるのであるが、此の學校では、一つの級の生徒を僅か二十名と極めてそれ以上は、如何なる理由があつても、生徒の數を増さぬといふことです、それは勿論生徒の數が多くては、敎授が行屆かないからで、此の一點丈けでも他校の模範にするに足ることと思ひました。

△横井時雄氏の演説は、女子の成功といふことを説かれたのですが、今もさうか知りませんが、元々宗敎出身の方であるので、何處となく說敎めいた處に

面白味がありました、小楠先生の御子息だと思ふと一段有難く思ひました、親の光りは、ほんとに七光りといふものです。

△新渡戸博士は、今臺灣から歸つた許りだとのことを、日に燒けた黑い顏に證據だて丶、登壇されましたが、辯舌が流暢で、比喩が巧妙で、何時まで聞いても、欠伸の出る氣遣はありません。

△が、併し自分は元來性質の惡い人間であるから、教育を受けなかつたら、巣鴨にでも行く筈であるの金時計をどうしたとか、かうしたとかのお話は、比喩話しではありますが、神聖な卒業式の演說としては、少々輕卒に聞えるやうに思ひました、まつと高尙な比喩はありますまいか。

△式に列した人の内には、日本人よりは、確かに西洋人の方が多かつた、式が了ると其處にも此處にも外國語が聞へて、賑かで愉快で、名實の相伴うて居るのを感じました。

△大山侯爵夫人捨松子も、學校の理事で居られるので、列席して居られましたが、寫眞で拜見したよりも、大層お若くて、奇麗で入らつしやる。

△三田の東京高等女學校は、棚橋絢子女史が良妻賢母の養成を信條として熱心なだけに、萬事が整ふて居て、何となくゆかしい處の仄見えるのが、態とならずして嬉しかつたので厶います。

△式の始る前に生徒の製作品を觀覽しましたが、何れも却々に見事な出來で、ほと〳〵感心を致しました、たゞ其の製作品中に卒業生の長篇の作文が厶いまして、それが日淸戰爭の原因及結果とか、又は日露戰爭の原因とか題するものばかりで厶いましたが如何に時局が時局でも、此の學校の此の生徒には、まちつと相應しい題のありさうなものを、惜しきことよと思ひました。

△棚橋校長は御病氣とやら聞いて居りましたが、左までお窶れの御容子もなく、相變らず嚴しき中に熱情をこめてのお話し、生徒も嘸かし滿足でありましたでせう、現にお言葉の途切れ〳〵に、我を忘れて

同舟舍繪畫研究所

油畫。水彩畫。木炭畫。圖案。研究時間各自隨意

所費每月壹圓五拾錢。束脩貳圓

斯道の眞摯なる研究者の爲に。

美術學校入學志望者の爲に。

業務の餘暇を畵に遊ぶ者の爲に。

赤坂區新坂町

（六十五番地（幽靈坂下））




諸學校御用
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5. Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 一、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺 拾參圓
並等一張 九圓半
號大人用
御用 體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
電本484
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用（一號） 六圓
同二號 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス網一張 一、七五〇ヨリ二、七五
○諸各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

輕く頷づく生徒の少なからず目につきましたので、記者は日頃の師弟の情合にまで思ひ到りまして厶いますが、敎育も此處まで往かなければ迚も成功は覺束ないので厶います。

△千家知事のお話しは時局柄誠に有益で、殊に此の學校の卒業式には極めて適當したもので厶いましたが、其のお言語の明晰なのと、其の辯舌の爽やかなので、いよ〳〵列席者の感を惹いたやうに見受けました、其の大要は記者が記臆を辿つて書き綴りまして本誌の論叢欄に掲げることに致しましたが、これは其のお話しの益を、一般女學生にも頒ちたい心からなので厶います。

△實吉軍醫總監は體育のことに就てのお話しで厶いましたが、棚橋校長も、千家知事も、謂はゞ女子に對する國粹保存的のお話しで厶いましたのに、其の來賓席に二十世紀婦人記者の今井某が見えて居たのは何となく面白い對照であつたと、口善惡なくお言ひの方もありました。

△此の學校の卒業式は初めから終りまで、質素で、靜肅で、如何にも奧ゆかしく感じたので厶いますが數ある卒業生の中に、琴の奧許し免狀を得られた方のありましたので、又一入ゆかしさの感を增しました。

△西澤之助氏の日本女學校の卒業式は、まことにお盛んなことで厶いました、式場の裝飾といひ、來賓の顔觸れといひ、列席生徒の多數なことゝいひ、場馴れぬものには目のさめるやうにも感じたで厶いませうか。

△見渡せば正面には敎育勅語を漢文にて寫したる扁額を懸け、それには國旗が交叉されてあつて、副島伯揮毫の額は幾個となく、其處此處に見受けらるゝさへ、一種の感に打たるゝのでありましたが、細川潤次郎氏の祝祠朗讀、土方伯の漢文の祝辭朗讀、卒業生の言文一致體の答辭など、チヨツト耳珍らし、聞取つたので厶います。

△西校長の訓辭については、兎角の評をするのでは

ムいませぬが、何どなく特に異樣に感じられましたよ、神代の例をお引用になつて、不孝のものはなかつた、不貞のものはなかつた、其證憑は歴史の頁が二三行で幾百千年を代表して居る、と仰有つたことや、露國の例をお引用になつて、ペートル大帝の皇后は四たび夫を變へた人であるとか、大帝晩年梅毒を病んで其の毒のモトの持主について皇后と爭さふたとか、お話しになつたことなどが、其の重なるものでありましたが、畢竟は御熱誠と御感慨とが溢れた結果と存じました。

△此の、餘りに熱誠な、餘りに感慨に富む校長の指導せらるゝ生徒は、餘程感情的に發達を遂げて居るもので厶いますものか、那の立派な卷軸になつて居る卒業證書を受けた生徒が、受領後十歩ならずして破顏一笑し、伏目になつて、匆々に復席せぬものは、殆んどなかつたのです、待に待た卒業證書を此の盛んなる晴れの式場で我手にしては、嬉しく思ふのは尤もです。

△式後、別室でビールの祝杯を擧げられて、可愛い孃樣方が彼是と厚く待遇て下されました、但見れば、窓の外には櫻の花が今降り出した雨に濡れて得ならぬ眺め、上野が岡はおぼろに霞みて遠景の水彩畫とも評したい位ゐ、やがて歸途に就くべく階下に降りて見ますれば、細川樣の車やらと、土方樣の馬車やら　中々盛んなものでありました。

△麻布鳥居坂の東洋英和女學校では、宗教主義の學校だけに、生徒の聖書の暗誦もあれば、高木壬太郎氏の祈禱もあり、尚ほカナダ婦人傳道會社々長の演説も厶いましたが、此等は普通の學校の卒業式では見られず聞かれぬことなので厶います。

△尾崎市長の演説は、文明的に働らいて好い國民の母となり、亞米利加風の婦人になつて、充分家庭の改良をして貰いたい、といふやうな意味で、日本人の是迄の誤解の點などを列擧されまして、頗ぶる懇切なお話しで厶いましたが、場所柄だけに面白うお聞き申しました。

△式の了んでから後に、生徒の成績品を一覽致しましたが、日頃裁縫には餘り重きを置かれぬ爲めか、此の部には感服しかぬる點も厶いましたが、葉書に花鳥人物などを描かれたのや、色紙にものされた卒業生の手蹟などは、いづれ甲乙なく見事な出來と感じました。

東京裁縫女學校成績品展覽會

卒業生の多いのと修學に便利なので、醫學界での專門學校であつた濟生學舍と共に名高い渡邊裁縫女學校が、東京裁縫女學校と改稱して益々生徒の收容に勉めつゝある事は人の知る處でありますが、初次の生徒の製作品評會を去る四月一日より三日間同校の敎室に開かれました、記者も案内をうけて一覽致しましたが、校門を入ると正面の受付には生徒諸姉が接遇掛りとして來賓の姓名を記して居られ、やがて一々案内をして之を樓上の陳列場に誘ひ、質問に應じて説明して居られるのでありました、第一の陳列場には、普通一年生の運針を初め、帶、袴、褄形雛形の衣類、刺繍等を陳列せられたが、流石に專門の學校ほどありて、製品は何れも美事なるが中にも運針の一時間百〇八尺と記したものなどは、針目もよく揃ふてよい出來でありました、雛形では、比翼付、比翼改良服などよく出來て居りましたが、此改良服は渡邊氏の考案に成つたので、袖は例の筒袖を締くゝる樣にし、下は袴の樣な工合で襞のとり方が袴よりは多い樣に見受けました、これは敎師の日常の服であるそうですが、裁縫などを致します時には袖のある着物よりは餘程便利でありましやう、次に雛形で總割の着物と羽織、及び兩面用の羽織着物などは、尤も手際よく出來て居りました、第二の陳列場には、前と同じ樣に褄方、羽織、袴、單物、袷、綿入、其他雛形の夜具、蒲團、蚊帳、及び菊形の肘付、鯛、蛤などの縫物が陳列されてありました猶此外に改良服と申しまして筒袖と股引の樣なもの

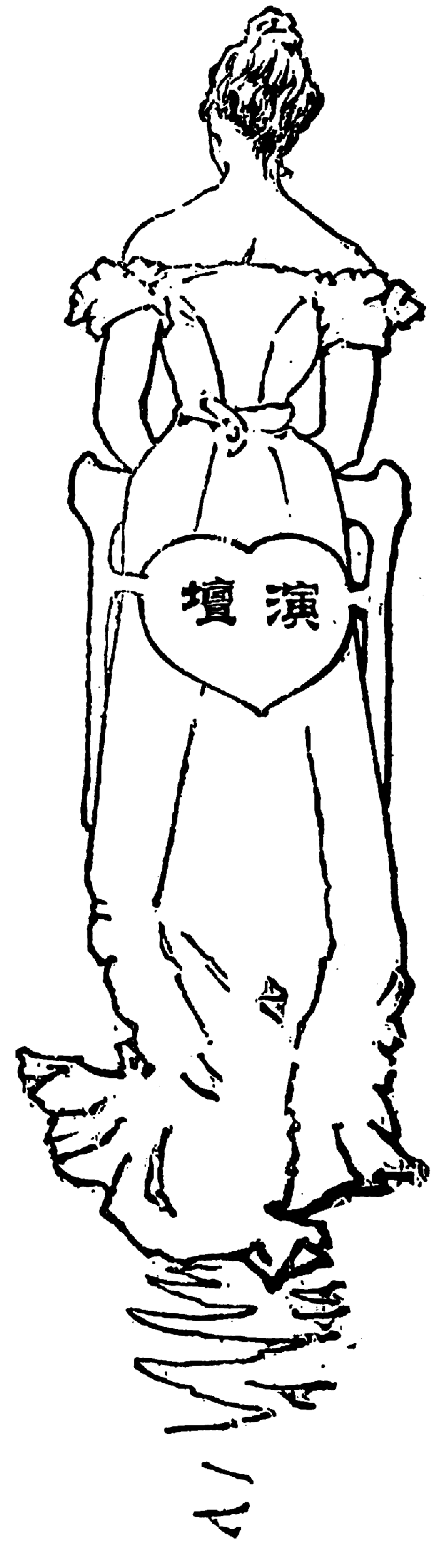
を一つに縫付けた紋付に、優美高尚にして傳染病を豫防す云々の効能書を添へてあつた衣服は、頗る異樣に出來て居るのと、また効能書が効能書である爲に餘程人目を惹ひたやうです、但し之は同校の出品ではなく東陽堂とやらの出品と記してありました、何にしましても流石裁縫專門の學校丈ありて、製品は何れも美事に見受けました、第三陳列場には古代服を始め中世時代から德川幕府に至るまでの衣服の雛形を排列せられましたが、これは頗る興味のあるばかりでなく、其間に衣服の沿革と變遷を知ることが出來ていよ〳〵有益なることを覺えました、即ち十二單衣は申すに及ばず、束帶、直衣、直垂、素袍、素絹、半臂、長絹、水干、闕腋、太紋、上下等に至る迄順序よく陳列し、一方には朝鮮服、支那服などが陳列されてありましたので、尤め會衆の注意をひいた如うですが、其他洋服類にては、小供用のもの及び女服の雛形、水兵服樣の小供服等、凡て格好よく見受けました、又男子の洋服では、燕尾服をはじめジヤツケツト、テニスコート、タクシードコート、フロクコートなどを排列して御座いましたこれは僅か六ケ月稽古をした人の裁縫されたものと申しますが、實に立派で、其進步の迷いのには驚かざるを得ませんでしたが、槪して申しますれば、同校の製品は割合に目立ちて佳良に、二年三年の修業を積んだ上級生の成績品は其の進步のさまも著るしく良好なることとは申すまでもありませんでした。

日露薔薇合戰

米國駐在の露公使カシニー伯夫人が去年の夏頃白薔薇の花を其頸に挿したるが流行の始めにて一時白色薔薇の飾は華盛頓の貴婦人社會に大評判となりしより日本好きの貴婦人連はカシニー伯夫人への面當てに紅色薔薇を用ゐ始め此處紅白薔薇の色競べにて白色黨紅色黨とは宴會と云はず道路と云はず常に反目の有樣となりしが黑奴の女共何と思ひてか昨秋以來白色薔薇を其飾となし始めければ流石白色黨も是には閉口せりと見え今日に至りては白色薔薇の女王たるカシニー伯夫人すら其花飾を廢したるより日本好きの米國貴婦人は紅色薇薔の勝利を稱して意氣揚々たり

二十世紀に於ける 日本婦人美の理想

リギョル博士



近頃世間にはいやらしき婦人の繪はがきが續々と出るやうでありますが、是れは何の爲でありませうか物質的文明の餘弊でありませうか、或は又戰爭の餘響でありませうか、其邊は今私が探る意はありませんが、兎に角今人の美的觀念就中婦人美に對する觀念が大分下卑て來たかと思はれます、此際婦人美の理想をお話しますのは强ち無用の業ではありますまい。

私は今玆に婦人の外形美を語る積はありません、此の方面に就ては私共が奬勵しなくとも御婦人方のほうで餘計に知つておいでになることだらうと思ひます、口善惡なきことではありますが、婦人日常の仕事

は鏡を見て身を飾るに在りと申します、身を飾るのは必ずしも惡しき事ではありません、が、心を飾るのが尚一層大切かと思ひます、處が其の大切な方面を殆ど打棄てゝ、末の方にばかり奔つて了ふと云ふのは餘り感心の出來ぬことであります、此の方面に於ては寧ろ節制の立てる方が大切かと存じて居ります。

凡て人間の美と云ふものは、内部より現はれて來るものであります、彼の無邪氣なる子供の美を見ましても直ぐ分る通り、心に罪なく情慾の亂れなきときは、面容まで美しう御坐ります、一片の氷心玉壺に在りと云ふやうなときは、實に立派なるものであります、子供の時分は多く此の通りであります、漸次成長して利慾の心が生じて來るに從つて、其のいたいけな心術が顏面にまで見はれ、如何に之を飾り裝はんとしても、畢竟僞善の仕事でありますから駄目になつて了ひます。

故に眞正に美を好まんと欲する者は、先づ第一心を美にしなければなりません、心美なるときは、其の美自ら面容に顯はれて、虚飾を假るの要はありません、然し心を美にすると云ふことは、却々容易すき業ではありません、否、人生最も困難なる事業と言つても過言ではなからうと思ひます。

世人は往々美は萬人の見て以て美となす所に在るかのやうに申しますが、是れはチト當にならぬことだらうと思ひます、蓼喰ふ虫もすき〲と云ふことがありますから、人の嗜好や外部の定規などは餘り重きを置くべきものではありません、美は比例(釣合)に在るもので、之を面容に就て申しまするならば、耳目口鼻等皆よく釣合つて、其の大小の比例が立派にとれて、突飛な所がなければ、先づ〱美と稱すべきであります、例へば鼻隆きを以て美となすと申しましても、鼻ばかり隆くて他の方面との釣合がとれませんならば、却て可笑しくなつて了ひませう、然し今は面容の美を語るのではありませんから、此の事は詳しく申上げる必要はありませんが、兎に角比例釣合と云ふものが、美に取りての必要條件であると云ふこと

だけ申上げるのであります、乃で內部に於きましても同じ理屈でありますが、然し內部になりますと、比例と云はんより寧ろ秩序が立つと云つた方が穩當かと思ひます、畢竟は異言同義であります、但だその內心に秩序を立てると云ふのが、六箇敷い業で、社會の秩序を維持すると毫も違ひありません。

社會には秩序を維持する爲に法律と云ふものがあります、法律は言ふ迄もなく罪惡を罰するものであります、蓋し社會の秩序を紊亂するものは、他のものではない、罪惡であります、之と同じ譯で、人間の心の中にも法律があります、それを良心と云ふので、此の良心に從つて往きさへすれば、心海は平穩なものでありますが、然し不幸にして他の一方に其の平穩な心海を絕へず荒さうとして居るものがあります、それを情慾と申します、丁度社會に於ける罪惡と同じであります、故に心を美にする術は之を簡明に申しますれば、良心に司配權を握らしめて、情慾を之に服せしむると云ふだけでありますが、但だ此の簡明な道理を實行する段になると六箇敷くなるのであります。

蓋し此の簡明な道理を實行するには、心中に激しき戰爭を經由しなければならぬのであります、漢學者は之を人心道心の戰と解し、宗敎家は之を新人舊人の爭ひと申し、多くの道德學者は之を內人外人の戰爭と云つて居りまするが、名稱はつまりどうでもよう御坐ひます、實際は良心と情慾との戰を指すので、心戰とでも云ふべきでありませう、哲學者になりますと之を理性感性の衝突と云ふでありませう。

兎に角人の心には日露戰爭が啻ならざる戰爭でありまして、其の爲に心の平和が屢々亂されて居るのであります、その平和を克復せん爲には、正を以て邪に勝たしむるに在りと云ふ通り、良心をして情慾を壓服せしむるやうにしなければならぬのであります、然し是には餘程注意して其の意味を誤らぬやうにしなければなりません。

凡て感ずると云ふことは、人生自然の情でありますから、感情を絶體的に絶息せしめると云ふことは、實際に於て出來ぬ事であります、如何なる人でも喜怒哀樂の情なき者はありません、が、但だ之に制限を立てゝ適當に之を律しませんと、遂には良心をまで横領せんとするのであります、さりとて直接之に反抗すると云ふことも出來ません、餘り過激に出ますと、身體の器械が壞れて了ひます、故に彼のマキアウエールの策を執り「治めんと欲せば、分裂せしめよ」と云ふ言を除々と行ふやうにしなければなりません、それには二つの道があります。

先づ第一は心を他に放散せしむると云ふ事であります、人は多くの事を同時に考ふることは出來ぬもので、何か一事に専念熟慮するときには、自然と他の事に疎くなるもので、其譯は、心は唯だ一つで幾個にも分けることが出來ぬからであります、故に心が惡い方面に向はうとするときには、之を制する第一の道は、心を他に轉ずるので、此時には成る可く罪にならぬ面白く且美しき事柄を撰ばなければなりません、それはどんなことかと云へば、運動するとか、土地を轉へるとか、或は讀書、繪畫、音樂とか、若くは和歌を作るとか、各自得意且適宜の美術的のものを撰ぶときには、心の美は毫も亂されず、閑雅優麗美風は矢張り面容にまで顯はれて居つて、依然婦人の道徳美を失ひません。

次に受働的退嬰的の態度をばかり取つてゝいけませんから、進取的活動的に出で、成る可く苦しき場合をも嬉しき場合をも利用しまして如何なる徳を行つたならば宜いかと考へ徳を以て身の飾となし、徳を以て最善の樂みとなさんことを務めなければなりません、然すれば人生は空漠無意義に了りません、樂みも此の方面に於ては何等の悔恨を帶びて居りませんから、眞個に愉快の至りであります。

此は實に道徳の方面から見た美ではありますが、乍然形體的にも其の美たるを失はぬものであります

蓋し心中の德美は形體にも發射するものであります、二十世紀の日本の婦人美も此の通りにいたしたいものであります、彼の心に何等の德なく徒らに粉飾を事とする婦人の如きは、藝娼妓と何の異る所もなく、人は之を美と稱するも、吾は之を掃溜の上の雪と言ふに躊躇しません、理想美は此の如き者には斷じてあるべき筈はありません。

　但だ此の理想美に於て困難とする所は、德を行ふと云ふ點に在ります、德と云ふ文字は言語で申しますると、ウイルッスと云ふ、ウイルッスとはウイルより轉化した語で、ウイルとは日本語で譯しますると、男と云ふ意味であります、其の譯は德を行ふは易々たる業ではない、男子の勇を要すると云ふ所から斯く申すのであります、如何にも其の通りで、右申上げました人心道心の戰ひ、所謂良心と情慾との戰爭に於て天良の心を發展せしめて、擾々たる邪慾の念を壓屈せしむると云ふのは、人生最も困難とすべき所であります、此の事は男子に取つても六箇敷いことであります、否、英雄豪傑と雖も之を難んずるので、彼のハンニバル、アレキサンデル等皆、武器では勝つたが、惡には負けたと稱せられて居るのであります、之に反して彼のセザルのみが大勇者として稱せられるのは、彼が野蠻の敵を征服した爲ではなくして、自家心中の敵を抑制した爲であります、即ち色情を抑へ、邪慾を抑へ、憤怒を制し、復仇の念等を制したるが爲で、文豪シセロは之を稱して殆ど神に近き人物と云つたのであります、是れ實に高尙なる所であります、理想美は正しく茲に在ります。

　婦人も、此の心此の決心がなければ、理想美を備へることは出來ません、理想美のない婦人は、如何に面が美しくとも、人の玩弄にのみ委せられて、人から尊崇されると云ふことはありません、それは神に近い所、所謂神聖なる所がないからであります、日本では之を氣高い婦人と申します、氣高い婦人は何とな

く犯す可からざるものであります、是に於て美女と淑女、美婦人と賢婦人の區別が起るので、前者は俗に言ふ別品、實にいやしう御坐ります、言葉からして最早俗了して居ります、別品と云ふときは、既に一種の玩弄品を指すやうに思はれます、今日世間で繪はがきにある婦人は所謂此の別品の方であります、實に是れ日本婦人の一大恥辱と云ふべきではありませんか、人間的美は單に花の美の如きものと思ふてはなりません、人間的美と云ふときには理性的美を離れてはならぬものであります、理性的美は即ち善であります、徳であります、婦人に於ては特に之を淑徳と云ふので、婦人の理想美と云ふときは、乃ち此の淑徳の心より發射して容貌形體にまで顯はれるものを、云ふのであります、背格好の如きは多く關する所ではありません、水晶は如何なる形にきられても、光りが來つて之を照らすときは、燦然として異彩を放つものであります、人もその通りで心だに水晶の如く潔からば、實に立派なものであります。

婦人は皆顔面の美醜を見んが爲に一の鏡を有つて居ります、どうか其の心にも亦一の鑑を有つて居るやうにいたしたいものであります、心の鑑と云ふのは外でもありません、完全なる婦人の理想であります、婦人方が鏡に對して自分の眼で全く奇麗になつたと思ふまで化粧を凝すが如く、完全な婦人の理想鏡をも眼前に立て丶、自分の心が全く之に類するまで、缺點を改め、汚點を拭ひ、弱質を補ふやうに務めなければなりません、是れは面を作るよりも確に大切な事であります。

然らば完全なる婦人の理想は如何なるものでありませうか、婦人美の理想は昔と今とは少しく趣を異にして居る所があるかも知れません、昔は聽從と云ふ徳が婦人淑徳中最も重要の位地を保つて居つたやうで御坐りますが、今日は然ではありません、女子でも獨立自由と云ふ文字を口にするやうになつて居ります今私は古今の婦徳を批評する精神はありませんが、依頼心のみあつて寸毫も自發心なき者は、人間ら

しいとは云はれません、さりとて獨立自由の名の下に我儘勝手氣隨氣儘の擧動があつては、却て貞淑の德に背くことゝ思ひます、アリストテレスと云ふ哲學者のいつた通り、德は中に位するものであります、即ち過不及なく、中道に位するのが眞正の德であります、只今古今婦人の德を比して申しましたから、之に就て申しますれば、聽從も卑屈に流れず、自由も放縱に過ぎずと云ふやうに、溫良閑雅、優美貞淑の中にも何となく氣品高く、凛として犯す可からざる所がなければなりません、此點に就ては昔は不及ぬ方で、今は過ぎる方でありますが、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しでありますから、何れにしても極端と云ふことを避けなければなりません。

私をして二十世紀日本婦人美の理想を語らしめたならば、先づザット左の如きものだらうと思ふのです。

謹愼で勇氣で質朴で正直で、活潑で貞淑で、其の蓮步を移すときは、目をさげて、見ること僅に數步、宛も頭上に一の目的あつて、之を考へつゝ步むが如く、其の精神には高崇善美なる思想を浮べ、其の心には優麗閑雅なる德操を帶び、口は常に閉ぢて何となく締りのある所を示し、擧止は輕妙快活の裡に何となく溫良恭謙の容を見はし、往來の者には斷じて嘲笑的の風を示さず、批評せず、噂させず、愛眷を求めんが爲に故さらいやしき嬌態を示すことなく、粉飾の如きも極めて淡く、成る可く天成の美質のみを貴しとなし、流行を逐はず、淤泥に染まらず、傾立亭々として瓊樹の淸池に臨むが如しと云ふやうなありさま。

是れ實に私の所謂婦人美の理想で御坐ります、此の如き婦人は、人之を見て畏敬の念を起します、決して狃れ親しむ心は起りません、所謂嘆美すべくして、愛玩すべからざる婦人であります。



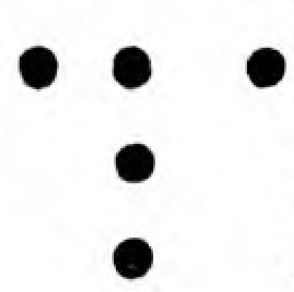
イリユーション

（幼想又は幻影）　松村　蓬麻

此頃袖ケ崎の友人を訪れました。折節主人は留守でわつたが、庭の梅は坐ろに笑ひそめて今二三日が見頃の盛りなのに、二人の令孃は夫人と共にもてなして下さるので、ツヒ種々と打興じた話の中に、令孃から梅花の圖案をして呉れろとの難題が提出されました。之はトンダ御請求で困つたものと思ひながら「イヤ、それは面白い思付、早速拵へて差し上げませう、が、オイソレとお茶を呑むやうな手輕いわけには參りませんから、今晩の中に意匠して明日お送り申しませう。其かはり唯今ホンの責め塞げに、一つ二つお慰みをお目にかけませう」と、菓子盆に供へてある利久箸を取りて、左圖の如に並べまして、

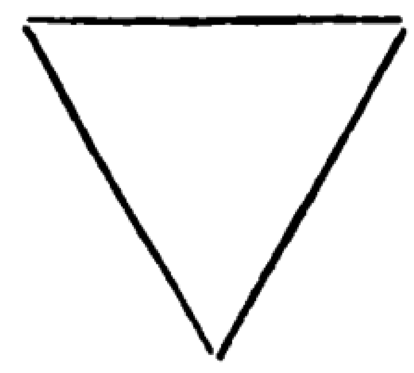


「サア善く御覧なさい、縱のと横のとドチラが長いで厶いませうか、又ソレトモ同じ長さに見えますか、」といふと姉妹の令孃はチツト見詰めて後「アラ不思議だこと、同じ箸だのに縱の方はズツト長いやうに見えますわ、お母樣にはドウお見えで厶いますか」、「左樣、妾にも矢張りさう思はれます、」叔父さん箸をドウかなすつたのではありませんか、」と何やら私に手品でも有かのやうに疑が懸りましたから、早速菓子皿から圓の雫を五つ程取り出して次のやうに並べました。



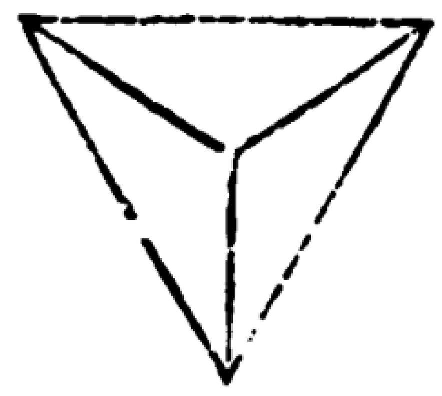
「ソレでは今度は如何ですか、縱と横とを比べて御覧なさい」と言ふや否や妹さんは目を圓くしながら「マアずるいでは有りませんか、縱のは其間が横のより廣いやうですわ、お母さま左樣で厶いませう、」と機敏な穿議立に、夫人

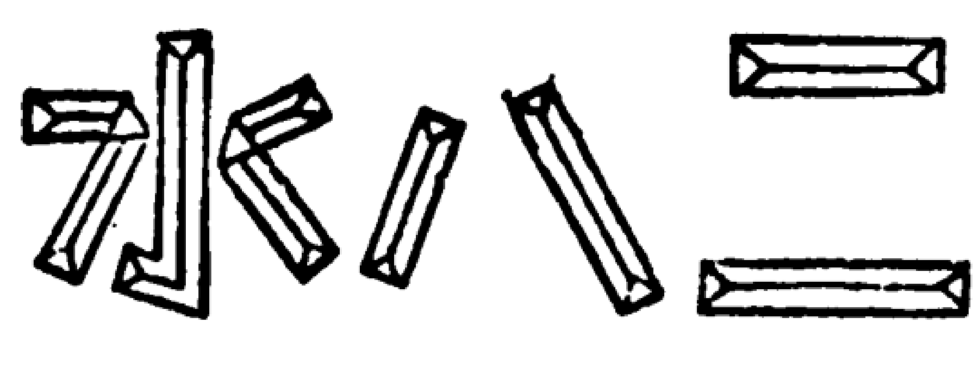
は令嬢に對ひ、「デハ尺を持つて來て寸方を試して御覽なさへ、さうしたら間々が廣がりもせず狹まりもせず、叔父さんを疑はずとも善いでせう」と諭されたので姉さんは早速尺を持ちて來て、菓子と菓子との間を一々指して見ました、スルト其間隔は何れも一寸づゝでありましたので、夫人も令嬢も愈々怪訝な顏色で「オヤ、ドウ見ても縱の方が長く見えますわ、不思議いでは厶いませんか、」と更にかはるぐ實驗して興がつて居りました。其時私は懷中から白紙を取り出して次ぎの如く等邊三角形を拵え「モウ



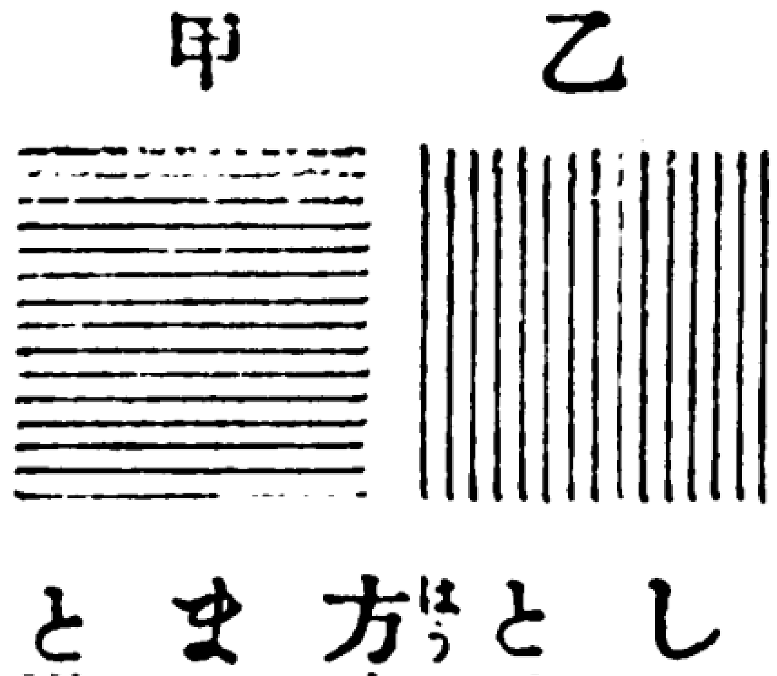
一つ之を御覽なさい、縱と橫とはドチらが長く見えますか、」一同聲を揃えて「ヤハリ縱の方が長く見えます、ドレ又尺で指して見ませう」と三邊の長さを計つて見たが何れも同じ丈でありました、ソコデ皆々不審に不審を重ねて私の仕た事柄について、信用と尊敬とを拂はれたのみならず、却つて自分等の目に故障でもありはしまいかとの疑ひをさへ起したものと見え之は妾どもの目の惡いのでは有りますまいか、ソレトモ何ぞ外に道理のあるので厶いませうか、」と云はれましたから、「イヤ、之は誰樣が見てもさう見えるのです、決して貴方がたの目に故障も何もあるものでは厶いません、目がコンナ見誤りをする例は幾らもあることで、ホントに目の働きなどはアテにならないものと言つて差支がありません。斯樣に目が騙されることの作用を英語でイリユーシヨンと申すのであります、今お目にかけた三つの試驗は、イリユーシヨンのいろは位に過ぎませんのですから、序にモウ二つ三つ少々込み入つたものをお慰みに致しませう、」と勿體らしく說き出しましたところ、皆皆愈々興に入つて、「サア早く仕て見せて下さい。今度のイリユーションはドンナのですか、」と矢の催促ですから「デハ、今の三角紙の中心點より三つの隅に線を引くから御覽なさい、サア、此中心點を善く見詰めるとドンナ風に見えますか、」「オヤ〳〵眞中が高く成つて見えること、チーお母さまさう見える

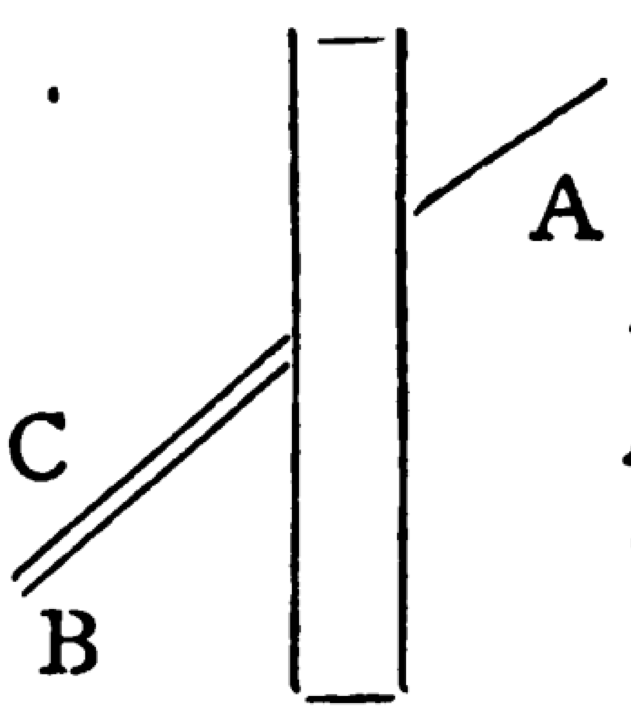
で厶いませう、」「ホントに三角が山になりました、」「叔父さん其次は。」「ハイ、幾らもありますが、日外神田須田町の電車の停留場で面白いイリユーションを見ましたから、其話をしませう、彼處で上野行の電車を下りて左側に一軒の小間物屋がありますが、其軒先に花王散と二八水と書いた大看板が掲げてありますが、其二八水と云ふ三字を左圖のやうに現はして人目に觸れ易くしてありました、御覽なさい。





二八水と云ふ字が浮いて見えませう、中々善い思ひ付きでは有りませんか、」「サッパリ氣付きませんでしたが、イリユーションもかう云ふ風に應用されますと、隨分効用が多いものと云はなくてはなりますまい、」「ドウして其効用は是れ位ではありません、我々は常に其おかげを被つて居りますが、ソレト氣が付かない所から、イリユーションとも何とも思はぬばかりでありませう、」と申しますと「ソンナにイリユーションの作用が妾どもの目の前に澤山あるもので厶いませうか、」と夫人が熱心に問を起されましたので、今更ながら坐輿が一轉して固苦しい話に成りかけました、が、「デハ之はドウデ厶います、甲と乙とは同じやうに見えますか、甲の方は高く見え乙の方が廣いやうに見えませう、が、之はドチラも正方形に縱と横との線を引いたばかりなのです。





サア、今度はACとABとは、ドチラがA線に正しく連絡して居りますか、誰方が見てもA線とC線とがキチンと連絡して居る樣に思はれます、が、定規でヨク／＼正して見れば、A線はB線に連絡して居ることが、正當で御座います。

モウ一つ込み入つたものでありますが、先刻圖案のお話しが出ましたから、意匠の御參考に線の近いものを御覽に入れます、此圖の短線は水平線と鉛直線

との二つのものを組み合せたゞけでありますが、何やら斜線の結合されたもの丶やうに見えるではありませんか、此頃の流行に縮緬やモスリンなどの模様に格子を染め出したるものを見受けますが、千篇一律で、悉く古人の糟粕を嘗めたものに過ぎず、如何にも嶄新な意匠に乏しい次第でありますが、此圖などを工夫したらば何とか面白い新圖案が出來さうに思はれます、是れ又たイリユーシヨンの利用の一つに數ふべきではありませんか、」と山鳥の尾のやうな長い說明も左程退屈を招かぬ容子で「イリユーシヨンは未だ此外に澤山ムいませうが、ドウか其利用の重立つたお話を伺ひたいものです」と三人口を揃えての請求に、「是れまでのお話はホンのイリユーシヨンの簡單な應用で、サツパリお爲めにもなりませんでしたが、ズツト込み入つて申せば、多少御參考になることも有らうかと存じます、先づ手近い所から申せば、アレに掛けて有る……耶馬溪の寫眞額……山又山の奥深い樣や、杳々として此方に流れ出づる水など、殆ど際涯ない光景を表はして居ではありませんか、猶又、床の土佐畫の幅……內裏の家根棟の奥深く續いて、而も部屋〳〵の遙に內入れる鹽梅、雲深きあたりの樣など、目のあたり見せるやうに感じるではありませんか、アノ寫眞と云ひ此掛物と云ひ、何れも平面の上に畫かれたものであるに、ソレがアノやうに奥深く見えるのも矢張イリユーシヨンの一種に外ならぬのであります、分けて著しいのはパノラマで、其前景の部は實物であるが背景は繪畫を飾り付けたものに過ぎないのです、此背景で思ひ付きましたが、歐米の芝居では舞臺の背景に大變に意匠を凝して、一劇に數千萬金を費すさうであります、近頃我邦の芝居でも歐米に倣うて此イリユーシヨンを應用して中々立派に背景を飾るやうになりました、以上のお話で略々イリユーシヨンの何物であるかはお分りになつたこと丶思ひますが、更に之を概括し抽象して見れば、美術上に於ける繪畫寫眞な

どはイリユーションの應用に外ならぬと云つて差支ありますまい、茲に一寸御注意を致しますが、此イリユーションの爲めに又トンダ失敗を起すことも少なくないので、薄月夜に人通りのない淋しい處を過ぐる折、ペンキ塗の木標が幽靈に見え、辻地藏が大入道と見えた爲め仰天狼狽して大滑稽をする人も無きにしもあらず、シテ見るとイリユーションにはコンナ惡い方面と、前にお話した善い方面と二つがあるもので、ズット煎じ詰めればツマリ目の見そこないと申す外はありません、言葉をかへて申せば目が物の形狀大小遠近などを誤認したのであります、と云はゞ吾々の目は甚だ不完全の機關らしいのみならず、目の何れの部分がドンナ構造からイリユーションを生ずるであらふかと樣々のお疑ひが起るでありませう、デ少々六ケ敷道理にはなりますが、序に

イリユーションの學理

をザットお話申しませう。イリユーションは譯して幻想又は幻影などと申します、イリユーションは啻に目の作用の上に生ずるばかりでなく、耳にも鼻にも味にも將また吾々の心の上にも、其作用を表して居るものでありますが、茲には專ら目と心との二つに限りてお話したまでゞありますから、勿論全體の解譯を試みるのではありません、去ながら唯目ばかりについて研究しても其外の場合に應用するとが出來得ることゝ思はれます、分けて目のイリユーションは耳や鼻や味などのそれよりも一ト際著しいもので、此理さへ聞き分けたならば其の學理を明らかにすることは決して難事では厶いますまい、デ前節にお話したのは皆目と心との二つのものに關係したものであります、先づ專ら目のみに付て申さば、(一)目の水晶體には其周壁に極細い筋肉即ち毛樣筋が有つて水晶體の厚さを加減する作用を司り、遠い物でも近い物でも思ふまに〱明視させる調節をつけて居ります、若し御調節の作用がなかつたならば、目は或一定の場所の物を明視することを得るばかりで其一定の場所より、遠い所の物、近い所の物はハッ

キリ視ることが出來ないに相違ありません、然るに微妙なる毛樣筋が活潑に働くため水晶體は自由自在に其厚さを加減してあらゆる物を明視するのに少しも故障なくして居ります、……(二)吾々の目は其右のと左のとは物の映ずる樣が同じで厶いません、即ち右の目には物體の左半より稍々多く右半を映じ、左の目には稍々多く其左半を映じ其樣は丁度寫眞眼鏡のやうであります、ソコデ目には(二)に於ける如き作用があるため、イツも(一)に於ける作用に依て甘く調子を合せて行かぬと、ツイ見誤りが生ずるのは必然の結果でありませう、然るに前の色々の圖は何れも目を遮ぎる點又は線がある爲めに彼の調節の運動がスラ〳〵と參らぬので、ソレデ一種の見そこない即ち幻想を生じたわけであります、次に目と心との入り交つた幻想では、先づ初めに目が物體を朧氣に認めたので、其物體に不明な點があるに乘じて逸早く心の作用が尾に羽を附け加へてとんと一種錯誤的の或物を形成したので、即ちペンキの標柱で申さば、其柱の長さや其塗色などを認むるや否や、心の中でオヤ瘠せ細つた白衣の怪しいものよ、青褪めた物凄い顏よ、シホ〳〵立ち上つた樣よなど、樣々の考を加へてワザ〳〵獨りで幽靈を拵へ出したのであります、之でイリユーションのお話もザツトお分りになつたことゝ思ひますが、序に申し上げたいのは家庭に於ける子女の教育にも能く此等の理を思ひ合せて、役にも立たぬ幽靈談や化物話などを持ち出して子女の精神を軟化せしめるやうなことは最も戒めなくてはなりません、イヤ吾ながらトンダ長話、サゾ御退屈で厶いましたらふ」と御挨拶に及びました、夫人も令孃も未だ物足らぬ容子で、「どうも色々のお話を伺ひまして心が晴々と致しました、どうぞ次ぎに入らつしやる時、耳や鼻や味などのイリユーションを話して頂くことを今から樂みにして居ります、」「叔父さん急度梅の鬪案も拵へて下さいよ、」と追ひかけての強請に唯々と應へてお暇しました。

(をはり)

端午の節句　林きく子

端午の節句と申すは、むかしの五節句の一にて、又五節會の一にて數へられたり、五節句はまた五節供とも書きて、人日(正月七日)、上巳(三月三日)、端午(五月五日)、七夕(七月七日)、重陽(九月九日)をいひ、五節會は元日節會、白馬節會(正月七日)、踏歌節會(正月十六日)、端午節會(五月五日)、豐明節會(十一月辰の日即新甞祭の翌日)をいへり、さればは五月五日はむかしより朝廷におかせられては端午の節會あり、武家より下々にても五節句とて、祝日の一とせるめでたき日なりしなり。

むかしは五月といへば、最早夏の半なのは、藤の花牡丹の花まで時過ぎて、梅雨にも入らんとするの頃なりしが、今は一月ばかりも時節を早めて、今年の五日は丁度舊歷の四月朔日に當るほどなれば、春夏のさかいにて、申分なき好時節なるが、五日といふのを待ち兼ねてにや、早一日頃よりは暖き風を飲みて孕める大鯉、緋鯉の棹の上に躍る、紅白を交へたる幾條の吹流の空に翻へる様いと勇ましく、もし高臺に上りて見渡さんには、都の家々目のとゞかぬ處まで、幾千幾萬となく、都は鯉の淵となり、屋形は淵の波となれるかと、怪しまるゝばかりならん。

數日前より日本橋區十軒店を始め、諸處に散れる是等の商人の店には、此節句に飾らるゝ昔の武者の面影を見るべき旗、幟、鎗、刀、甲冑などより、武者人形、武者押繪、紙鯉、供物臺などに至るまで、並立てゝ賣出せば、己が兒のため、或は孫のため、さては親戚朋友の家の初兒の祝に贈物として、購はんとせる人々、店先に群り集れるは、流石に都の繁昌の一端を窺はるゝを得て、殊に雛祭は女兒の節句、幟祭は男兒の節句とさへ云へるに、今年は日露の役も連戰連勝といふ、めでたき限りなれば、男の兒には一層の祝日とも申すべく、彼鯉幟は更なり、家の內に飾らるゝ武者人形、旗、鎗などの見事さも、此

祝の酒宴に集まれる人々も、毎年とは彌增して賑へるなるべし、鯉幟も下方にては紙鯉を常とすれど、富の家、貴き族にては、染鯉も縮緬にてといふ、下下にても初めての男兒を喜ばるゝ家の之に倣はるゝは、親々の心には、無理ならぬ事なるべきか、今婦女の身にて此男の節句の事をものするはとも思へど婦女とて男兒の母たるを思へば、男兒の事とて、如何で棄てらるべき。

▲鯉幟、飾物

さて此端午の節句に旗、幟、甲冑などの飾物をなすこと、何時の頃より始まりしかといふに、むかし人皇四十九代光仁天皇の皇子早良親王と申すが、當時異國より我に寇せるものありしより、是れが追討の大將として、西國に御進發の門出に、深草山(山城國紀伊郡)の南なる藤の杜の社に外寇退治の祈願を籠めさせられ、其の稜威により、神風吹きて、夷船悉く覆沒し、皇子は戰はずして凱旋ありて、御禮參を行はせられたるが、此のめでたき形を殘さんとて、是れより藤の杜の社にては、毎年五月五日の祭禮に甲冑を着して神輿の供奉を爲すこと丶なり、我邦にて祭禮に甲冑を着て供奉せるものは、此宮の祭禮を始とすといひ、此祭禮の五月五日なるより、此節句に甲冑を飾るも、亦是れより來れるならんと書かれたるもあれど、光仁天皇の御代に外寇の事ありしといふさへ、正しき歷史には見えず、縱令歷史には漏れたるものとするも、之をすぐに此節句に甲冑を飾るの起りとすること如何あるべきやと、是れ又古人のいはれし所なれば、之を始とするとかたかるべきか。

此の光仁天皇より以前に於て、人皇四十五代聖武天皇の天平十九年五月に、天皇南苑に御して、騎射走馬を視たまふよし續日本紀に見え、又其後平安城に於ては、五月五日に天皇豊樂院にて、騎射を御覽あり、之を馬弓といひ、天皇を始め奉り、群臣に至るまで、何れもあやめかつらを冠にかけて、節會の儀式ありしことを書けるものあれば、此五月五日には

むかしより朝廷に於て講武の節會なりしこと明なり後世武家に於ても、又諸國の武士にても、武を忘れざるの意にて、甲冑を飾り、弓箭旗幟まで武備に擬したるものをも飾るに至れるにて、元朝廷講武の節會より出でたりとすること穏當なるべきかと云はれし人もあれば、之ぞ其始めともいふべきか、今鯉幟をたつるは武家ならぬ身分の家にては、鯉は瀧をものぼるといふ勇ましき魚なれば、之にちなみて男兒の斯く立身せよとの意にて用ゐられたるものにて、深き意味はあらざるべきか。

▲槲餅と粽

此節句の供物又は贈物としての名物とも申すべきは槲餅と粽なり、今も槲餅は行はれて、餅菓子屋より常にも賣出し居れるが此節句には是非用ゐること、なり居れり、併し粽は今は物堅き田舎の一ヶ月後れに節句を祝へる地には殘れるならんが、都には最早影もなし、左れば唯々昔物語となりたれど、此粽は我邦にても古きより行はれたるのみならで、之は支

那の風俗より來れるものなるべく、從つて其起りも支那にありて、楚の屈原よりなりと諸書に見えたりそはむかし楚の屈原といふ人、五月五日に汨羅といふ淵に身を投じて死せり、楚の人之を哀みて、此日に至る毎に、竹の筒に米を入れて、之を水に沈めて屈原を祭りたるが、其後後漢の光武皇帝建武年中に至りて、長沙といへる地の歐回といふ人、白晝に一人の異人に出逢ひたるに、其人は自ら三閭大夫（屈原は三閭大夫なり）なりと稱へ、歐回に向ひて謂へる樣、世の人我を祭らるゝ、多きは誠に嬉しき至りなれど、如何せん其大部は蛟龍のために奪ひ去らる、今後若し我に惠まるゝなれば、願くは楝の葉を以て竹筒の上穴を塞ぎ、五色の絲をもて之を縛りて、江に投ぜらるべし、此楝の葉と五色の絲とは、蛟龍の畏るゝ所なりと、是れが五色飾り及び粽の起原なりと云へり、固より怪しき話にはあれど、昔の人には斯る事も多く信ぜられたるものにて、隋唐の世となりては、種々の迷信と異説と之に加はりて、粽も種

々の形ともなり、又製り方も幾種ともなりたるが、是等は支那の事として、さて、我邦にても平安城の頃に於て既に粽を用ゐられたること諸書にありて、飾りちまきとて五色の絲に飾られたることも、亦諸書に見えたるが、後には篠の葉の葦、菰の葉などにて包み、是れは陰陽を包裹して散せざるに象りたるものなりともいひ、又粽の形は蛇に似せて卷く、是れを服して毒虫を殺すことを表せるものなりともいへるが、後世には斯る意もありたるにや。



▲菖蒲

此節句にて、尙は一の名物ともいふべきは、菖蒲なり、彼重陽の節句即九月九日を菊の節句といへるが如く、此節句を菖蒲の節句ともいへり、是れより節の後れたることを、六日の菖蒲、十日の菊などとも云へり、左れど菊の節句の如く、菖蒲は花を眺めて賞するにはあらずして、此の菖蒲には種々の因緣あることなり、今も菖蒲湯とて此節句の日に菖蒲と蓬とを湯に入れて、浴客を待てるが、是れのみむかしの名殘ともいふべきか、此

事も今は唯々昔物語となるべけれど、昔しは種々の習ありしなりしにて、今其一二を見はんに、人皇十六代仁徳天皇の三十九年辛亥五月に、詔して菖蒲を献ぜしめられたるが、朝廷にて此菖蒲を用ゐられたるの始めなるべく、前にも記したる聖武天皇天平十九年五月に騎射を覩たまひし折、太上天皇（元正天皇にて、聖武天皇未だ御幼冲なりしをもて、垂簾あらせられしなり）詔して、昔は五月の節には常に菖蒲を用ゐて縵とす、比來此事を停めたるも、今より以後は菖蒲の縵を用ゐざるものは、宮中に入ること勿かれと、是れ續日本紀に見えたる所にて、是れにても菖蒲の此節句に用ゐられたることの、いと古きを知るべく、後世には此菖蒲と蓬とをもて檐にふき、或は酒に泛べて飲みたり、之を邪氣を禳ふと云ひ傳へ、又禁中にては菖蒲枕とて、御枕の左右に五寸ばかりつゝを挿まれ、又此の菖蒲の葉にて種種の形即人形或は刀ノ箭などの形を剪ちて、女兒は髮にさす簪とも爲し、ひたすら身に着くるをもて邪氣を禳ひ得るものとなせるが如く、又此菖蒲と勝負と云へる言葉の聲相似たるより、此日に勝負事を爲し、川を隔てゝ、石合戰を爲すを風習とせる土地さへあり、最も可笑しきは此時作りたる木太刀にて、婦女の後を敲けば、男子を生むといひ、又菖蒲にて注連の形に繩をよりて、之も同じく婦女の後を打つの具として、祝ふといふ言葉の下にせる事ゆゑ怒りも爲得ざれど、打たせじと逃げ廻るを、追かけ打つの戯わりたり、前の菖蒲湯といへるも、支那にてはいと古くより蘭湯に沐浴すといへるとありて、此蘭は今の蘭にはあらで、澤蘭の香草なりといへるが、何にせよ香のある草を採りて湯に入れ、邪氣を禳ひしこと、周の代よりの事なるべく、我邦にては禁中にても檐に葺きたる菖蒲と蓬とを採りて湯に入れ、前にいへる御枕の菖蒲をも御湯の中に泛べられたるが、此菖蒲、蓬とも五日の夜に露を受けたるを用ゐられたりといへば、菖蒲湯といへるは六日の儀式にて、此露にわへるを用ゐるは、神水を含めりと

いふよりの事なるべきか、此蓬も菖蒲と同じく、支那に於ても身に着けなどして、邪氣を禳ふに用ゐたれば、我邦にても菖蒲と合せて用ゐられたるものなるべし。

▲端午

序に端午といへる事に就きて、諸書に云へる所を見るに、端は初にて、午は「うま」なれば五月の初めての午の日をいふならんが、午の日とすれば、五日には限らざるなり、然るを五月五日とするより、九月九日の節句を重九といひ、五月五日を重五といひ、三月三日を重三ともいへり、何れも月と日と共に同數なるよりいへるにて、此五月の節句のみ午の日にはあらずして、これも五日なれば、午の字は當りかぬるなり、左れば午は五の字の音と通用す、午と書けるも五の調なりといひ、後世に「うま」とするは誤なりともいはれし人あるは、さもあるべきことゝ思はる。

むかしは五節句といひて、唯々兒女の遊び、婦女の戯れの如く、徒らに遊宴の具に供へられたるやにも思ふものあらんが、三月三日の節句は女兒の節句として、婦女のたしなみとなる事を敎へ、五月五日は男兒の節句として、前にも云へる如く武備を敎へ七月七日は文かく事を敎へられたるものにて、此三節會は何れも兒女敎育に供へられたるものにて、唯唯九月九日の菊の節句は兒女敎育にも、なり兼ねたるより、むかしとてさのみ言噺されざりしを見ても推さるべく、むかし人の何事にも深く心を注がれて後の世までも、そが惠に浴ること難有事とこそ申すべけれ。

當世俤草紙（二級）

新山 春子

（三）奇遇

世人は能く其樣なことは何とかいふ小説のやうだとか、まるで小說だとか、何だとか彼だとか云ひまするが、私は其小說よりも事實として其以上の面白

い奇妙なことがあることを認めました。丁度先月の中旬で、花の噂の其所此所に起つて居た時分でした。空がどんよりと曇つて一ト雨來さうな、如何にも陰欝な天氣。

私は書齋に籠つて机に向ひましたが、何となく不快で不快で、頭を抑へらるゝやうな氣がするので、ほと〳〵困りました。

何處か、不忍池の周圍か、さなくば上野の方へか散歩に出掛けて見やうかと思ひましたが、又雨に遇つてはと思つて、これも一向氣が乘ませんでした。

もう、妹も學校から歸つて來るだらうから、さすれば、一緒にぶら〳〵動物園へでも出掛けやうと、漸く、まあ、此樣なことを胸に定めて居りました。暫すると、其處へ下女のお竹が郵便を一封持つて來ました。まあ、誰樣からか、斯樣な氣の冴えぬ時、親しいお友達からお手紙なんかを貰ふほど、自分の慰藉になることはないと、取る手遲しとばかり其狀を受取つて見ますると、私の一番〳〵親しい紫藤芳子さんからなの、別に外のことは書いてはありませんが、大分久濶ですね、ちと被入いな………なんかと例の御得意の假字で言文一致に認めてあります。ちと被入いな……私も其内に……と私は何となく此文句にひかされてか、俄に芳子さんに遇ひたくて遇ひたくて、矢も盾も堪まらぬやうになつて來ましたの。

で、なに、雨が降らうが、風が吹かうが、一向そんなことに頓着は爲ないといふやうな氣になつて、直ぐと衣物を着換へて、母の許可を得て、家を飛び出ました。無論雨が今にも落ちさうなので、私は低下駄に蛇目傘を一本用意しました。

上野から南行の電車に乘りました。時刻は丁度午後の三時。

電車は兩側へ丁度乘客が一ぱい、吊革にぶらさがる者もなかつたので。

切通、黑門町の停留場を過ぎて、五軒町へ行きますると、二三人下車る乘客がありました。そして新

に三人の乘客を迎へたのです。

丁度其三人は私の前へ腰かけました。一人はまだ浦若い丸髷の細君、一人は十八九の氣の利いた下女今一人は三つか四つの愛らしい女の子で、友禪の美しい被風を着て居ました。

丸髷の細君とは年頃は二十二三か、面長な、顏色の眞白な、眉目の淸しい、氣品賤しからぬ婦人で子供をあやする時などは、その櫻色の頰に、ちよつと靨を見せ、その目の中には、又何とも云へぬ柔和な色を現はして居ます。子供は又「かあーちやん〳〵」つて、溢るゝばかりの微笑を滿面に湛へて、母なる婦人の懷へ紅葉のやうな手を指し入れて、何か頻と云つて居ます。

私は斯の若き母と、斯の愛らしい兒との顏を凝乎と打目戍つて居りますると、今まで鬱いで居た氣が漸々に晴々するやうになつて實に淸々しい心地になりましたが、これは全く此兩人の間に發揮された愛の光に照された故かとも思ひました。

私は猶ほも眸を凝らして若き母の顏を見て居りますると、其淸しい目付、その口元、頰の邊から、私の少女時代のお友達の町田柳子さんに似て居ることを思ひ出しました。すると、私は外の事は何にも思はず、頭の中には、唯頻と町田柳子さんばかりを想像しまして、古い〳〵お互にお烟草盆や、お稚髷に結つてゐた時分のことを思ひ出し、それから二人で山へ遊びに行つたことだの、川へ遊びに行つたことだの、歌留多遊をしたことだの、……といろ〳〵と少女時代のことを思ひ出して、往昔の懷かしい、慕はしいやうな氣がするやうになつて來ました。

考へて見ますれば町田柳子さんとお別れ申してからは、既う八年！、八年と云へば一ト昔、左樣〳〵彼の方は丁度十五の春、柳子さんの伯父樣が大阪の府廳へお勤になるやうになつて、大坂へ行かれたのだつけ。そして、初めは一ト月に一度か二度位は必ず〳〵手紙を遣り取りして、音信をして居ましたつけ。けれども、去るものは、日に疎しとやら云ふ諺

と同じやうに、お互にだん〲と疎遠になつて、お手紙なども、二月か三月に一度と云ふやうになり、それから半年に一度、それからは一年にたつた御年始狀一本といふ樣な工合で、兩方とも大層疎遠になりました。

それから、柳子さんは、又伯父樣のお勤向が變つて熊本の方へとかお出になりましたが、その後はさて〲何うなすつたのでせう、私もついお尋ね申しませんので一向分らぬことになりました。何でも紫藤芳子さんのお話では、柳子さんは、旣う熊本で、高等學校の先生の諫早とやらいふ文學士の方と結婚せられたといふことを聞きましたが、さて、まあ、今は何うなすつたのでせうか、……………と、私は今は全く町田柳子さんの事ばかり思つて居りまして、電車に搖れながら、首垂れて斯樣なことを思つて居りました。

不圖、頭を擡げまして、又も私の前に腰かけて居まする若き母の顏を見まするると、氣の故か知らぬが何となく町田柳子さんの夫れに似て見えますの。そして、又、その女の子を見ると柳子さんの少女の時と酷似なのです。若しやと柳子さんではないかと、私しは思ひ切つてお尋ね申さうともしましたが、イヤ、まて、若しこんな突飛なことを云つて間違つては氣の毒なことと、女は女だけに斯樣な氣がして、思ひ切つてお尋ね申すことも出來ないのでした。

すると、この時、電車が甚く動いた拍子に、若き母なる人の蛇の目の傘がばつたり私の前に倒れました。彼方は手早く其傘を取り上げて、その細やかな右手で持つて居らるゝので、傘の表に書いた朱書の苗字が、不圖私の目へ入りました。それには「諫早」といふ二字を認めてありました。

諫早！諫早！正しく柳子さんの片付れたのは、諫早だつたつけ、さう〲慥に諫早だつけ、さうすると十中の八九までは、必定町田さんに相違はあるまい、必定柳子さんに相違はなからう……と今は私は旣う疑ふの念が無くなりまして、私は早速、

傘を杖に前へ乗り出して、輕く一禮し、

『もし、貴女！甚だ突飛なことをお尋ね申しまするやうですが、貴女は、あの、町田さんでは……。』

と、云ひまするト、彼方は私の語を遮つて、太く打ち驚いて、その細い目をきいつとし、顏さへ赤めまして

『えッ、左樣です、私は町田でございます。貴女は誰樣で。』

『私は新山でございます。』

『えッ、新山さん、春子さん。』

と、一方ならず打ち驚いて居られて、



『まあ、お久いことで、私もう、すつかり、おみそれ申して居りましたが、貴女は、まあ、能くもお覺えがありましたね。』

『ハイ、私も、別にさうも覺があるといふ譯ではございませんが、貴女のお顏を先刻から見て居りますると、どうも、昔の貴女の俤も見えまするし、それに此お孃ちやんが、貴女のお小さい時に酷似なので、ことによつたら町田さんではないか、それとも違うかと、いろいろと思つて居りました所、貴女のお傘で、「諫

早」さんと判りましたから、慥に柳子さんと思ひましたのですよ。」

と、私は、有の儘を打ち語りますると、彼方はさもさも嬉しさうな面持せられて、

『あ、左樣でございすか、それは〳〵、まことに面白い所で御一緒になりました、この電車もなかなか數の澤山あるものですが、よくも、まあ、御一緒になりました。不思議なことです。これも、神樣のお引き合せかも知れませんオホヽヽ。』

『ハイ、左樣です、私も其後すつかり貴女樣と……最早六七年も音信しませんので、今頃は如何なすつて居られまするかと、時々思つて居ましたよ、そして、別て近頃、頻と貴女のことを想つて居ましたから、全く、神樣がお引き合せなすつて下さつたのでせう。……………オホヽヽ、餘り久しいことでお目にかゝりましたので、何からお話申し上げて宜いやら、薩張り分りませんです。』

と、私は云ひますると、彼方は透さず言葉の尾を取りまして、

『ハイ、全くですよ、私も何からお話し申して宜いやら分りません、……貴女のお家が東京へお出京になつたのは、うす〳〵知つて居ましたが、私も始終、貴女は、今頃は何處に何うして被入るやらと、時々想ひ出し、廣いやうで狹い世界ですから又、いつかお遇ひ申さぬとも限らぬと思ひましたが、今日は不圖も、此所で、………まあ、何とも云へぬ嬉しいことで、涙が出ます位です。……まあ、自後はお互に昔のやうにお交際なすつて下さいまし、私の所は芝の櫻田本鄕町二十六番地でございます、實に汚い所ですけれど、是非お遊びに被入いまし、ゆる〳〵と昔時のことなんかいろいろとお話申しませう、待つて居ます。……何うで厶います、柳子さん、何ならば今から、御都合が宜敷いなら被入いましな、……別に御用もございませんならば、……櫻田本鄕町ですから、新橋で下車れば直きでございます。是非被入いな。

『ハイ、有難う、又重ねて、何ですか、お宅は櫻田本郷ですか、それならば芳子さんの所から直きですわ、私、今芳子さんの所へ行くのですから、まあ、兎に角御同道いたしませう、貴女は芳子さんをお覺えでせう。

と、云ひますと、柳子さんは小頭をひねつて、

『芳子さん』

と、獨語つて居られます。

『あの、紫藤さんですよ。』

『あッ、紫藤さんですか、さう〳〵紫藤のお芳さん知つてゐます、知つてゐます。芳子さんのお宅が私の所の附近?、何處ですか、まあ。』

と、喜ばしい眼を見張るのです。

『西の久保の巴町二十番地といふのです。』

『はあ、巴町ですか、それならば、宅から直です。宅の前を通つて被入れる道順ですから、是非ともお立寄なすつて下さいまし。』

『ハイ、ありがたうございます。』

電車は今丁度新橋へ來て停留したので、私も柳子さんも皆下車しました。そして、柳子さんの所へ立寄り、いろ〳〵とお話しました。そして、又、使を遣つて紫藤芳子さんを柳子さんのお家へお呼び申しまして、いろ〳〵と古を偲んで三人お話まして、夜になつてから歸宅しました。

陰欝した空のやうな氣も、此奇遇の爲めに、秋の空の如くに高く晴れ渡つたのでした。

温泉の話　　倭翁

翁は先きに年末年始の缺禮をして伊豆行を企て湯ケ原、伊豆山、熱海などに、當時療養中なる名譽の負傷勇士を慰問かた〴〵、茲に羈旅の客となりました、御承知の如く伊豆の國は富士山系に屬せる天城山の一脈が、その脊梁をなして居るので、爲に山東の地は氣候暖かにして東京に比べては慥に華氏の十度以上高温であります、されば軒端の筧には既に春水の

迸りて舊苔の髭を洗ふあり、庭除の梅蕾は早く春信を傳へて只管黃鳥の訪ふを待てる光景でありますさて豆東に溢るゝ計りなる療傷兵士は何れも生氣活活、所謂る捲土重來の意氣もて、口を開けば即ち憤然西比利亞の野を睥睨するの概あつて、誠に賴母しき極みであります、翁が滯在は僅々二旬足らずの日子でありましたが、心身共に非常に興憤したやうに感じました、是れは勇士の元氣に化せられたのでもありませうが、又一つには溫泉靜養の効驗でないとも限りません、依て端なく臆起いたしました溫泉てふことに付て、聊か科學上の御話を試みますのであります。

地熱

我が地球の全體は、もと極熱の物質でありました、然るに次第〳〵に外部より冷却して、外皮には既に固體の地殼が出來ましたが、內部には未だ非常の高熱を以て居ることは、種々なる現象や實驗によつて明かであります、元來寒氣とか暑氣とか申しますは空氣の太陽より受けた熱から起ることですが、地下に入つて或る深さに達すれば、彼の季節に應ずる寒暑の相異はありませぬ、熊本測候所に於て地下十米突(三十尺)の所に寒暑計を置いて之を測つたことがありますが、年中大抵十七度乃至十八度にして大差はありませんでした、即ち冬期地上の溫度が零點以下に降ることがあつても、三十尺の地下では十七度を有し、又夏期地上は三十度以上に昇ることあるも三十尺の地下に影響する所は僅か約一度にして、十八度に過ぎないのであります、其他世界の各所にて實驗せられた結果では、地下六十尺乃至七十五尺の深さに達すれば、年中溫度に變化がありませんで、恆久溫點と云つてあります、是れ地上氣溫の左右し能はざる所でありまして、地熱のみを感ずるからであります、更に進んで地中に深く這入りますれば、溫度は次第に增加して、遂には人の堪へ能はざる程の高溫となるのであります。

今日人工を以て穿ち得た穴は、最も深い坑でもヤッ

ト地球半經の三千九百六十二分の一即ち一哩に及ぶものはありませぬ、されど斯の如く深くない穴でも意外に高温を有して居るものがあります、佛國巴里の近傍にある深坑は約一千七百九十尺ありますが、それより噴出す水は二十九度の温度を有して居ります、又墺國ベスト府に於て、地熱の理に基て三千百二十尺の深さ井を穿ち、毎日六十八度の温水を六千四百五十五石宛得、地熱を實用に充てゝ居ると申すことであります。

さて世界の各所に於て實驗せられた結果によれば、地熱は地中に這入ることいよ／＼深ければ深い丈け温度が逓加することは何處でも一様であります、然るに其増加率は火山地方と否とによつて相違がありまして、又地質の異同によりて一様ならぬ場合もありまするが、各地の平均は三十三米突(約百尺)を下る毎に攝氏一度の温を増すものとなつて居ります、されば若し三千三百米突の深さになると、水も常に沸騰する道理であります。

温　泉

前に略説いたしました如く、地中の深處にあつては水も常に沸騰すべき譯でありますから、その温水が冷ゆることなく、地上に湧出づれば、即ち温泉であります、さて雨だれが地上に落つれば、其一部は土中に滲入し深く地下に入つて地層間を循環するときその地熱に觸るゝ場合には強く熱せらるゝことは疑いなき事實であります、そこで現に湧出せる各地の温泉は皆悉く一回は地中深く滲入して、岩石界の最下層の強熱界に達し、その高熱を受けて再び地上に湧出たものかと申せば、それは必ずしも斯る至深の處まで行くには及ばず、もし深底まで下りて再び地上に湧出たものとすれば、却てその途中で熱を失なはねばならぬ道理であります、然るに高熱の温泉にあつては、沸騰點以上を以て湧くものもある所を見ると、外にその原因のあることが知れませう。

すべて地皮の所によつては、成層岩を破つて噴出した成火岩もありますが、又幾多の斷層若しくば缺隙

などが出來て居て、地層が餘程入組で居る所もあります、然るに地心の熱が斯る隙間を透して地上近くに接して通るものもありますから、地層間を循環しつゝある水が、あながち深く地底に入らなくとも既にその熱に觸れたならば、忽ち熱せられて温泉となり、直に地上に湧出るのであります、是れ温泉の湧く原因でありまして、火山地方若しくば火山岩附近に温泉の多く出るのも此の譯であります。

以上述べましたは、雨だれの地中に入りて熱を受け再び温泉となつて地上に湧き出づる順序を申しましたのでありますが、世に多くの鑛泉は、海水が壓力などによつて海底を濾して地中の深處に滲入し、高度の熱を受け、剩さへ強き壓力の爲に酸化物が遭接して作用を起し、之を分離して遂にその幾分を溶解して湧出する塲合が多からうと、云ふことであります。

水の地下熱の爲に一度熱せられましても、地上に湧出するまでに、途中で冷ゆるものもあります、これを冷泉と云ふのです、温泉と冷泉とを區別するには通常その地平均の氣温を標準として、氣温以上を温泉と云ひ、以下を冷泉と云ふのであります、又華氏六十六度を標準として温泉、冷泉を區別することもあります、冷泉の尋常井水などゝ異なる點は、一度地心熱に逢ふて温泉となつた證として、必ず種々なる鑛物を溶解して含有して居りますことです、故に冷泉、温泉を論せず、地熱作用を受けて湧く所の泉を鑛泉と云ふのであります、さて鑛泉はその含有して居る鑛類の性質によつて、凡そ五つに分けることが出來ます。

一、炭酸泉

この泉は透明にして無味でありますが、大抵は亞留加里を含有して居ります、其特徴は曹達であつて、曹達は多く炭酸鹽狀であります、又湧出いたしますときに遊離炭酸を爆鳴して飛散するものもあります又常に遊離硅酸を含有して居ります、此の泉は夥しく炭酸石灰を包含せるに依つて、その堆積したるも

のは硬石灰、軟石灰、豆石等の狀をなして居るものもあります、この炭酸泉は火山地方に多く、概ね第三紀の凝灰岩及び花剛石岩の中より湧出して居ります、我が國で名高きは肥前の嬉野、豐後の別府等であつて、加賀白山の炭酸泉は遊離炭酸爆鳴して湧き筑後矢部川の泉は冷泉であります。



二、硫黄泉

この泉は腐れ卵のやうな臭氣がして稍白黄色の濁を帶びて居ります、銀器を入るれば黒くなり、白粉をつけた顔も亦黒く變ります、各種の鹽類を含有して居りますが、その特徴はコロリン化ソジユームであります、併しながら硫黄泉の原基となすは硫化ソジユームでありまして、噴火山近傍の安山岩或は古代地層と火山岩との接觸せる地層から湧くのであります、此泉は非常の高熱を以て居る所を見れば、その近傍に高熱界のあることは疑ひはありません、火山の半腹若しくば、山麓にある温泉は概ねこの温泉であります、箱根の芦の湯、伊豫の道後、上野の草津肥前の温泉岳、肥後の阿蘇山等の諸温泉は名高き硫黄泉であります。

三、鐵泉

鐵泉は鐵が重なる成分でありまして、稍澁味を帶び

雌黄性の實質を堆積して居る、これが此泉の特徴といたします、その外に炭酸曹達、炭酸石灰食鹽等をも含有して居ります、この泉は多く冷泉であります我邦では純粹の鐵泉は甚だ少くて、豐後の鉄輪の澁湯や、鷲來迫温泉が純粹なものであります、箱根の湯本紀伊の龍神も鐵泉だと云ふことであります。

四、鹽類泉

この泉は多く鹽類を含有して居るのであります、その主なるものはコロリン化ソジユーム、及びコロリン化マグチシユームであります、之に次いで硫酸曹達、硫酸石灰、硫酸マグチシヤ若しくば少許の炭酸石灰をも混有して居ることもあります、この泉は大抵第三紀凝灰岩中より滲出するので、此層は曾て海底に落ちこんだものでありますから、澤山なる鹽類を含有して居るのであります、故にこの層中を通過した温泉は必ず鹽類を含める道理でありませう、鹽類泉は多く透明無色でありますけれども、或は微黄を帶びて居るものもあります、我邦では硫黄泉に亞で多く、攝津の有馬、下野の鹽原等は、その著名なるものであります。

五、鹹泉

この泉は殆んど鹽類泉と同じことでありますが、只その氣量のコロリン化ソジユームを含み、著しく鹹味あつて强く舌頭を刺激するのと、又海水と同じく鹽味を有して鹽を製することが出來るのであります第三紀凝灰岩より滲出するのと、海水の直に地熱を受けて滲出するものとがあります、我邦では鹽類泉と同じく各所に少くはありません、

温泉療養の効用

温泉療養の効用は、泉中に諸種の鑛物を含有して居るからであります、即ち炭酸瓦斯、硫化水素、其他固形鹽類は、醫療上大切なる物質でありまして、特に炭酸瓦斯の如きは鑛泉中第一効能あるもので、これに入浴すれば、皮膚の知覺過敏さを減じて、感冒等に罹る患なく、これを內服すれば腸胃病、呼吸病を治します、要するに鑛泉の種類に依て、各々特効

のあるものでありますから、その病患の種類に適應せる温泉に浴することが肝要であります。温泉は多く火山の繞らし山腹、山脈から湧出して居ますから、山高海濶なる眺めに富めるか、さなくば綠林四周の別天地で、空氣清良なる故、一度びこの境に遊ぶときは心神先づ壯快にして、百憂頓に忘るるの効があります、常によく職業に出精して置いて折節かゝる地に遊びて、その心身を保養するは人生に缺くべからざることゝ思ひます。

三越呉服店

すみれ

三越呉服店を紹介致しますのは、單に同店の顧客の便に資せんとする目的では御座いません、同店の事業が日本の婦人界に對して如何なる關係をもつかと云ふ、一寸妙な考へから筆を採ることになりました、同店は呉服店としては實に有數な店舗で御座いますから、従つてその事業が慥に婦人界に一種の勢力と關係を持つて居る事は疑ふまでも無く、觀察の致し樣によりましては、社會改良に從事せらるゝ方方や、女子教育家又美術家などには、確に有益な參考になる樣に思はれます。

▲沿革● 同店は都下でも尤も古い呉服物の老舖で、殆んど二百年以前から引續いて營業を爲て居ります勿論駿河町の今の處は創業當時の場所ではないそうですが、然しそれとても決して新しい事では御座いません、一番町の三井得右衞門氏の所藏にかゝる駿河町呉服店の繁昌の圖などは隨分古い浮世畫で、百年や百五十年のものでは無い樣に思はれます、兎も角も徳川全盛時代からの江戸のお馴染は此呉服店であつて、元は三井呉服店と稱へまして三井一家の合資會社と云ふ樣な風で御座いましたが、ツイ半年程前から三越呉服店と改めました、元來三越と申すのは此店の舊稱で、主人の名が得右衞門――三越得右衞門と申すのが通り名であつたそうです、然るに何時の頃よりか、主人は無くて番頭計りで三越得右衞

門と稱へて營業を爲て居りましたのが、維新の後に主人の無いと云ふのは可笑いと申すので、今の一番町の三井得右衛門氏が店の主人となつたのでありました、それが又如何云ふ事か主人無しの三井一家の合資會社に爲つて重役支配の店となり、又再變しまして昔の三越呉服店となりましたので、專務理事等の役員を置いてツマリ昔の番頭支配の樣な組織に爲つたので御座います、現今の專務は日比翁助氏で此の人は慶應義塾出身で學生時代から我國の商工業の事には、深く意をとゞめられたと云ふ事で、從つて商工業上に於ける才能は現今の實業社會で有數な腕利と云ふ評判あり、殊にモスリン紡績會社の事業につひては同氏の手腕によるものが多いとか申すことで、三越店の主宰には尤も適當である樣に同業者間に云ひ囃され居る、夫から朝吹英二氏も益田英作氏も共に監督の任に當つて居て、それに今は專ら三井礦山會社の方に專任の高橋義雄氏も、矢張顧問の一員として、事務に參畫さるゝそうで、兎も角も實業社會で有名な其の人達の協賛により、店務の一切を統轄することで御座いますから、同店が日本の呉服店の中で、一頭地を拔いて居りますのも偶然ではありませぬ。

▲流行の中心としての同店　何事によらずではありますが、わけて男女の衣服、服裝等の流行の中點は丁度歐洲での巴里の樣に日本では東京であります、勿論中國から四國西國九州へかけては大阪が其中心となつて居る樣ではありますが、所謂之は上方風なので昔は隨分勢力もありましたが、今では日本全國を通じて東京が流行の中心點となつて居るので、其東京の流行の中點は、呉服物では先づ三越店などが元になつて、次第に諸方へ傳はつてゆく樣に思はれます、それ故三越呉服店を一覽しますれば、流行模樣が知らるゝと申してよろしいと思ひます、記者は屢屢同店を訪れて其有樣を見するに、大抵三四ヶ月で慥に流行の趨勢は移り變る樣に思はれます、さて其の移り變つてゆく流行といふものは、世の中に何程

の影響を及ぼすものか、よく〳〵考へて見れば、隨分之によつて社會の風潮や、國民の氣習や、品格の高下を卜する事が出來ると同時に、社會改良或は兒童教育等に從事さる〻方には一種の參考となるもので、充分に考慮すべき價値がある樣に思はれます、若し三四ヶ月を隔て〻其流行の樣を、比較觀察しましたなれば、よほど面白き研究の材料が得られるでありませう、凡て織物は勿論模樣縞物に至るまで、意匠の嶄新奇拔なるは同店の特て誇りとする所なので、時々懸賞で圖案を募り之を評定して撰に當つたものを染め或は織上げつ〻あり、夫には隨分少なからぬ費用を抛つそうで、今尚ほ記者の記臆に存じて居りますのは、彼の日英同盟條約の成立つや否や、直ちに懸賞圖案を募集しましたが、此折の當撰は櫻花に獅子毛の模樣でありましたが、一寸した事が凡て斯う云ふ風であります、要するに同店の意匠は光琳風又は之に能樂趣味を加へたもの〻樣に見受けられ、一寸見た時はヌウボー式の樣に思ふ人も有ませうが、仔細に觀察しますれば、ズット高尚で而も優美な處が御座います、さればとて全くハイカラ趣味の無でもなく、物によつては大層意氣のもあり高尚のもあると云ふ風で御座います、此等は婦人社會の觀迎を受くる一つなので御座いませうか、獨り品物の意匠計りでなく凡ての飾り付など世人の知れる如くよほど面白い處があります、聞く處によれば、店舗の裝飾については絶へず巴里わたりの目新しい流行を參考して時々取換ゆるので、意匠掛りの人達は絶へず夫のみに掛つて居ると云ふ事で御座います。

▲店員●● 現今店員は男女併せて二百餘名、從前は男子計りで一切の店務を處理して居りましたので女と申ものは飯炊一人もなく、眞の男世帶と云ふ風であつたので御座いますが、一昨年かに女子を採用して見ようと申す事になつて、初て女子の店員を置きましたが、此種の店で女子採用をしましたのは、同店が率先で、又實に店の一大革新でありました、それで二十五名程の女子を試驗の上採用しましたが、其成

績が善さ如なので、今では三十五名程になつて居るこれが簿記掛、電話掛、賣場、接待掛等の各方面に割り當てゝあります、此の女店員は重に女子職業學校の卒業生で大抵廿三四歳を頭に十三四歳の少女もあつて、いづれも忠實に働いて居りますが、身裝りも小薩張として、流石に三越呉服店の店員と申丈けあります、そして一體は人柄もよく何處となく氣が利て、勸工場の見張女などゝは比較になりません、中には何處の令孃かと思ふ樣な人も見へまする、給料は日額と月額と兩樣あるそうですが、大抵最初が一日三十五錢位で、其上は腕次第働き次第なので、現に月給十八圓位の人もあります、意匠掛に人柄の卑しく無い五十位の婦人が御座いますが、此人などが其の監督者で御座いましやうか、女子の店員で一番給金の低いのが、給仕代りに茶を汲む小女なので日額廿八錢であるそうですが、一體に申せば女子の稼ぎとしては先づ好い方なので、當人の心掛次第にて隨分嫁入の仕度が出來ます上に、多少の貯畜も出來ます譯で、婦人の側から申ますれば、斯樣な職業の端緒が開ましたのは、大層喜ぶべき事でありますそして婦人は萬事緻密で注意深く、男子の樣に惰けると云ふ事の無いので、先づ好成績であると云ふことで御座います、併し女子店員の採用と云ふことに就ては多少考量を要すべき點があるかのやうにも考へられます、夫は何う云ふ點であるかと申まするとこれは或る令夫人が記者に語られましたことですが、三越呉服店へ行つて買物をするのに女の店員が居ると頭から足の爪先まで見とれる樣な氣がしていけぬ矢張男子の方が買ひよいと仰せられました、或はそう云ふ樣な感じを持たれる方もあるで御座いましやう、要するに我々婦人の立場から云ば、何處までも好成績で行末店員は女子に限ると云ふ樣に歡迎さるべく折角得た斯の職業を再び男子の手に取り返さるると云ふ樣な事の無ひ樣に切望致します。

▲顧客の增減と種類　流石に大都會唯一の老舗でも一年中何時も〳〵同じ樣に客人の來るものでは無く

客足の極めて少ないこともあるそうで、先づ一年の内一番多いのが十二月、即ち一月前で、極めて少ない季節が五月の末から六月の始めと八九月迄なのでありますが、それでも一日に三百人や五百人の客の無いと云ふ様な事は無いそうで、鐘一つうれぬ日は無し江戸の春、流石に日本の都だと思はれます、十二月から三四月へかけては一日何千人と云ふ來客、勿論其内には單に縱覽のみの人もありますが、之は至つて小數であります、然るに同店では買物客と縱覽客との別なく一様に待遇して休息室へ入る人には茶まで汲



んで出すと云ふ風で、之は大變好い仕方であると思はれます、尤も其の來客も春と冬とによつて其の種類が違ひます、即ち十一月の末から歳暮へかけては所謂江戸前の客で殆んど府下の客のみと云ふて好い位であるが、三四月から五月の始にかけての客は、地方人が多いそうで、從つて品物の趣味も品質も季節によつて全く違ふそうで御座います、歳暮の客人向きの品は、意匠も目新らしく品質も贅澤で氣の利いた物でなくては賣れぬので却々骨が折れる代り、意匠方でも織方染方な

どでも大層張合があつて、此の季節は殆んど意匠や流行の試驗期である樣な心地がすると云ふことで御座います。

▲今後の計畫●●●● 同店が今後の事業として現在計畫しつゝあるのは、單に衣服反物の販賣ばかりではなく日用品の中で婦人に必要なものを凡て陳列して販賣すると云ふこと、之は日本には未だ一ヶ處の設けも無いが、巴里あたりの悉皆店（此譯名は不適當かも知れず）の風に擬して、婦人必要品は三越店へ行けば整ふと云ふ樣にすると云ふことで、先づ其第一着手として差當り化粧品丈は近々の內に陳列するさうで御座います、此の計畫が完成したならば、玉寶堂や、香取や、服部時計店、ゑり治などを合併した樣な大層便利で、奇麗な高等な店が、出來ることであらうと思はれます。

▲海外に於ける評判●●●●●● 三越呉服店の名は內地で名高いばかりでなく、海外では內地よりも一層の評判で殊に戰勝の結果、日本美術品の粹を集めたるものだと云ふ樣な事が傳はつて居りますため、彼國の婦人社會では三越呉服店の名を記憶せざる人は少い位で交際社會に知られた婦人とか、流行好みの婦人間では、三越店の商標ある品の一つ位は屹度身に付けて居ると申します、彼の東郷花を刺繡したハンカチーフなどは最も多く賞玩されるとのことで、丁度精好織が織元の鹽瀨と云ふ稱呼の下に世間に知られて居る樣に、日本服地は三越と云ふものだと心得て居る婦人も少くないと云ふ程であるとのと、それで日本へ漫遊の外人は必ず同店を一見する例になつて居て現に先頃御來遊の獨逸の皇族殿下なども、府下遊覽の第一に同店を縱覽されたのでありますが、或は事實よりも大きく海外へ反響して居るのではないかと思はれます、巴里で發刊する最近の衣服雜誌を見た方は、大抵此間の消息を御承知の事と思はれます。

（つゞく）

美人は薄命か幸福か（下）

赤門隱士

▲どんな莫連の引摺り女でも、一度は慈母の懐に抱かれて、乳房を吸うて、スヤ〳〵と罪もなく眠つたことがあるのだと思ふと、一見可憐可哀の情を催ふさずには居られない。

▲まして姫御前のあられもない口のきゝやうをしたり、女としてあるまじき擧動をしたりしても、兎も角良家の子女であつて、志を立てゝ學問の道に就いて居るのだと思へば、縦ひハイカラでも、蠻カラでも、われは之に對して、一滴の涙を流すを禁じ得ないのである。

▲阿母さんの乳を吸うた時から、お手毬、羽子板でお正月の樂しかつた時から、尋常小學の時代から、つひ今の樣に大きくなつたのであると、歴史を追念して見ると、どうしても、同情を起さずには居られない。

▲阿爺や、阿母の思ひが、何處まで、此人達の身上に及んで居るか、燒野の雉子、夜の鶴、それにも増して、案じて居られるのは勿論である。

▲無事に卒業して呉れゝばよい、さて卒業した曉には、どんな人を聟にせうか、どんな人の嫁に遣らうか、先の先まで苦勞するのが親心といふものだ。

▲お薩を羊肝、蠶豆を金平糖と心得て居る間は、まだ〳〵大丈夫である、

▲羽衣ショールとなると、少々難物である。

▲露骨ではあるが、追々ラブだの、スウイートだのといふ語を口外する時節が來る。

▲御面想のよいもの程、自負心が强い、その自負心に乘じて、誘惑といふ魔物が、内からも、外からも攻め寄せて來る。

▲アラ私し嫌よと、嫌でもない顔をしていふことが

ある。

▲薄命の萌芽は、此時から徐々と生じ始むる。

▲必ずしも墮落すると極つて居るのではないが、此處が一生の運命を左右する動機となるのは、決して爭へない。

▲兎角美くしい花ほど、人の目に着き易ひ、目に着くから、容易に手折れる。

▲同じ手折られるにしても、立派な花瓶に挿されて床の間に置かれるのもあれば、そのまゝ路傍に棄てられて、哀れや、落花狼籍の姿となるのもある。

▲床間のながめとなつた牡丹花と、散るを惜まぬ山櫻の潔よさとは、何れが仕合せか、不仕合せか。

▲それは人々の心の中にあることで、容易に判斷し得べきではないが、併し人生の幸福といふものから割出して見ると、大概見當はつくと思ふ。

▲夫は品位ある相當の紳士で、社會に相當な地位を有つて居る、敢て富めるといふ程ではなくとも、今日の生計には差支へないのは、先づ幸福といふべきではあるまいか。

▲家庭の空氣も清らかであつて、何處にも惡臭を放たないのは、幸福ではないか。

▲此方が、柔順にして居れば、無理な小言などは、決して言はない、若しわが胸に落ちないことがある時には、おとなしく筋を分けて聞き糺せば、諄々と説明して呉れるから胸がサッパリするのは、幸福ではないか。

▲愛も深く、情も濃やかで、無理でない希望は聽いて呉れる、共に樂しい旅行もする、散歩にも伴てくれる、こんな風で日を送るのは、樂みであるまいか

▲一時の情熱にうかされて、戀は神聖とかなんとか下らぬ得て勝手の解釋をつけて、つい誘惑にヒッかかる、面白いと思つたのは、一寸の夢である、その夢も儚なく覺める、覺めた跡に來るのは、さて何である。

▲小説を讀むで見ると、辛らい一方には、面白味もあるやうに思はるゝが、實際その境遇に入つて見る

と、決して面白いことはない。

▲世間には顔が出されず、お友達からは愛想をつかされる、親々からも捨てられる、かうなると當の男の待遇は、次第に冷かになる、不平は山のやうに生じてくるが、訴ふるに途がないから、その色が自から顔にあらはれる。

▲こちらが面白からぬ顔をすると、對手もまた不愉快な色を見せる、情は薄くなる、愛は醒る、自由結婚などといふもの丶、成りの果てが斯うである。

▲容姿がわるいか、わるくなくとも、餘り目立たぬ位であつて、少しも自惚といふものがなくて、自分で自分の容姿を正當に認識して居るものは、幸福な人である。

▲學問も出來る、裁縫にも達して居る、行ひも至つてよいと賞めらる丶よりも、たゞ一言『美人である』といはる丶のを最上の光榮と思つて居る連中は、寧ろ哀れむべきである、多くの失敗は、これから來る。

▲美人といふものは、兎角自惚勝なもので、鏡に對つても、世間の噂によつても、容姿の美といふことを唯一の武器と恃んで居る、此の漫心が抑も間違ひの原因となるのである。

▲美人の運命は、幸福でなければ、即ち薄命、薄命でなければ、則ち幸福で、ツマリその中間に居つて普通な生活を遂げるものは少ない。

▲故に人生美人と生る丶のは、幸か不幸か、恐らく結局不幸の場合が多からう。

▲美人として、世にあらはれた婦人の中には、一時は時めいても、その終りを善くしたものは、甚だ少ない、或時は幸福の山の頂きまで昇つたかと見へると、ドサと薄命の谷の底に落ちて了う。

▲尤も世に隱れたる美人で、一生を無事に過した人もあるが、其人は必ず吾が美といふことを、心中から棄て丶、普通の女らしい生活をした人である。

▲若し容姿がよくても、其の容姿を頼まず、學問があつても、學問を頼みにせず、貞淑に、静婉に、柔順に、親切に、此世に立つ女子がありとすれば、其人こそ、實に最上の婦人であつて、眞成の幸福を得らるべき道理をもつた人である。

（をはり）

米國通信

在米澁谷馬頭

▲日本婦人に關する二大事件

其一　寫眞結婚(米國移民官承認せず)

◎當國に在留せる伊木某なる者、其郷里なる小鶴と云ふ當年取つて十五歳の美人と、寫眞を以て見合をして結婚の約を定め、遙々日本から呼び寄せました小鶴が海上無事に當國に着きましたのは去る一月中の事であります。當事者たる伊木、小鶴兩人の嬉しさは他人の想像のとゞかぬ程でありましたでせう。

◎豈圖らんや、當地移民官は兩人の寫眞結婚を承認しません。即ち『寫眞結婚なんど云ふ事が有らう筈がない。必定、伊木某が移民官の目を昏まして小鶴と云ふ女を我が妻だと云ふ名のもとに上陸させていづれ其女をば醜業婦にでもする考へだらう』と云ふ移民官の意見で、伊木が小鶴を引き取る事を拒絶致しました。

◎小鶴は最愛の良人(?)にも面會出來ず、只今は婦人ホームと云ふ無宿婦人引取所に預けられまして日夜玻窓の下に涕を拭ふ事をつとめとして居ます。

◎小鶴の持つて來た旅行免狀には慥かに伊木某の妻と記載して有ますから、勿論日本政府も其結婚を許したものに相違ありません、又其兩親も其結婚を許したものに相違ありません、然らば米國移民官は其結婚を非認する理由はありません。たゞ米國では結婚するには男女相携へて教會堂に至り、僧侶の前で其結婚を誓ふか、又は裁判官の前で兩人が誓ふかしなければ、其結婚が成り立たぬこととしてありますから、伊木小鶴兩人が四千浬も遠く離れて居て結婚したと云ふ事を、移民官等はどうしても信じませんのであります。

◎結局これは權利問題ですから、伊木某は法廷へ移

民官を相手取つて訴へ出ました、其うちに目出たくをさまるであらうと思はれますが、とにかく、米國へ呼びよせる男も、米國へ渡らうとする女も其成り行きに注意すべき事件であります。

其二　白人船員の暴行
（日本婦人虎口をのがる）

◎二月十一日に日本から來着した東洋汽船會社のカプチック號の中等船客中に當州モントレー市に在留の石川平太郎氏の夫人がありました、中等船客の婦人室には石川夫人たゞ一人であつたのです。

◎カプチック號航海中に、其船員が、石川夫人の一人客であるを見込んで、いろ〳〵嫌らしい事をしむけ、果ては夜中合鍵を以て其室の戸を開き、忍び込んで、暴行を遂げんとしたる事二度までに及びました。幸に石川夫人は虎口を逃れまして船員の一人は重禁錮二ケ年(？)に處せられました。

◎石川夫人は幸に無難ではありましたもの丶、船員のしわざ、憎さも憎し、又後來渡航される他の同胞婦人のためをも慮り、上陸後ありのまゝを良人に語りました、これが只今在留日本人社會の一大問題になつて居ますのです。

◎當地日本字新聞は數欄をふさげて此事件を論じ、又日本人協議會と云ふ團體よりは汽船會社に向つて既に嚴重な談判を持ち出して居る所です、白人が婦人を尊敬すると云ふは、外面のみでありますか、但しは白人同士ならば眞實に尊敬を拂つて、他の人種の婦人ならば玩弄してもよいと考へて居ますか、どちらにしても相當の制裁を加へ、且つ自ら警戒しなければならぬと思はれます。

▲貴婦人の日本行き

其一　マクアーサー婦人
（マクアーサー少將同行）

◎マクアーサー少將は、桑港プレシデオ師團長であります。日本軍に滿洲に從ひ、戰況を視察する爲めに二月十五日の便船で、日本へむかひました。

◎マクアーサー婦人は、良人なる少將と共に、やは

り滿洲まで御でかけになるさうです。日本軍に婦人の從軍は珍らしい事でありまする、と在留日本人間のうはさです。

其二　スタンフォード夫人

（病氣保養のため）

◎スタンフォード婦人は有名なるスタンフォード大學を獨力で設立された婦人であります。此日本びいきの夫人の事蹟は、大抵の方は御存じの筈です。

◎夫人先般風邪が亢じて扁桃腺炎となつてより、大に其健康を損じ暫く療養のためとて南カリフオルニヤ州のサンノゼと云ふ所に居られました。全くよくなりました事と思つて、桑港の住宅へ此程歸つて來ました所が、桑港の寒氣と濕氣とのために又々病氣が再發しました。

◎醫師の忠告には暫く暖國に轉地療養したらよからうと云ふので、婦人は其轉地さきを、日本と決定しましたのです。

◎夫人の日本へむけて出發しましたのは、二月十五日であります、夫人の日本着の節は、此日本びいきの貴婦人客に、日本の貴婦人らが出來るだけの款待をつくすべき事を、馬頭は信じて居ます。

◎右の記事を書き終りました後に、ブルチン新聞（二月十八日）を見ましたら大々的の活字で『スタンフオード夫人は既に毒殺の災に遇はうとした所を辛うじて免れて、愈々一時も猶豫出來ずと、取いそぎ日本へ出發する事になつたのです。毒を婦人に飲ませうとした犯人は、只今探偵中でいまだ縛に就かない』と書いてあります。事實如何にや。

（記者曰く、スタンフヲード夫人は、日本來遊の途中、布哇に於て遂に毒殺されたことは、當時の新聞に見えへ居る通りです）

▲年限附の結婚

其一　コロラド州の結婚

（三ケ年の夫婦契約）

◎英人メールデイシ、ジヨージと云ふ人の發案で、コロラド州では『夫婦たるもの如何なる事情でも三

ヶ年間は離婚すべからず」と規定しました。
◎これは其地方で離婚のはげしい事を患へて、之を防がうと云ふ主意から出たものです。

其二　カンサス州の修正　（三ヶ年及び十ヶ年）

◎カンサス州の政治家はコロラド州の三ヶ年結婚を以て、非常の名案と思考し、尚ほ之に少しの修正を加へて、之を州内に實行しやうと目論で居ます。
◎其修正案は、三ヶ年の年限で、直ちに夫婦契約を解除してしまへばそれでよし、さて、其後一ヶ月なり、三ヶ年の年限を超過して、夫婦契約を履行しつづけて居るものは、其後十ヶ年間離婚を許さないと云ふ主意であります。
◎以上二ヶ條は二月十四日發行の、サンフランシスコ、コールと云ふ新聞に書いてあるのです。コール新聞はなほ之に少々の冷評を附記して居りました。

▲露國の女俳優

其一　露軍を嘲つて追放せらる

◎二月六日露都よりの電報が當地に着しました。曰くマダム、クガ Mme. Kuga と云ふ芝居の唱歌師は、正月二十二日の露都のストライキ騷動にコサック兵が、押し寄せ來る職工どもを射撃して、多數の死傷者を生じたるを諷して、之を日露開戰以來の露軍の第一の勝利と歌つたので、此の唱歌師は國外放逐の命を受けました。

其二　日本種のクロパトキン　（在桑港の露國女優の事）

◎桑港第一の劇場グランド、オペラ座に先日からマザー、グースと云ふ藝題を興行して居ます。其の役者の一人、名をエイマー孃 Miss Aymar と申しまするは露國人でありますが、非常の美人で、非常の愛國者であります。
◎孃の父は露國に於て社會黨に加つたがために、露國政府から追放されまして、其妻女を伴ひて米國に渡りましたのです、で露國政府とは全く敵であります。孃も其ために露國政府を非常に憎んで居ます。

◎併し孃の父子とも露國政府には敵であるけれども露國と云ふわ[illegible]本國には非常に深い愛國心を持つて居まして、常に本國の事を心にかけて心配して居ます。そして日本に對して惡感情を持つて居ます。

◎一兩日前に面白ひ、併しながら眞實な出來事がありました。或顧客の筋から、孃の許へ贈物がありました。それは誠に可愛らしい狆でありました。しかも日本種の狆でありました。孃は大さう嬉しがつて之を抱きあげて、クロパトキンと名をつけて可愛がつて居ました。

◎あとで、其狆が日本種だと云ふ事がわかりましたので、孃、俄に機嫌を損じ日本狆は傍にも置きたくないと云つて早速之を劇場の戸締りの者へ與へてしまひました。これは二月十五日の話です。

▲慈善演藝會

其一　日米兩國婦人の會
（日本赤十字社義損金募集のため）

二月十八日桑港アランブラ座に於て米國貴婦人十數名、日本貴婦人二三名の合併演藝會があると云ふので、出かけました。貴婦人等はたゞ發起したゞけで、舞臺へ出て出演するどころか、挨拶に顏出しもしなかつたのです。在留日本藝者の手踊數番、難有くもなく拜見イヤ見物致してかへりました。併し當夜の純益金三百幾十弗ばかりありましたのを、日本赤十字社へ早速送附する事になりましたのは何より結構。

其二　女學生の日本芝居
（病院設立費募集のため）

二月廿四日オークランドの某座で、州立大學の女學生及び教授の一二人出席して、日本のキモノを着て日本芝居をすると廣告に見えます。そして其役割をきゝまするに、ミカドになりますのは教授タブルユー、マッギー氏、ピーバになりますのがメアーデイシユ孃、プーバになるのがスターン女史、其他最も聲のよい女學生六十人打揃つて登壇して大々的のコーラスをしますと、一風變つた見ものでありませ

うと思ひます。

▲米國婦人の服裝

其一　女子大學生の帽子（脫帽に決す）

◎カリフォルニヤ州立大學に於て女學生は其の敎場及び校庭にある時、帽を脫いで居る事にきまりました。之は敎授センガー氏の意見で決定しました一大果斷であります。

◎元來米國婦人は學校の敎場は勿論、寺院の禮拜堂の中でも、大きな帽子をかぶつて、決してぬがないのが、習慣であります。（但し芝居見物の時だけはうしろの人の邪魔になりますから、ぬぎます）

其二　牝雞のあるきぶり

（長い袴をひきずつて）

◎華盛頓府なる敎授メーソン氏曰く女子の身體は走るために造られて居ない。尙ほ曰く女子の歩くやうすは女神の玉歩を運ばせ給ふやうだ。最後に曰く女子が長い袴を引きづりわげていそぐ時は、牝雞の走るにさも似たりだ。

◎オレゴニヤン新聞は之を評して曰く、メーソン敎授の說は一應御尤である、しかし女子の競爭を見よ一少女十一秒時間に一百ヤードを走つたと繪入雜誌に見える實に活潑なものではないかと。

◎馬頭曰く前のメーソン敎授は、年頃以上の婦人が長いスカーツを引きずつて容態ぶつてあるくを、體育上から割出した意見で嘲けつたのです、後のオレゴニヤン新聞は短袴女學生の態度を見て感じたのであります。米國婦人は歩く時に妙に身體をふりますのが可笑しくあります。しかし小娘の時の活潑は如何にも感心です。日本の女學生が袴を長くして、地を掃きつゝ不活潑に歩く如きやうすは米國女學生には見出されません。

雜件

◎妻を撰むならば　ドロシープエニモールと云ふ者コール新聞に投書して曰く「妻を撰むならば髮よりも目よりも鼻よりも、まづ第一に口もとを見るがよい。口もとのよしあしによつて女の全體のよしあし

がきまる」と

◎婚姻の効力　死人を活かす――桑港ゴールデンゲート町二八一六番地住エンマ、シユリッチ孃、病んで死に瀕し、最早天國へ引導を渡すまでになりました、然るにウオルター、ブライトと云ふ男、かねて夫婦にならうと約束して置きましたので、今はのきはに、せめてもの安慰を與へてやらうと云ふ考へで結婚の式を擧げたいと、病人に申し聞けて、やがて法の如くリッチモンド、ラザラン教會の牧師、及び其他證人等立ち合つて式を擧げました、此時から病人の元氣が俄かに興奮して、並み居る人々は却つて今や縡きれるだらうと心配しましたのが、時を經るまゝに次第に病勢が輕くなつて來まして、一二日過ぎてからは、最早死ぬきづかひのない迄になりました。

◎女生を級長に撰む　バークレー大學の初年級ではこの一月に級長を生徒同士に投票しました時に、ミス、シユー、エ、ラッスと云ふ女生が當撰しまして

女生のがはに拍手盛んに起り、男生また之に和しました。大學教室內の光景件の如し。

◎老夫婦の離婚　夫は九十歲名をヘンリー、ジヨーン、婦は八十歲名をスーサン、ジヨーンと云ふ。オマハと云ふ所に住む。二年前に結婚しましたものです。最初の三ケ月は幸福に過しましたけれども以來波風はこの高砂の翁媼の枕邊に立ちさわぎ、もとの他人に立ちかへるやうにと、媼は裁判所へ出頭して判決を乞ひましたのは近頃の話でありました。

◎交際場裡の花一旦悟つて前垂かけて働く　シカゴ市で交際の女王と呼ばれた、紐育でも、遠くは巴里でも知らぬ者ないと云ふチヤット、フイルド、テーラー婦人は大に悟る所あり、シカゴ市ヴアンバーレン街に店を開き、製本屋を始めまして、毎日前垂をかけて働いて居ます、これが米國婦人イヤ一般婦人の本領と云ふべきでありませう。

◎馬頭は近い內に、米國を去つて、歐羅巴大陸に渡り、先づ佛國に參る積りです。



蛇籠

江見水蔭

一

田舎路では能く有る事で、たとへば向ふに目的の村が見えて居る。それへ行かうとして二股道の分岐點に立つ。右せんか、左せんか此所で餘程巧く先きから先きを考へぬと、一歩が千里の、飛んでも無い處へ出て、いや、それが京都式の町なら、曲り損つても餘り多くの足數を無駄に爲ずに濟むけれど、田舎では大變である。

自分は、武藏野に道は數々あるなれど、悉くそれを心得て居るつもりであつて、それでも逃水の昔に迷はされ、今でも時々間違つて、方角違ひの村へ出る事が度々である。

未だ梅の散らぬ頃であつた、霜解路を又踏迷つて、下野毛村の玉川端へ出て了つた。

それが最う正午頃であつたから、幸ひ後の土手で北風は防ぐし、蛇籠の上は日當りは好し、此所で玉川の水を掬つて飲んで、握米飯でも食べやうと、枯葦を折敷しくと、向ふの蛇籠にも一人。

最う此人は握米飯を食つて了つたので、竹皮を捨て、巻煙草喫うて居る處であつた。

不思議な位此人には、幾度となくめぐり合ふので、羽根田でも、川崎でも、矢口の渡でも、鵜の木の光明寺でも、嶺の薬師でも、馬籠でも、大塚でも、それから蛇窪でも。

自分は日曜日毎に郊外へ出るが、其時には屹と此人にめぐり合ふのである。最う一年の餘になるが、月に一二度は屹と顔を合せる。後から來るとか、先きへ行くとか、すれ違ふとか、けれども未だ一度も口を利いた事は無かつたのだ。

年齢は二十四五だろふ。軟かな髪の、あまり濃くないのを長くして、綺麗に眞中から分けて、顔は艶の無い白さで、眉毛は地蔵形で、眼端は一皮で、少し窪んで、眼球が何處やらに曇りのあるやうなので頬のこけた、唇の常に乾いたやうな、鼻は隆いけれど、小鼻の落ちた、それから喉骨の出た、肩の垂れた、背丈は餘り高くない、痩せた人。文化文政度には色男と云つたかも知れぬが、明治では餘り歡迎されぬ男ぶりであるのだ。

自分の近郊を歩くのは、武藏野の名所古蹟を調べて、一冊の書を著はさうといふ、歴史と地理との研究からであるが、痩せた人のは、何んの爲だか、自分には如何しても分らないので。寫眞、でも無い。寫生、でも無い。採集、でも無い。獵でも、釣でも、勿論無い。何者が何の目的だか更に要領を得ぬのであつた

今日は斯う落合つたのであるから、一番問うて見たいものだと思つて。

「やア最う御辨當は濟みましたかな」

と聲を掛けた。

痩せた人は、困つたやうな、迷惑なやうな、恐怖を抱いたやうな態度で以て。

「はい……」

それだけ答へた。

「能く貴郎とは出合ひますが……」

「失禮します……毎度お目に掛るのですが……」

「つひ、期會を得ませんでしたな

「私は、能く貴郎を知つて居ますよ……」

と瘠せた人は云つた。

「えツ、私を……」

驚かざるを得ない。

「はい、知つて居ます。武藏史料編纂に從事爲さつて居るのでせう。樋戸流花さんでせう」

無口であるべく見えて居る人は、更に多く語るのであつた。

「お宅は芝の二本榎でせう。能く私は知つて居ます。しかし、貴郎が私に言葉をお掛け下さるとは思ひませんでした。はい、全く知りませんでした。私は如何も意外に感じまするので……」

向ふでも此方を意外に思つて居る、これは道理で、人見の惡く、喧嘩面をして居る身分であるから、此人に限らず、常に他から惡感情を抱かれて居るので、味方とすべき人も親しみ得ず、心にもない人に敵を作るといふ損な性分。

向ふの人も交際は下手らしい。進んで友を求めるといふ事の出來ないらしい、顏の表情は意志を現はすに拙く、或る場合では、反對の現象を得る事があるらしい。されば曩に、此方から言葉を掛けた時に、困つ

たやうな、迷惑なやうな、恐怖を抱いたやうな顔をしたのも、眞から然うなのでは無かつたのであらう。東京の中央で、何百度、其人と顔を見合したからとて、深い記臆を印する事は迚も無いが、人の行來の少ない田舎では、一二度すれ違つても、最う其人と懇意であるかの樣な氣持がするもの。若し、お互ひに、偏屈でなかつたら、最う餘程の以前に懇親を結んで居たかも知れぬので。

「如何して貴郞は、私の名を知つて居ますか」

これ、自分の問であつた。

二

瘠た人は、卷煙草を吸はずには居られぬと見えて、少時自分に返詞を呉れなかつたが、やうやく。

「あの、御近所です。私は、能く貴郞の事を知つて居ます」

と云つて、又卷煙草。

「然うですか、どちらですか、御近所では承はれば分ります。どの御家ですか」

と自分は又問うた。

「いえ……申しますまい、それアちと何んです、申し難いので……」

斯う云つて、下を向いて、最う吸切つた卷煙草、手が遊んで居るので、蛇籠の中の小石を、指の先で引出さうと試みながら。

「私は名乘りますまい……失禮でせうけれど、それは困りますから……野毛でお話をしかけたのですから、野毛でよろしい。玉川の端ですから、玉雄とでも、まア……」

「ぢやア私が貴郞に話し掛けたのが、矢張失禮でした……やア、御交際をお好みなさらない樣ですから

……」

と自分は云つた。いや別に酷く腹を立て云つた譯では無いのだけれど、例の態度と語氣、向ふでは心配して。

「貴郎、如何か感情を害さないで下さい。私は是非貴郎と御交際を願ひたいので……私は貴郎に随行して歩きたく思つて居ましたので……」

如何しても蛇籠から小石が出ない。

「貴郎のお歩きなさるのは、目的がお有りなさるのでせう……私のは目的も何も無いのです……貴郎と私は郊外を歩く時だけ、お友達に爲つて居て、東京では、いくら御近所でも、知らない顔で居たいので……」

奥齒に物が挾まつて居る如く、氣になるかして、蛇籠から小石を引出さうと勉めても、如何しても出ない。

「……といふと何んだか譯の分らない事を云ふ樣ですが……私は、それア實に淋しくッて、何んだか始終心細くッて、友達が一人でも多い方が好いのですけれど、全く今の處では、一人の友も無いのです。友を作る事が――或る事情で――出來ないのでして……ですから、唯一人で、斯うして近郊をぶら〳〵目的無しに歩いて居るのですが……その遠足先きで、内所に友達を作るといふ事は、知れると惡いのですが、私は是非然う願ひたいのです。ねえ、樋戸さん、其代り私は貴郎の從僕代りにもなりませう、持物があるなら、持つて上げませう……」

頗る要領を得ぬのである。郊外だけの友、東京では知らぬ顔。譯の分らぬ話ではある。何等かの秘密なからずと云ふ事無し。

「ですが……」
「ですが……と云は無いで下さい、是非お友達に……で、有りませんと、貴郎位、極適當な友を、如何して他に得られませう。毎週必らず近郊を遠足なさる、然ういふ人が澤山有りませうか。有りませんですな。それア決して有りませんですな」
「然うまでに云つて下さるなら、私は嬉しいですが……しかし、然うなると、何か貴郎は秘密があると云はなければならんですなア」
いや、遠慮なく私は云ひますが、秘密があると云はなければならんですなア」
「それア有ります」
と云つて彼の人は、新に卷煙草を出した。
「その秘密をですなア」
「はい……」
「それを私は知りたいです」
「えッ」
驚いたので、折角摺つた燐寸の火を消した。
「友でせう、一種特別の友となるのでせう。それが、ですなア、東京では知らぬ顏で過さうといふ、その何等かの秘密を知るといふのは、當然では有りますまいか」
困つたやうな、迷惑なやうな、恐怖を抱いたやうな顏で。
「然うですな」
と彼の人は云つた。

斯う強く此方から出ると、最早や彼の人は、それを打開けずには居られぬといふ性質であらう。

「云ひませう……え丶、秘密を……」

巻煙草に火は點じられた。慌しく、一息吸うて。

「ですが、秘密です。貴郎だけにして……それから、又、此方からお願ひ申した通りに、ねえ、何分野外の友といふ事を。宜しいですか」

瘠せた人の假名、野毛玉雄は斯う云つた。

三

「私は秘密を洩らしません、有る事です。誰にでも大概秘密は着いてますからな」

自分が斯う云つてる間は、唯茫として居た玉雄の、彼の語る番と爲つてから、急に又巻煙草を吸出して、其半灰になるまで無言であつたが、辛うじて。

「貴郎は古蹟をお探りですな」

と前置して。

「ですが、これはお知りなさるまい、私に取つて忘れる事の出來ない古蹟――はい、自分だけの古蹟があります。それは此所なんです」

「此所が貴郎の古蹟？」

「新田義興が死んだのは、矢口ですねえ。それが古蹟に爲つて居ませう。名も無い野毛武雄が精神上で死んだ場所、誰も知らないで濟みませうが……」

巻煙草の灰を蛇籠の上で拂つて。

『私の親父は、唯今では最う老年で、何もして居りませんが、私が五歳の時には、外國の公使でして、日本に居る事は極稀で、多くは母と一所に外國に參つて居りました。私は病身でしたから外國へは行かず、祖父祖母の隱居所に、保母が附いて、あづけられて居ました。はい、その隱居所は此村であつたのです、後の岡の上に有つたのですが』と後の方を卷煙草の先で示して。



「保姆の名は阿安と云ふのでして、其時が二十一でした。私をどんなに可愛がつて呉れたか知れないので……私は兩親が居なくつても、何んとも有りませんでした。祖父や祖母に叱かれても、阿安にさへ離れなければ、好かつたのでした。始終私は阿安に抱かれて寢て居たのです」

それから吸ひさしの卷煙草を、根下近くまで燻らして。

「子供心に此所がですなア、此所が大好きでして、どんなに泣いて居ても、此所へさへ連れて來れば、泣止むのでしてね、祖父や祖母は、子供が川の端へ行くのは危いと云つて、留めたのでしたが、坊つちやま一人でならお危いでせうが、どんな事が有つても、妾は、お側を離れる事が有りませんから、何んの危い事が有りませうと云つて、能く連れて來て呉れましたよ。しかし、私が好きだから、保姆は連れて來て呉れたので、阿安自身は決して好きでは有りませなんだ。何んて淋しい處がお好きなんでせう、奇態なお子だなんて、時には愚痴をこぼしたのでした。けれども、私は如何しても此所へ來なければならなかつたので、保姆と一所に來て、蛇籠の上から小石を川の中へ投入れては、それが面白いと云ふので喜んで居ました。草花や木の葉を水に流しては、それが面白いと云つて喜んで居ました」

斯う云つた彼は、吸殼を川の中へ投込んで捨てた。

「それからです、能く私は記憶して居るのでして、春の事です、麥が靑く、それから菜の花が綺麗に綺麗に咲揃つて居た頃でした、例の通り、私は保姆をせがんだのでして、今日は何んだか厭ですから、他へ行きませうといふのを、私は聽かないで、泣いて脅かしたりして、此所へ連れられて來たのでした。それ、土手から此所まで、今でも麥畑です。彼所のは菜です。あれが今に黃金色の花で咲揃ひます。それ、彼所に饅頭形の地ぶくれが有りませう。椿の木が有りませう。あの下まで二人で來ました。其日は

上天氣で、暖かで、川面がぎら〳〵して見えて、睡いやうな氣がするのです。保姆は私に向つて（睡たかァ有りませんか）と云ふたのです。私は（あゝ、睡たいねえ）と云つたのでした。（それなら椿の木の下で、少し横になつて行きませう。草が軟かで、丸で鳥の毛を入れた御布團のやうですから、心持が好いのですよ）と云つて、先きへ身を横にしました。私は其帶のあたりに纏はるやうに、身を倚せて、落ちて居た椿の花を拾つて、花瓣をむくり取つて、其中の心を出して、黄い粉を拂落して、それから蘂の中の甘い露を吸つたり、何かして居ると、虻が飛んで來たので、吃驚して、阿安も私も起上つたのでした」

玉雄の手は卷煙草を放すと、極つて又籠の中の小石を拔取らうと試みるのである。しかし、如何しても出ない。

「虻が他へ行つて了うと、今度は蝶が舞つて來て、蝶までが睡たさうに保姆の肩に泊らうとしたが、私が取らうとしたので、ぎら〳〵と舞上つて逃げたのです。菜の花の方へ。此所にもぎら〳〵した形の無い物が動くやうに見えるのです。陽炎なんですね。私は其ぎら〳〵の中へ飛込んだのです。菜の花は丈が高い、私が隱れて、蝶だけが上を逃げるのです。私の白い胸當に、菜の花の紛がペッたり附いて、色が變つた位で……」

胸に卷煙草の灰の附いて居るのを、爪の先で彈き落して。

「蝶は澤山居ました。皆私が行くと逃げるのでして、追へば追ふ程蝶の數が多いのです。いつの間にやら、私は麥畑へ出たのでしたが、氣が着いて椿の方を振向いて見ると、保姆は又横に寢て居ました。陽炎が阿安の髮の上から立つて居ました」

と言つて、溜息を吐いて。

『此所で止して、私は元の處へ還れば好かッたのでしたが……麥畑から土手へ出たのです。蝶は最う居ませんで、其所には土筆が澤山々々、並んで生えて居ましたから、直ぐと、それに氣が變つて、二本三本と取つて居ますと、ひよいと土筆を引拔く樣に、私を抱上げて、土手の上へ連れて行つた者があるのです』

又新しい卷煙草を紙袋の中から取出して。

『驚きましたね、天狗に攫はれたかと思ひましたよ。赤い顏の、鼻の大きい、五十餘歳の男です。白髪まじりの伊賀栗頭でして、松皮のやうに痘痕が出來て居まして、口の曲つた、眼尻の下つた、厭な奴でして、息は酒臭いのでして、身體全部が生臭いのでした。それに後から抱かれたのですから、私は恐しくッて、泣出さうかと思つたのです。すると、其男は、突然、大きな／＼、私の顏を覆うて餘りある掌で、口を閉いで、それから、汚ない汚ない手拭で、猿轡といふのを嵌めて……三尺帶で私は後手に縛られました』

茲に於て、自分は問はざるを得なく爲つた。

『それア何者です。其男は何者です』

玉雄は燐寸を摺つて、卷煙草に吸付けて。

『それは何んです、田舍廻りの魚屋です。大森から玉川端を廻りに來る、腐れ魚屋といふのでして、知らない顏では無いのです。甚五郎といふ名です』

『如何しました、そ、それから……』

自分は午食を忘れて、聞いて居るのに、玉雄は悠長にも、又してもパッ、パッ。溜息と一所に烟を吐いて。

『甚五郎は片手に私を抱へて、片手にピカ〳〵光る出刃庖丁を持つて、のッさ〳〵と土手を降りて、麥畑の麥を踏倒して、桒の花を散らして、椿の木の下まで來ました。保姆はそれを知らずに寢て居るのです。如何か早く眼を覺して呉れば好いと思つても、いけないのです。熟く睡つて居るのです。私は聲を立てやうにも、如何しやうにも、身動きさへ出來ないのです。甚五郎は阿安の顏を見て、にや〳〵と笑つたのです。此時椿の花が一ッ落ちたので、それが阿安の顏にでも當つて呉れたら、好かッたのでせうが、其脇へ反れました。此物音で眼を覺して呉れば好いと思つたのでしたが、駄目でした』

玉雄は吸さしを、小石の間に挾んで、火を消して。

『甚五郎は、それから又、私を抱へて、阿安の寢て居る處を去つて、此所です、此所へ來たのです。此邊の蛇籠の上へ乘つて、大きな手で水を掬つて、何度にも〳〵水を呑みました。宛如大蛇が酒を吸ふやうでした』

（以下次號）



詞苑

従二位黒田清綱先生撰

（代撰菊池武則先生）

夜聴蛙

天

東京市麻布區永坂町一番地　加藤数子

おぼろ夜も雨にやならんそこはかと
まくらにちかく蛙なくなり

地

赤坂青山南町七丁目二　森千里子

春雨のふる田の畔をよる行けは
こゑふむはかりかはつなくなり

人

東京市赤坂區北町四ノ一〇三　松本くすゑ子

いせきにもとまらぬ春を惜みてや
井出のにかはづのよたゝなくらん

豊多摩　駒澤さだ子

ねやの戸を明れは匂ふおぼろ夜の月おもしろくかはづ鳴くなり
麻布　林艶子

小夜ふけて文かく手さへたゆたひぬ窓の邊近くなけるかはつに
肥後　徳永茂森子

山吹の花にこゑあるここちしてにはのしみつにかはつなくなり
埼玉　横田須磨子

夜もすからかはつの聲も聞なれていまは夢にもさはらさりけり
麻布　平山あゐ子

小山田のかわつの聲はきゝなれてゆめもしつかに結ふ夜半かな
秋田　古瀬惟子

かしましきをたのかはつの聲さへもひとりきくよは靜なりけり
秋田　古瀬惟子

夜半になく聲はひとしほ哀れなりみこもり蛙のこゑにやはある
米澤　木村旬子

さよふけて人を待みのわびしさをなくさめ顔にかはつなくなり
秋田　細矢はる子

夕月のかけもうつらふ谷かはのみなそこきよくかはつなくなり
肥後　板坂惟子

夜はふけてあたりさひしくなるからにいよ〳〵さへぬ蛙なく聲
日向　岸上はる子

ふる雨はやみしとおもふさよながにまたひとしきり蛙なくなり　三河　榊原てる子

やま下の小田のかはづは百千鳥ねくらにいりし夜半ぞきくべき　薩摩　松原みれ子

よもすがらかはづなく音に見ん夢も結ぼかれたるたびまくら哉　日本橋　小林好子

かはづなく伏屋にひと夜かりたれば枕ゆるさず寐られざりけり　埼玉　横田秋子

かすみそひくもれる春のつきかげに蛙のうたをよたゝきくかな　小石川　青木たつ子

夜ばの雨すずしくはるゝ池殿にこゑすみわたりかはづなくなり　肥後　佐々小琴子

小夜ふけてあれにし庭のふる池にすだくかはづの聲をきくかな　下野　細野喜美子

おぼろよにあぜの細みちわけゆけば聲ふむばかりかはづ鳴なり　秋田　古瀬りく子

つきすみて蛙うたへる夜半ながらおもひぞまさるますら武夫を　陸前　前田河みさを子

折り〳〵はすだくかはづの聲やみて雨夜さびしき小山田の里　埼玉　横田やな子

すみわたる月にこゑしてなく蛙こゑすだくまに夜ぞあけにける　陸前　前田河千年子

おのがちゝかはづなくなり庭面の池のみぎはぞにぎわひにけり　神田　山田靜子

小夜ふけてなかれしつけき里川にすみても陶ゆかはづ鳴くこゑ　愛媛　藤子

くれ〴〵ゆく春うらみてが此ゆふべ庭のふる井にかはづなくなり　神田　山田婦美子

物おもふ枕べちかきせゝらぎに夜たゞかはづのなくぞうたてき　和泉　中江なほ子

おぼろ月かすみてうつるさわ水に聲かしましくかはづなくなり　大和　栗山高子

小夜ふけてうのはなくだしふるあめに小田に蛙の怒しきるなり　大和　栗山俊子

水のせし門田や月になくかはづきくもゆたがのくさのゐほかな　埼玉　澤田房子

夕立の雨はあとなくはるゝ夜のかはとさやかにかはづなくなり　肥後　佐々有鄰子

さとの子がくさ留きゝつ聲あらう池にのとけくかはづなくなり　茨城　初澤さく子

おぼろよに小田の細道たどりつゝまた世になれぬかはづ聞かな　岐阜　中島もと子

はるの夜の月にあこがれ我居ればかどの千町田かはづなくなり　伊賀　佐々木まさ子

里人の知るや知らずや夜ぞ更けて蚊火屋が下にかはづ鳴くなり　神戸　今西みさを子

人なればおなしおもひのはらからやしつみがちなる夜の蛙かな　神戸　海乃潮子

小夜ふかみ狹山が池のもろ聲は行く春惜しむかはづなりけり　神戸　今西みさを子

さくらちる庭のいけ水しづかにてかはづなくなり夕つきのかげ　京橋區　高橋珍子

小雨ふる景色なるらんさよふけてやなぎの枝にかわづなくなり　兵庫　山内初枝子

月きよく苗代小田にかけをちてふけゆく夜半にかわづなくなり　備後　高坂たゞ子

我庭の石井のそこにこゑたてゝかはづなくなれもさやかなりけり　肥後　徳永廣子

夜もすからさわく蛙のこゑやみて靜かにねむるゆめのかよひし　越後 高坂つちえ子

しつかにもかすみ渡せるよさくらの花下かはにかはつなくなり　肥前 藤松りか子

わかやとの庭の井筒の夕まくれつまよふかはつあはれなるかな　肥後 德永而行子

ひとりねのとこの山田の春の夜はすたくかはつの聲のみそきく　福岡 三原須那子

花くもり月はおほろの春の夜にこゑはかすまてなくかはつかな　肥後 千知波楢子

おもふことやすくふしたるよはすらも庭の蛙にねられさりけり　小石川 新井ちよ子

かやり火もいつしか消えてひろの原蛙なく音もいとゝさひしき　越後 山田なみ子

たゝ一人なかむる庭にこゝ地よくかはつなきけり五月雨のあさ　神奈川 菊子

淋きゝよき庭の澤邊に聲たてゝかはつもはるのくれおしむら舞　尾道 片山松子

なくかはつ路のしるへとたとる身は庭のつきもなにゝかはせむ　麻布 林環子

庭ふるひ破れしやまてら小夜更けて五月雨ほそくかはつなくなり　能登 池野いさみ子

いとゝしく過しむかしそ忍はるれ外もの小田にかはすなく夜は　北見 中川伊代子

かしましくなくやかはつのもろ聲にむすひかれたる春のよの夢　津 神田みよし子

わか宿のにはのやなきのかけくらき夕へを時とかはつなくかな　群馬 飯田かつの子

東京 強田園子

さよ更て小田のかはつの聲きけは物おもはさる身も哀しられて　名古屋 若原みち子

おのつからちる花影もかつみえて小田の行夜にかはつなくなり　津市 茨木美壽子

かはつなく聲もあはれに聞えけり月とはなとのかすむところは　大阪 山本伊勢子

月さへて霞かける庭のたえなるに雨をよほふかかはつなくなり　下谷 岡田柳子

おほろ夜の月なつかしみ下りたてはいけの蛙のこゑしきるなり　三河 永井さい子

咲はなのかけこそみえぬよし野川よるそかつのこゑはさやけき　松山 上原のふ子

春雨はしつかなる夜もふりはへて聲かしましくなくかはつかな　山口 村上操子

さよふけて聲かしましく鳴くかはつ晝はさはかり聞えさりしを　松山 田村多豆子

月かけはおほろにかすむ春の夜に聲さやけくもなくかはつかな　愛媛 梯京子

雨ちかくかすみはてたる春の夜になくやかはつの聲のさやけさ　麹町 石川薫子

苗しろの水やこふらむきのふけふ庭のまかきにあまかへるなく　岩代 菅野和子

夜ひとよ思へとならぬわか詩をあさける如くかはつなくなり　神奈川 森田はな子

ちかきを田の蛙のこゑに國のうちこゝろすみゆく春のよはかな　大阪 船越小仙子

こさめふるよはにかはつのこゑ／＼は春の別れる惜みてや啼く　京橋 高橋翠子

なきしきる蛙のこゑを友として更くるも知らすふみを見るかな

京橋 渡邊初子
つき山のさくらちりこむ池みつに月もかすみてかはつなくなり

京橋 渡邊名加子
みめぐりの神にさゝけしともしびの影さすをたに蛙になくなり

愛媛 梯 武子
なきしきる池のかはつのもろ聲に老はよすからねられさりけり

福岡 小島まき子
夕づきのかげおもしろき千町田にかはつのなくれかしましき哉

東京 まつ子
南風ぬるく吹くよののとけさになくやかはつのあまたきこゆる

但馬 田尻保代子
つれ〳〵とふるはる雨のよはふけてかとたのおもに蛙なくなり

東京 竹内みつ子
人すまてあれにし庭の池みつになるはさひしくかはつなくなり

筍

天

東京市麻布區永坂町一番地 平山莖子
生いてしうふきぬなから千代しめて筍はかりめてたきはなし

地

岐阜縣稻葉郡北長森村 中島もと子
となりより垣ねくゝりてわか宿のものともなりぬ庭のたけの子

人

東京市赤坂區青山南町七丁目二番地 森千里子
ちりつもる花のしら雪ふみわけて

おもはすゑたる庭のたけの子

秋田 細矢はる子
ゆみやともつゑともなりて行末はいさをゝたてん庭のたけのこ

奈良 天野照子
朝な〳〵のひまさりゆく竹のこにちよをもふへき姿た見えつゝ

瀧の川 松本まつ子
生そめてまたうら若き竹の子に直くなるふしのはや見えにけり

松山 梯 武子
おや竹のもとに生ひたる竹の子は千代の初めのすかたなりけり

福岡 小島まさ子
我かとの垣根をこえてたけのこは思はぬかたにおひいてにけり

三河 永井さい子
生立のすくよかなるにおのつからこもれる千代のみゆる竹の子

肥後 千知波橋子
竹の子は日毎にのひてうるはしき親にまされるふしそみえける

薩摩 松原みれ子
しらぬまに垣より高くなりにけりそうひかくれの庭のたけの子

京橋 高橋珍子
ゆくすゑは弓矢となりて君かためみくにまもれや庭のたけのこ

和泉 中江なほ子
おひ出て日數もたらぬ竹の子のみしかきふしに千代はこもれり

神田 山田節子
竹の子もなほき心のあらはれて曲かれるふしのなきそうれしき

赤坂 松本くすゑ子
朝な〳〵まとにかすそう竹の子のおひしけりゆく影そゆかしき

靜岡 竹内みつ子
夏のよはみしかけれとも竹の子のふしはなかくも延たちにけり

津市 神田みよし子

ほりとるもをしきものから賓客にいさすゝめてん庭のたけのこ
米澤市　木村旬子

たけの子の千代の齢も保つらん根を絶ちしこそいとしかりけれ
日向　岸上はる子

待ちわひしその筍生ひたちてゆふけのしろとなるそうれしき
三河　榊原てる子

知らすまた來てはよみけりうれしくもかす生ひ出し庭の竹のこ
日本橋　小林好子

親竹はすくなるまゝに生ひいてし二葉にしろく千よもさかえ舞
陸前　前田河千年子

あさことに園の竹の子なかめつゝきみか御杖にやかてきらまし
埼玉　横田秋子

たけの子の若き心もいつしかもうきふししげくおひのひにけり
埼玉　横田須磨子

竹の子とふゐゑまにいつか枝さして葉わけに風のやとりぬるかな
秋田　古瀬惟子

花ふゝきこゝろいためてみる中におもはすえたる庭のたけのこ
小石川　青木たま子

むく〳〵とおひいてにける竹の子の行末みえていさましきかな
下野　細野喜美子

生ひ出てまた日かすへぬ竹の子のはや幾ふしかのひにけるかな
秋田　古瀬りく子

もしなかく筆のさやともなりぬへし末たのもしき庭のたけのこ
埼玉　横田やな子

賤の男にほりのこされて竹の子のみつゑさすまて成にけるかな
陸前　前田河みさを子

誰かためにそのの竹むらたつれつゝえたるなるらん此竹の子を
愛媛　蕪　子

この夏はすゝしかるらん宿ちかく生ひそひにけり裏のたけのこ
神田　山田錦美子

ゆく末は杖ともなりて世の人をすくふもうれし庭のたけの子
大和　栗山高子

千代ふへき影はみえけりすなほなるふしかされたる園の竹の子
麻布　林艶子

ほりあけていさやとなりに送らなむ垣根をこえておひし竹の子
麻布　林環子

くらへたし園のたけの子肩すきぬ人にめくみのつゆうすくして
大和　栗山俊子

けさみれは垣をへたてゝ我そのにとなりよりきて生ふる竹のこ
茨城　初澤志津子

から國にほことり給ふあにきみか好みし筍は生ひそたちけり
伊賀　佐々木まさ子

垣根をは越えて生ひ出したけのこの一よ二よとのひまさりけり
兵庫　山内初峰子

いとけなき姿なからにたけの子の直なるさまそあらはれにける
肥後　徳永成子

人の身のよのうきふしもかゝれかし親にまさりて生るたけの子
肥前　藤松りか子

ひんかしの宮のそのふの竹の子は千代に八千代に榮えゆくらん
福岡　三原須那子

ふしのまにひとよふたよと生出てゝ千代のかけそふ園の竹の子
麹町　西野つれ子

うのはなの香たばからむとなり立ちて垣根に行けは竹子の出つ
肥後　徳永萬壽子

たけのこは親の千とせをよろつよと色うるはしく生いてにけり
小石川　新井ちよ子

わつかにも土をぬけたる竹のこのそらつく末もある世なりけり
長野　小枝子

わか葉もひと日／＼にのひまさる竹の子のことなれやとれかふ
尾ノ道 片山松子

ことしおひの園の竹の子色そひて千代の操の見えそめにけり
福井 牧かれ子

昨日かも見えそめにけるたけのこのこのえた生るまて早なりにけり
京都 森本秀子

ちる花にかわりて出るたけの子の人もたのめるにひろまてにや
伊豫 高橋茂子

親たけを遠くはなれて生ひいてぬ千代のかけさふその〻竹の子
本郷 小坂操子

はな散りてのちのいへゐはいふせきにうきふしもなく生ふる筍
松山 上原めふ子

わか庭にはしめて生したけの子はほらてちとせの節や見てまし
山口 村上操子

いさ子とも園のたけの子ほりて來よちゝのこよひのみ肴にせむ
松山 山田村多豆子

みな人のころもを更るときとてや園のたけのこかはをぬくらむ
麹町 石川蘭子

ことし生の千代のはしめの若竹ゆ親にもまして生ひたてとのみ
岩代 菅野和子

よもすからのとかにそゝく春雨に背戸の竹のこかすまさりけり
神奈川 森田はな子

おひいてし園の竹の子すくすくと垣こゆるまてたちのひてけり
大坂 船越小仙子

たかんなはうるはしき名を歌はれぬ親にやさしき人に似られて
京橋 高橋翠子

花ちるとうらみし雨にけさはまた庭のたけのこ見ゆるそうれしき
京橋 渡邊初子

起いてゝまつみる庭のやふかけにもえいてにけり竹のみとりこ

投稿定規

一女子は何人にても投稿する事を得
一用紙は文章及新體詩は半紙、和歌今様は半紙半裁又は端書を用ふべし
一題異なるものは必ず用紙を別にし、二葉に渉るものは必ず紙捻にて綴り置くべし
一題目の下には必ず住所姓名を明記すべし
一文字は必ず楷書にて句讀點を施し鮮明に認むべし
一文章は一行十五字詰にて兼題ものは四十行以内短文は二十行以内に限る新體詩も亦廿句以内の事
一兼題文章及短文今様新體詩等總て一人一篇づゝに限る
一兼題和歌は一題に付一人一首、短歌は一人二首に限る、但上下句中二音の漢字三字を入れ他は悉く平假名にて認むべし
一投稿宛名國光社女鑑編輯局とすべし
一投稿〆切期日は雜誌發行の廿日前即毎回前月十日迄とす
一〆切期日に後れたる兼題は總て其撰に入れず但短文短歌今様新體詩は次號に掲載すべし
一右の規定に違ひたるものは總て採用せず
一兼題當撰者には文は天一圓、地五十錢、人三十圓、歌は其半數に當る計算を以て代價相當の書籍を呈す

華族女學校教授井上頼國先生撰

落花を惜みて

地

大阪市南區東美須町二丁目六六三番屋敷　船越小仙子

ふみ讀む窓に近き庭の櫻の二本、去年のことなりけり、戯れにその幹の太くして花の八重なるを淸少納言枝ぶり優にやさしく花また一重なるを紫式部となん名づけたる、されば今年の春もはや闌になりゆきて軒のふる巣に燕を迎え、朧の月に雁を見送りてより、花はいつまでも盛ならず、あはれ色香深き淸少納言は昨日の雨に花貌全く地にまかしぬ、色香ふかきもの丶移ろひやすさは、花も人もかはらねど、昨日まで我は顏に咲誇りたる八重の、色香も薄き一重に先だちて散る、花もし心あらば如何に口惜しかるべき、さながら『駿馬の骨』をと叫びつる淸女の老の果にも似たらむ風情、さすがに物の哀れ身に沁むばかりなるにこれのみはいつまでも散らであれよと昨夜の夢にまで叶はぬことを心に祈りし紫式部、あはれその一重の花も、今朝見れば心短かき夜半の嵐に半は散りぬ、かくては今日の夕風心元なしと、我知らず花の木陰を幾度も廻れば、おもひがけなく頭髪に落ちし花一輪、盡きぬ名殘の身にしみて、來む春までの紀念にと、その一輪を玉筐の底に祕めぬ、あはれその色香永久に變らであれ。

人

岡山縣御津郡一宮村　小山松枝子

白雲のにほへるあたりにそゞろありきして、かたみに理想をかたり、歌ひつあそびつ、花のしなさだめ胡蝶の身ならねど心は空に、けふも明日もと、のどけき日を送りむかふるほどに、さびしき春雨のふりにしかば、妙なる色香も一夜のまにあせはて丶、そよ／＼とかよふ風にも、吹雪のやうにみだれ、ちりかた

急ぐうたてさ。かねてより、さけばちる花のならひとは知りながら、なほ雨風なくばとかこたるゝも、愛づるあまりの心ならむ。あはれ戀しくなつかしき花よ、とこしへにちらでありたらんには、世はいかに長閑けからまじを、三日見ぬまの櫻とは、あまりにはかなからずや、されど花はまたこむ年に咲くよしもあれど、見るわれは今年のわれにあらざるを如何にかすべきなどうちすさみつゝ猶ほさびしき梢をながむるほどに、入相のかねの音かすかに聞えたり、諸行無常のことはり告げかほなるも、折から一層あはれさましてけり。

わかな

甲

兄君の此上なうめで給ひし園の櫻花、今年もいつにかはらぬ色香に匂ひて、おのがみさをゝまもる社ゆかしけれ、あゝいとしの花よ、汝も心あらばさぞなめづる人なきを淋しと思ふらん、まいて此頃はさかりになりたれば、いよゝ美しうあかぬ心地のせらるゝに、けさ見ればそよふく風のまに〳〵ちりみだるゝさま、げにも時ならぬ雪かとおもはゆるばかりに、我袖の上にもちら〳〵とかゝりぬ、あゝ兄君の御心は此花の如く清かりき、はたいさぎよかりき、あはれこその此頃なりし「我も汝れの如く、やがては大和心をあらはさばや」とのたまひて、此花に別れましゝより、程もなく名譽の戰死を遂げ給ひし事思ひかへすも涙の種なりや、あはれ潔よき櫻よ、なれも兄君と同じ心かとおもへば、いとゞ慕はしうて、惜めどかひなきものとは知りながらも、猶木の下に佇立みて厭かすながむる吾心を推してや。

此文よく出來たれども住處も記さず姓名も不明にて規則に違うにより採らす

下谷　岡田俐子

花散らす風のやどりは、誰か知る、我にをしへよ、行きて恨みむ、と古へ人のうたひけんも、うべなりや、げに昨日迄は、色香めでたう咲き亂れて、諸人にもてはやされ、朝露にぬれたる色を見んとては、曉深く尋ねられ、或は朧月夜の花の匂ひは

いみじう床しとては、眺められしを、はかなや夜のまの風に誘はれて、うるはしの花の姿、再び梢に見んよしもなきを、誰かは、惜まざる者やはある、哀れちりゆく櫻花よ、心あらば二ひら三片だに、暫しは袖に止まりてよ、さらばゆく春の名殘とも、見てまし、誘ひし風も恨みまじと、急ぎ木陰におりたてば、又もやさと吹く風に、花はみながら梢をはなれて、我は櫻の衣きたらむやうなり、あな可愛の花の心や。

和歌山　高田さくら子

春も漸く深くなり行くまゝに、吹きくる風も香ひよく、なく百鳥の聲も、何となう、のどけくて、そゞろに起こる浮かれ心の、立つ糸遊にもむすびとめんよしもなければ、いでや花にねむる、春の小蝶の夢おどろかしてんと、今年四ッになる、妹の手をひきつゝ、程遠からぬ、花野にあくがれいでぬ。

おち方は霞の帷にへだてられて、花の姿のそれと見えねど、近きわたりの一本二本は、今や盛りの最中にて、咲きも殘らず散りもはじめぬ、其の風情えもいはれず、あかずも見とるゝ折柄、空高くまひあがる雲雀の、羽風にやふれけん一片二片とラ〳〵と散りゆくを、妹は小蝶とや誤りけむ、其の後を追ひぬ、折しもあれや、さと吹きくる一陣の春風に、あはれ雲かとうたがはれし花の、こたびは又雪かとばかり散りしきぬ、さても心なの春風や、あゝ、何れ長からぬ花の盛りの、風吹かずとも散るべき時は、散りもし、落ちもするものを、さりとては又心せはしき春風や、花に何の罪かある何の恨みかある、實に昔の法師ならねど風のありかだに知らば、いかに恨みのかずかずをいひやらんものを。

福井　岩橋花子

頃は卯月の末つ方、十三夜許りの月雲間を出で、清けきに、しばしとて庭に下り立ちぬ、吹く風いとゞ長閑に心地よき事限りなし、朝夕に見なれし我庭ながら、春の夜のそゞろあるきばかり嬉しきはなし、さるにても櫻の花よ、今は大方の花も盛りに、この月影に香へる風情いかばかりと、心も勇みて木の下に至れば、こはいかに、今朝までは

咲きそろひし花の、二ひら三片散りにしを、胡蝶の袖に似通ひて、美しとのみ思ひしが、邊りは去年の垣根の雪の、淡く積りしそれの如と、花の錦を分ける樣なり、また花衣の袖さへも色あせず、ましてや眺めあかぬ間に、あたら花香を散らさん事のいとおしさよ、まだ梅が枝の花の蕾、やうやう豊かになりにし折より、今幾日あらば咲きぞ出ると、待つ程に、四方の霞も深うなるまゝ、花の三ッ四ッ笑み初めし時のいかに嬉しかりしよ、風な吹きそ雨な降りそと祈りつゝ、朝に眺め夕におとづれ、其折々は心に思ふ愛ふしも忘られて、樂しかりしを、盛りと見しはしばしにて、短かき花の玉の緒ぞ果敢なくもうたてけれ、さあれ大方の花は、あせての後にぞ散る者を、此の花のみは盛りのうちに疾く散りて、潔さよきは類ふべくもあらず、今度の戰ひ開けてより、はや一年あまり、亡き兄上もほまれある、軍人の數に召されて出でます折よ、この花の終りにならひませと、おこがましうも聞えしを、ならひ給ひき兄上は、過にし南山の戰ひに、いと潔よく散り給ひぬ、花は年々咲く春あれど、散りにし人は百年千年いかに待つともかへりはせじ、たゝすむ袖に散りかゝる、うす紅の花びら、今更にながめつ、胸はあやしううち曇りぬ。

麹町　西野つね子

あはれいみじき佐保姫の織りなす花衣もて、野邊も山邊も裝はれ、百鳥さへ木々にさへづれば、人人自から氣もうき立ち、いづれ其の美に醉はぬはなく、詩人は之を詠ひ、畫家は之を描き、或は花の下に謡ひ舞ひ、或は假面などして走せ狂ひ、千差萬別の心もて娛しみ合へり、已もそゞろに浮かれ出で、老木の下に佇めば、風吹くとも見えぬにあな心なや、花は長閑けき春の日に、空に知られぬ雪と散りゆけり、やよ花よしばしな散りそと打ちさけべば、切なる聲の通じけん、袖に散り來る花一ひら、あはれ之を形見に偲べとか、さても東風の吹き初めしより、色香妙へなる君を見むとて今日は明日はと待ちわびしを、あまりにつれなからずやと重ねて怨ずれば、友は慰め顏にさないひそ、人生は花よりもろく、有明の月影宿す朝露の

如しと聞かずや、若し花の物言たらむには我等をこそわはれとや笑ふらむと說き出でぬ、己も實にとうなづきつゝさ思へば落花またいひしらぬ風情わらめやと、猶も奥深くあくがれ入りぬ。

東京　岡田智嘉子

よべは、嵐の、吹きかよひけん、今朝は、櫻花の、庭もせにちりしきぬ、ア丶、優しき其花、床しき其色香。

昨日までは、唱ふ小鳥を友として、色香美しく咲き亂れつ丶、長閑なる春の景色を、賑はせつるものを、いかに、かくはかなくは、ちりはてしぞ、と恨みもわへず、またもや、吹きくる春風に、殘りなく散りはてしこそ、なか〲に床しけれ。

わはれ、この潔き櫻花のちりぎはよ、我か軍人のまで丶ろにも似たる哉。

名古屋　若原淑子

やゝふけし春の色の、わをみたるいけかもに。朧月夜の影も、にほひ、そひて、そゞろ物なつかしきに、いでや、かの岡の花とはむと、たちいづれば、小川の、ほとり。いづこのたがすさびなるらむ、笛の音の、あるは高う、あるは低うきこえて、岡邊の松風にたぐい來るか。いはむかたなきに哀れ空蟬の世も、こゝろなき人のみかはと、おもひ入りてたゝずめるほどかすみならぬ雲の月の前にまよひいでゝ風の音つようなりしまゝに、彼の笛の調べもやみて、岡の櫻の影には時ならぬ雪しろうふりしきて、ふみわけむかたもなきに、月のかほ、さやかにみえ、岡のとかげ、めぐれる、水の面にはこがれしろかれを、くだく、汀の柳みだれぬべう、打ちなびきて、雪のあしものどかならぬは、昨日の雨をや、さそふらむとおぼゆるに小田蛙の聲のしすればさればよともいはまほしきに花開きて。風雨多し。といへる詞もうべなはれて、人の世の、さだめもかゝるものを大かた花の上にのみかけてうらむは、いかにぞや。されど。春たちそむる、かすみのひまより、みゆるゆきも面影のにほひて、人あくがらしゝものゝ正しき色にいでゝは。いたくみじかき、己がよをうらみなげきつくし、はてゝ、蝶の戀風にすらあらそはぬ、心清さを思へば、いかでよそにみてあられましやは、とは、なほ、花にのみしみたる心ならむかし。

（注意）　一語一語に〇の附たるは甚だ煩はし、又字體は規則の通楷書にし、名詞には本字を用ゐることなど、他の作例に習はるべし、左もなくばよき文章もよく見へぬものなり。

神奈川　森田はな子

雪かとばかりちる花は、春風のさそへるにか、花や風をば、まれきしか、何處にゆきてたゞさなむ、風の宿りをさへ知られば、そも叶はじ、花にうつたへんか、花心ありや、如何なれば、かばかりさきそろへる花の一時に散り去るにや、さを煩君の世を去りて天に上らせ給ふらんか、行衛だに、わからば天つ風よ、其通路を吹きとぢよ。あゝ今年の春も今日を限りにか、落ちては、復び本に返られば、惜むらむ人の多かるを、花も頭ふかゝらずや、いでや名殘に舞ふ蝶のそれの花を神にうけて浮世の夢をや結ばなむ。

愛媛　なむせい

わはれ虎伏す野邊に起臥する將士の上を思へば、いたづらに、花にあくがれぬべき春にあられど、大和心とあふがるゝ櫻の、我庭

に匂ひ出でゝは、などかは、よそに見捨てらるべき、朝な夕なあかぬ色香をめでつゝ眺め居りしに、あなうたて、一夜の嵐に誘はれて、あたりの苔地はさながら白雪の降積りたらんが如くにて見るからにいと口惜しくはたうらめしき心地せられてなむ。さはれおのがつとめをつくし終へて、かばかり潔きよく散りにし其心こそ、げにたぐひなきみ國の武夫に似かよひたるなれ、とおもへばいよゝなつかしう花の名殘のをしまるゝよ、アゝ惜しき花よ、尚それよりも惜まるゝは、花とちりゆく戰場の勇士よ。

此文なむせいとは本名か、それにしても姓な記さゞるは規則に違へりしこのまゝにては以後は收錄せず

播磨　織田春枝子

遠くのぞみては、雲か雪かとあやまたれ、木の間より眺むれば、昔ルツ衣着たる女房の、几帳の隙より、もれて見えたらむがごと思はれし、庭の櫻も盛りは短かく、夜一夜吹きつゞきし、無情の風にうつろひて、惜や、うす色の花びら、綠のこけの上に散りつもりて、道もせに、消えがての雪とも見ゆるばかり、駒下駄履みいるゝすべもなし、思へばさいつころやゝほころびし頃はやり心のやるせなくて、床の花筒に水さしては、鋏持ちしことの幾度なりし、されど惜し、自然の神の咲かし給へる花、一枝折るも、罪のよう思はれて、なればいゝ迄も、此庭にと、盛り永きを願ひしに、今はしも、淋しき色の世はなりて、とこしえに春は暮れぬ、さはいへいさぎよく散るこそ、昔よりの習なり、花は櫻に人は武士、御國の爲に身をすてゝ、老先こもる、若木の花を、滿洲の野に散らして、艸むすかばれとなれる人の、澤なるを思へば散るこそ花の譽なれ、われはた何をか嘆かんや。

米澤　木村旬子

夕べの風に、雨さへ打まじりて、いとう、ふきすさみぬ、妻戸あくれば、時ならぬ、雪かとばかり散り敷く花の降り積りて、梢に殘るは、枝折り敷ふる花のみ、哀れ、昨日まで、あかず、めでくらせし花の、今はかく地に落ち散りて、花魂はたいづくにぞ埋もりけん、今日錦繡を身にまとひ、佳肴珍味にあくもの、いつしか此の落花の觀ながらめやは、あさましともあさまし。

福岡　小島まき子

いつしかと、春風の吹きかよひしより、花の匂ひ出づるを待ちつるに、昨日今日、あたゝかなる日影にてりて、庭の櫻はいとうるはしう、淡雪のかゝりたらんやう、吹きそろひけり、さるに花の木の間を洩れて、夕月のおぼろにかすむころ、庭面にさまよへば今を盛りと、吹き亂れたる櫻の、如何にかしけんや、二ひら三ひら、袖の上に散るぞいと哀れなり、かくばかり、めでたく、咲き匂たる花の、夜半のあらしに、時ならぬ雪とみだれて、芝生の上に、散りしきたるさまのあはれさよ、昨日までは花下に、むしろ敷きはへて、まとひしてける乙女子もありしを、あはれ今日は、たへて見かへるみやびをだになきぞ、はかなくもまたかなしきかぎりならずや。

薩摩　松原峰子

春立ちてより待たるゝものは櫻のみかは、谷間の雪の消へしよりは、木の芽春雨降る度に、花の枝のみながめられて、世の親の子の生ひ立ちを待つらむ心地でせらる。やうく蕾ふくらみて霞立ちこめたるあした、　の櫻の五輪三輪匂ひ出でたるはまたなく嬉しう。咲きの盛りはげに子等が學びやのおかしふみにても得たらむ時の親心もかくやと覺ゆるを、待ち得し花を樂しく見しはたゞ夢の間にて、人の心も知らず顏なる夜の間の風のつれなさに、早くも色はうつろひて、吹雪となれる花の惜しさ何にたとへんものもなし。あはれ敷島の大和心の花と咲き出し、まだうらわかき武夫がいくさの庭に散り行くさまも忍ばれて、すゞろに涙もようされぬ。

山櫻散るをし見ればみいくさの庭の花さへ忍びけるかな

和泉　な　は　子

暮れ行く春の夕まぐれ、我庭面を見てあれば、きのまでも此庭の主しと咲ほこりし花も、あはれなる春雨になやまされて、幾片となくヒラ／＼と我袖にかゝりて名殘りゆかしくにほふなり、此ちるを見るにつけおもひ出さるゝは、今滿州の野に戰へる武士が身の上にこそ、そも日本男兒が心ばへは御國のためには身も世も忘れ水漬くかばねとなりぬとも、ひるまぬ心一すぢに大和櫻の香こそにほへとちることの潔きは千早ふる神代よりのならはしなれば、しこ草の露なる國人はゆめにも見し事なかるべし、おしまれて散るこそ花の盛りなれとむかしの人は云ひたりき、されば戰ひ開かれてはや一年と二月あまりになれりしに、戰へばかち、せむればとる健氣の功績も、散るを惡まぬ大和魂のあらはれたるに外ならぬと思へば、今散る花のいとゞ床しさを覺ゆるにならめ。

新發田　齋藤八重子

思ひ出多き夕まぐれ何となう哀しさの催ほして、身はいつしか、撩亂たる、落花の下にたゞずみき。のどかに匂ひし、春の日影もはや暮れなんとして、殘んの光に、最後の榮を見せんとてか、夕日に照り映え、きらめきつゝ、はら／＼と、散りゆく、その姿よ、あはれ、如何に美しき、如何に其潔き、しばし我を、忘れて、たゞすめば、又一しきり、そよ吹く風に、忽ち身は、落花につゝまれぬ、思へば、汝れが美しき姿を見んとて、月凍る夜半のほどより、夢路にも汝が麗なる、顏せを見て樂みしに、春風そよ吹きて咲き出でし時の喜びは、そも如何なりしぞ、それより、歡喜の朝も、汝が下にし、悲哀の夕べも、汝が爲めに、慰められつるよ、さるを汝は世の無情を感じてか、獨り散りゆくぞ、誰が爲めに、慰められんさあれ、行くものは、追ふべくもあらず、汝よ、行く先き、まさきく、あれよかし。

茨城　初澤さく子

朝の祈りを捧く可く圓窓押せば、小雨に交りて散る花の白うして雪の如きに、なんとなう悲しく、鳴く鶯の聲も身に沁みて哀れに覺ゆ。げに夢の如き春の盛りよ。

春姬のまた縫の夢を覺す可く、梅の園のあたり暖たかき風の吹きそめてより、白にまた紅に、妙香奇しき花の魁かけて咲き匂へば天使の囀きにも似たる鶯の聲も聞へて、片田舍の家にも、春はきにけりと歡び歌ひしより未だ幾日ならぬに、春は逝かんとして花散ることとしきりなり。あゝげに夢の如き春の盛りよ、

哀れ小さき女の身、春を送り春を迎へて茲に幾春秋、なす事もなく朽なんとす、されど／＼花は散れ共また春にあう、さるを妾が身や如何に、春に逢ふ度毎に老ゆくことのげに果敢なさよ。

散る花は、幾個の人に惜まれて、幾多の歌ある詩ある詩人の筆に弔はるゝに、げに花にも劣る妾が身のつたなさよ。

さわれ、妾は假令落花に劣らんも、この平和の村に巣を作りて、こゝに餌をあさりて、こゝに死せん、汚れたる名や譽や、夫れなんかせん、塵深き大厦高樓よりは、小さき平和の茅屋こそ樂しかれ。

清淨なる心には神も宿らん、ましてつたなくとも、妾に一枝の筆あれば、永遠に妾はこの平和の村を捨てじ、など、空想にふける折りしも額を打つ一片の花に驚き、われにかへれば、尙も散る花を惜みてか、老ひし鶯の二聲三聲。

能登　高森以知子

きのふまでは、芳しの香よ、美しの花よと、愛でし庭櫻大方は散りぬ、惜しひ哉宵の嵐に、きのふ藤子の君の許に、「庭のさくら咲き揃ひましたから、あすは旗日で、御宅でせうから、御妹さんと御一しよに御出で下さい、待つて居ります、屹度屹度ですよ」と參らせしをいかに失望遊ばすらむ。げに「あすありと思ふ心のあだ櫻宵にあらしのふかぬものかは」とか、よく詠みしものよと、今更の如くに感じぬ。

あゝ庭の櫻は散りぬ。妾が心をなぐさめくれし此花の今は數ふる

許りにそこゝに殘れるのみ。あゝ惜しいかな庭の櫻、あわれ姿に千歳の命あるならばゆづらましきものを。さわいへ天のならひかよわき姿のいかにいらちたりとて詮もなし。「やよ櫻花よ、來ん春には又まみえむ。恙なかれ櫻花よ、いざゝらば。」

兵庫　山内方　初挙

花は年毎に變らず咲く、されど落花枝に復せず、待ちに待ちし櫻も今は慌しく散りぬ、嗚呼、花に嵐は浮世の常、眞盛を過れば敢果なく散るは自然の道、そをしも惜むは世の人の常とやいはん、思へば、去年二月以來北風、吹き荒む滿洲の野に、君の御爲め國の爲めに譽れの花と散りし將士の上ぞしのばるゝ。

岩代　大内とめ子

綺羅を飾ふ少女子のリボンに、蝴蝶の日毎舞ひにし花の盛りも稍々過ぎて、待ちにし日曜は來たれど、音づれ給ふ友もなく、徒然やる方なきに、ひとり里のわたりに逍遙ひつゝいつしか愛でにし櫻のもとに至りぬ。咲きも殘らず散りも始めざりし昨日の姿に引き返へて、あはれ今は散りにしあとの痛ましさよ。されどなほ殘りの花の我を待ち顔なる風情なつかしく、折りて名殘の簪にせばやと思ふ折しも、吹きくる風に幾片となく地に落ちぬ。嗚呼花よ暫し止りて我が言の葉をきゝねかし、まことに三日見ぬ間といふなる譬へにもれず、宿る蝴蝶の夢また結び得ぬ間に早散り果つる汝が身のはかなさ。嗚呼此花にも似ていと惜しきは、名譽の戰死を遂げたる出征軍人の運命よ。日露の戰起りてより、山行かば草むす屍、海行かばみつく屍と我幾多の兵士等があるは海に、或は陸に、朝日に匂ふ山櫻の光を外國までも輝やかせしこと幾人ぞやかれとこれとを思ひあはする折しあれ、花に心のありてか、はらはらと我袖の上にかゝれる其ゆかしき。

赤坂　松本くす子

實に待つこそ物は樂しかりけれ、咲けば散る花のならひと云ながら、待ちし心も知らずあはたゝしふうつろふ口惜しさ、夫もなほ艶なる躑躅に太陸白みてほのめく燈籠に散ふ許りちりかゝるは面白き風情なれど、後めたさにとく起き出し將、空打霞みて、紫立し高峯より、嵐も白ふ吹颪したる何心地かせん、げに現としもなしや、花し散らずばと云ひけれども、うべかゝる思ひの無くばこそ千代も經ぬべき命なめれ、さは年毎に盛の色を面影にして、散迄見じと思へど、颯々し名殘はいとやる方なふ物哀しけれ。敷島の大和心によそへられし潔さよさ、惜まれてちるら日出度宿世なりけれ、いつなりけん、惜むあまりの幼すさびに、造りし花だとふいと大事とひめたるを日頃へてとふ出しに、色香あさましふあせしあたら名立の花となりけり。色香をば何にたくへて櫻花あかぬ名殘の面かげにせん。

小石川　新井ちよ子

机にもたるゝも、眠氣にのみ誘はれて、かひなく、窓を推せば、おな庭しの春なれや、みどりの池水、櫻の花さへ、靜々とちるよ、折しも、姉さまと呼ばれて、驚き見れば、妹の、白き蝶を追ひつゝ庭石傳ひに、よりくるなり、みよちやん、今日は上野に參りませうかと、さりげなく、うながせば、却ってせかるゝに、今は詮方なく、せめてくれゆく春なりとも、惜まむと、出行きぬ。同じ心かしられども、花かげは、人の押合ふのみなるに、わづかにのころ芝生に、花の斑にちりしさま、云しらじあはれなりき、動物園をみばやと、妹のいふがまゝに行見ぬ、かくて母さまのまつも忘れて、まどひあるけば、何時か茶見世にも、人影少なく、唯花のみ、散りゆく木かげを、妹をそゝのかして、歸りにつきぬ。急ぎていでし、花かげも、とかくしかへられつゝ行くに、同じ心か、夕烏の。花のかげより、立ちて、二つあるは三つ、返り見もせず、唯池の彼方へ〳〵と、ゆくも見えけり。やがて家につきぬれば、母さまのなさけに、風呂さへたかれて、ありしに、つかれもいとすが〳〵と、あらはれぬ、と見れば窓の外の花は、朧の空より、翁もちりつゝ、蛙の聲さへうらがなしき

に、此年の別れかと思へば、いと堪えがたかりき。

越後　山田なみ子

見渡すかぎり佐保姫の心をこめてなりなせる錦の衣飾らぬはなく雲井には雲雀の聲の聞ゆるなどいづれも春景の長閑ならぬなく、筆にも言葉にも盡し難し、實に花は櫻木人は武士、朝日に匂ふ山櫻の勇士の面影止めて氣高くかしこし、折しも吹き来る春風にあたら花は飛び散りぬ、あないたましの春風よさても情なき嵐よ、花も無情をかこちてや、水晶の如き玉のはら〳〵と落ちぬ、あゝ花には嵐あり、月にはむら雲あり、人もまた一度夜の嵐に誘はれなば、流るゝ水の如く行きて再び返らざらむこそうたてけれ、さはいへ月花は又来ん日には咲もし又照りぬべきを。

尾道　片山松子

菅の根の長き春日も、早や西の空に沈みぬ、欄に彳めば、今し山寺より送る入相の鐘いと哀れに、庭もせに咲き亂れし花の色香の日にそひて、うつろひ行くを打眺め、うたゞ哀れを催せし時、風とてもなきに、彼方よりも、此方よりも、二片三片はら〳〵と散り初めつ、あはれ時の間に落花いよ〳〵降りしきりて、時ならぬ雪かとも見まがう許りなり、あはれ花よ古歌に「明日をまつ今日こそ花はさかりなれ咲き殘らずは散らでやはあろ」とげに理ならずや、汝が花の盛りには、招かざるに男女自ら集ひ来り、色を賞し、香を愛で、鳥さへ歌ひ戯れしにあらずや、汝が盛一朝衰ふるに至りては、誰れ訪ふ人もなく、獨り淋しく散りゆく汝が心こそあはれなれ、げに盈つれば欠る憂世の常とこそ聞け、情なきは人人の心なるかな、物の哀れは秋こそまされといひし人もありつれど、春の哀れも亦おさ〳〵秋に劣らじな、されど花は又来ん春も来ん春も、とはに咲きいづれど、わが顔は年々歳々かはりゆきて遂には双鬢における霜白く、腰はあづさの弓の如く、ひきて返らぬに至るべしと思へば散る花もなか〳〵に羨やむべし。

短　文

○不幸なる友

なにがし

私のお友達の八重子樣、竹子樣、みんな同年で、お二人とも實に〳〵お人柄のよいおとなしい方でありました。年頃になりまして御二人は元より私もそれ〳〵に縁付きましたが、八重子樣は御結婚後四年ばかりで、御夫婦離別なさらなくてはならぬ、かなしい〳〵御身の上となられました。只さへおよわきところへ、かなしみの餘りに、恐るべき肺の病を起されまして、お金にあかして御養生なさいましたけれど、病氣はます〳〵重り行きて遂に昨年十一月秋の木の葉とともに散りてお終ひなさいました。

竹子樣は、始じめ誰れも〳〵賞めぬはなき好き御人物でございましたが、何たる不幸のことか、嫁かれました夫君がまるで黄金を土の樣に思召て、お子樣のあるにもかゝはらず、放蕩にふけり、竹子

様に御心配ばかりかけていらしやいましたが、本年一月東京某新聞の電報欄に、某會社員の〇〇〇との見だしのもとに、社員某云々と見へました時には、實に〳〵驚ろきまして、御氣の毒とも何ともまをしやうがなかつたのであります。八重子様の訃音を聞きました時には。なく〳〵お悔みを書て送りましたが、此度は何と申してよろしきやらお手紙も上げられませんのでたゞ〳〵途方に暮れました。實に思ふにまかせぬ世の中とは申しながら、婦人は良人とする人の性質體質のよしわしによりて、其身の幸も不幸も定まるものなれば（申すまでもなくわしき行ひはいさめてよきに改さすは婦人の務めなれど）結婚前に、夫の撰び方こそ最も大切なる事と今更に深く感じました。

〇戰死せる軍人の未亡人に贈る

肥後　千々波橋子

春とは申ながら、世のさまを思へば、花鳥の色ねもよそなるこゝちいたし申候、久しく御音信もうち絶て、御無禮のみ申上候、おりから、御良人陸軍少尉金光幸吉様御事、御出征後いつも會戰のたび毎に御戰功の御うはさのみ承りゐ候處、今度二月二十八日の沙河方面の戰闘に、名譽の戰死をとげ給ひし由承り、驚入申候、かねて御覺悟の御事とは申ながら、御老人様はじめ、御子息様の御身の上を思召ては、いかに斷腸の思ひになやませられ候御事申あげん言の葉も候はず、御同情の泪きんじがたく候、さりながら難攻不落ときこえし旅順すら落城いたし、其他名だかき砲臺をも占領して、わが大君のみいづ萬國にかがやき候事、いかに嬉しき御事に候はずや、數ならぬ身には候へども、萬御心おきなく何事にまれ、御申越被下候はゞ、御役には立ち申間敷候へども赤心もて御力をも添へあげまゐらせ度候、申上度事海山候へども、筆につくしがたく、餘は御對面の節と、とりわへず申入候かしこ。

〇女鑑兼題投稿者の御一人に參らす

松山　白百合

今日此頃なつかしの君にはいかに暮し給ふらん、未だ御姿をほの見し事だにあられども、女鑑誌上にてやさしきみ心を知りたり、我ながらあやしきまでに、君の慕はしくて、日々思ひになやめども、君にはよも知り玉はじなあゝとく御膝許にまかりて我思ひを打あけかつやさしきみ教へをも、乞はまほしきは心一つの願なれ

ど、いかにせむ、海山遠く隔たれば、明暮れつばさだにあらばとかこつのみになむ、げにまゝならぬは浮世なるかな、さはれ落遠ひ蚤らすべきよすがもやあると、唯それをのみまつ山に、ねになく鳥の姿の心をあはれともおぼしめしてや。

あゝ花よりも美しき友垣はみ空の星の數々おはすらん、されど片田舍に匂へる花の、赤き心をも、いさゝか汲みとり玉ひてよ。

春雨

播磨　横田春枝子

天の戸いづる朝日のかげもなく、常は姦しき雀の聲さえ、けさは聞へず、しめやかに降る春雨に、軒端をつたふ玉水の音のみぞ靜けき空にひゞきぬる、ぬれそぼちたる櫻の花より、したゝる露は、花の色をそのまゝに染めしかとばかり美はしく、さては海棠のなまめかしきが、雨にほころびたるなど、朝日うるはしく晴れたる日にも優くて、見どころあり、近きあたりの家々より、淡く流るゝ朝けぶり、緩やかに立ちて、消えゆくもはかなし、程遠からぬ山寺の木魚の音すみて、讀經の聲一しほ身にしみ、寂しさを覺ゆる折から、郵便の聲いさましく、見れば濵遠づの友よりの玉章なり、いでなつかしき友の音つれ聞かむとて、封をとけば、雨は一きわしげくふりまさりぬ。

蛙を聽きて

名古屋　不破きみ子

春雨の、晴れし名殘の夕ぐれの空、あやしう見えて、かつ散る花に心みだれ、あたりさまよふ折しも、軒近な鉢前のほとりなつかしく、咲きかゝるさつきが下に、いとさう〴〵しく蛙の鳴けるは影見る水の少なきをかこち、降りこん雨を乞はんとてか、或は花のむしろに一夜のゆめをむすべよとて、古井のそこの妻よばふにか、はた、見もなれぬ廣き庭もせの、草木の露によふてにや、目を丸くし、體に力こめて、鳴き居る樣の、おかしさよ、思出でらるゝは去年の春、我故郷の、裾裳もかるき、衣が浦邊の田舍道、親しき友どちうち連れて、面白おかしく返るさの、話破りしも蛙なり、又農夫達が、み軍の糧多かれと殊更に、豐けき秋を祈りつゝ種おろしたる、苗代小田の、水にごらすも蛙なり、さては、心憎き蛙かなと、うちかこちしが、彼の親しかりし友人は今は遠く隔ちて、更に訪ひこぬ此庭に、汝なればこそ、住馴れし古井の水を飛捨てゝ、はる〴〵こそは尋ねきつるか、妾も、今こそは、にぎはしき、市にあれど、元をといへばおなじ井の内の蛙なり、ゆるせや蛙、けふよりは又なき妾の友なるぞ、行く春永く住めよかし。

夜半の瞑想

茨木石波子

朝よりの雨は、夜に入りていよ〳〵はげしく、風さへ吹き出でゝ物凄きほどである、昨日挿たばかりの机上の櫻の花は、何となくしほれ返つて居る、妾は今孤燈の下に一人文机にもたれて、深く瞑想に沈んだのである、嗚呼汝櫻の花よ、妾は汝を見る每に思ひ出ることこそあれ、去年の春親しき友垣二三人と庭の櫻を賞しつゝ互に未來を語りし事のありしが、友は皆希望を達せしに、嗚呼妾は何たる不幸ぞや、今も尙其の當時の如く、煩惱の内に歳月を送りぬるなり、されど精神一到何事不成と聞けば、縱令如何なる苦學をもなして希望を達して見んと決心するのであるが、奈何せん姿の去りし其あとは、老ひにし母と弟一人、如何にして其の日を送る事が出來やうか、嗚呼孝ならんと欲すれば志成らず、志を成さんとすれば孝ならず、嗚呼汝櫻花よ、汝は我が友たれ、年々に來りて、其の笑顏を以て此不幸を慰藉せよ。

我里の朝

神奈川　菊子

朝まだき起き出でゝ、程近き、小山に上り、遠く彼方を眺むれば霞に半つゝまれつゝある、砲臺の樣、はた、波間をつたひ行く千鳥の影など最と面白し、いつしか東の方のカーキイ色に染め出されし、雲のたへ間より出づる、太陽の海面に美しう、うつりてか

がやける又海士が家の烟こめて此處此處に立てる、岸べよりは、舟歌うたひつゝ漁舟など漕ぎゆくさまのいさましさ、都には得も見られぬ、朝景色になん、げに、たのしき我里よ。

月夜の感

麹町　西野つれ子

病後の鬱を散せむと獨り飄然として、靖國神社の畔を彷徨ひぬ、十六夜の月は、朦朧として我前途の定かならざるを示すに似たり嗚、想へば、去年の神無月の今夜なりけるよ、西邦の邊にて、なつかしき親しき友とゆく先き／＼の樂み語り明かせしもかゝる月夜なりけり、月は昔の月なれども、友は何處にかある、仰ぎ看れば社内の櫻花はやがてほころびむとす、年々歳々花相似、歳々年々人不同、の唐詩も思はれて我心は亂れたり、月に思ひを語らむか月は遠く中天に在り、誰か懐郷の涙なからむ、我未だ七歳に滿たずして母を失ひ、嚴格なる父の膝下に育てられたり、されど幸に繼母の慈愛は、なか／＼に實母にもまさりて、世のうき方は知られで過にき。さるを其頃如何なる事にか、不幸は打ちつゞきて、身は漸く艱難の底に沈み、想ひを天國の樂園に走するも、行路の難は益難を加へて、蜀道の險よりも險なり、精神一到の語を思はぬにしもあられど、故郷には我行末を待ち給ふ老父母在り、實に樹靜まらむと欲すれども風止まらずとはやがて我身の嘆とはなりぬべし、など思ひめぐらして、いよ／＼心細きを感じぬる折しも松風耳邊にさゝやきて、神のみ惠をつくるが如し、戀しき此夜の月よ、汝を掩ふ雲は今や霽るべし、我心の雲もまた散する時あらん。

短歌

折にふれて

三河　榊原てる子

打つれてかりはかへれといくさ人血しほのみ山なほすゝむらん

述懐

和歌山　高内さくら子

なか／＼に散りゆく櫻うらやましありて此の世に浮め見むより

月夜出征軍人を思ひて

播磨　横田春枝子

雪ふかきもろこしの野に銃とりて月にむかへる君はしもいかに

蕨

和泉　中江なほ子

家土産にほこらむものとさわらひをおとろわけても手をるたのし

出征軍人の親を想ひやりて

長野　田島みよ

君が爲命すてよとくちにいひて子をおくる親の心やいかならん

薔薇

伊豫　和氣兼代子

ひと枝は我れにゆるせよ花うばら愛にし妹のあはれ手むけに

浦舟

大和　栗山高子

住の江うらわこぎめくるあま小舟はるはかすみのなみにたゞよふ

夕雲雀

春の日もはやくれそめて雲雀なくこゑのみ空にきこえけるかな　肥後　千々波橋子

故郷なる母上のもとに

そこひなく海より深きみ恵みをあはれいつの世くみやはつべき　峯子

遠村柳

うちわたすつゝみのすゑの柳はらかすみてけさは遠く見えけり　岐阜　中島もと子

友君に奉る玉章の端に

おりおりはありし昔とも思ひてゝかりのつはさにふみかけ給へ　日向　岸上はる子

庭花

このころの雨につほみのほころひて咲まさりゆくにはさくら哉　三河　榊原てる子

偶々逢ひし友に

よそにみしつみ許しませたまさかに逢ひみし君もおもかはけけり　愛媛　さゆり子

美しき家こぼつを見て

富みし家けふはこほたるゝ世の様に我よの末もかへりみらるゝ　愛媛　薫子

愛子の戦死を聞きて

み軍の庭にきえにしいとし子が思ひいつれはそてそ露けき　愛媛　せき子

堪忍　白ゆり子

いかばかり風つよくともあらそはてなびく柳をこゝろとはせん

落花を惜む

うぐひすの羽風にちりし花行のいとしまろゝ庭のおもかけ　名古屋　不破きみ子

友の父君みまかりぬと聞きて

われもまた君に倣りてそてたもとぬらすなけきを思ひやらなむ　神戸　今西みさを子

春雨

夜もすからふる春雨にかやふきののきしめやかになりにける哉　肥後　秋吉輝尾子

落花を惜む

野辺とほく吹くはるかぜにほろほろとなしくも散るは櫻なり鬼　茨城　石波子

菫

おもふとち春の野のへに打むれて心すみれのはなをつままし　肥後　板坂惟子

今様

春曙　さつき子

おぼろにかすむ有明の、月は櫻のはなの上に、
きえてこつゑに鶯の、こゑさやかにもきこゆなり、

わらび　播磨　横田春枝子

焼野にもゆる初わらび、ひとり思案のくひたれて、
はなの少女のしろき手に、折られんおりを待ちくらす、

摘草　神奈川　菊子

春あたゝかききのふけふ、
やさしき姿に手かごさげ、
またつほみのなと女子か、
ほゝ笑みながら摘む菫、

卯花垣　くれなゐ

まかきに匂ふうの花の、
山時鳥音つれて、
み雪のすゑにたゝすめは、
秋にそよく風すゝし、

春風　茨城　初澤策子

若草肥えし野に立ちて、
描き腕に筆執りて、
可愛の羊眺めつゝ、
寫生の夕べ風ぬるき、

つみ草　大阪　竹内晴子

錦おりなす春の野に、
籠に摘みたる菜の花の、
ねむる蝴蝶の夢さめて、
香を慕ひつゝ舞ふてくる、

同　同人

去年の彌生の春の野に、
ゆかりの色は戀ふれど、
共につみたる菫ぐさ、
つみにし人やいまいづこ、

別れ　大阪　ゆかり子

花咲く春にはかならずと、
またはた寒き春の夜に、
名殘おしみて別れしに、
なき友忍ぶ小夜ころも、

亡き祖母を想ひ　東京　芳月

月かけ淡き夕まぐれ、
いとゞ涙のますかゝみ、
なき祖母君を偲ひて、
胸もはりさくはかりなり

新體詩

若草　愛媛　和氣兼代子

外とはうらゝかの春の日に、
雪とし散りて萌ゑいづる、
やよ兄君よ摘るゝまで、
室やかぐわし葉は若く、
梅は名殘りの香をとゞめ、
野路の若草根はあさし、
ともに摘みてむ芹なづな、
小ゆひの土に香ひあり、
いさくみたえ雪解の水、
花やはらかに根は繊く、
妾は洗ふ籠わか菜、
秋の岡に聲あり、

花すみれ　伊豫　和氣兼代子

糸ゆふけむり春たけて、
しつけき草の下かけに、
紫そむる花すみれ、
思ひ出づるはこその春、
ともに遊びしかの君の、
すみれよ汝は今もなほ、
契りし昔偲ふらん、
流るゝ里の川添の、
ゑならぬ香ひ放ちつゝ、
ゆかしき色を眺めても、
秋ふりはゑ二人来て、
歌ひたまひし春の歌、
おなし心に咲きいてゝ、

明星　茨城　初澤策子

曉光る明星の、
何處そ青き雲の上に、
燦きの目を閉ずなり、
夕に光る明星は、
清きは心の姿等に、
燦きの目を開くなり、
次第に消ゆる其陰は、
愁に狂へる人見しと、
無名の村にうつもれて、
慰安の光與ふべく、

思ひ出で　神田　松室のぶ子

遠く忍へは十年の昔し、
君の衣は膝まてなりき、
明日は手を取り鎭守の森へ、
遊び暮しぬ十年の昔し、
櫻花春雨になやむころ、
妾は都の家に嫁ぎぬ、
思は増さる君が行末、
難攻不落と敵のほこりし、
打死しぬと妾は聞きぬ、
名は千歳に傳はれと、
なくなく繪姿とりたせは、
妾は前髪ふくらせて、
今日は成野に草摘み遊び、
世の憂き事は打忘れ、
椿ほろほろ風無きに散り、
君と妾と苦しき別れ、
君は知らん妾の胸を、
聞く君此度の戰に、
旗順の戰にいさきよく、
忠勇無双のものゝふと、
また面影を見んよりも、
なほ偲るゝ十年の昔、

短歌及び今様　前號掲載洩れ分の

浦冬月　肥後　松村絹子
あまならでたれかながめん千鳥なく明石のうらの冬の夜のつき

梅盛　東京　大塚里子
花やてるつきやかほれる立ちよればいまさかりなり梅の一もと

春日祭　同人
大内のまつに咲きそふふぢの花かすがのかみのまつりかしこき

朝花　同人
武士のやまとごゝろのさくらはなあさ日ににほふ色ぞゆかしき

春雨　前橋　竹のふし
音もなくふるはるさめのゆかしくも草木のはゝと蘇はれにけり

松露　伊豫　山本田鶴子
折にふれ散りにし露のこり〳〵て松のみさほを香に見するかな

萬年青　愛媛　さゆり
やよつちかへと征きまし〻　心盡しを知るやそも
君が武運を見せがほに　榮へにさかゆ萬年青

寫眞　愛媛　薫子
遼陽旅順に勇ましき　我兄弟が寫繪を
共にかゝげて勝ち戰　祝ひの御膳参らせむ

梅　水戸　高村きの子
萬歳の聲勇しく　今ぞいでたつ武士に
軍のさきがけあれかしと　梅の一枝をおくりけり

失題　下野　井上倚子
舌三寸のつるぎをば　僞り押ふ世なればや
涼しき眼の底になほ　いとゞ怪しき光あり

冬夜　遠江　武井鈴子
わら打つ音をさそひくる　北山おろし身にしみて、
文よむまどにかゝげたる　孤燈の光またゝきぬ

松　近江　磯野田鶴子
常盤の松の色かへぬ　みどりうもれて白妙の
雪のみ山とふりかはり　世の常なさも見えにけり

亡友を悼む　牛込　石井貞子
東風吹く頃を契りつゝ　共に咲かんとちかひてし
蕾は哀れ散りはてゝ　月影淋し軒の梅

折にふれて　さつき
旅順のうみのあた浪を　打しづめたるますらをの
いともおゝしきそのこゝろ　世々につきせでにほふらん

近時の露國を思いて　東京　北村妙子
神も怒れり裁取れば　戰毎に打敗れ
民は激して露の國の　今日此頃ぞ哀れなり

春月
播磨　横田春枝子

今をさかりの花の上に
おぼろにかすむ春の月
已が光りをゆつりつゝ
げに云ひ知らぬ眺かな

琴の音
越後　山田なみ子

のとけき春にあこがれて
たがてすさみか筑柴箏
花の下陰さまよへば
優にやさしくひゞきけり

寡婦
前橋　竹のふし

世は春ながら春ならぬ
背のおさなごすかしつゝ
日かげのみちを淋しげに
とぼ〳〵たどるかげうすし

わが友
北海道　小山春枝子

母みまかりしユーの君
姉なきわれと交らひの
父うせませしビーの君
幾百年もかはらしな

紅梅
京都　竹下すゑ子

やゝさきそめし紅梅の
たゝへん術に惑ふかな
花の一えだたをりきて
夕くれちかき窓のへに

折にふれて
みどり

おほろにほふ夕月夜
君とかたみにかたりあふ
花の木陰を辿りつゝ
そゞろありきの樂しさよ

負傷兵をみて
下野　井上滋子

仇のとりでは落ぬれど
白衣のすがた見る時は
傷手になやむ益良夫が
胸のおもひぞたゞならぬ。

折にふれて
伊豫　山本田鶴子

春風そよぐ岡の上に
しばし歌集をひもとけば

いつか夢路をわけ入りて
うたゝねさむし花のかげ

軍人におくる
旭川　笹の雲

正義を元にいくさする
我はらからよ兆雄よ
不義はいかでか神ゆるす
つくせよ皆し國のため

祖父母の一年祭に
愛媛　薫子

祖父母の君が愛でましゝ
源平咲きて園の梅
去年を偲ふの色と香を
いさや手向けむなき魂に

海邊春
栗山高子

松のひまより一すしの
霞なひきていさり船
こきゆくかたも明石潟
春の夕べそのとかなる

鶯
岐阜　中島もと子

軒端に茂る呉竹に
ふし面白くうくひすの
木傳ふかけはほの見えて
囀る聲のいとゆかし

暮鐘
播磨　横田春枝子

おもひあまりて門にたち
ゆうへの空をながむれば
しつかにひゞく天嶺の
ひみつにかよふ鐘のおと

春宵
廣子

思ひあまりてひとりたゞ
かなたの空をながむれば
おほろの月をあとにして
つれなくかへる雁一羽

寫眞
札幌　小山かく子

學ひの庭を出る時
紀念にとりし寫し繪の
君がみ姿今も尚
變らぬ心語りける。

幼な子

やさしき姉に抱かれて
面のにゑみをふくめるは

■島 加津子

すやくくねむるをさな子の
いかなる夢や結ぶらん

新體詩

前号掲載
洩れの分

遠征の夫を偲びて

近江 磯野田鶴子

千々の思ひにいねかねて
淋しく更けし冬の夜の
女心と云はゞ云へ
今宵はいかにと手に取りて
泉 進むわだし野の
朝日の光身にそえて

心ともなくまど推せば
さゆる月さへ片彼れて
征きにし夫の墓はしく
寫眞抱くも涙なり
露は朝日に散るときく
歸り來まさん時やいつ

四季の眺め

福島 すゞむし

かほりゆかしき梅が枝に
鶯來り鳴くところ
しばし櫻に宿かりて
おぼろの月のさす處
春にやさしき眺めあり。
綠の若葉青々と
玉なす露に滴る處
賤が伏やのかやり火に
白龍そらをまふところ
夏には淸きながめあり。
染めしもみぢ葉燦として
錦の雲を綴るところ
高嶺にすめる月影を
掠めてかりのとぶ處
秋にはさやけき眺めあり。
香爐の峯の白砂に
美人の簾をまく處
子鳥のむるゝ嚴奇しく
浪の花片散る處
冬には氣高き眺め有り。
ながめ優しき春の日に
眺め淸き夏の日に
眺めさやけき秋の日に
ながめけ高き冬の日に
いかでか神もまはざらむ。

、、。人形を抱いて

淡路 森海玉枝子

あたしのすきな叔母さんが
大事にせよと下さつた
名をば市子と朝夕に
ニツコリ笑んだこの顔が
見えますするのは何故でしやう
去年の春の父兄會
ときわ御前が三人の
雪ふる中もいとわずに
その時あたしの市ちやんは
アラアー又もニツコリと

日光がへりの御土產に
オヽ可愛らしいこの人形
呼んでも返事はしませぬが
うなづく樣にあたしには
さゝ可愛くてく
もようしいろくある中に
可愛い稚兒を引きつれて
歩みはこべる作り物
義經公となりました
サーこれからはおんぶしやう

夢に富士山を造る

前橋　竹のふし

目出度年の手ほどきに
日頃好める押繪もて
因む富士が贈物しける
いとも妙にぞしつらへぬ
此世に在す心地して
心のまゝに出來つると
なし給はぬぞいぶかしき
我と我聲に驚けば
かたみにとゞむ物がなと
畳けれ共勅題に
さるに常とはこと變り
此時のみは母君の
やよ母君よ見そなはせ
追ひてすがれどいらへだに
我にもあらで聲あげて
あはれ今のは夢なりし

梅の花

牛込　石井貞子

奈落の底に世は落ちて
かくも果かなきうきの世に
寒さ冒して眞先きに
谷の戸出る鶯の
ひやびの人を樂ます
さわさりながら浮の世は
汝は泥土にちらぬ間に
疾く嵐をは誘ひ來て
人は皮きる飯ぶくろ
汝は何故に雪霜の
かく氣高くはほゝへめる
懸しき爲めかさてはまた
なさけ心のあるなるか
けがれし人の多ければ
不潔の人の見ざる間に
かなり渡れよみ空まで

○○述懐

下谷　岡田柳子

我行く先は遠くして
今は麓の里ぞかし
何處の山にわけ入らん
み教へうけん師もなし
言葉の花を得まほしと
胸の歩みのおそき身は
さはいへ元は好むみち
高きみ山に例ふれば
この里をしも立いでゝ
道のしるべの父はなし
世にたぐひなく麗はしき
學びの道に入りにしか
進みかぬるぞ口惜しき
如何になしても進みゆき

霧りも深きみれの花
哀れ半ばにならずして
跡見かへれば我家は
哀れ思へば已が身は
花を尋れて如何にせん
哀れと思ひ給ひてか
風にたぐへて運びくる
あゝ此後はいつくにか
千々にみだるゝ我心
折りてやまんと思へども
仇し道には迷ひしよ
深きさぎりに包まれぬ
商ふ家に生れ來て
み情深きたらちねも
厚きめぐみの絶間なく
いとなつかしき母君よ
道をとりてや進まゝし
みちびき給ふ友もがな

○あゝ今宵

本郷　清月

思ひぞ出づるきさらぎの
まだ消えやらぬその夕べ
親しき君と打ちつれて
手をとり共にかたりしも
雪にも似たる双の手に
讃美のこえもいときよく
われをなぐさめ給ひしも
あわれ行末たのもしき
無情の風にさそはれて
永き眠りにいりにしも
げにはかなきは浮世かも
かのバイブルは倚こゝに
君のやさしき手によりて
あゝなつかしの友の君よ
かへりましてようるはしき
軒端につみしあわ雪も
此月消きエデンの園に
かほりゆかしき梅がもとに
あゝ今宵なり今宵なり
さゞげし樂器の音もたへに
此の麗はしき園にたちて
あゝ今宵なり今宵なり
文子君のはかなくも
ちり行く花ともろともに
あゝ今宵なり今宵なり
君が心の友とせし
さやかなる月のもとにて
ひらかるゝなばまつなるに
あゝしたわしの友の君よ
神のみ國にいま一度

○野あそび

能登　池野いさみ

遠くかすめる人を見て
春に醉ひ眠る蝶を見て
佐保姫の肌忍びけり
眞の愛を悟りけり

赤よ紫黄よ緑
清き自然に微笑めり
蕚ひよりくる蝶を見て
誰が戀脱けて香ひけん
菫の花の濃紫
アゝ花咲きて風ゆるう
園の中に只一人

とり〳〵香ふ彩を見て
手折りし花の香を戀ひて
優しの感情おこしけり
誰が愛脱けて香ひけん
接吻して見む與溺いて
春の女神がおりなせし
詩のおもひに餘念なきかな

小田まき

月の影白くさす窓に
こゝろ靜にむれの中
夢にさも似し四ツの年
神さへ知るかしらぬかの
月ゆきはなに行く水に
理想描がきし其のかみの
見よやいざよふ彩雲も
きらめき渡る大そらの
流るゝ水もゆく雲も

下野　井々倚子

悶へやつれし身をなげて
曉の小田をくりかへす
巳が希望にあくがれつ
未來をうたゝ夢みつゝ
みそらの星にゆくくもに
まよひしことを今悟る
榮ある色はひとときぞ
ほしもいつしか影たゆる
行方しれぬものなるを

ふる草履

※捨どこの片隅に
赤き心の鼻緒すら
われ學びやに通ふころ
朝夕汝を伴ひて
能あるうちは追ひ使ひ
情を仇とかへりみぬ

北海道　小山春枝子

たが打捨しふる草履
やれてと切れて朽ちしよな
往還の助けをからむとて
八年の間交りぬ
老て疲れて厭ふとき
人の心のうらめしき哉

春野の感

かけろふもゆる春野邊に
いつれけはしめはなきなるを
變りゆくこそぜひもなき

前橋　竹のふし

おほろわかくさ幾千種
花さきそむる時しより
己が姿そほゝえみて

蟲の身をはかさにきて
あすをもまたてふる雨に
みにくかられと及はぬを
浮世のちりをさく花は
果をむすはなん心かや
花美しくかほるとも
すきてくゆとも及ふまし

摘草

やよひの空のうらゝかに
吹けともいとも愛らしや
紫白う咲きみだる
紅白やさま〳〵の
小溝のふちに脊々と
しけみのかやのその中に
實に實に春のつみ草の

高く身をのす花はそも
色のあするを知らぬかや
他の花かけにかへりみて
やかてそ來る時を期し
あはれ床しき行ひよ
みをむすはれは何かせん
心をよかしわか竹よ

淡路　春海むな

春風淸くそれ〳〵と
かろく袂を拂ふのみ
可愛いすがたのすみれ花
もーせんをれるれんげ草
ほこり顔なるよめな草
頭もたけるつく〳〵し
たのしさ何にたとへんか

再會

くり數ふれは五年の
始めて知りし其人は
我身の樣をきゝしとて
相會ふたびにねもころに
幾秋へぬるけふまても
あないふかしの爲にしかな
思はさそけり其人に
小やみたになくふる雪を
おとなひくれし其時は
かゝりしよりそ休日は
定の如く訪はれつる
おのつからなる愛情は

旭川　笹の雪

今は古しぞ都にて
互に知れるある友に
深くもよする同情の
なくさめくれし言の葉は
落ちなく胸に包みけり
又と再ひ逢ふ事の
思はさりけり此里に
こきわけつゝもわひ屋をば
ゆめならぬかと思ひつる
一里許り何かはと
あゝはしなくもうたてくも
いつしかこゝに細やかに

結ひたるこそ宜ならん

遠征を思ふ　さつき

思ひわびつゝ磯の邊の　松の木蔭にたゝづみて
夫をおもふ夕まぐれ　いつこをさして行雁ぞ
涙路のすゑにこゑに殘し　島のかなたに影きえぬ

國民兵出征　愛媛　さゆり

さらばと勇む右左　父上何處と雅兒の聲
思ひは二つひとすじに　笑顔つくれと目に時雨
ふりすてゝ征く親心　あはれ御國の爲なれば

目にふれしまゝ　下野　細野きみ子

あさまだきよりふりしきる　六花の世界の夕まぐれ
ゆき來の人もたへにけん　ちりさへ見えぬ野への道
山につみたる荷の車　ひくにくるしむ夫をば
やさしきつまのいたわりつ　背にみとり子をおひながら
をもき車のあとをおし　さらでもさむき今日の雪
赤城山より吹きおろす　つめたき風は身にしみて
火桶をかこむ我身すら　實にたへがたき此夕べ
たまなすあせをながしつゝ　ひき行くさまのいじらしき

學期のをはりに　前橋　廣子

今は學びもをへはてぬ　證書手にしてうれしげに
また新なるをしへをば　うくる樂しきみとなりぬ
はたよの中のあらなみに　うちいで玉ふ人もあり
わが家にありておのがしゝ　なりはひはげむ人もあり
あゝ師の君のおことばも　もはや千さとのほかにあり

投稿募集

歌　文

七月｛夏月。魚。｝……郭公をきく
八月｛擲泉　老人｝……避暑旅行
九月｛草花先秋　古寺｝……日記の一節

隨意

短文、短歌
今様、新
體詩

長岡商業學校の襪靴製造（口繪）

我が國露國と砲火の間にまみえそめてより已に十たび月を重ねぬ、殘んの雪は一たび消えて、こゝに再び見る嗟々たる山野の景、アゝ凛烈裂膚の寒威を冒して大陸の野に干戈をとれるつはものゝやいかに、其筋にては其困難を慮り防寒の具として襪靴を製作すべき旨の命を下し給ひぬ、我校に於ても喜んで其命を奉じたり、常は學業の暇々にはピンポンよテニスよと遊びに餘念なき少女等も御國を守る武夫の爲めと聞きては朝には定めの時刻に先んじて來たり、夕には月を踏んで家路を辿る、斯て意の儘に動かざる針は指を刺して時に或は鮮血のにじみ出つる事さいあるも敢て意とせず全校を擧げて一意專心之れが縫附に從事し遂に二千有餘足を製作し終へたり（同校裏銀兼雨女記す）



愛國婦人會總會

愛國婦人會にては去月二日午後二時より九段坂上なる陸軍偕行社に於て第四回通常總會を開きたり當日は兼て仰出されし如く畏くも　皇后陛下の行啓あらせられたる事とて全國より參會の爲上京したる會員一萬餘人の多きに及びたりしが前日來の降雨は幸にして霽れたるも空は猶ほ搔曇りて又も降出し兼ねまじき景色なりしにも拘らず會員等は定刻前より陸續と參集し式場たる同社の庭園は殆ど立錐の餘地なき程なりき斯て皇后陛下には午後一時二十分同會場に行啓あらせられたれば總裁閑院宮妃殿下、東伏見宮梨本宮、久邇宮の各妃殿下を始め奉り御先着の萬里小路式部官等御車寄に奉迎し便殿にて御休憩の際會長岩倉公爵夫人徳川公爵夫人等へ又地方支部長及び監事等へは御廊下通御の際拜謁仰付けられたり

同社の階上階下には紅白純子の幔幕を張り繞らし玉座は庭園の正面なる階段階上の彼方に設けられ其上には紫の紐にて幔幕を絞り上げ御後には金屏風を立て廻らし金梨子地の御椅子は置かれ各宮妃殿下以下山内侯爵夫人鍋島侯爵夫人等は玉座左方の廊に右方には寺内陸軍大臣淸浦農商務大臣花房宮内次官島津公谷子松平千家澁澤各男爵長岡參謀次長等起立階段の前方には有功賞者其後方周圍には一萬數千の會員整列したりやがて君が代の吹奏に連れ皇后陛下には玉　容麗しく會長岩倉公爵夫人の御先導にて臨御あらせられ香川皇后宮太夫御傍に侍立し一同最敬禮の後會長岩倉夫人は御前の階段に立て左の開會の式辭を朗讀したり

開會の辭

今日茲に愛國婦人會第四回總會を開く抑も本會は軍人遺族及び廢兵を救護するを以て目的とすれば苟も我國に生たる人は男となく

女となく間接に直接に同心協心この國家的慈善事業に盡すべきなり況して一旦緩急あり義勇公に奉すべきの時に於てをや我國民の大御母と仰がれ玉へる皇后陛下には夙にかゝる事業を御嘉納遊はさせ玉ひて今此席にさへ臨ませ玉ふ全國の會員はさらなり遠く塞外に在りて砲煙彈雨の中を驅けめぐる勇將猛卒も之を聞かば其感激やいかならん

時局の前途は尚遼遠にして本會事業の擴張彌急なりいでや此總會に集まれる婦人諸氏よ今よりは愈々會務を振作し本會の主旨を貫徹することを努め以て山よりもいや高く海よりもいや深き大御心に報ひ奉らではあるべき久子謹しみて聊か所思を述べ開會の辭とす

明治三十八年四月二日

愛國婦人會長　公爵夫人岩倉久子

次に皇后陛下には御聲爽かに左の優渥なる御令旨を下し賜ふ

令旨

本日愛國婦人會の總會に臨み此盛に各員を見るを喜ぶ殊に今回の事局に際し本會が能く救護の實を擧げつゝあるは滿足の至りなり尚は將來事業の益々盛ならんことを望む

次に總裁閑院宮妃殿下には御前に進ませられ右の御令旨に對し左の奉答文を御朗讀あらせらる

總裁殿下奉答文

今や愛國婦人會は畏くも皇后陛下の親臨を辱うして爰に第四回總會の式を擧ぐるを得且特に優渥なる令旨を賜はりたるは本會無上の光榮にして全國の會員は勿論軍人遺族及び幾多廢兵は當に恩旨の厚きに感泣すべし抑々本會は創立日尚淺しと雖も曩日兩陛下並に皇太子同妃兩殿下の特別なる御補助を蒙り一般の婦人も亦深く感發する所ありて陸續本會の主旨を贊同し加盟するもの絶えず現に會員は三十有六萬の多きに達せりされど今回の戰役は規模極めて宏大にして其狀況又悲慘を極め我至仁至慈なる皇后陛下の特に軫念を夜ましめ給ふ所なり本會員たるもの克く時局に鑑み益す奮つて同心協力事業の擴張を謀り陛下の懿旨に副ひ奉らん事を期すべし靡みて奉答す

明治三十八年四月二日

愛國婦人會總裁載仁親王妃智惠子

皇后陛下には此時始めて御着坐總裁妃殿下より有功章御親授せらるゝを御覽あらせられたり夫れより會務會計の報告あり定款議事に移り終に各地よりの祝詞祝電の報告あり其内在奉天閑院宮載仁親王殿下より寄せられたる御祝電は左の如し

閑院宮の御祝電

本日愛國婦人會總會に皇后陛下の行啓を辱ふせらるゝ愛國婦人會の光榮何を以てか之に加へん夫れ會員諸子上は　陛下の御思召を奉戴し下は出征將卒の艱苦を思ひ尚ほ一層奮勵し本會を擴張し國家の干城をして後顧の憂なからしめんこと切望の至りに堪へず一言以て祝詞に代へ本會の隆昌を祈る

在奉天　載仁

是れにて式終りたれば君ケ代の吹奏にて入御更に樓上に出御ありて來會者の狀況を御覽あらせられ御機

嫌麗はしく還啓あらせられたり式後靖國神社馬場及び九段牛ヶ淵公園にて宮内省音樂隊陸軍音樂隊並に太々神樂等の餘興あり又特別招待者には階行社に於て立食の饗應ありて頗る盛會にてありき

奥村女史の榮譽

去月二日愛國婦人會總會の節　皇后陛下より破格の拜謁仰付られたる同會の發起創立者奥村五百子女史は更に其翌日御召に依り重て特別の拜謁仰付られ尚有難き御諚を拜受せしのみならず當局者より特に履歴書呈出の命ありし由なれば或は遠からず何等かの恩命あるべしといふ

ルーズベルト氏の家庭演説

米國大統領ルーズベルト氏が米國母の會大會の席上に於ける演説の大要次の如し

近來工業の發達に伴ひ地方の農民も鋤鍬を捨てゝ漸く斯業に從事し爲めに都會の人口急激に増加するの傾向を生じたるは必ずしも喜ぶべきの現象と云ふべからず從來農業は我國の社會組織の基礎たりしを以て急激の變動は大に注意すべきとなり遮莫國民の家庭にして健全なるものあらば其職業の如何は人多く之を問ふを用ゐざるべし若し夫れ家庭の健全を缺ぎ夫たるものは唯貪亂を恣にし妻たるものは自己の本分を忘れ苟も各自に其任務を完うし其職に忠にして後始めて偉大なる美性の發揮せらるゝの所以を忘るるが如き事あらば國民的獻身の美風は忽ち地を拂ふに至らん一國の安寧幸福は主として普通人民の家庭に係れり蓋し普通人民は國民を代表するものなればなり其の家庭の評價を等閑に附するは軈て健全なる文明の根蒂を忘るゝものと云ふべし國に健全なる家庭なく普通人民に信義なく常識なく眞摯なく妻として其務を盡し母として健全の子女を擧げ之を養育し以て國民の發達を計るにあらずんば假令巨萬の富を積むと雖も遂に夫れ何物をか國家に益せん夫は家の

主長として妻子を養ひ妻は主婦として内助の功を致す是れ古今不易の眞理にあらずや衣食に奔走する者は夫なり而も余は婦人の務を以て夫のそれよりも一層重要にして且困難なるを信ぜんとす故に婦人にして克く其任務を完うする者あらば寧ろ男子よりも重く之を尊敬するを辭せざる者なり

夫たるもの丶普通の業務は寧ろ妻の務の如く困難にして又責任の重きことなし試に思へ人の妻女たるものは其一家族を擧げて終日家政を執るのみならず又終夜子女の爲めに心身を勞せざるべからざることあり而して會々來る休日と雖も其内政の裕ならざる者は尚子女の屈托に費さゞるべからざるにあらずやリンコルンが通常人の妻女を呼んで献身的女丈夫と云へるも理なり母は一日も安樂の時なし否實に二六時中悉く是れ苦痛の時なり然れども世の良婦賢母たるもの誰か其苦痛に換ふるに安樂を以てし敢て子女の養育を等閑に附するものあらんや夫婦は同權なり苟も之を無視するものあらば宜しく之を主張してなり然れども義務は權利よりも更に大切なるを知らざるべからず余は人生の終局に於て其義務を完うするもの丶寧ろ權利を主張するものに勝るの酬あるべきを信ず諸姉の責任は重かるべし諸姉の務は困難なるべし然も余は敢て之を憐むに非ず却て之を諸姉に向て賞賛せんとするのみ母の務は國家將來の運命に係るものなれば其子女を養育するに當り慈愛の缺べからざるが如く智育體育にも留意すべきを記憶すべし即ち一方には温和の德を以てし他方には子女の將來に緊要なる嚴格の性質を養成せざるべからず若し母たる者煩惱に過ぎ其息子の利己心を增長せしめば將來之に妻たるべき婦人の悲哀を與ふるの責あるものと謂ふべく又若し其息女を怠慢ならしむるは軈て其夫たるものに煩累を增さしむるものと謂はざるべからず

子女を養育するには宜しく其子女をして困難を厭はず困難に打勝つの氣象を與へ自己の爲め又他人の爲めに働くは苦痛にあらずして却て幸福なるを敬へ幸

福の生涯を樂むと共に必ず之を勤勉と苦闘とを通じて求むべく神の爲め人類の爲め其任務に忠實なるの念を抱かしむべし思ひ來れば婦人の務は決して容易なるものに非ず然れども如何なる事業と雖も安逸以て其功果を收むべきなし而も婦人にして克く其責を完うし或は之を完うしつゝあらば人間最高最聖の快樂は即ち此に在らん而して其功は以て頌徳碑に銘するに足るべし蓋し其夫其子女は言ふ迄もなく全國民は双手を揚げて國家の基礎を築きたる婦人の功績を承認し其恩惠を謝するに吝ならざれ

日本女子大學校卒業式

日本女子大學校第二回　卒業式　並に附屬高等女學校第四回卒業式は第四回創立紀念式と敎育學部校舍及び圖書館の定礎式を兼ね去月二十日午後一時より擧行せり先づ卒業生に關する報告ありて後成瀨校長は大學部卒業生百三十二名及び附屬高等女學校卒業生八十六名に卒業證書を授與し終りて同校經營の來歴を說き且つ卒業生一同に對して訓諭するところあり次に大學部卒業生總代大岡蔦枝子、高等女學校卒業生總代吉田きよ子の謝辭朗讀あり次に同校財務委員澁澤男爵の家庭談敎務委員大隈伯の女子敎育談等あり終つて生徒一同校歌を合唱して式を了へ引續き第四回創立紀念式を行ひそれより直に新築場に於て定礎式を執行しこれにて全く當日の式を了りたり此日烈風沙塵を飛ばして面を向くべくもあらざる程なりしに大隈伯澁澤男の兩委員を始めとし岩倉公、土方伯、北畠男、三井男、英公使マグドナルド夫人を始め内外の紳士淑女等數百名の來賓ありて散り殘れる山櫻や今を盛りの八重櫻の雪と散るが下に三五徜徉する樣また一段の風情なりき猶名譽ある大學卒業者の氏名は左の如し

家政學部卒業生

伊藤とめ(福井)　伊藤百合(宮城)　伊藤ふぢゑ(長野)
一條八重(巖手)　池田渓(山形)　林婦美(福岡)
服部たい(三重)　羽生田錫(神奈川)　萩原美知(埼玉)
西村重(熊本)　堀信(福島)　大村はつ(愛知)
大泉梅惠(山形)　太田みや(宮崎)　大原千代(長野)

大岡　蔦枝(和歌山)　金森　京(香川)　笠井　志賀(山口)
勝山　伊知(宮城)　影山　喜代(靜岡)　舩田　千代(青森)
鎌田佐賀滋(山形)　片倉さとち(宮城)　吉村　かう(東京)
高田　くま(福岡)　田中　とみ(佐賀)　田邊とみえ(廣島)
田邊　武(大阪)　根岸　はな(群馬)　根本　ちよ(茨城)
名取　芳枝(長野)　中川原婦美(佐賀)　村松　いし(大阪)
上田　松樹(富山)　宇佐美　鶴(山形)　野原　けい(長野)
久保　從(石川)　久野　雅(滋賀)　黑田　とし(佐賀)
安武　ひな(福岡)　松田　信(宮城)　藤田　たま(廣島)
深田　暉(東京)　福永　愛惠(德島)　神村　つろ(大阪)
赤松　すゑ(福岡)　赤司　とみ(佐賀)　相原　斐(愛知)
青井　榮(岡山)　阿部しのぶ(宮城)　笠木　幸(宮城)
坂田　梅代(和歌山)　齋藤　はつ(熊本)　清原　まち(福岡)
木內　てる(千葉)　衣笠　壽(大分)　杠　のし(佐賀)
南　貞(高知)　三原　悅(福岡)　光永　きぬ(山口)
三橋　せん(東京)　宮坂　きぬ(長野)　南　れん(富山)
滿木　よき(長野)　莊　たけ(埼玉)　白崎　みつ(山形)
莊　千代(埼玉)　廣瀨　千代(山形)　平田　春野(岡山)
廣江　はな(茨城)　杉山　愛(長野)　鈴木　みれ(福島)
鈴木　柳(宮城)

國文學部卒業生

伊藤　つれ(巖手)　坂東みつえ(兵庫)　服部　たか(千葉)
本間　ふみ(新潟)　堀　起江(山形)　鳥居　もよ(大阪)
德重　せい(香川)　小野　花(北海道)　大河原　貞(鳥取)
小川　はつ(新潟)　岡野　睦(長野)　渡邊ちとせ(東京)

桂　磋(新潟)　香川　とみ(香川)　門谷　末(高知)
河野　政衞(高知)　武島　茂(山口)　多田　くに(東京)
玉本まさえ(兵庫)　辻　さと(愛媛)　長井　ゆく(宮崎)
仲田　しげ(愛媛)　夏目　のぶ(愛知)　村松みつじ(山梨)
草野　すが(熊本)　山田いさを(宮崎)　山崎　千代(愛媛)
安井八重野(京都)　山城くにを(長野)　眞野　ふし(愛媛)
福田　とよ(山口)　小出　恒(德島)　小西　まつ(秋田)
近藤　世保(巖手)　江崎　きま(熊本)　寺村　淸水(高知)
淡河ふじえ(香川)　坂尾　よれ(山形)　西洞たみの(巖手)
菊池　たか(秋田)　宮內　讓(愛媛)　宮本　壽惠(埼玉)
平井　章(宮城)　日野とめき(宮城)　持永　ろよ(宮崎)

英文學部卒業生

八藤　登美(岡山)　丹羽　禮(愛知)　細野　壽(石川)
堀越　道(茨城)　大塚　たま(群馬)　岡崎　百代(愛媛)
小川　滿(山口)　田中　照(北海道)　高島　きく(福岡)
松本　茂(富山)　藤林　隆(兵庫)　三武　しぎ(東京)
水戶部茂野(栃木)　平野　駿(東京)

東洋女學校の開校式

澤柳政太郎氏等の顧問たる村上文學博士の東洋女學校は校舍新築落成せるを以て去月十六日午後一時より開校式を擧行せり君ケ代の唱歌を以て式を始め村上校長の開校の辭に次で創立加談岡田治衞武氏の挨

拶ありそれより大隈伯は教育は時代の精神と合せざるべからず日本には日本の時代精神あり亞米利加の時代精神を以て直に日本の女子教育に應用せば大なる誤を生ぜん本校の趣旨即ち此に在りと雖も予は開校の式に臨で殊更に教職員の注意を促すとの簡短なる祝辭演說を述べ次に久我侯爵の祝辭朗讀あり終に菊地男爵は女子教育は目下の大問題なり日本の女子教育問題はやがて日本の女子問題なり元來女子をして良妻賢母たらしむるを以て足れりとするか之を以て足れりとせず男子と共に交際場裡に雄飛すべきものとするか之の解釋によつて從て女子教育の方針は異ならざるべからず本日の讀賣新聞に「婦人と交際」と題して「女子教育といふものは常に餘裕がある樣にしなければなりませぬ」云々といふことを記載せるが余は全く之に反して「唯賢母良妻を養へば足る」といふことに斷定したし否斷定せざるべからざるものと信ず世の女子の父兄は女子教育といへば皆良妻賢母を養ふと思へども實際かゝる議論のある世の中なれば大に注意すべきことなり本校は全く予の主義と合致すれば世間子女の爲に幸福といふべしとの聊か氣色ばみたる演說を以て祝辭に代へ之にて式を終り別席にて茶菓の饗應を爲したり

米國篤志看護婦の書簡

昨春米國篤志看護婦マツギー夫人と共に來朝し一行の歸國後も暫く止まりて病傷士卒の看護に從事したるマリス、ケンメル孃は其後マニラに至りシビル病院に在りて看護事業に身を献げ居る由なるが孃は頗る日本好きにて在留中も熱心に日本語を習ひたる程なれば頃日小澤日本赤十字副社長の許に祝捷の意を籠めたる日本文の書狀を寄せ來りたる由其原文左の如くにて手蹟も短時日の稽古とは見えぬ許りに立派を極めたり

おさはたんしやく

ちかごろおてがみをくださいました、ともありがとござります、日本ごでてがみをよくかけませんけれどまちがいをゆろせば、てがみをあげましよう、日本ごまたならつております、だから日本に

いきましよう、もー日本ごならいます、まことにおもしろいことゝおもつております。日本におりましたあいだ、つすけさまごしんせつをくださいました、まことにありがとござります、いのちのかざりにおぼへております、日本のりくぐんのめざましき大しよりをきゝとれます、そして百はつ百中していますことをふしざとおもつております、おめでとござります、いまではよろのはんにぴよにんをいたはつております、ぴよにんのねこみにてがみをかきますにへもーぺんきよういたしますによほどじかんがある、まにらにみとれないけれども、しごとにたのしんでおります、日本はまにらよりおもしろいくにだ、もーまにらにたのしきことも、うつくしきものあまりすくない、もー日本よりあついところだ、たびたびかんだんけいは九十五どまでのぼりますそなときにあついくろしです、どぞせきじうじしやうのしくわんへよろしくおしやつてください、とこさまもーよろしく、いくひさしくしんみつをねがいます、いつかおめにかゝりましよう、おひまのときにおてがみをよこしてください、さよなら

まりす、けめる

明治三十八年三月廿五日

谷子爵夫人の談

勤倹と貞操とは畏くも皇后陛下の懿聞に達し特別の思召を以て筒袖の儘拜謁を仰付けられたりといふ谷子爵夫人玖満子　今回子爵と共に歸郷の途次京都において某新聞記者に語て曰く京都の御婦人方の熱誠と能く氣が揃うて働かるゝことには實に感服します殊に服裝の一定して皆木綿の黒紋付を着らるゝが如きは東京などにて到底眞似の出來ぬことであります愛國婦人會の趣旨は質素儉約を主とするのでありますが東京などは美服競爭の弊があるやうで一人や二人で之を唱へた所が一向に應へません、東京には妾共と違ふて學問のある御方が多いものですから兎角議論が喧しくて……船頭が多過ます……昨日人圓會の救護所を見ましたが出征軍人家族の子供を世話しまして母たる人に仕事をさす方法は誠に結構なことで慈善事業はドーかさうありたいものです、金満家の御婦人方は自ら働くことをなさらないで貯金をお出しになりますが實は稼いで得たのをお出しになつた方が同じお金でも一層價値があるやうに思ひます妾は昨年蠶を飼うて一石ほどの繭を取り四十圓ばかりに賣れましたから夫を愛國婦人會や其他の慈善團體に寄附しました、愛國婦人會の本部でも此方針でミシン器械を買入れましたから妾も始めて稽古をして今ではシャツ位は縫へるやうになりました、大

方の御婦人方は内職などをなさることは兎角耻づるやうな傾きがありますが戰勝國の日本はこれから益益多事になり隨てお金も澤山要るとなりますから御婦人方も質素倹約を守り一生懸命に働かねばなりません、何卒か斯ういふことに就ても京都の御婦人方が率先して他の模範となるやうに願ひたいものであります

孝子表彰

去月廿二日賞勲局に於て左の如く善行を表彰し緑綬褒賞を下賜せられたり

秋田縣士族寺庭隆賢妹

寺庭やす

資性温順にして幼より父母に孝事し年十六にして他家に嫁し幾もなく實母病に罹り長兄公務の爲に常に外に在りて孝養到らざるを憂ひ歸寧して病母に侍し看護を盡す病勢愈々重きを加ふるや夫の家に懇請して生家に復歸し爾來妙齢の身を以て家政を經理し夙に澣濯裁縫等の勞を執り以て藥餌の資に供し温良貞省意を盡さざる所なく人の交々再婚を勸むるも孝養を缺くを恐れて肯せず一氷の歎倍倍努め志操の堅き二十餘年一日の如し洵に奇特とすべし依て明治十四年十二月四日勅定の緑綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

適れ妻女の心掛

（戰塲に落散りし婦人の手書）

「女でこそあれ」との一語は、軍國婦人の心に強く思ひ身に篤く行ひ、出征將士をして安んじて奉公の義を盡さしめ、國民後援の力を致すべき心掛なるべし

玆に適れ健氣なる婦人の手書あり、そは大谷少將の指揮せる白鷺城聯隊及び鳥取聯隊が勇戰健鬪せし柳匠屯の新戰場にて發見されしものにて受信人は兵士には相違なきも唯「旦那樣へ」とあるのみなれば姓名隊號等未だ分らず又生死のほども定かならねど此の手書が落ち居し形跡より考ふれば花々しく戰死せ

し勇士の遺物とは思はれたり、良人が長の遠征、留守の妻たるもの月につけ花につけ誰かは情を滿洲の雲に馳せ思を黄海の波に寄せざるべき、さるにてもこの手紙は尋常の遠情ならで飽くまでも夫をはげます男々しき筆、痕は語勢さへ激したる樣あり、その人しのぶべし原文のまゝ左に記して志氣發揚の資ともせん

拜復八月十四日御投發の御芳信本日正に拜讀いたしましたおゝせのとほりいまだおつさきびしく御座りますれ共旦那さまニハ御出征後なんのおさわりモなく御勤務の條まことにおめでとう御座ります、次ニひさゑ孃を始め家內一統下男下女に至ル迄デみな〳〵無事でおりますゆゑでおんしんしてくざさりませついてわおなじ軍人樣デモ當地ニのこりまご〳〵して御(一字不明)る御方も澤山でござりまするニ旦那樣はさいわいニモ露征軍人に加り出征おそばされましたハ是レ君國に恩を報ずるは今此時なり旦那樣に限り御失念は御座りますまいが一層御ふんぱつ遊し御くんこうをあらわし且人の目を驚かしめたまわん事をかけながら神かけねんじおりますわらわも女でこそあれ軍人の妻飽食暖衣すべき時にあらずとなれぬ手仕事迄いたしおりまする樣な次第でござりまする故國本の事ハ少シモ御懸念ハ御無用に遊ばし只々國恩を御忘れない樣ニそればかりが心掛に御座ります何分開戰以來新聞紙上を讀見致しまするト連戰連勝でハ御座りまするが敵は堅固なる防禦ヲナシ夫れニ反し攻擊ヲ致サレまするゆゑ嘸御苦戰御苦勞の程ハさつしておりますかいす〴〵モやまとたましひヲあらわしあかひげ茶まなこヲシテ目ヲ覺サシメ御健全ニテ御凱旋の程待ておりますおかへりの節ニハあかひげ茶まなこノ生首ヲ二ツ三ツ引拔キひさゑ孃の御玩に御持歸り被降度たのみあげます尙又お孫さん別紙さしあげ申筈なれ共略儀ながら宜敷御傳へ被降トノ事ゆゑ不惡御了承被降度き事(記者曰くかき度事の誤り乎)は山々あれ共餘は後便にゆ

すります先はわらく〳〵しと

九月五日　　　　　ひさ子より

旦那さま

日本兒童の自然研究を奬勵す

米國マサチユーセッツ州クラーク大學敎授ハッチ博士は、敎育上、博物學を實地的に、人生に直接利益多く且つ趣味多からんように研究を要することを唱道せる人なるが、常に日本國民の自然を愛し、自然を了解する力に富む事を嘆賞し、此程、日本の中學以下の生徒に對し、蟾蜍の實地研究を希望し、其報告に對しては一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、四等五圓の懸賞を爲す旨を米國の一雜誌に掲載せり、其研究及び報告に就きての注意を擧ぐれば

一、觀察及び研究の要點

(イ)蝌蚪が河水湖沼等を淸潔にするにつき實際上の觀察及び注意

(ロ)蟾蜍が有害なる昆蟲類を食して吾人の助を爲す事に關する實際上の觀察及び研究、

(ハ)其他蟾蜍が人間の爲に益する點の實際觀察及び研究、

一、右觀察及び研究は、卵の時代より蟾蜍發達の順序を追て、其變化すると共に、如何なる特別の利益を吾人に與ふるかを細に觀察研究するを好方法とす、

三、授賞の標準は、專ら觀察研究の機軸を抽て、實際上蟾蜍に關する智識を增進するに力あるものに重を置く

四、文は日本文若くは英文にて草し、本年十二月末日迄に出題者に送るべし、

五、觀察研究に係る蟾蜍種族を明記すべし、

玆に參考の爲め同博士の蟾蜍一篇の要領を抄出せんに(一)蟾蜍は普通の動物にして、其標本を得るに費用を要せず(二)此迄の經驗に依れば、少しく正しき方法にて研究せしめば、兒童は直ちに注意して蟾蜍を保護する樣にならん、されば其研究は兒童をして猥に動物を虐待するの風を矯正し德育上好結果を生ずるものなり(三)蟾蜍の働は人生に大なる關係あり、昆虫は黴菌に次ぎて人間の害敵なり、ハリー氏の計算によれば、昆虫が全合衆國にて年々四億萬弗の財産を破損すと云へり、蟾蜍は家庭に飼養して昆虫(蚊、蠅、蟻、蛾、薔薇虫、蝶、尺蠖其他の夏蟲)を撲滅せしむるに最も働きある者なりと、又曰く、蟾蜍の眼は自然界の最も美麗なる現象の一なり

氏は兒童の多くが蟾蜍を嫌ふ傾向ありしも、其眼の美しきに注意を引きてより、直に之を愛する心を起し、手に取りて愛し弄ぶやうになりしことを實見せりと、新刊の某雜誌に見えたり、

九十三の翁と百二の媼

鶴の千歲龜の萬年、それにも類へていと芽出度き話は薩州伊佐郡羽目村に大迫嘉左衞門となんいふ翁あり當年九十三の高齡なるも至て壯健にて意氣の旺なること壯者を凌ぐばかりなれば、夫の旅順陷落の祝捷會にも銀髮雪の如き翁國旗を肩に萬歲を大唱しけるは、場に一段の光彩を放ちたりと翁もと武門の家に生れて鄕の頭領と仰がれ例の薩軍に合して田原坂を始め轉戰至る處に驍名あり其後四海波治りて戶長に推され統治に最も功績あり今や光風霽月に悠々晩年を送り居れりと又同村に下野しをと呼ぶ媼あり當年一百二歲なるも日々山に入りて薪を採り孫等を相手に日を暮し其の成長するを此上なく樂み居れりと

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て御領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年四月三十日印刷
明治三十八年五月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊榮一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六三九番)
(電話新橋特八八番)

阿多廣介先生
園田竹熊先生 編纂◎明治卅八年二月文部省檢定濟

再刊

女子補習讀本

菊判 大和綴美本
定價 上卷金貳拾五錢 下卷金參拾錢
郵税 壹冊金四錢
郵劵代用壹割增

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子、及び修業年限二個年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せんが爲め編纂せるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其の材料は家事家政女工等を始め實業に關する事項。國家公衆に對する必要なる心得及び美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを選擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

重要目次

卷之五 ●わが國●養蠶●京染●色●衣服の取扱●衣服着用の注意●思ひやり●萩山直女●心のまゝにならば●親こゝろ●佐藤つる●娘に送りし手紙●日本の米作●畜産果樹の栽培●苦樂●勤儉貯蓄●甘藷●砂糖●食鹽●術生に關する心得●運動を勉むべき事●飲食を節すべき事●清潔を保つべき事●西洋洗濯法●空氣●住居の撰擇●ナイチンゲール●赤十字●慈善を行ふべき事

卷の貳●國土と生業●商業の發達●主人の眼識●古今交通の變遷●電氣世界●四季折々き加賀千代女●都と田舍●森林海國の女子の務●女子の長所短所●髮の飾身の飾●風俗變遷●維新後織物の進歩●陶器磁器●工女のかゞみ●英國人の勤務●田舍の夕ぞら●看病●傳いつとめ●樂しき家庭●國家に對する心得●出征軍の妻に送る手紙●右返事●歐米人の公共心（以上）

發兌元 東京築地二丁目 國光社

第五回内國勸業博覽會
賞牌并に褒狀受領

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ザワイオレツト煉製
錫蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい



壽美禮おしろい

●ねり製（定價 大壜二十錢 小壜十二錢）

水製（定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）

ヴワイオレツト水
スミレ水白粉



錫栓附乳白硝子罎入

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そはかす、あせも等を生ぜす御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑 壽美禮あらい粉

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
鑵詰六錢五厘 袋入壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞讚する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し髮くして艶を出し髮のればりを取り油あかふけ等を生ぜす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

西ノ色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮わらい粉



製造本舖 東京東兩國（兩國橋際）元町
伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

女鑑

明治三十八年五月一日發行　毎月一回一日發行　第拾五年第五號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可